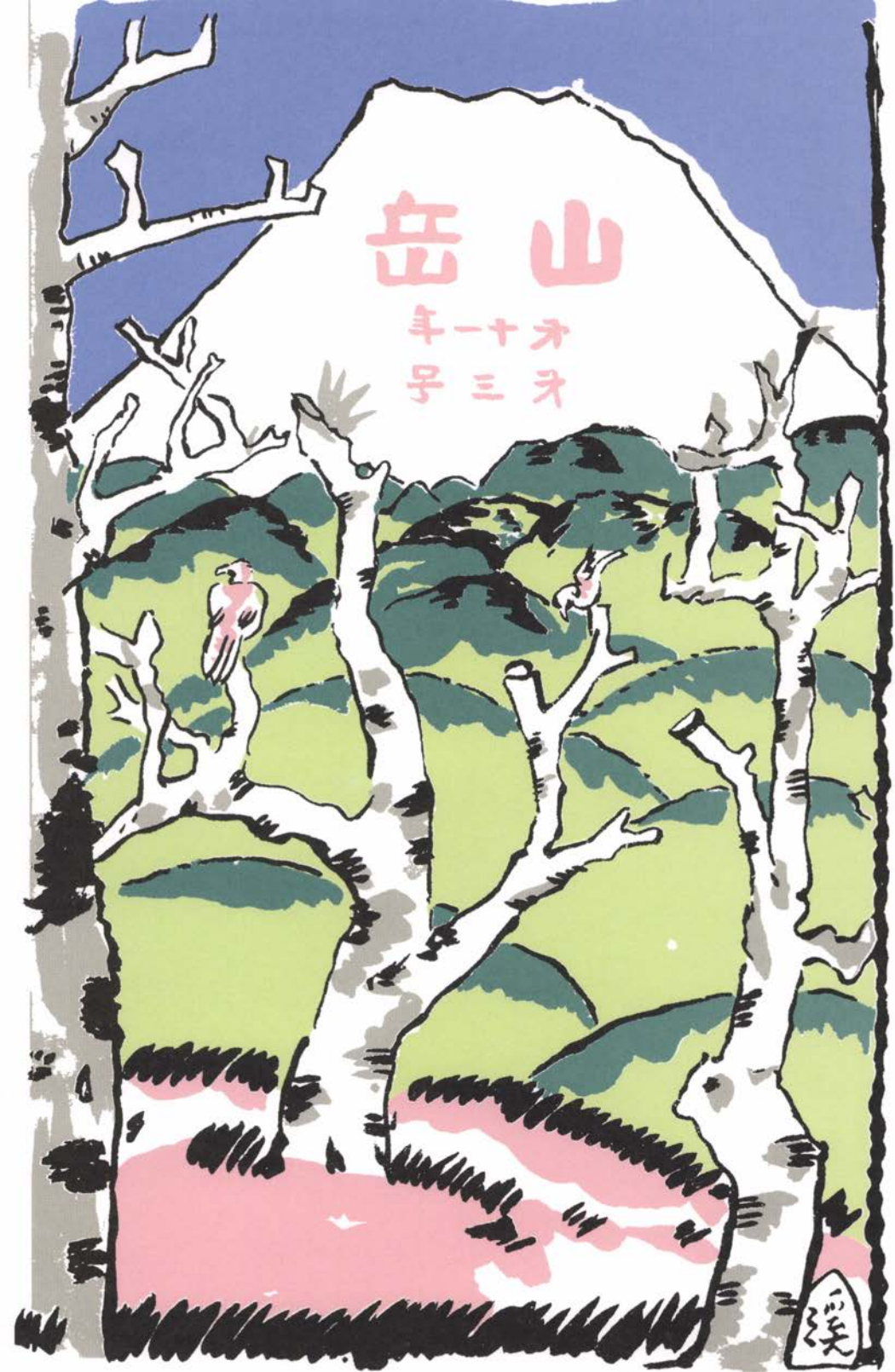

山岳
才十一年
才三号

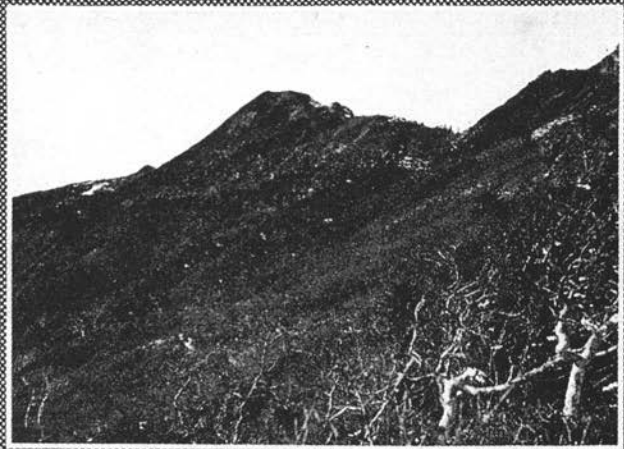
山岳

第十一年第三號

大正六年九月發行







小倉三郎氏撮影

上、武尊山より見たる燧、至佛、平ヶ岳
左、剱ヶ峰より見たる武尊山

右、武尊山頂上（東南より）

目次

（大正六年九月十八日發行）

表紙……富田渓仙氏筆

圖版　　頁

劍ヶ峯より見たる武尊山。武尊山頂上（東南より）前武尊より見たる燧、至佛、平ヶ岳　（寫眞銅版）……小倉三郎氏撮影……一

前穗高岳より奥穗高岳……（コロタイプ刷）……近藤茂吉氏撮影……一六

藥師岳の一角より槍ヶ岳穗高岳を望む……（同　上）……同　上……二四

八島ヶ池採集綠藻圖……（亞鉛版）……武田久吉氏圖……四〇

東京市內所望の山岳高度表……（石　版）……木暮理太郎氏圖……一六〇

しらたまのき……（亞鉛版）……武田久吉氏圖……一六八

大覇尖山頂奇巖。シルビヤ山頂南投社シカヤウ社より見たるシルビヤ山　（寫眞銅版）……野呂寧氏藏……一七六

雪の伊吹山……（同　上）……三上拾三氏撮影……二四八

第十回大會出品物

△カツコウサウ（松平康民氏出品）。ミチノクコザクラ（本山佗吉氏出品）。（コロタイプ刷）。

△トガクシショウマ（植物園出品）。シラネアフヒ（松平康民氏出品）。（コロタイプ刷）。

△タツタサウ(松平康民氏出品)。Arabis alpina, (辻村伊助氏出品)。(コロタイプ刷)。

本欄

武尊山……日高新六郎……一
槍より穂高へ……伴野清……一一
霧ケ峯と鎌ケ池及八島ケ池……理學博士武田久吉……三一
千挺木山……寺島玉郎……四二
布哇キラウエヤ火山を見るの記……國府精一……五三
秋信……冠松次郎……六四
雪の恵那山……長谷川峻峯……八一
大雪山登山記……小泉秀雄……八八
高山植物檢索便覽(一)……理學博士武田久吉……一二四

雜錄

○後立山は鹿島槍ケ岳に非ざる乎(木暮)○八ケ岳の北(笹魚生)○相州蛭ケ岳(梅澤親光)○東京市内所望の山岳高度表に就て(木暮)○したたまのき(武田)○日本の山地に見るカタマキの種類(II、T)○臺灣の高山(野呂寧)○「菅沼」なる名稱について(武田)○山中の傳說(山本德三郎)○空と雲(山本德三郎)○机上談山(笹魚生)○信越線附近スキー練習地の主なるものに就て(外山高一)○白馬詠草(古家實三)○大正五年七月ばかり越中國立山にのぼりけるときによめる(田口虎之助)

圖書紹介

○高山植物の研究(武田)○高山植物(た、た、)○日本アルプス縱斷記(H、T)○信濃の山(岳雄)○鹿澤温泉と高山植物(H、T)。

各地登山會彙報(五)

○一高旅行部大正六年度夏期旅行日程○慶應義塾山岳會夏期登山計畫○三高山岳會大會○七高山岳會○梓會の成立まで。

雜報

○中學生行方不明となる○寒中淺間山登山○マラソン登山を恥ぢよ○天下の名山大臺原山の破壞○比叡山の天幕村○山の傳說○山へ山へ○女學生の登山旺んなり○白馬山雪深し○小黑部鑛山に郵便局○武甲山中の慘事○日本アルプス山嶽戰記○谷間へ墜落して慘死を遂ぐ。

會報

○幹事の改選と新任○第十回大會の記○名古屋に於ける山岳講演會○豐橋市に於ける山岳講演會○橫濱市に於ける山岳展覽講演會○會員登山報○登山の注意の頒布○寄附二件○會員の著作○會員石崎光瑤氏印度より歸る○會員加賀正太郎幹事中村清太郎兩氏の外遊○高頭高野兩幹事慰勞會記事○雜誌の遲るゝ言ひわけ。

武尊山

日高信六郎

一

赤城山の最高點黑檜山の頂に立つて北の方を望むと、右手の方日光山塊から起つて西に、高低參差起伏して蜿々と連なる會津境越後境の山脈を背景として、間近く利根の支流片品川の谷を隔てゝ、根張大きくドッシリと、我よりも高く我よりも鋭く、幾多の峯頭に分れた頂上を有つた山が見える。若しそれが雪の多い晩冬か、未だ雪の融け切らぬ初春の頃であると、白金の様に眞白く光つた燧、至佛の左に當つて、更に近く更に大きく、雪に裝はれた此山の姿は一段の氣高さと鋭さを加へて、此方を向いて大きく抉り取つた様に口を開いてゐる谷の凄じい斜面に、三十一面の雪を溢へた其姿に、身を切る様な北風に震え乍らも、驚きと悦びの聲を發して躍り上らずには居られない。

この山が武尊山（二一五八米）である、數年以前友と二人、未だ雪深い春の赤城を五輪峠から追貝の方に、行き惱み乍らも絶えず仰ぎ見た此山の崇高な姿の印象と、比較的孤立した此山の位置と標高とから推し量られる山頂の眺望―未だあまり世に知られない而も相當の高さと比類ない深さとを有する我が未知の越路の山々と、大利根の水上遙けきあたりの深谷の一班と――は、武尊と云ふ耳に快い名と共にいたく私の心を惹いた。

今年（大正五年）秋幸に其の頂を踏むことを得て、この山とその眺望とが期待に背かないものであ

◎武尊山　日高

る事を知つた。以下左に當時の覺束ない記憶を辿つて拙い紀行を錄す事にした、後遊の士の參考ともなれば幸である。未だあまり多くの人に知られず、汚されざる此地方の山には、充分に自然を愛好する人々の渴望を滿すに足ると信じて居る。

◎武尊山　日高

二

十一月三日。赤城山大洞（ダイドウ）より片品村花咲（ハナサキ）まで。

連日の雨が昨日から止むで、美しく澄むだ秋の日である、大洞の猪谷（イカヤ）の家から三十分、五輪峠まではふけ行く秋の赤城に盡きせぬ名殘を惜むだ。五輪峠に立つて北望する、都に降つた連日の冷雨は山では雪であつたと見えて、遠い山はみな新雪を被つてゐる。殊に淺間は眞白であつた。苗場も燧も多くの山は雲を冠してゐる、武尊の頂にまつはつて居た白雲は間もなく晴れた、前武尊には雪はないが、劍ヶ峯の岩峯から頂にかけて、川場谷に向つた南の方は眞白になつて居る。實は我々は登路及登山の可能幷に案內等に關しては何等知るところなく、只先年中村淸太郎氏が花咲から前武尊に登られたと云ふ事を聞いたのと、五萬分一圖に花咲から前武尊に到る登路が記入してあるのとに據つて、花咲から登らうとしてゐる次第なので、此の雪を見て心中に登山の可能をいさゝか怪しんだ。丁度こゝに來合はせた牧夫から、花咲に宿屋のある事、川場からも武尊に登り得らるゝらしき事等を聞いたのでやや勢を得た。

十時十分峠を辭して追貝に向つた、終始我が武尊を正面に仰ぐ、零時半山を下り切つて南鄕に出で、片品川に沿うて行く、武尊は最早前山に隱れて見る可くもない。花咲に行くには、追貝の入口から橋を渡らずに片品川の右岸に沿うて行くのであるが、我等は吹割瀧を見たりして會津街道を行つた爲に少し廻り道をして、千鳥新田の少し先で片品川を渡り、幡谷の部落で本當の道に合し、武尊の東面に



◎武尊山　日高

東京市近郊より遠望したる武尊山

源を發する塗川の左岸に沿うて、後に雪白い皇海山（スカイサン）を顧み、前に武尊の一角を仰ぎ乍ら夕暮の路を行く、前武尊の頂や、それから花咲峠に曳く尾根のゆるい斜面などが夕日に照らされて美しかつた。幡谷から半里餘り、塗川を渡つて一寸した坂を登り、諏訪社の前を通つて數町行くと山崎の部落に入る時に午後五時十分、夕暗があたりを籠めて居た。追貝から二里あると云ふ、我等は赤城から約七時間を費した。山崎、登戸（ノボット）、鍛冶屋等の諸部落は合して花咲と呼ばれ、元は一村を成して居たが、今は須賀川、戸倉等と相並んで片品村の大字になつて居る、そしてこの山崎は花咲の中で最も人家多く宿屋が二軒ある、勿論木賃式の怪し氣なものであるが、相並んだ二軒の一を藤屋と云ひ他を朝日屋といふ、我等は手前の方の藤屋（高山太吉）に入つた。宿の前には道に添て奇麗な小流れが冷たさうに流れてゐる。こんな山懐の寒村には繭買ひの商人位しか訪る人もないと見えて、今日此頃は泊る人も稀らしく、只二間しかない座敷の一に陣取ると、ガランとした吹き抜きの天井もない室には、冷たい夜風が舞ひ下りて來て、一には寒さと物淋しさを加へる。菜つ葉づくめ

◎武尊山　日高

の夕飯や堅く重い蒲團には驚かなかつたが、翌朝出發の時になつて近所に草鞋もないと云ふのには聊か困まらされた。

夜爐邊で近所の若者から山の話を聞く、花咲から前武尊までは毎年八月一日に村から大勢登つて道を修繕する、前武尊の頂上には金佛が立てゝある、それから先は劍ヶ峯の岩壁で、屋根形をした巨岩の處には鐵鎖がかけてある、頂上の附近には池があるが此邊の者でそこ迄行つた人は少ない、と云ふ事であつた。兎も角も明早朝發、行ける所まで行つて、歸りは成る可く川場に降りる事に決め、案内を賴むだ。丁度立太子式の奉祝會で村の青年が學校に集つてゐるので、宿でその連中に色々掛合つて呉れたが適當のものがない、老人でもいゝならばと云ふので、すぐこの近所の星野多三郎と云ふ六十になる爺さんを連れる事にした、なほ登戸にも勇吉（六十一歳）と云ふ行者が居て、山の事に委しいと云ふ事であつた。お祝の御神酒に赤くなつた連中が提灯行列をやつたりして、夜更くる迄前の通りを往來するのを耳にし乍ら、明日の快晴を祈つて寢に就いた。

三

十一月四日。武尊登山。

午前六時四十五分出發、水の樣に澄むだ秋の空の東を見れば、皇海山の白い圓頂が旭日を背うて美しく輝いてゐる。宿の前の道を一二町も西に行つて、お寺の傍から右に折れ込んで小さな丘を越えると、桑畑の彼方に南向の斜面に朝の日をうけて登戸の村が見える、山崎から十五分にして村に入る。村の西北の端に小さな祠堂があつて路は其側を通つてゐる、日本武尊を祭つてあるらしく、武尊講と云つた樣な札が澤山かけてあつた。社の傍にある大きな岩を案内はタンクヮ石（一名花咲石）だと云つた。昔し此石に花が咲いたと云ふ言傳へがあると云ふ事を聞いたのみで一向注意して見なかつたが、

『花咲けるが如き紋様あり、故に花咲石と云ふ』、と云ふ記事を後で讀むだ。

祠の傍を通つて路は雜木林について行く、暫らくの間は畑があつて、甲斐々々しく働らいてゐる人の姿が見えたが、それを後に少し登り氣味にゆくと、登戸から約三十分足らずで、白樺や楢が疎生してゐる茅原に出る、大品原（オホシナノハラ）と云ふ、林の上に前武尊の圓い頂を仰いで一寸いゝ景色である。原の盡きる邊で道が二分する、左は草刈道、右を取つてすぐ塗川の一支流を渡れば、道は漸く淺い谷に入つて始終川に沿ふ、この邊は數年前小林區で殖林をしたので、一面に低い草原は松と落葉松との苗が未だ二三尺にしかなつて居ない、夏は可成りに暑い事であらう。八時十分右手の尾根に猿岩を見る、その少し先で河を右に渡つていよ〳〵河と別れる、こゝに近年迄お籠りの堂が建つてゐたさうだが、今は壞れて材木が散亂して居る、石佛が二基、一つの背には御山開闢木食上人普寛行者と書いてあつた、行者の骨を八合目邊に埋めて置いた所が、お山が荒れるので到當（たうとう）下ろしたと云ふ話もあつて、山下の人は大分此山を神聖視してゐる。少憩。

八時三十五分發、これから不動坂にかゝる、地圖に甚しく屈曲した路になつてゐる奴である、草計りの斜面を登る事二十五分で尾根に出る。前武尊の頂は近く西北に木立と笹に包まれて青い。こゝからは秩父の一角、赤城山、皇海山、日光白根山、金精山、温泉岳等の山々を望む、その北は我等の北に派せる武尊の尾根に遮られて見る可くもない。

これから尾根の上を仆れた梅の木立の下を、熊笹を分け乍ら進む、所々に石の祠や石像の小さいのがあつて迷ひさうな道でもない、尾根を行く事二十分餘りで右へ少し下り氣味に御澤（おさは）に下りる、これからは頂上迄水を獲られないと云ふので水筒に詰める、澤を渡らずにその右岸を稍左手へ丈高い笹を分けて急な斜面を登ると、さつき傳つた尾根は早ずつと足の下に見える、木立をすかして西南の方が見え出して來た、十時十分御澤から二十分で普寛上人のやゝ大きな石像のある所に達した。こゝは我

◎武尊山　日高

◎武尊山　日高

等の登つて來た尾根と花咲峠へ引く尾根との分岐點らしく、遙かに低く低平な尾根が花咲峠へつゞく邊の茅原を見た。こゝからは西南の方がよく見渡せる、近く赤城、遠く秩父の山々、白峯、甲斐駒、八ヶ岳、淺間山、槍ヶ岳等が重なるものであつた。この邊から消え殘つた殘雪が漸く現はれて、木の根元や笹の蔭に塊まつてゐる、傾斜は可成り急で、おまけに眞後から太陽にてりつけられて大に惱まされた。笹をつかんで登る、漸く栂等の木立が高山相を呈して來たと思ふと頂上に出た、頂上は平たく木立に圍まれた茅原で、雪が一尺計りも積んで居た。十時半三角點に達する、花咲から三時間四十五分を費した。三角檜の破片が僅に殘つて居る傍には、嘉永年中に花咲の村から擔ぎ上げたと云ふ丈四尺計りの靑銅の像が、片手に經卷を持ち片手に杖をついてこわい顏をして立つて御座る。平たく削げた岩片の上に地圖を擴げて四邊の眺望に耽る。

行く手に當つて兀立するものは劍ヶ峯である、急峻な袴腰形をなした岩壁は我よりも更に高く聳えて、武尊の頂上は其の蔭になつて居て、その左にずつと低く劍ヶ峯山（五萬分一圖による）につゞく山稜が見えるのみである、劍ヶ峯の岩峯の右手には頂上につゞく一峯二一〇五米の笹に覆はれた平たいドームが見えて、頂上に至る道は其笹の間に見られる。その右手北の方には遙に遠く平ヶ岳の偏平な頂に雪白く、少しく近く至佛山の西に峻しく東に綏やかな頭にも雪が見える、笠ヶ岳（笠科山）は更に近く更に低い、燧岳はそれらの右に雪白い二尖峯を現はし、その東は鬼怒沼あたりの山々連亘して雪白い日光白根に及ぶ、白根の爆裂火口は凄じい口をこちらに向つて開いてゐる、その右には皇海山の白い頂が目についた、赤城山は榛名に對し遠く關東平野を隔てゝ秩父の山々に對してゐる、甲武信岳の邊及金峯山の北面には雪を認めた、富士は白い姿を高くこれらの上に擢んでてゐる、秩父の右には雪班らな荒川岳（赤石山脈）、眞白な白峯三山、甲斐駒の右に仙丈の頭がのぞき、八ヶ岳立科の右に木曾駒が見える、殆ど全く雪を被つた淺間山、草津白根山、二山の間に遠く乘鞍岳（御岳？）（御岳から

望むと武尊の頂上は淺間と籠の塔山との間、むしろ後者に近き邊に見えたるやうに記憶す。木暮）二山の北に穂高、槍の雄姿を望見した、其右手は群山重疊して、此方面の知識を持たぬ吾等には只俎板（まないた）を仆した様な山形によつて雪を頂く苗場山を認め得たに過ぎぬ、谷川岳の邊と思はるゝ清水越附近の連山から右は、劍ヶ峯に遮られて仕舞ふ。天氣は申分なく、滿天に一片の雲もなく、うらゝかな秋の日は暖かい光を投げ、風さへ靜かに擴げ列べた地圖を吹き散らさるゝ虞もない、淺間の噴烟がゆるく東南へ曳いて、秩父の山々の上から赤城山の彼方迄及んでゐる。眺望に時を過ごし、中食を濟ました時は午に近い、絶頂派は頻りに氣を揉（も）み出して來た。正午こゝを發して西北劍ヶ峯に向ふ、三角點の傍から南に木立の中を道らしいものが通じてゐたので、案内に尋ねたが要領を得なかつた、或は花咲峠の方へ下りる路ではなからうかと思ふ。

路は木立の中を劍ヶ峯との鞍部に向つて下る、日蔭には雪が可成りあつて、熊笹の上に積むでゐるのは脛を沒し、隨分冷たい。鞍部に達する少し手前で左手から斜に川場からの道が合する、その邊に荷物を皆置いて輕裝して劍ヶ峯に取りつく、木の根、岩、二十分近くも攀ぢると岩壁の上に出る、畧西北に長く狹い山稜を成して、高さは前武尊よりは遙に高い。其一二ヶ所には石像が置いてあつた。これから頂上につゞくリッヂは、こゝから更に低下して三四の岩峯を成し、其先に笹に覆はれたドームの向うに突兀たる一峯を起し、やゝ西に曲つて其左に偃松と熊笹の青きを纏つて聳ゆる頂上は中々に雄大に、その上の三角點の櫓は針の様に小さく見える、それから山稜急に低下して一二の峯を起し、二千米の劍ヶ峯山となつて我劍ヶ峯との間にカール狀をなした川場の谷を形作つて居る、赤城の方面から見て最壯大に見えるのが此谷であるが、下部は針葉樹の木立に覆はれ、上部は一面に笹を被つて、遠望して感ずる程の凄味を現はさない。只劍ヶ峯山の下部のみがガレになつてゐる、一體に西南川場谷に面した方よりも、東北の斜面の方が急であつた様に思ふ。行程の遙かなのを見て眺望を恣にする

◎武尊山　日高

餘裕もなく、これから先の様子を一向に知つて居るらしくもない爺さんを後にのこして進んだ。これからは剃刀の刃の様なリッヂを傳つて四つ五つの岩峯を越す、所々に鐵鎖の用意があり、一ヶ所には鐵梯まで掛けてあつた、狹い岩壁に雪が積んで居るので可成りに歩き悪いが、幸水平な方向の節理をなした岩が重なり合つて居るので、恰好の足掛りを供して呉れる、岩の所々には石楠が多い、花の頃に來たらば嘸奇麗な事であらう。岩峯が終ると熊笹が現はれる、覺束ない路の迹をたよりに雪を踏んで登ると偃松が現はれて來た。一時二一〇五米の峯に達する、平たい頂は一面に熊笹に覆はれてゐる、笹を分けて一小峯を越すと道は當面の峯を避けて其南側の斜面を横切る、兎の足迹の多い雪の中を熊笹を分けて行く、側面を十餘分も行くと、右手の頂上一帶の峯と平行して小さな阜が出來てゐて、其間に東西に狹長い窪地を作つて水を溢へて居る、路は池に沿て窪地を通る、此の窪地は雪が脛に及ぶ位あつた、兎の足跡に雜じつて熊の足跡が登路に沿て點々と印せられてゐる。これから路はやゝ右を向いて熊笹と偃松の間の土の現はれた急な道を五六分も登ると頂上の一角に出る、一時三十五分、巨岩の陰に四尺計りの鑄像が杖をついて立つて居る、臺の背面には明治二十四年八月廿二日大林區署の許可を得て川場の人が之を建てた所以を誌してある、像の足許には徑五寸計りの古風な鏡が置いてあつた、其隣には高さ二尺計りの足駄穿きの鑄像があつて、背に御山開闢深澤心明行者と書いてあつた。そこの上の岩角には小さな木の祠が安置してあつて、登山者の名刺が散らばつて居る、劍ヶ峯から此處に到る道は川場の人が作つたものださうで、登山者も川場の人が多い様である、九月下旬久米民之助氏が藤原から登られて、午前十時四十分頃上着と書いた名刺が置いてあつた。これから絶頂へ道も何もない所を偃松と熊笹と戰つて、一時四十五分三角點の櫓の下に辿り着いた。櫓には雪が堅く凍りついてゐる、北の方からは冷たい風が吹いて來てたまらなく冷たい、寒暖計は日向で攝氏一度を示した。頂上は狹く、板狀をなした岩片がちらばつて居る、櫓に登つて大觀する。

武尊から東北に一度低下した山脈はもり上つて笠ヶ岳（笠科山）をなし、それからゆるくたるんだアウトラインは至佛のなだらかな頂をなす、その右手には燧岳が神經質な顏を見せる、燧と至佛との間には遠く雪を戴いた山を見た、至佛から尾根は北に連なつて白澤山となり、更に尨大な平ヶ岳となつて其の頂には雪が白い、それから西へ低下して兎岳に連なる尾根を越えて荒澤岳が頭を擡げる、兎岳から國境の連山は越後澤山小澤山等を起して清水越附近に連なる、兎の左に此連嶺を越えて見えたのは中ノ岳であつたらうと思ふ、その左に遠く雲を隔て雪を戴いたものが見えたが何だか分らなかつた。清水越附近は群山殊に錯雜してとても我等の貧弱なる知識を以てしては一々の山をアイデンティファイする事は出來なかつた、只谷川岳らしいものを認めたに過ぎぬ、それから左は苗場となり岩菅となる、其の壯觀は前武尊のそれに異らぬ、飛驒山脈の北部がチラ〳〵とその彼方に眞白く見えてゐる。藤原からの登路を一寸物色して見たがそれらしいものを見當らなかつた、然しこゝから西北に曳く尾根を傳ふものである事は殆ど誤りあるまい、何れにしても頂上に達する最も近い路であらうと思はれる、歸りの時間が氣掛りなので頂上の大觀を割愛して二時五分頂上を辭し、祠の處で遲れた友を待ち合せ、二時四十五分歸途に就いた、出鱈目に路を急いで三時山稜に出で十分にして二一〇五米の頂に達し、又劍ヶ峯の岩壁に取りつく、三時四十分劍ヶ峯に歸り、五十分川場道との分岐點に歸着した、遲くとも三時迄に下山の途に就かうと云ふ豫定は一時間計りも後れた、案内の爺さんは川場への道を知らぬと云ふのでこゝから歸へす事にした、賃金は五十錢呉れと云つた、七十錢を與へたら三拜して去つた。尤も荷物は一行の辨當を持たせたに過ぎぬ、正直な男だが花咲から前武尊までの外に山の事はあまり知らない樣であつた。

四時五分いよ〳〵川場道を下る、道は密林の中を暫らく前武尊の横を絡らんで、前武尊から南に派出せる尾根（花咲峠へ續くものゝ西に隣るもの）を下るのである、暫らくは雪もあり熊の足跡もあつ

◎武尊山　日高

たが間もなく消える、道は可成り急にドン〳〵下つく行く、十五分計りで水神と書いた石のところに來る、尾根の行手には岩峯が二つ三つ見える、鎖に縋つて其一に登ると東側の一枚岩の絶壁を又鎖によつて下りねばならぬ、そして又鎖によつて登る、有難味をつける爲かずい分人を威嚇する樣な路の付け方をしたものだ、見上げると未だ前武尊の頂はすぐ頭上にある、時計は五時を指してゐる、容赦なく夕暗は迫つて來る、こんな岩峯を三つ計り越えると木立の中を行く、五時二十分になるとすつかり日は暮れて冲天にかゝる九日の月が木の間を洩れて覺束ない光を落として呉れる、道を失はない樣に注意し乍らも木に蹉いたり岩を蹴つたりしつゝ下つて行つたが、漸く六時木立を出て殖林地の草原に出た、こゝは劍ヶ峯の頂上からも見えて居た尾根の部分である、眼の前には淡い月の光に照らされた下界の樣が夢の樣に展開する、左には花咲峠つゞきの尾根、右はひらけて遙に榛名が見える、其下には人家の燈が見えてゐた。茅原の中を通ずる道をどこまでも尾根について下つて行くと、尾根の盡くる邊から東へ下りて川の傍に出る、堂宇があつて武尊登山何十何度と云ふ碑などが立つて居た、傍の茅屋に入つて御茶の御馳走になる、七時十分。こゝは日蔭茶屋(當字)と云つて中谷の中だと云ふ。こゝから花咲峠の道と合する迄半里位、川場の村迄二里ある、この邊に炭燒が入つて居るので馬もこゝ迄通ふ。我等は前武尊から此處迄約三時間を費したが、夜暗の爲めに浪費した時を見積ると、登り四時間半もあれば充分であらうと思ふ。しかし草原の尾根を上るのは夏の仕事としては可成りにこたへるだらう。我等はこゝで辨當の殘りを食し、七時四十分出發、泥濘の路を提灯に照らしつゝ二十五分で花咲峠の道に合し、川場温泉の戸を叩いたのは十時を過ぎて居た。

槍より穗高へ

伴野清

同行者　中上川小六郎　大西又吉
　　大島永明人夫　宮坂義憲
　　宮川久雄　宮阪廣治

(一)まへおき

小島烏水氏の日本アルプス第三卷に、穗高から槍への縱走が巧に描寫されて居る。自分は何時か一度は、是非此の間を通つて見たい希望を有して居た。殊に今迄この縱走はまつたく上高地を起點として行はれ、且つ上高地の案內者にのみ任して居たので、私達の樣にいつも大町を根據地として山に入る連中は、大町の案內者で槍から穗高に拔ける事に成功したいと思つて居た。此の考は私ばかりで無く、他の山好きの間にもあつたものと見え、已に昨年は、小倉君が又吉を案內として此の山脈を縱走するため、大町を出發されたのだが、人夫に負傷者が出來たり、不吉な事が每日續いたりした事が、此んなひどい山をしかも不知の道を始めて辿る案內者の心に、板子一枚下は地獄の生活をして居る船乘りの抱く樣な迷信的の影響を與へたものと見えて、又吉は槍の肩迄來た時に行く事を肯せず、其の儘上高地に下つて仕舞つたさうだ。今年も七月に入つて早々箕作新六君が拔け駈けの功名をしやうと、之も又吉を連れて、高瀨入りから槍に出て、穗高迄縱走する筈であつたが、天氣の險惡に日數を費し、槍に出た時には食料品が殆ど缺乏して、之も縱走不可能に陷り、上高地温泉に下つて仕舞つた。其の

◎槍より穗高へ　伴野

他に之も矢張り今年、吉澤榮次を連れて縱走しやうとした人があつたさうだが、不成功とあつて中房温泉に降つたとの事。此んなわけで行く者行く者皆槍で擊退されて、穗高の領分へは一歩も足を蹈み入れる事が出來ず、穗高の連山は、人間の足下に蹈み躙られずに、單に雷鳥や、羚羊の跳梁に任して居たのである。

私は七月二十四日に大町を出發した。先づ高瀨から烏帽子、三岳、野口五郎、黑岳、鷲羽を經て雲ノ平に下り、更に藥師澤を溯つて、太郎兵衛平に出で、あれから峯傳ひに藥師を究め、南下して上ノ岳、赤城、黑部五郎、蓮華（三俣）双六から鎌尾根に取つついて八月二日に槍に登り、いよ〳〵三日に穗高へと志したのであつた。今度は人數が多く、槍に至る迄には已に十日を閱し、食料品も不足だつたので、實は十分完全に縱走出來るかどうか疑問として居たのであるが、どうやら成功したので、筆を取る氣になつたのである。希望するのは大町から此の連峯を蹈破する行程を利用せられん事である。

（二）槍ケ岳

空はあく迄藍青に輝いて居る。その青空の下に槍から穗高に掛けての一大障壁は、恐るべき尖峯の連續をなして、私達の頭上に威壓を加へる。盛夏の強烈な日光は、その黃金色の光を投げかけて、それが紫色に反射して八方に放散する時、私達の眼は、開いて居られない位である、面はジク〳〵燒き爛れる樣な氣がする。

私達が硫黃澤乘越を通り過ぎて、鎌尾根をあへぎ〳〵登つて行つた時の事である。向ふの一峯の偃松の茂みに、人影がチラリと見える。昨日蓮華（三俣）の頂上に寢そべつて居た時、下から京都の田中氏が茂一を案內にして登つて來たのに逢ひ、今日の槍への道づれとなつたのだが、今又人に出逢ふ

とは成程鎌尾根は天下の大道だわいと思ふ。併し人間に出會ふ珍らしい慕しさは、此んな山の中では、日記の一隅に記すべきかなりの事件となるのである。向ふの人影は一旦偃松の蔭に入つたが、今度はひよつくり目の前に現れて來た。見ると先頭に立つて居るのが、一昨年一緒に黒岳や、蓮華、針木などに登つた龜次。續いて麻の洋服を着けた小柄の紳士と人夫二人。その一人は中房の善作であつた。龜次は相變らず人の善さ相な顏つきをして久濶を述べる。彼の偉大なる體格は益々立派になつた樣である。これから黒岳、雲ノ平を經て藥師に行くのださうだ。紳士とも名刺を交換して、山の話を取りかはす。紳士は私達のこれから先の計畫を聞いて、

「君それは槍と穗高の間はひどい。僕も一昨年上高地から槍へ出樣と思つて出掛けたんだが……。何！人夫か？

いや正吉じやない。さうさう作とか云つたが、途中で僕は岩から落ちて膝を打つて、とう〳〵横尾の谷に下りて仕舞つたんだ。途中の泊りかね。さうさ、まあ一泊では苦しい位さ」。と云ふ。その泊り場や、難場を指示しやうとて、紳士は穗高の連壁を見上げたが、惜い事には雲が掛り出して、上部は綿帽子を被つて見えなかつた。十分ばかり話して、龜次は又重い荷を背負つて立ち上る。

「お大事に」の聲を取り換して上と下とへ別れる。「龜次に雲ノ平の案內が出來ればよいが」と又さんは心配さうに呟いた。間もなく鎌尾根のかなり上部の岩山の側で晝にする。もう午後になるので、槍、穗高は元より、大天井、燕の連山や、黒岳、三俣の方にも白い積雲が浮んで、山の上部は大抵見えなくなつた。燒岳は乘鞍の下に赭つちやけた山體をさらし、水瓜を半分に切つた樣な頂上からは、白い煙を悠暢に吐き出す。笠ヶ岳は目の前に幅廣い山體を橫へ、下には蒲田川の流れが白く蛇曲して、森林の蒼黒い中を輝きながら流れて行く。之れから先は鎌尾根はいよ〳〵尖い。

岩の崩れは足下にカラ〳〵と音を立て、人々は偃松につかまつたり、岩角に獅噛み付いたりして登

◎槍より穗高へ　伴野

◎槍より穗高へ　伴野

つて行く。急傾斜で岩がこまかく崩れて居る所は、草鞋を蹈みしめても蹈みしめても落ちさうで、誠に危險だ。槍の肩に近いのか岩が大きくなる。しかし近くの尖峯に霧が吹き付けて來るので、これが終りかと思ひ樂しんで登つて行くと、又向ふに一峯が現れ、それを越すと又一峯と云ふ風なので、がつかりして仕舞ふ。其の中に槍の眞の穗が霧の幕を貫いて、青空の下に聳える。實に雄大なる景色である。

大分息が苦しいが、先頭の又吉は一本も立て樣としない。人夫達は遂に降參して一本立てたが、私達は痩我慢をして這ひ登つて行つた。やつとの事で槍の肩に着く。午後一時半。待ちこがれて居たので、梓川の谷を覗いて見ると、例の赤澤岳の坊主頭、その上にピラミッド形の常念と、左に橫尾鳥や大天井が續いて居る、雲は今來た方面のひどいのに較べれば少い。心配になる明日行く方面はと云ふと、大喰岳の廣い肩幅に隱されてわからない。大喰にも今年は雪が少いなと思つて眺めて居ると、思ひ掛け無い「ォーイ」と云ふ人聲が、しかも大喰岳の方から響いた。驚いて其の聲の主を搜すと、頂上の少し下に豆の樣な二三の人影。續いて又もォーイと叫ぶ、こつちでも三四人聲を揃へてォーイと應へた。返事のあつたのに喜んで、杖を振つて躍つて居る樣子である。そして直ぐ下り始めた。此の模樣に依つて考へると、確に穗高を縱走して來た者らしい。そして槍の肩に大勢人の休んで居るのを見て誇りの餘り吐鳴つたものだらう。よく見ると眞中に居るのが客で、前後は案內と人夫らしい。私達の仲間は次にこの案內と客が誰であるか當推量を始めた。見て居ると三人は、大喰の急な岩の間を左右に縫つてどん〳〵下つて來る、かなり早い。しかし早いと云つても此の肩迄達するのには、かなり時間が掛る事だらうから、その間に槍の穗に登つて來る事にする。穗へは餘程大勢登る樣になつたと見えて、岩の上に草鞋の跡が殘つて居る位。案內なんか無くても十分上下出來る。十分ばかりで頂上。

この前來た時は曇つて居て眺望が思はしくなかつたから、今度こそはと前から期待して居たのであるが、不幸にも又曇りである、昨日通つた双六や三俣などは雲の怒濤が碎けて居る。黒岳、五郎などは勿論見えぬ。殊に高瀬右岸の山々、即ち燕、餓鬼、唐澤などは雲の中である、

大天井の方は少々明るいが、南の連峯、即ち當の敵たる穗高の連峯に至つては、上部が、まつたく雲の幕の中にあるとは情けない。頂上の小祠には澤山の名刺が藏してある。開いて見ると水が溜つて居たのか、べと〳〵に露れて居る。一枚一枚はがして見て居る中に友人の名前などを見るのは嬉しかつた。併し、今年の登山者のが多く、古いものは、一萬尺の峯頭に冬を過す事は出來ないものと見えて、甚だ僅になつて居たのは、殘念な事であつた。此の小祠から右手の斷崖を覗ふと、高瀬川に面する東鎌尾根の一部らしい所迄、直下數百米。巍岩の列は鋸齒を横にした様である。水俣の奥、ピンボウ澤は、此の鋸齒の間に獅噛み付く雪から滴り出るものだらう。熟視しやうとしても、目がちらついて、頭がぐら〳〵する。三角點の所に引き返して槍の肩を見下すと、例の三人はもう大喰を下り切つて、乘越から肩の方へとからんで來る。殊に先頭の案内らしいのは恐しく足が早い。早く降つて様子を聞きたいので、頂上はそれ迄として下山の途に着く。降りながらも、もう槍の肩に着いて、又吉達と挨拶を取りかはして居る案内に就て推量する。少し下ると先に降つて行つた友は、「嘉門治だよ」と云ふ。嘉門治は此の頃はもう案内をよしたと云ふ噂を一寸と耳にして居たので、一時は疑つたが、成程近づくに從つて、頭の毛の薄くなつた所から、小兵で頑丈な所迄どうしても嘉門治らしい。背には殆ど荷を負つて居ない。さうと心で定めて足下に氣をつけながら肩の所に出る。やつぱり嘉門治であつた。

「やあ爺さんしばらくだつたね。此の春は上高地で色々御世話になつたが、おぼえて居るかね」

と云ふと、

◎槍より穗高へ　伴野

◎槍より穗高へ　伴野

「あんたさんよくまあ！之れから穗高へ駈けなさるかね。なあに、俺達の足跡があるから、案じは無へでがす。」

如何にも如才ない。先生もう私達の穗高へ行くのを聞いたものと見える。併しよい者に出逢つた。之で先づ不知の案内者を伴つても、一日先きに人が通つたのだから、どうにかして通過して行く事が出來やう。そこで色々な事を尋ねて見る。嘉門治に云はせると、尾根へ尾根へと通つて行けば安氣なのだ相である。そして途中には槍の様な尖峯がいくつも在つて、其の中二箇所程悪い所があるが、こつちから行けば登りとなるので危險な事は無いと云ふ。

こんな事を話して居る中に、お客と人夫も着いた。お客と云ふのは、この間私達が大町に行つた翌日、一人で對山館を去つて上高地に歸つた槇有恒君である、人夫は逞しい男だつたが名は聞かなかつた。此連中は、之れからまだ藥師迄行くのだ相で、今日は午後三時迄に上高地から米を此所に運んで來て、それを持つて北進するとの事である。もう此の運搬の人夫が見える頃なので注意して居ると、間も無く遙か下の雪渓の邊に當つて、小さい二つの人影が見えた、歩くのか歩かないのかわからない位だけれど、確に登つて來る様子である。お待ちかねの温泉からの人夫に違ひない。飛驒乘越（槍の肩から一つ大喰の方へ寄つた凹所）で待つ約束となつて居るからと云ふので、嘉門治達は、「大切に行つて呉らつせ。」と別れを告げて再び乘越へと戻つて行つた。

こつちももう降らねばならないので、荷を作つて今日の泊り場の殺生小舍の方へと降る事にする。小舍の所在がわからないので、振り返つては、頭上の乘越に立つて居る嘉門治に吐鳴つて教へてもらひながら下る、先の温泉からの二人の人夫にも間近く出會つたので、之れにも聞いたりして、どうと見つけ出す。此の前來た時には殺生小舍の側を通らなかつたので知らなかつたが、今年は登山客が立てこめて、坊主小舍だけでは入り切らなかつたものと見え、殺生小舍も修繕を施して泊つたらしい。



穗高岳　近藤茂吉氏撮影

岩穴の前には石垣を作り、中には假小屋が一面に敷いてある。附近には鑵詰やら新聞の切れなどが散亂して居て汚い。けれども六七人なら樂に泊れやう、私達は一行十人故、皆詰めるわけにはゆかないので、一町程上部の岩の平になつた所を選んで、天幕を一張り立てる事にする、今日は二時少し過に着いたのと、明日の行程に就ての相談とで、天幕を張るのもそつち除けにして、薪火を圍みながら又吉と話す。人夫は又吉共に六人大町から連れて來たのであるが、之を全部穗高に連れて行くのは、元より危險な話であるし、又其の必要をも認めないので、三人だけ不用な物品を持たせて一日早く上高地に下らせる事にした。それで穗高へは一行七人となる。併し之れでも人數が多過ぎるが仕方がない。携帶品は、天幕を止めて油紙三つと、毛布、シャツなどの類。眠る時には少し平な所を見つけて、油紙を被つて眠る覺悟である。草鞋は上高地へ着く迄に一人三足宛としたが、一人二足平均切つただけで濟んだ。もつとも當日は今迄の穿き古しを穿いたので、それがいくらか助けとなつたかも知れない、兎に角大町の草鞋は強い。次に食糧品に就ては大分憂慮すべき問題が起つた。大町を出る時一行十人に對し、太郎兵衛平に出る日迄の分として、米三斗を擔がせたが、太郎兵衛平に着いた翌日有峯に米を買ひに遣らせる時迄は、米は十分あつて、未だ幾分殘つた氣味であつた。有峯で二斗の米をついで、翌日は南下して黑部五郎の池で泊り、次に双六池で泊つて、三日目に槍に出るつもりだつたが、上ノ岳から赤城岳を駈ける日、途中で豪雨に出會つた爲、赤城の北で一泊し、翌日三俣に出る事にして居たのも、午前中カラリとしなかつたので、どう〳〵其の日も五郎の池迄しか行けず、結局一日の行程を二日で歩いた事になつて仕舞つた、其れで、今日着いて殘つた米を檢べて見ると、僅かに五升をあまるのみであつた。此の五升で、七人二日、三人一日分、此の延人員十七人一日の食糧とする事は勿論不可能である。又吉の顏色甚だ穩で無い、しかし暴風雨の際にとて持つて來たビスケットと軍用パンとは、ビスケットは前途の事も考へず、不用意に食べて仕舞つたが、軍用パン五十枚は未だ行李の

◎槍より穗高へ　伴野

◎槍より穗高へ　伴野

中に秘藏されて居る。それから明日温泉に下る人夫は、遲くも二時に温泉に到着する筈であるから、晝の辨當はごく輕くつめてやつて、温泉で茶漬けでも食べさせる事とし、私達は明日奥穗高か、奥穗高と涸澤岳との間に泊り、明後日は日の出と共に出發して温泉に降れば、晝少し過ぎに降れる見込みなので、方々どうにか遣繰りがつき、まあ行く事に埒が明いた。それから副食物も大缺乏を告げて居る。大町を出る時には、食ひ切れるかと思ふ位鑵詰やら、奈良漬やら、鐵火味噌、佃煮などを詰め込んだ竹行李は、今見るとがら〳〵になつて居る。併し副食物は米程に重用な問題ではない。目をつぶつて冷い飯を掻き込めば、生命には別條ない筈である。

どうやら食糧事件も方がついたので、あと氣になるのは天氣ばかり。槍の穗を見上げると、蒼い天空を威喝する如く聳えて居るが、常念附近にはやつぱり濃い雲が屯して居る。四時頃となつてやつと天幕一つ立てる。殘りの一つを立てる餘地が無いので、人夫等は殺生小舍で寢る樣にした、やがて太陽は早くも槍から穗高に續く絶壁の後に沈む。日が隱れると、寒さがぐつと增した。私達は、天幕の中で上高地へ下す荷をわける。明日はかうして置いて出來るだけ早く立たねばならない。夕闇が此の碗の底にある殺生小舍に押し寄せて來た時に、偃松の薪火は赤々と輝き、鍋に入れた米は、暖い息を吐く。人々は焚火の周りに夕餉を待つて居た。

(三) 大喰岳から南岳

昨夜寢る時に「明日こそ早く起きなければ」と思つて寢た爲か、三時前に一寸と目が覺めた、未だ天幕の中は眞暗。風が出たと見えて天幕がはた〳〵と鳴る。よい時分は起して呉れる約束なので、又毛布をかぶつて仕舞つた。今度目を覺した時には、早や曉の色が天幕の內に及んで居る。風は未だ止まぬ。人夫等はもう起きて焚火を圍んで居るらしい。盛に話聲がする。起しには來ないが、もうとても

おち〳〵して居られないので、天幕から這ひ出して見ると、風がビューと吹きつけて來る。そしてそれと同時に、霧が槍澤から恐しい勢で奔騰して、槍の穗や大喰は、忽ち影を消す。寒さに震へながら、焚火を取り卷いて人夫の話を聞いて見ると、今朝天氣さへよければ、三時過に起きて湯を沸し、直ぐに私達を起して昨夜炊いた飯の殘りで朝飯を濟し、今頃はもう出發して居るわけだけれど、此の天氣では仕方が無いので、四時過に起きて、天氣を見て居る所だと云ふ。併し間もなく朝日が、槍を目がけて飛び行く浮雲を金色に染め始めたので、此の分ならばと云ふので、兎も角さら〳〵と湯漬けの朝餉を終る。殘りの飯は、人夫三人の飯盒と、私達の辨當箱に固く詰めて。此れで明日迄支へるのだから心細い話。天幕を倒し、荷物を整理して居る中に、風も少し凪ぎ、霧も切れて行くので、いよ〳〵出發する事と決し、下に降る人夫と別れを惜みつゝ露營地を後にした。五時五十分。

先づ飛驒乘越にとつ着く。此の壁は下から見上げると可成急峻だ、壁下に獅噛み付いた殘雪の左を廻つて登つて行く。乘越は朝日に映じて岩が赤く輝いて居る。皆元氣がよいので間もなく到着。六時十分。槍の肩へ登るのと同じ位の距離だらう、しかし路の跡が無く、直線に登るだけこつちが苦しいかも知れぬ。登り切つて、ヒヨイと向ふを見ると、長い笠岳が日に輝いて、金茶色に光り、幾筋も縱に入つた雪溪迄、白色を失つて茶色に見える、その先は白い綿雲の海で、その中に頭をもたげた白山のコバルト色と、雪の縞の美しさには、まつたく心を奪はれた。しかし高瀨の湯俣の方から、濛々たる霧が吹き上げて、飛驒側に侵入するので、双六始め、三俣、鷲羽など見る事が出來ない。此所から見た槍の穗の壯嚴には、一同歡喜の聲を發せずには居られなかつた。絕えず吹きつける霧の中に在つて、朝日を受けて赤々と一劍高く天空を壓する其の姿は、世界の創造より以來、未だ曾て人類の足下に踏み躙られざる峯の如く、實に侵すべからざる風貌を具へて居る。振り返つて、來た方を覗ふと、今朝後にした露營地からは、未だ燃え殘りの焚火の煙が、風に吹き捲られて居る。常念山脈は、雲の中

◎槍より穗高へ　伴野

から頭をもたげ、横尾や二俣の附近は、未だ覺めやらず、曉の光が漂つて居る樣だ、遙か遠く〳〵、雲の中から不二と北岳が、高く聳へて居る。

五分ばかりして出發した。之からは大喰の登りとなる。始め飛騨側、次に信州側をからみ、頂上へは尾根の左をからんで登る、要するに此の邊では、何所から取り付いても登れる所だ。石は殆ど動かない。途中で見た高山植物は、かなり豐富なもので、この邊では、一番の採集地であらう。一寸と珍らしいものとしては、立山金梅、色丹草、雲マグサ、深山オダマキ、アラシグサなど。六時三十分に頂上に立つ。大體南北に亘つて三つの小隆起があり、標石など立つて居た。さつきは大喰の蔭になつて見えなかつた乘鞍や燒岳が見える。燒岳は例の樣に、赭禿げの頭から白い煙を吐き出して居る、下りとなつて、始め一寸と信州側をからんだが、岩は堅いし、這松は所々にあるから、尾根通しに行く方が樂な位だ。危險な所は無い。途中、槍澤の上方のカールにと辷り落ちて居る雪溪の上端を渡つて、中岳との鞍部に着いたのが、七時。

此所に立つて中岳の頂上を見上げると、急峻で中々手強い樣に見える。登りにかゝると、岩は動くし、急なので大喰よりは苦しい。私達は尾根を傳つて行く。しかし上部は信州側を行く方が樂らしい。七時二十分頂上。此邊の岩陰に咲き揃つた雲マグサの集りは、如何にも可憐である。群の大きい事は他の山では見られないものである。此頂上に立ち、行く手に當つて聳ゆる穗高連峯を眺めると、先づ第一に目に着くものは、北穗高の絕壁と峯頭。峯は少し横に長いが、其の上には幾多の小尖峯が劍を列べた樣に突き出て居る。中でも其の最高峯で、他の岩とは異つた白色の尖峯が、一際目立つて空を突く、北穗高の右に奥穗高、其の前に宛然奥穗高の山體の一部の樣な尖起は、涸澤岳である。北穗高の左方には、上高地から上下する南穗高が、一寸と槍に似た形を示し、それから横尾の連峯が左につづく。南岳はと見ると、極めて低下して居て、其所へ行く迄の尾根は、甚しく信州側に屈曲し、しか

も遠い様子である。

中岳を下り始める。非常に樂である。岩石は大喰のものとは趣を異にし、笞がむして居るので動く憂が勘い。樂な代りに、尾根はかなり長かつた。小さい峯をいくつか越して、東に曲つて居る尾根の最も東端だと思ふ邊に着く。此所からは、横尾の谷と、槍澤の谷との分水尾根が東に派出して居る。少く行つて、大岩の左手を雪溪の上端を渡りながら横ぎる。それから又樂な緩傾斜となつて、石は小石となり、烏帽子から三岳の途中に似て居る、間もなく南岳の直下に達した。南岳の北方に面した頂上以下は、板狀節理か何かの様に岩の割れたのが列んで居る、尾根は其右手を通つて行くのだから、之も心配は無い。すぐに登り切つて頂上へ達したのが八時十分。中岳から小一時間かゝつたわけ。三角點がある。五萬の燒岳圖幅中に北穗高としてある峯である。薄日が輝つて居る様だが、霧が下の方に卷いて居るので眺望が無い。人夫等は荷を下して安氣に休んで居るが、此の頂上からは、北穗高と南岳の最も險惡な所は、すぐ近くの一圓頂の小山の陰となつて居るので見えない。早くその大キレットを覗いて行方を定める必要があるので、一休みの後出掛ける、なだらかな傾斜を南に數百歩行くと、直ぐその一圓頂の小山、即キレットの頭に出る。

足下數百丈。目も眩むばかりの絶壁。此のキレットの底から聳ゆる北穗高の北部の絶壁と云つたら、又恐ろしい様で、此の南岳が降れたにしろ、北穗高は、どうして登つてよいかわからない。例の北穗高頂上の白色の尖峯は、鳳凰山の地藏佛の様だ。其の中腹から下に掛けて、四十度近くの岩の崩れが、どうとずり落ちて、キレットの底に達して居る、此のキレットは、私達の立つて居る此所と北穗高との爲め一つのカールであつて、カールの西緣、即ち南岳と北穗高とを連ねる尾根は著しく低下して居る上、劍が生へた様だから通れさうもない、それで先づカールの底に下らねばならないだらう。しばらくは度膽をぬかれた形でぼんやりして居たが、かうしては居られないので、下り路を搜し始めた。

◎槍より穗高へ　伴野

◎槍より穗高へ　伴野

又吉もさつきから、何所かに下りを見に行つたものと見えて居ない。他の二人の人夫は、荷の側に腰を下したぎりぼんやりして居る。それで私達は絶壁の左方即ち信州側を捜し出した。絶壁と絶壁の間のザラが下りられさうだが、下に降つてから、降れるかどうか疑問なので、友は少し降つて様子を見ると岩角につかまつて降りて行つたが、間もなくとても駄目だと叫ぶ。こんな事で大分手間取つて居る中に、又吉がヒヨッコリ歸つて來る。心配だから、「オイ行かれ相かね」と聞くと、右手の飛驒側を中途迄降つて見たが、大丈夫行け相だから出掛けませうと自信あり氣の様子。此の調子なら確に行かれさうだから、皆も一安心をしたと云ふ顏つきで腰を上げる。九時五分。いよ〳〵大キレットの底にと降る事になつた。

(四) 大キレットと北穗高岳

飛驒方面、もつと詳しく云へば、蒲田の谷の方に破片岩の崩れがづれ落ちて居る。大岩の崩れる患はないが、かなり急なので、小さい岩がガラ〳〵崩れ落ちる。下の蒲田川は綠の溪谷を縫つて白く輝く。なるべく絶壁を右から左に廻る氣持で、方向を北穗高に取つて下つて行く、十分か十五分で南岳頂上直下の絶壁の殆ど下方に着く。見上げると、膚の滑な岩壁がいくつも重り合つて、垂直に聳へた所は素晴しいものだ。私達は此の絶壁を飛驒側から卷いたわけ。此所からは南岳と北穗高を連ねる及の様な薄い尾根が低下はするがつゞいて居る。此の尾根の上は通れさうもないから、その左方について下つて行く。所々青い草が急斜面にへばりついて居る。下りて行く路は三十五度以上の急斜で、地盤の固い岩の上に大小様々の小石が被つて居るので、一寸と勢づいた足を掛けると、直ぐにガラ〳〵崩れ始めて、下に降つて行く者の危險は甚しい。注意して緩々降つて行つた。雪の多い年では、恐らく此の邊から狹い雪溪になるから、カンヂキなしでは苦しいだらう。私達もかなり降つて、巾二三間長さ

數十間の殘雪にぶつかる。左右から絶壁が迫つて居て、一寸と長次郎谷の熊の穴を狹く長くした樣な所なので、岩壁をへつるのも苦しいし、雪は急な上に、日に輝いて融けかゝつて居るので、一歩足を掛けても辷りさうだから、カンヂキ無しでは通れさうもない。仕方なく、雪と右側の岩壁との細い間隙を傳はつて此の關門を通過し、次に又岩の上に移つて降る。約十五分ばかりも三十度程のガレを下れば、最低部も近く、綠の草原も踈に點在して來た、膝ががく〳〵になつたので一寸休憩。九時五十分。今迄の所が南岳の下りの最難所なので、此れで一安心した。しかし此所から北穗高を見上げると、いよ〳〵頭上に高く、その崖はむしり取つた樣なので、之れよりもつとひどい目に合はねばなるまい、と思ふとがつかりして仕舞ふ。あまりゆつくりも出來ないので、間も無く出發して又降り、槍の穗高の交綏點、即ち大キレットの底に著いたのが十時十分だつた。此所は一カールで、本谷の水源の一つとなつて居る。谷になる時に急傾斜となるものと見えて、底に立つて居る者は、本谷の流れは見る事は出來ない。反つて涸谷と本谷との出會ひから屏風岩にかけて、川原が美しく輝いて居るのが見えるばかり。もし雨に降られた場合には、此所から直接に本谷に下りて、横尾に出る事が出來やう。屏風岩の上に見える筈の常念方面は、依然として雲の中。

今迄は思つたより危險はなかつたが、此れからの登りは餘程ひどい樣だ。北穗高の頂上を見上げると、脊梁らしいものは中腹迄で、其れから上は絶壁を立てた樣、しかし左を廻つて尾根らしいものが頂上に接續する樣にも見える。兎に角、その中腹から大キレットに掛けて、がれがずれ落ちて居るので、その右端を成るべく脊梁に接して登つて行く事に定める。いよ〳〵出發。此の大キレットの底は二千五六百米位あらう。殘雪もあつたし、車百合や、白山フウロなどのお花畑が美しい。

ガレを登つて行くと、岩の崩れが不安定極まるので、一寸と不注意の足を掛けやうものなら、忽ち岩石の流れが始まる。先に行く者が動かす岩の音は、心臟の鬱を止める樣な驚きを與へる。

◎槍より穗高へ　伴野

◎槍より穗高へ　伴野

登るに從つて手に掛ける岩が益々不安定になつて來たので、かなり登つた頃に、右手の尾根に取りつく。十時五十分。これからは全部岩登りである。下を見るとキレットの雪は殆ど直下に輝き、目が廻りさうだ。下は見ぬ事とし、唯目の前に出て來る岩を攀づる事のみに力を注ぐ。岩は大きいのでも一間か二間の高さなので、どうやら足掛りがある。氣を落ちつけて登つて行けば心配はない。その中に上の平な六疊敷位の岩の上に出たので一寸一休みした。十一時三十分。此の岩の御座敷から上は、大きな岩の堆積で行けさうにも無かつたが、もうこうなつたら行ける所迄行くより道がないので、右の方から攀ぢて、なほも岩登りをつゞける。所がどう〳〵大きな障害物に出喰した。それは地藏佛を持つて來た様な四方滑面の數十尺の孤立した岩峯で、しかも二つ三つ前方に突き出て居る様子なので、とても通れさうにもない。仕方がないから飛驒側から之をからむ事にする。右に降らうと這松を手依りにして少し降ると、もう力になる這松は無くなつて、あとは赤裸々の岩ばかり。やがて約四十度の石崩れを渡らねばならなかつた。一寸でも足を掛けたが最後、石の崩れは凄い音を立てゝ崩れて行く。又吉から渡り出したので、他の者も仕方無く一人一人渡つては向ふの岩蔭に避けてどうやら渡り終る。此の邊からは頂上は直ぐ頭の上らしく、目の前には、白い鳩の恰好をした岩が黑い絶壁の上に載つて居るのに目がつく。前と後と左は岩壁で、右は急な岩の崩れだが、それも直ぐ下で左に屈曲して居るので、岩の牢獄にぶち込まれた様な氣がした。霧が時々右手から襲つて來る。

これから先は確に左に登らねばならないのだが、登り口がわからない。又吉はそれを捜しに行くため、私達を後にして、あちらこちらの岩壁を探つたり、へつたりして居る。他の人夫は荷を下して腰を落ち着けたぎり、一體どうなる事かと云ふやうな顏つきである。私の頭にも前途の遠さや、今夜の夜營の事などが渦卷く。わけても食糧の不足の事が一番心配の種である。間も無く又吉は進路を發見したと見えて、向ふの岩蔭から姿を現し、オーイと吐鳴る、私達も元氣づいて再び腰を上げる。そ



薬師岳の肩より槍ヶ岳穂高岳遠望

近藤茂吉氏撮影

して又吉の行つた後をへつって行く中に、高さ三四間巾一間半位の岩壁が横つて居るのに出逢ふ。手掛りが無い大岩だから、不安極りない。しかし又吉の奴は平氣でへつって仕舞つたので仕方なく中央の僅な凹みのあるのに片足の先を突きかけ又吉に助けられて乘び込す様に通り過る。えらく危險な場所であつた。しかし之から少し進むと左上からガラ〳〵した崩れがづり落ちて居るので、之を登れば此の難所の上部に出るに違ひないと、その斜面を這ひ上る。果して先の地藏佛の様な岩壁の幷立した脊梁の上に出る事が出來た。此岩の幷立を天狗岩と云ふのであらう。要するに私達は此所を飛驒側からまはる爲に一時間ばかりも費したわけ、未だ頂上にはどの位あるかわからないし、それに十二時四十分になつて居るので、一休みして晝食を濟す事に定める。又吉によく今の廻り道がわかつたねと賞めると、先の三四間の岩をへつった近所ではとても行かれぬと思つたのだが、その時幸にも岩角に草鞋の紐の切れ屑が引つかゝつて居たので、昨日の連中も此所を通つたにちがひないと推定して、どうやら通り脫けたのだとの事であつた。一時半に出發、登りは依然として急な岩登りである。しかし北穗高の頂上も直ぐ近くなつたので、私達も元氣附き、信州側から廻つて這ひ登る。高山植物の可憐な姿も岩角に獅嚙みついて居る。二時十分どう〳〵北穗高の頂上に到着した。

霧がすつかり深く鎖して居るので、眺望は皆無。唯、目前に怪物の様な鼠色の尖峯が、次第に薄墨にぼかされて、立ち列んで居るばかり。此の北穗高の頂上はいくつにも分れて居るらしく、天氣がよくなければ、どこが最高峯やら見當がつか無い。三角點らしいのも見當らず、所々に標石があるばかりだつた。前途を急ぐので一休して出發。

頂上を南進して行くと、危岩怪石が堆積して、或は屹立した二岩峯の間を身體を横にして通りぬけたり、或は石門の様なのをくゞつたり、細長い岩を渡つたりした。しかし岩質が緻密で且つ岩塊は大きいから動いたり、崩れたりする憂はない。槍を小さくした様な峯はいくつもあつた。天氣がよけれ

◎槍より穗高へ　伴野

ばこんな岩峯の危景などを云つて居る暇もなく、四方の眺望に氣を奪はれる事だらう。二時四十五分「十山」と刻した標石のある山頂に出る。此の附近が北穗高の最南峯に當るだらう。夕方に近づいたので霧が少し納つて行手に赭茶けた涸澤岳の絶壁が殘忍の相貌を表す。そのむしり取つた様な絶壁からは生々しい血がしたゝりさうである。あれを攀ぢなければ、今夜の泊るべき豫定地に着けないと思ふと、折角靜まりかけた神經が、再びいらだつのを覺える。奥穗高や南穗高は矢張り雄姿を現はさぬ。涸澤岳の東面は一面のざら落ちが、横尾の谷底に及んで居る。そして鼠色の霧の幕の下から横尾の殘雪が淡白い。

（五）涸　澤　岳

此の北穗高の最南峯と、涸澤岳の鞍部に降るのには、國境が殆ど刃の様な薄い脊梁を辿るので、小さい峯を登つたり、降つたりして降つて行く。鞍部に降り切つたのは四時十五分。左方横尾谷に面して狹い雪が掛つて居る。人夫達は今朝からの奮闘にかなり疲れたらしく、無言の中にも苦しみの色はあり〳〵と浮んで居る。しかし横尾の岩小舍に泊るわけにもゆかないので、又出發する。涸澤岳の登りは、先の北穗高の登りに較べればそれ程危險では無い。始めは矢張り國境の脊梁を左右にとからみながら登つて行く。手と足を同時に働かさねばならぬ事は勿論である。一峯を過ぎてからは、所々に這松の小さいのが岩の間に根を張り出して居るので、之が大變手助けとなつた。どうやらして頂上の直下まで攀ぢ登つた。此所から東方に帶のやうな細長い岩の棚が續いて居るので、又吉は先頭に立つて様子を見に行つたが、棚と棚の間が一間ばかり切れて、ガレになつて居るのに逢ひ、一寸と足を掛けた。忽ちひどい岩の崩れが落ち始め、足のひき様が今一瞬間遲れたら、又吉はその崩れの中に引き込まれて、數千尺の下に吸ひ込まれたかもしれぬ。さすがに青くなつて居た。東から廻つて行くのは

絶望となつたので此所から直接に登らねばならぬ。その邊を調べると、昨日の連中の通つたらしい岩の崩れや杖の跡があるので、此所を登る事にした。それは一寸アルプス等でチムネーと稱して居る岩の割れ目に似た地形であつた。又吉が最初に登り次に私達が登る。繩は無くとも、膝や肘を用ひれば登る事は出來る。しかし降りは駄目だらう。勿論荷は吊り上げた。此の時用ひた繩の長さから考へると五間ばかりはあつた樣に思ふ。登り切ると涸澤岳の頂上。皆の無事を喜び合ふ。五時二十五分。三角點の櫓は毀たれてしまつたのか見えなかつた。依然たる霧の海の中にあるので、直ぐ降る事にする。降りは岩も小さく、傾斜もゆるいから危險は無い。少し降ると、太陽は西の雲の切れ間から祝福するが如き金色の光を投げ、それが東方の濛々たる霧の幔幕の中に落ちたと思ふと、そこに美しい金環が現れた。驚いて熟視するとその金環中には私達の影がうつつて居る。そして手を動かせば、影も手を動し、杖を振れば向ふも其の通りの動作をする。自分達は生きながら阿彌陀樣にでもなつた樣な氣がして、自然の此の祝福に對して絶大の喜悦を感じないわけには行かなかつた。

もうよい加減にして降る所を定めねばならぬので、注意して適當の地を捜しながら降る。薪の少いのも慮つて、偃松の枯枝など拾ひ集めて行く。奥穗高との鞍部に出たのが六時近くだつた。此の邊に泊り場を捜すと、信州側に面した陸地測量部員の泊つた遺跡らしい周圍に石垣をめぐらした六疊敷位の露營地を見出したので、此所に荷を下す。殘雪は直ぐ下にあつたが、偃松が少いので、之を集めるにはかなり骨を折つた。

今日は朝の六時から十二時間に亘る勞働をした上、氣をつかつた事も甚しいので、腰を下した時には安心した爲か一時に疲れが出た樣な氣がした。下は石で痛いから、脊負子を解いて其の上に腰を下す。風も冷くなつて來たので、冬シャツや毛布を出して被る。今夜は飯を炊く世話も無いので、簡單に冷い辨當で濟す。火もパチ〳〵音を立て、風にあふられて嬉しい焔が燃へ上る。今迄は野營と云つ

◎槍より穗高へ　伴野

◎槍より穗高へ　伴野

ても、雨露を凌ぐに足る天幕があつたけれど、今夜は頼みになるものとては、僅に大油紙二枚、しかも三千米の高所に泊るのだからとても眠れさうにも無い、其の中日はとつぷり暮れて星がキラ〳〵輝き出す。又吉も安氣と云つた顔つきで、犬の皮の上に腰を落ちつけて煙草をふかして居る。一しきり今日の行程に就て話に花が咲く。明日は食料が不足だから是非晝迄に温泉に出やうと、いゝ加減に切り上げて寢る事にする。用をたしに石圍の外に出ると、三日月が凄く光つて居た。

毛布と油紙を被つて横になつたが、石の角が身體に當つて痛いので、屢々寢返りを打つ。その中疲れた爲か、眠に落ちて仕舞つて。夜中に焚火が消へて寒さが急に增し、忽ち目が覺る。油紙は夜露で雨に逢つた樣に霑て居る。起きて火をたきつけると、頭上には天の川が銀砂子を撒いた樣に輝き、數千の星は燦爛として冷い光を投げて居た。奥穗高も涸澤岳も黑く高く靜り返つて居る。焚火を燃しつけて、又毛布にもぐつた。

(六) 奥穗高岳

毎日暖い天幕の中で寢て居る時には、人夫等が起きて、偃松を切つて火を燃しつけ、水を汲み、飯を炊き終り、味噌汁が出來た時分に、「先生方もうお起きなすつて。」と天幕の入口から催促されても、毛布にくるまつて中々起き出なかつたものだが、今朝ばかりは夜の明けないのに目を覺し、人夫等に火をたきつけさせる。又風が出て來たので、石垣の外に顔でも出さうものなら、切られる樣に寒い。奥穗高も涸澤岳も未だ曙光を受けず、暗く高い。東方が稍薄明くなつて來た。風が强いのと、偃松が少いので中々燃えつかない。骨を折つて漸くものにした頃には、滿天の星も消え始め、東方の空に明星が唯一つ美しく光つて居た。空は風に吹き清められて薄青く輝いて居るが、東方に當つて鼠色の雲が地平線上に沈んで居る、此の雲の上は薔薇色に澄み渡つて非常に美しかつた。雲の中から北岳や八

岳や立科らしいのが頭をもたげて居る。左によつて淺間が煙を吐く。

直ぐ下にある雪を鍋に入れて湯を沸し、薄黒い塵だらけの湯を昨日の殘飯に掛けてかたづけ、パン三四枚を嚙つて補にした。情け無い仕末だ。間も無く最初の曙光が奥穗高の頂上を金色に輝す。殘酷な山の相貌も少しは和いで來た。風は止みさうにもない。飯は濟したものゝ風が強いので、出て行く元氣も無く、皆焚火を圍んで暖まる。其の中に朝日も此の悲慘な野營地をてらし出して來たので、いよ〳〵出掛ける事に決める。油紙や、毛布は皆負つてもらつたが、シャツは寒いので着た儘にして置いた。六時出發。

目の前の脊梁を奥穗高さして登る。途中一寸とした峻峯があつたが、右を廻り、二つ三つの危峯を起して登つて行く。身體もかなり暖くなり息もはづんで來た。奥穗高の頂上らしいのが見えたので飛驒側から登る。頂上らしいのは二つ三つ續いて居て其の一番高いと思ふのに達したのは六時三十分。頂上は同じ樣な高さの岩の堆積があつてどれが高いか一寸とわからないが、其の一つには標石が立つて居た。霧が例の通り出て來て槍の方も飛驒の方も悉く見えぬ。太陽もさつきから雲に包まれ、大分險しい天氣に變じた。たゞ、上高地の盆地ばかりが霧の隙間からのぞかれる。美しい梓川の流れや、こんもりした林が見えた時は嬉しかつた。

霧はとても霽れさうにもないので、七時十分出發して、南穗高に向ふ事にする。霧の爲に此の間をつなぐ脊梁がわからなくなつて、一度岳川の方に降りかゝつたが氣がついて又左の方に引き返し、それからは間違ひなく脊梁々々と辿つて降つて行く、勿論小さい岩山がいくつも突出して居るのでそれを乘り越しては降つて行くのだ。危險さは今朝の奥穗高の登り位なものだ。しかし降りだから時々石が落ちて來てあぶない。鞍部に着いたのが七時五十分。尾根の谷から吹きつける霧はずゐ分烈しいので、とても谷の樣子なんか見られない。大雪渓らしいのが、淡白く霧の下に光つたばかり。又登り。

◎槍より穗高へ　伴野

◎槍より穗高へ　伴野

かなり急だけれどもゆつくり休まずに行くからそんなに苦しくもない。霧の爲に頂上は見當がつかないけれども、しばらく行くと、破片岩の崩れの大きい斜面になつて、もう頂上に近い事を思はせる。成程此れを登り切ると例の三角標がぼんやり霧の中に浮び出た。一時間かゝつて八時五十分南穗高の頂上。

もう此所に着いたからには安心なものだ。あたりを見ると温泉から登山する人達が持つて來る辨當包みの屑が、淺間しく散亂し、三角標には名刺だの登山紀念の署名が一杯である。南穗高はすつかり荒された。兎に角昨年の夏などは一時に八十人も登山して三角標下は人で埋つたと云ふから、こうなるのも無理はなからう。しかし此れに較べて此所から先は有難い事には、如何に見棄てられて居る事だらう。

標下に座して殘りのパンを喰べて居ると、登山客が上高地の方から登つて來た。一人の西洋人と案內者。小柄な髮の黑い雜血兒の樣な男である。眺望の無いのに悲觀して居た。一足先きに御免を蒙つて九時半下山とする。降つて行くと一寸とした道らしいのも出來て、先年登つた時の危險は少しもない。併し急な降りだから足はがく〳〵する。急な一枚石の崖を下りて河磧の所に出たが、今年はちつとも雪が殘つて居ない。水が飮みたいが我慢して下る。あの長い押し出しの上を岩から岩へと飛びながら降つて行く時は、いやになつた。早く森の中に入りたいが中々來ない。一時間計りも押し出しを降つて始ど降り切つた所から森に入る。久しく固い岩の上ばかり、オズ〳〵して登つたり降つたりした身にとつて森の中の柔い土は、如何に心よかつた事か。梅などの綠の香も嘉しい。間もなく美しい溪流が森林の空氣を搖がしてドットと泡を吐く、可愛らしい鳥の聲も聞えて來た。一同は飽く迄水を呑み、偃松の煙くさい身體を拭いた。之れからはもう歩くのも苦痛では無い。風も暖くなるし、日も輝き出す。萬物は皆笑つて私等を迎へる。ごぶ川の淸い水を徒涉したり、白い河原を歩んだり、川楊

の線に氣を取られたりして、河童橋の所に出た。振返れば穗高は高く、上は雲に包れて居る。私等は無意識に歩いて行く。間もなく温泉の建物が現れた。（大正五年）

霧ケ峯と鎌ケ池及八島ケ池

武田久吉

霧ケ峯と聞くと、直に本誌第一年第一號に出た、久保田柿村舍氏の『女子霧ケ峯登山記』を連想せざるを得ない。本會が成立してから第十二年目の今日に至るまでに、霧ケ峯に關する記事は只一回しか出ない處を以て考ふるに、此山が如何に山岳研究家から冷遇されて居るかゝわかる。世の中から流行といふことを取去ることは不可能であらうが、單に雲表に聳える高山とか、峻險を極むる山岳とか、さては恒雪、カール等のある所のみを目がけるピークハンターは別として、眞面目な愛山家、山岳研究家と名のる面々は、六千尺内外で、而も傾斜緩慢な、と同時に非常に興味のある霧ケ峯を度外視するのは餘り當を得ては居るまいと思はれる。さういふと自分がひどく一流の研究家で、其爲に山岳に登りでもする樣に聞えるが、實の處自分が登山の目的は本能寺にあることが多いので、山岳其者を研究するが爲めに登山した場合は過去に於て僅かに過ぎないのは、何やらうしろめたい譯であるが、事實は如何ともし難いのである。

霧ケ峯――少くも其一部――に登つたのは、昨大正五年七月十六日と同九月二十九日の二回に過ぎないが、幸ひ兩回共晴天であつたので、山容の大部分を見る事が出來たから、今此には其折の記憶を

◎霧ヶ峯と鎌ヶ池及八島ヶ池　武田

辿つて、登山記事でなく、概括的に山の模様と、多少後來の登山者の參考となることでも書いて見やうと思ふのである。此記事を讀まれる人は幸にして陸地測量部發行五萬分一地形圖諏訪圖幅を參照されたい。

地圖上に現はれただけで、霧ヶ峯が如何に尨大な山岳であることを想像出來やう。しかし其偉大なる山容は、前方の低山の陰になつて居る爲め、諏訪方面からは殆んど見ることが出來ない。霧ヶ峯の概念を得るには、湖東村か豐平村のあたりで、大門街道の一部からも見えるが、更に東へ寄つた方で八ヶ岳連山の裾野に登れば、霧ヶ峯を側面から可なり能く見ることが出來る。此他上諏訪附近では諏訪湖の南方の有賀峠（アルガ）、眞志野（マシノ）峠、杖突峠、金澤峠等に立てば、霧ヶ峯の南面を窺ふことが出來る。

此處で序に言つて置くが、有賀峠や眞志野峠は上諏訪から半日で樂に往復することの出來る所であるにかゝはらず、其の頂からの西望は、天龍川のヴァレイを見下して、其の西方に屹立する連山の雄大な姿を見ることが出來るから、上諏訪から散歩がてらに行くには恰好な所であることを申添えて置く。殊に是等の峠の西側は古生層の砂岩等より成るので、諏訪方面からの登りとは大分樣子が違つて面白い、只夏日には隨分暑いことを覺悟する必要がある、さて霧ヶ峯の特徵はといふと、此附近の山岳、否寧ろ日本の山岳の大部分のものと異つて、其最高點が海拔六千尺を少し超えるにも係はらず、急峻に聳立することなく、山腰以上は傾斜が極めて緩慢で、泰然として座する容は、如何にも落付拂つて、又或點に於ては要領を得ない樣な、奥の如何にも深い、と同時に近づき易い、一言にして言へば特種の興味を有する山である。厖大で傾斜が緩慢である上に、谷合の或一部を除いては、樹木が皆無と言つてもよい程で、概してス、キ等の草本が生じて居る處は、そゝろに氷河で頭をなでられたスコットランドの或山を偲ばせるのである。

霧ヶ峯の近郷近在の百姓共は、霧ヶ峯を以て最良の草刈場として居る。夏の半頃から秋の初め、山

にそろ〳〵霜が降りる頃まで、朝うす暗い頃から馬に乘つて、鎌一挺と研石とを用意して、霧ヶ峯へ出かける。時には大勢群をなして、十數頭もそろつて行く處は、宛然砂漠を横斷する隊商の一隊を思はせるのである。されば霧ヶ峯にはよく踏み固められた小徑が縦横に立つて居るので、路をはづれない限り、地圖と磁石とをあてにして、充分注意して行動をすれば、名物の霧の深い時でも、踏迷ふ患は殆んどない、只五萬分一地圖には、何故か小徑の或者が省略してあるのと、毎度苦情の出る通り地名は餘程確な記錄のあるもの〻外は記入しないとかいふ方針に從つてあるので、不便を感ずることは少くない。

霧ヶ峯山彙の最高點は地圖に車山一九二五米突と記してある所で、此所からの眺望は可なり面白いだらうと思ふが、自分は未だ此處に達するの機がないのは遺憾である。此車山の南面から、地圖にカシガリ山としてあるあたりは、盛に殖林がしてあるので、尚霧ヶ峯の四周をとりまいて、谷合には闊葉樹や針葉樹がよく生育するが、山麓から上には一二ヶ所の小區域を除いては、樹木の影さへないのである。

霧ヶ峯を構成する岩石は角閃安山岩であるといふが、それが所々に磊々として居て、鬼が石投げでもした跡でゝもあるかの様になつて居る所がある、其の中には蛙岩と名のついたのもあるので、巨巖の草間に隱顯して居る點は、一寸立科山の東南の横岳に於けると類似して居る。是等の岩石には往々縞の様な紋理が見えるが、土人は之を以て霧に原因するものと考へて居る。

霧ヶ峯山彙には小池が少くない、標題にも掲げてある鎌ヶ池八島ヶ池は、地圖上にも明に記してあるが、其中間に無名の小池と、尚長二三間許の小水界もある。鎌ヶ池の北端と八島ヶ池との見通しの所にある小池をば本會員理學士川村多實二氏と共に瓢箪池と命名したが、尚是等の外に底無し又は鬼ヶ泉水と呼ぶ小水界があるといふ話であるが、其位置は明かに知り難い。鎌ヶ池等に關しては後段に

◎霧ヶ峯と鎌ヶ池及八島ヶ池　武田

更に述べる處があるから、これで筆を止めて、モ一つの池に就いて略説する、それは五萬分一地圖上には、角間澤西御料地と記してある御料地との二字の間の眞東にあたる所に、小流によつて續いて居る二つの小池がある、これは俚俗オドリバノ池又はアシクラの池と呼ぶもので、地圖にある様に明に二つになつては居ない、池の周圍の大部分にはアシが生じて居て、池の輪廓を窺ふことは誠に困難である、池中に水草（ヒツジグサ？）が大分生じて居る處から考ふるに、池は大して深いものとは思はれないが、其東端に龍宮と言て、非常に深い地點があるさうである。此池の緣の淺い所にはアシの間にスゲの一種が生じて居る、葉は細いが可なりの長さである爲め、此頃上諏訪の或人は之を刈つて簑を製して販賣して居るのを目撃した。池の西に續いて長さ數町の凹地がある、嘗ては濕原であつたのが、今は漸く乾涸しかゝつて居るのが歴然とわかる。オドリバノ池の東北の澤から流れ出る小流は、此池を貫流して南方に流れ下り、北大鹽に出て、終に鑄物師屋（イモジヤ）の南で瀧ノ湯川の下流に合するのである。

霧ヶ峯の登山路は大分あるが、一番便利な上諏訪を根據地として登るとすれば、少くも二つはある。霧ヶ峯の何れの部分に登らうかは、登山者の隨意であるが、最高點車山に達するには、前述のオドリバノ池を經て上るを第一とする、此池から小流に沿ふて登る道は、何となくハイランドの或山を登るのに似て居る點は面白い。

上諏訪からオドリバノ池に出るには、地藏寺の少し北から、目下盛に石材を採集して居る山梁に登り、阿彌陀寺の後方の尾根を北に傳ひ、角間新田（カクマ）の上から右に細徑を東北に進んで、オドリバノ池の西方の凹地の端に出る。此處から凹地の北側の細徑とを辿るもよし、或は南側を行つても、霧さへ深くなければ初めてゞも容易である。

第二の路は上諏訪の郵便局の少し上（かみ）から左に折れて、高等女學校の側に出で、細徑を桑畑の緣を進んで、やがて一寸急に下ると、角間新田に通ずる道の人家の間に出る、これから一時間程で角間新田

に達する。角間新田からは道も漸く狭く且悪くなるが、土人は荷車を引上げて刈取つた草を積んで運搬する。道は概して角間澤の流れについて上るが、やがて流れを渡つて其右岸に出る、左右は草山で、眺望もなく、風も通さない、只後を見かへつた景が多少目をなぐさめるのみである、漸く進むと、道の左側から可なりの小流となつて清い水が盛に流れ出すに出遭ふが、これが俚人の所謂夫婦清水で、元二條になつて流出するからだと云ふ、シミヅと云はうより寧ろ男女川とでも言ひさうな水嵩である、しかし水は實に清冽で渇を醫すに足りるのである、流れに沿ふてイブキキンバイサウなどの咲いて居るのも美しい。

夫婦清水より上ると數町で、地圖に諏訪と記してある諏字の上に、一寸申譯程の針葉樹林の記號がある、土人は此處をシナノキダヒラと呼ぶが、シナノキはなくて、カラマツ及ヒノキであつたか兎に角針葉樹の疎林が、右方に見える、此處から小木橋を以て再び角間澤を左岸に渡り、小溪に沿ふて眞直に東に上れば十數町程で前述の凹の西端に出る、登りは可なり急であるが、いよ〳〵上りきつてオドリバノ池が見えると急に目先が變つて面白い。

シナノキダヒラの所で路が三岐する、右方のは前述のものであるが、中央のは前面右手に見える赭赤色の山坡を登るので、夏月にはハナシャウブ、ゼンテイクヮ、クララ等の咲き亂れる間を一條の路が通じて居る。これは元來小縣郡の男女倉（ヲメクラ）に通ずる道故、馬も立派に通へば、迷ふ恐れは全くない、登りつめると石のゴロ〳〵して居る所に出て、急に北面が開けて、近くは鷲ケ峯よりやゝ距つては左手に鉢伏山が二ノ山を徑て三峯山に連亘して居るのが手にとるやうに見える。此處を賽ノ河原と呼んで、石の地藏佛二體が小高い崖の上に安置してある、そして此地藏はシナノキダヒラからも望むことが出來る。

此處へ着くと誰しも腰を下して、五分や十分は休憩したくなる。今迄山懷と言つた樣な、左右を山

◎鷲ケ峯と鏡ケ池及八島ケ池　武田

◎霧ヶ峯と鎌ヶ池及八島ヶ池　武田

や崖で取圍まれた路で、只後方に少し眺望があつたにすぎなかつたのに引かへて、北西から西にかけては、中央山系の逸物が、白雲の間から隱見して居る、西南に木曾山系、南には近くは駒ヶ岳山塊を初め、其後には二岐せる北岳の尖頭を初めとして、それと前岳との中間には赤石山系の雄物が雲の如く霞の如く連つて居る。

賽の河原は已に霧ヶ峯の西端で海拔千五百米突を出でゝ居るが、霧ヶ峯の本體は今數町東北に進まないと見參に入らないのだ。東俣澤の右岸に聳立する鷲ヶ峯を前面稍々左手に見ながら、巾の廣い、往々巨石の横はる道を東北に多少一上一下して行くと、程なく千六百米突の等高線を越える頃より、徐々に右手に傾斜の極めて緩慢な、略平坦に近い草原が開展する。行けば行く程際涯のない草原で、何やら迷宮にでも入つた様な、それにしては四方の開けすぎた、一向に山らしくない、と言つて武蔵野とも趣の違ふ霧ヶ峯獨特の味がそろ〳〵頭に入りかけると、それを右手に見棄てゝ、左手の谷合の上部から針葉樹が一寸頭を出して居る所を目がけて進んで行く。此黒木は東俣澤の官林の一部であるが、路は此谷間に降りかけると見せて、實は右に曲つて東に向ふのである。霧ヶ峯の尨大なる姿は右手に限りなく續いて、其端からは一足飛びに八ヶ岳連峯に達せられさうに見える。スヽキの間には處々にハナシャウブの紅紫花が笑つて居る、又時にはギバウシも之に交つて生じて居る、土人は之をコレーと呼んで、若芽を食用とする爲めに、晩春から初夏にかけて盛に之を採りに山に入るといふ事である。

東俣の官林に接近した所を、ダラ〳〵と降るとなしに小流に下るが、これは地圖には濕地の記號のある地點から流れ出て、東俣澤に注ぐ小溪で、水は清冽を極めて居るから、渇を醫するには適當である。流水の緣には夏はナツユキサウ等の花が美しく咲き亂れて、乾燥せるスヽキの原とは、小區域ながらも植物景が急に差異を現はすのも面白い。

此小流をこえて、更に東に向つて進めば、右には霧ヶ峯の主部が一起一伏して連なり、路の左右に

は巨石が磊々として横はり、其間には淺間や八ヶ岳の裾でおなじみのキミカゲサウが少なからず現はれる。路は少しづゝ上り氣味であるも、概して平坦で、只隱れ石を注意してさへ歩けば、歩行には何等の苦痛を感じない。

やがて千七百米突の等高線に達すると、路が尚更平夷になると共に、左手に東俣澤の上流が現はれる、前面には千八百米突を抽く同樣な草山の峯が泰然として座し、處々に巨巖が現はれて居るの外、一見何等の奇をも認め得ない、即ち霧ヶ峯一流の筆法である。

此邊から路は左手にダラ〳〵と下り氣味になる、東俣澤の上流をこえて開けた左手を見ると、四周を丘陵や山で圍まれた一小平野が目に入る、附近の山野の綠色に似ず、妙に赤味掛つた此平地の北隅に、一點新月形の銀色が月に輝くもの、これぞ鎌ヶ池であるのだ。

鎌ヶ池を望見して、而も惜氣もなく之を見棄てゝ他の方向を轉じ得る人が幾人あるであらうか、靜かに濕原の中に笑を漏す山中の小湖の、如何に人を引つける魔力のあるものであることよ。太洋を航行して島を望むだ時と、山中に彷徨して池沼を見出した時とは、共にそれに近づきたい、若しそれが不可能ならば出來得る限り、それをあくまで見たいとは誰も思ふ處であらう。今自分等の立つて居る所からは、一條の細徑が鎌ヶ池に通じて居るのを知つては、最高點車山に登るのは中止しても、先づ鎌ヶ池に達して見たくなる。

男女倉越の道を東俣澤に向つて降るのは多少足元の注意を要する。傾斜地である爲めに、崖から水が湧出して、處々に水溜りが出來て居る許りでなく、水分の存在は植物の生育を盛にする爲め、ミシウドであつたか巨大な草本を初め、カラマツサウ、ナツユキサウ等がスゝキに交つて路を蔽ふので、兎角に隱石に足を奪はれたり、水溜りに飛込んで、心持のよくない目に逢ふことがある。

いよ〳〵東俣澤の流れに降らうとする處で、對岸に思切つて左手に崖を登る路が明に見える。これ

◎霧ヶ峯と鎌ヶ池及八島ヶ池　武田

◎駒ヶ峯と鎌ヶ池及八島ヶ池　武田

が鎌ヶ池に出る道であるが、地圖上に記してある男女倉越の道とは別のものである。澤に下る少し手前でよく注意すれば左に急に下る細徑がかすかに認められる、これによつて澤に下れば、澤を渡つてから前記の道を少し下流に向ひながら崖に登るのであとは少しの困難もない。萬一男女倉越の道――この方が遙に明なので、兎角引入れられ易い――について流れ迄下つた場合には、崖を登つてから思ひ切つて下流に向つて進めば、鎌ヶ池への本道に出ることは造作ない。道を失つた場合には、温泉の入口に山坡が左右から突出して居て、其の中央を東俣澤へ合する小溪が流れ出る所を見がけて進めば間違はない。

スヽキを初め種々の雜草の中を、駒ヶ峯を正面少し左に見て進めば、澤を渡つてから十數町も北行すると、巾六七尺の溪流に出る、飲用に適する水は此處より先にはないから辨當を使ふなり、水筒を充すなり適宜此水を利用することが得策である。此處から今一息で鎌ヶ池の南端に出るから、休憩地としては池畔を選ぶ方がよい。

鎌ヶ池の南端からは一條の小溪となつて水が流れ出て、今し方越えた小川の下流に合して、やがては東俣澤に落ちるのである。池水の落口の附近から、池の西岸にかけては、スゲやヰの類が水中に繁り、之に交はつてサハギキヤウとワンモカウが多量に生じて居るのは、特に目を牽くと共に、花時の美觀を思はせる。池の東岸にはハンノキやヤナギ等が可なり多量に生じて、其間には大小の石が散亂して、緩傾斜を以て池に臨んで居る。

鎌ヶ池の東岸は、斯の如く岩石の散亂せる遠淺であるが、西岸は急に濕原に接して、何やら泥深さうに見える。濕原は學問上高層濕原（High-moor）に屬するもので、而も其典型的なものである。此濕原を構成する主要植物はミヅゴケの一種 Sphagnum cymbifolium 及び Sph. acutifolium と思はれるが、これに交はつて尚二三種のミヅゴケがある、そして自分が採集したもの丶一つは岡村周諦博士の檢定

の結果新種と確定して、これにイトミヅゴケなる新名が命ぜられた。濕原が遠望褐色を帶びて見えるのは實にミヅゴケが花青素を含有するによるので、枯葉などに基因するのではない。

此濕原中にはコルコケモヽ、ヒメシャクナゲと共にミツバツウレンが多量に生じて居るのは注目に値すると思ふ。其他にはイハシャウブ、ミカヅキグサ、スゴリ等を初めとして、スゲの數種が生じて居る。又處々ヤマドリゼンマイの群落や、バイケイサウの小群落乃至はキレンゲツヅジの小なるものなどあるのは取出でゝ目につき易い。秋にはオヤマリンダウも紫脣を綻ばすが、昨秋は之を藥用にでもする爲めか、盛に採取して居る人間を見かけたから、遠からず絶滅する事であらう。

鎌ケ池の東岸に沿へる細徑を進むと、やがて池の北端に出る、此邊には池中にサギスゲの白花や、カキツバタの紫花が美しい。カキツバタは嘗て北海道ホロムイの泥炭地に野生して居るのを見たが、内地で野生品に逢着したのはこゝが最初である。鎌ケ池の北端から、濕原の北に沿ふて山の裾を西に進むと、やがて一小池を路の左に見る、これが予等の所謂瓢簞池である。鎌ケ池の北端からこゝ迄に溝が續いて居るが、此溝は更に八島ケ池へつゞいて居る、而も此溝には多少の水はあつても常に其の流るゝのを見ない。溝の緣にはヤマドリゼンマイやクカイサウが生ひ茂つて居る。

八島ケ池は其名の如く、池中に數個の小さな島がある。これは浮島であると云ふが、昔は兎に角今では底に碇着して居るらしい、元來池畔のミヅゴケが池中に落ち込んで、初めは浮島をなして居たものが、場合によつては岸に吹つけられて、こゝに再び連續したり、又は池中の或部分に碇着するに至つたものと考へられる。

八島ケ池の北岸及西岸は直に鷲ケ峯から派出する山足に接續して居るが、東と南は濕原につらなるので、ミヅゴケが密生して居る、池水は西南端のアシ等の生じて居るあたりから小溝となつて流出して、濕原の西側を迂回して、終には鎌ケ池から流出する小溪の下流に合して、東俣澤に落ちるのである。

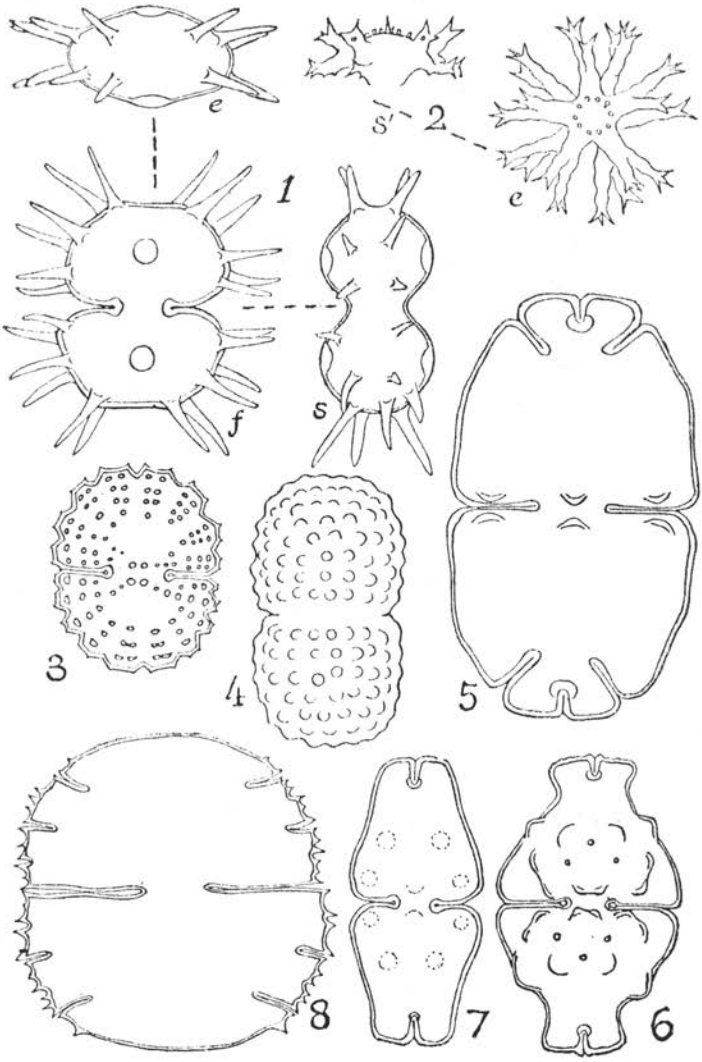
◎鷲ケ峯と鎌ケ池及八島ケ池　武田

◎霧ケ峯と鎌ケ池及八島ケ池　武田

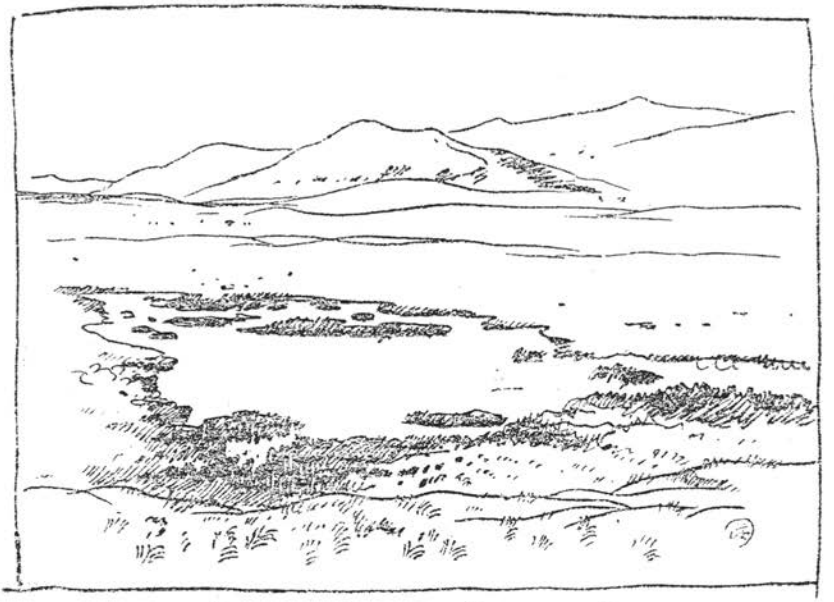
る。池の周圍には樹木はない、只處々にキレングツツジの矮小なるものがあるのと、島の上に同じくキレングツツジやサハラの小いものが生じて居るにすぎない。此處で鎌ケ池と八島ケ池とを一寸簡單に比較して見ても無益であるまい。此兩池は共に淺いもので、水の多い時でも五尺を出でまいと思ふ。底には例の火山岩の破片が散在して居て、其上を水垢の薄層が蔽ふて居る、八島ケ池の水底は岩石の高低が見えぬ迄に水垢やミヅゴケの破片が積つて、一見底知れぬ泥の様ではあるが、元來鎌ケ池と同様の底を有して居たものと思はれる。鎌ケ池には二三の巨岩が横はる外島などはないが、八島ケ池にはミヅゴケの島が十個内外もある事前述の通りである。鎌ケ池には北端の小區域にオヒルムシロがある外、水面は露出して居るが、八島ケ池はオヒルムシロが大分盛に生育して居るのは面白い。水は兩池ともに透明であるが、一寸飲用する氣にはなれない。魚鱗は少しも産せぬが、肉眼的の動物としてはイモリが居る。

鎌ケ池、八島ケ池の周圍及此濕原は植物の採集地として面白い、わけても久保田氏も書いて居るが一種珍らしいタヌキモの産するのは目下の處信州では霧ケ峯山彙以外に知られて居ない、此タヌキモはコタヌキモ（U. intermedia）に近縁の種類で、Utricularia ochroleuca と呼ばれるものに相當すると考へられる。鎌ケ池の縁の淺い所では、此タヌキモが甚しく矮小なものとなつて、一見異種に屬するかの觀があるが、生産地の狀況に適應して淺水的の形を呈するに過ぎないのである。此種は珍奇の種類であるのだから、何卒亂採して絶滅させたくないものである。

隱花植物、殊に顯微鏡的のものでは、實に珍奇の品がある、殊に八島ケ池や瓢箪池の水中及池畔のミヅゴケ等の間にはチリモの類が夥しく生じて、而も稀種に富んで居る。目の細い絹で作つた嚢形の網を水面に近く引くと、時にはこれ等の植物が一杯入つて、水が淡綠色を呈する位のことがある、其の一滴を檢すると到底形容も出來ぬ様な奇妙な形をして居るチリモの類が無數に見える。圖版はそれ



1. Xanthidium fasciculatum. × 400. e. 頂面觀. f. 正面觀. s. 側面觀
2. Staurastrum sexangulare var. intermedium. × 400. e. 頂面觀. s' 側面觀
（但し細胞の上半のみを示す）
3. Cosmarium nasutum forma. × 800.
4. Cosmarium amoenum forma. × 800.
5. Euastrum ventricosum var. × 320.
6. Euastrum ampullaceum. × 400.
7. Euastrum ansatum forma. × 400.
8. Micrasterias truncata. × 400.



◎鶏ヶ峯と鎌ヶ池及八島ヶ池　武田

八島ヶ池

等の中の或者を示したのであるが、これは實に九中の一毛にも過ぎないのである。チリモの類は世界に三四千も種類があるが、何れも美しい形をして居るもので、實に顯微鏡下の美觀である。チリモは八島ヶ池のみに限らず、諸方の池中、濕原等に産するもので、中には常に浮游生活を營むものあり、又は水草の葉間に生棲するものありて、殊に石灰質の少ない又有機物に乏しい池を選ぶのである。日本では此類の研究は殆んど行はれて居ない、それで序ながら登山家諸君中自分に同情して下さる方があらば、材料を供給して頂きたい。採集法は甚簡單で、顯花植物の様に壓搾する必要もない、只水中の水草――葉の細いものなら尚宜し――なり或はミヅゴケ――沈水性のもの殊に、そして手ざはりがヌラ〳〵すれば尚更有望――を手で掬い上げ、少し水の切れたる所で之を徐に搾つて其滴る水を小壜の中へ受ければよいのである。これで一週間や十日は充分生活をつゞけるから、このまゝを郵便なり何なりで送つて戴けば結構である、但し各壜に産地と採集年月日とを明記され

たい。萬一長時日に亘つて發送の機がない時には少量の稀薄な――十パーセント位――の工業用フォーマリンを少し加へて置いて下されば永く保存が出來るのである。尤も旅行や登山の折其用意なしで、偶然に池に出逢つたり、ミヅゴケの原にさしかゝることがないでもない、其の時には水草なりミヅゴケなりを其まゝ採つて、紙にでも包んで送つて頂いてもよい。立山の彌陀ヶ原、五色ヶ原、會津の駒ヶ岳や越後の平ヶ岳等の上の小池畔には面白い種類があることゝ思ふ。

さて八島ヶ池からの歸途であるが、往路を戻るのが一番近いが、若し變化を欲するなら、池の西の山間に登り、これから西に下つて、東俣御料林を通過し、東俣澤の右岸に沿つて萩倉を徑て落合に出で、此處で中山道に合して下諏訪に出るもよい。林中迷ひ道もなく、涼しい日陰を大平までこぎつければ、あとは夜道でも案じはない。下諏訪から上諏訪迄は汽車でも徒歩でも、若しくは例のガタ馬車を利用するとも、それは時間の都合と足の工合とによるのだから、臨機應變の處置をとられんことを願つて筆を擱く事然り。

◎千梃木山　守島

千梃木山

守島伍郎

大正五年十一月。同行者、山口成一氏。

犬吠崎沖にあつた低氣壓が北東を指して遠く去つた後の太平洋沿岸地方は、空の色が恐ろしい迄に深い碧を湛えた。

冬の山の豪宕な刺戟と、南アルプスの眞黒な大森林との思出は、山に渇した予を、雨畑の奥なる笊、千涯木、生木割の連峯におびきよせた。

一

十一月二日晴天。

午後十一時飯田町發、甲府へ。

十一月三日晴天。

午前五時三十五分、甲府着。直に鐵道馬車に乘つて八時に鰍澤へ着いた。九時三十分、川船にて鰍澤を發し、正午、飯富着。午後零時三十分、飯富發。徒歩にて早川を遡り、五時、雨畑(硯島本村)に着いて、上中村望月大次郎方に投じた。

主人に、笊、千涯木登山の案内者を依頼した處、先年中村清太郎氏の御供をした望月重吉は、今朝から狩に出て明夕刻でなければ歸宅せぬと云ふ。その他の山に心得あるものも、皆狩獵に出拂つて居るし、殘つた者は、丁度麥播きの農繁期にかゝつて居るから、御供が出來兼ねるとのことで、只一人少し氣が利かぬが、測量部などに雇はれて笊に登つた經驗のある由公と云ふ男をたのんで呉れた、それでともかくも出發ときめて寢に就いた。

その夜は八日の月が凄い程に輝いてゐた。

十一月四日晴天。

天は凄い樣に碧い。昨夜頼んで貰つて置いた由公は、八貫餘りの荷を重過ぎるとこぼして出發を澁る、それを勵して八時過ぎに漸く出懸けた。途中で望月半次郎と云ふ、五十位の男(此男も、屢ば測量部等に雇はれた事があると云ふ。)をたのんで、由公の荷を分けたりなどして居たので、半次郎の家を

◎千枚木山　守島

出た時はもう九時少し過ぎてしまつた。（半次郎は先年僕が山伏峠を小河内へ踰えた時、荷持に頼んだ男である、人夫としては弱く、案内として餘り深く山を知らない、其名の通り半端な男である、唯だおとなしいのが取柄だ。木暮）

昨日の道を十分も戻り、奥澤谷の釣橋を渡つて、道は左に奥澤に添ふて遡つて行く。九時二十分、老平。今日の道程は近いので、人夫は度々休む。金山の精錬場を目の下に見たのは、十時二十分。由公を精錬場に遣つて蠟燭を購はしめた。十一時同所出發。十一時半道傍に休んで中食をしたゝめた。不圖見ると、富士が驚く程眞白になつて、西毛無の右にぬつと顯れて居る。道は山の腹を上つたり下つたりしながら少しづゝ登つて行くが、大きな尾根をグルリと廻ると今度はダラ〳〵下つて行く。見れば本谷は既に色づき初めた紅葉の底を白く光つてうね〳〵流れて居る、未だ新しい小舍が二軒へばりついた様に岸に立つて居た。小さな澤を渡つてから小舍の傍に出る。小舍は行者の小舍で、丁度行に出た後であつたか、誰も居なかつた。そつとのぞき込んで見る、可成りに廣い小舍の中は、奇麗にとりかたづいて疊が敷いてあつた。三十分休んで居る間に、人夫は砥石を見つけて鉈を磨ぎ初める、予は奥の方は瀧になつて居るらしい本谷の瀬の音に聞き入りながら、うつとりと錦の山に見とれて居た。此一夏をノートと首引きで暮した予は、この深い谷間に這入つて來て、初めて本統に旅行らしい氣持で、瀬音に聞き入り、紅葉の錦に見恍れ、活きて血の通つて居る様な巖膚の縞を仰ぎ見たりしては、山口に「渇山病だなあ」と冷やかされながらも、しみ〴〵と山の子の幸福を味ふことが出來た。

午後一時半出發、本谷を渡つて向ふの尾根にとりつく。これ迄上つたり下つたりして居た道が、急に上りだした、そして少し粗末になるが、それでもよくわかる。遲れ勝ちな人夫は後に殘してドンドン登つた、上の方でカサコソ音がする。胸をどきつかせながら登つて行くと、ヒヨッコリ獵師が飛び出した。五十格好の見るから巖丈な雄健な男である。挨拶をとりかはして、何かと雜談をやつて居る、

そこへ人夫連が上つて來た。老獵夫は鷹揚な言葉付きで「お前等の案內だつたのか、どうも只の人の來る處でねえと思つた。」と云ふ。山岳會の名は知つて居ると見えて「それでは、皆さんは、山岳會の方だあね。」と云つた。「それぢや、今晩は石小舍泊りで、明日は笊ヶ森の天上はお晝を餘程廻るね。まあ、御大事に。」と云ひ殘して、一人ノソ〳〵下りて行つた。名は望月助次郎、村一番の勢力家で、曾ては村長をも勸めた事のある男であるさうな。

二時四十五分、山の神の社。ひた上りに上つた道は、こゝからうね〳〵と山腹を傳ふ。三時十分、下駄小舍。小舍はもう大分朽ちては居るが、それでも獵師が泊るさうである。少し下り加減に山腹を傳つて行く。三十分も下ると、何時の間にか本谷は南タル北タルに分れて、目の前にはもう餘程小さくなつた南タルが、更に右左に分れて眞黑な山膚の中にねぢれ込んで行く。瀧の連續から成つてゐる此谷は、尾根傳ひにグン〳〵上つて餘程偉くなつた積りで居る間に、水は一躍二躍して何時の間にか同じ位の高さに御先廻りをして居る。

先の獵師の云つた石小舍を探させたが、見つからなかつたので、川岸の平地に天幕を張る事にした。

二

十一月五日晴天。

寒い夜が明けた。藥研の底の樣な此平地は左程の高度でもないのに、凍みつく樣な寒さであつた。

今日吾等の執るべき行動は、昨晩から懸案になつてゐた。と云ふのは、大正元年十一月下旬に中村氏が登られた時には（山岳八年一號所載）此所から更に五十分ばかり登つた所を、午前六時二十五分に出發し、笊ヶ岳の頂上を極めて下山の途に付き、其日の午後五時三十分には、硯島本村に歸着して居られる。然るに一昨年恩賜林の境界査定の時、笊に登つた經驗のある由公は、笊、千梃木間の國境

◎千挺木山　守島

に近い露營地迄、荷を脊負つては一日道であると主張する。由公の云ふ事はどうも不明瞭であるけれども、假令空身でも此所から日歸りは無理らしい。それに吾等は一擧にして笊、千挺木、生木割を登つて、次第によつたら保谷か稻又谷を下りたいと云ふ希望を持つて居たので、兎も角も今日は由公の所謂國境附近の露營地迄荷を脊負ひ上げる事に決めた。

出發はもう八時であつた。澤を渡つて矗立した對岸にしがみ付く樣にとりついて、木の根を賴りに、上つて行く身輕の吾等に、兎もすれば人夫は遲れる。道は北タルと南タルとを分つ長い瘠尾根について行くのであるが、莫伽に明瞭な所があるかと思ふと、まるで跡が消えて居る所もあつて、時々まごつく、境界査定員の立てた標木を見つけては辿る。遲るゝ人夫を待ち〳〵五十分も登ると、行手に岩山が突立つ。道は之から右に迂廻して居る樣であるが、案內役の由公は尾根傳ひに行くのだと主張する。尾根を傳へば大した間違ひもあるまいから、とても人が上りさうな所ぢやないと思つたが、仕方がないので上つて行くと、この岩山を越した處に、本統の道が右の方から迂廻して上つて來てゐる。之が爲めに三十分ばかりも時間を空費した。傾斜が少し緩になり出したかと思ふと、六三號の標木の邊から、尾根通を覆ふて夥しい風損木が逆茂木を引渡したやうにぶつ倒れて居る。少し許りの隙間には、お定りの籔が繁つてゐて足の入れやうがない。幹から枝へ飛びついたり、邪魔になる枝を叩切つたり、籔の中に面をつき込んだり、空身の吾等でも大分暇取るので、人夫連の遲れる事實に甚しい。二十分、三十分と大束に待つ。一時間半位も費したが、未だ四五町も來て居ないらしい。何所まで續いて居るかわからぬので、人夫連は大分悲觀の氣味でなか〳〵上つて來ぬ。人夫を待つて居ると、小春の柔かいぽか〳〵した日が滲み込む樣にさして居るのに不圖氣がつく。見上げる紺碧の空には雲の片だに一つ浮んで居ない。目の前の眞紅に染まつた葡萄蔓の葉を匝つて、小さな羽虫がブン〳〵音を立てゝ居るのが如何にも初冬の暖い日の晝らしい。山口が突然「南はいゝなあ」と云ふ。取つて付け

た様な此言葉が、妙に予の心にも感應して、體までがすつかり南の山の床しい情調に浸つて行く様な氣持がする。針葉樹の眞黒な森林に抱かれた左右の谷は、沈默の權化のやうにあたりの空氣を支配してゐるが、それでゐて何所からともなく奥の知れない底力のある聲がする。いゝ氣持になつて居ると、人夫がフウ〳〵云ひながら上つて來た。丁度時刻なので晝食にする。

此風倒木は大正三年八月の大嵐に仆されたのださうで、以前は緩かな上りだつたのださうだ。中村氏が登られたのは大正元年だから、こんなものは未だなかつたのであらう。どうも昨日から由公の云ふ處が變だと思つたが、成程この風倒木では荷があつては骨だと思つた。

午後零時四十分、大分弱り込んで居る人夫を勵して又上りにかゝる。未だどれだけつゞくことかと內々心配しながら十分も上ると急に風倒木が無くなつて、栂や檜の蘢々と立つた、下生の少しもない、青苔のブク〳〵した氣持ちのいゝ道になつた。薄圍の上を歩いて居る様な足觸りだ。稍平たい場所に出た。標木は尙も上へ上へと續いて、千疋の頂上に行くらしいが、道は此邊から右に卷くらしい。もう道の跡らしいものはなく、しかも淺く雪が覆ふて居て一層跡がわからない。案內役の由公がやつと上つて來たが、右に入る地點をすつかり忘れてゐるので手も足もつけられぬ。「何でも右に卷いて行くとガレを三つ四つ渡つて最大のガレに出る、其所に水が湧き出して居る。そしてその近所に適當の露營地があつて、その露營地から國境まで二十分、笊ヶ森の頭まで一時間の道程だ」と云ふのが彼の石頭の持つて居る記憶の全部であるらしい。中村氏の記事とも符合する様だから、兎も角此處から右に入る事にした。もう二時過ぎである。

大小三つか四つかのガレは、眞黒な森林を劈いてなぎ落ちて居る。昨日一昨日遠くから眺めたあのかきむしつた様な千疋木の胸の邊にかゝつたのだ。思つた程の困難も無く通過したが、由公の所謂水のある大ガレはどれであるのかわからぬ。由公はもうボンヤリしてしまつて物の役にも立たぬ。年取

◎千疋木山　守島

つた宇次郎は默つて遲れ勝ちについて來る。恐ろしく黑い森を横に卷いた。すると又チラリと大きな雪の瀧が光つて見える。今迄にない大きなガレである。今度のはとても容易に渡れさうもない。由公は大ガレの樣だがどうもよくわからぬと云ふ。もう三時過だ、冬の日脚は餘程傾いた、愚圖々々しては居られぬ、さしより露營地を求めねばならぬが、あたりは例のかきむしつた樣な崩れで、而も水もなければ荷を下さう平地もない。吾等は崖の端に立つてボンヤリと恐ろしい岩の壁を見つゞけて居た。不圖何所からともなく淙々と水の音が聞える。あまり遠くはないらしい。見ると崖の向ふの端に、雪を破つて黑い岩膚を洗ひ出しながら、命の泉の水が迸り出て居る。さうだ、之が大ガレだつたのだ、近所に由公の所謂露營地があるに違ひないと思つたけれども、由公の言の每々不確實なのに困らされた吾等は、もうそんな事を當てにして居る事は出來ない、一刻も早く露營地を選定しなければならぬ。人夫を勵しながら崖の端を攀ぢ上つて、偶然この狹い痞せこけた尾根に、瘤の樣にくつゝいて居る一坪位の平を見つけた一行は期せずして其處に荷を下した。急いで火を燃し、人夫は危い岩壁を傳つて水を汲みに行く、吾等は鉈を振つて燃料を切り倒し初めた。

刻々に暗くなつて行く森の中に小田原提灯が梢高くともされた時には、燃料も充分に集められ、温い火がパチ〳〵と盛に燃え出して、飯鍋も沸々音を立て初めた。氣拔けの樣にボンヤリして居た由公は急に元氣づいて「俺あ、嬉しくなつたよう」と云ふ。予は此責任を果し切れない弱者が、小兒の樣な叫聲をあげた時、何だか可憐らしいやうな氣がした。

腹も滿ちた。今夜はとても天幕は張れないから、火を盛に燃やして、頭から毛布をかぶつてすくも虫の樣に圖くなつて寢た。天氣のいゝのが唯一の賴みである。

夜中に空が曇つて大に心配したが、間もなく復た晴れて靑白い星が痛い樣に輝いた。森のさゝやきが何所からともなく聞えて來る。

三

十一月六日、晴天。

氣に懸つた天氣は今日も恐ろしい様な快晴であるらしい。一行は三時半頃から起きて火を熾にする。東の方に白い光がたゞよひ初める。今日も亦幸ある日ぞと云ふ様な氣がする。

明るくなつて來ると、今更の様にこの露營地の狹く危いのが目につく。後かたづけは全部由公に任して、吾等は再びこの尾根を攀ぢ登つた。露營地を出た時は七時に未だ二十分前であつた。今日は半次郎も空身なのでグン〳〵上る。見上げる様な傾斜を樹の根につかまりながら上るのである。苦しいには相違ないが誰も上景氣だ。雪が次第に深くなる。

苦しい登りが一時間もつゞくと、傾斜が少し緩くなる。先に立つて行く山口が、けたゝましい喜びの叫を發する。雪の山が見えたのだ。急いで登る、狹い森の切間から遠い白いものがギラリと目を射る。もう戲談半分ぢやない、眞劍だ。白峯三山が丁度うまく森の切間からのぞいて居たのであつた。

七時四十五分、息をはづませながら國境に出た。疎らに截り開けられた森林を透して、心をそゝる様な鋭い光がちら〳〵する。吾等は更に一番手近な千枝木の一峯に、膝近くに及ぶ雪を踏んで登つた。山口も默つて見て居る。半次郎も默つて見て居る。予も亦默つて見て居た。北には白峯南には赤石、此兩山脈に肩を駢べて街道を上下する心ある旅人に雪の姿を垣間見せてゐる幾多の大山岳は、今吾等の額を掠めて目の前に立ちはだかつてゐるのだ、痛いまでに山骨を曝露した冬の山々の姿は、それ自身が抵抗し難い威力である、これでもかこれでもかと押しすくめるやうな強い壓迫の手にひしとかゞられて、息のつまる程に感じた吾等が、あれが赤石あれが聖と指點し初めたのは、この峯に立つてから餘程後であつた。

◎千枝木山　守島

◎千挺木山　守島

白峯三山、仙丈岳、荒川岳、蝙蝠岳、惡澤岳、魚無河内岳、西河内岳、赤石山、聖岳、上河内岳、新田河内岳、ガッチ河内岳、イザルケ岳、光岳、杓子崩（クヅレ）（小澤の入り、地圖の信濃俣）、大根澤山、更に遠く合地山、不動岳の連峯が目に入る。

然し山の名なぞはどうでもよい。此鋭いそして懐しい線と色との世界。力それ自身の世界。眞面目それ自身の世界。予は動もすると氣力負けがする様な壓迫を感じてはウンと踏み止つた。

大井川の谷、赤石澤、聖澤、其所には暗い人を寄せ付けぬ様な物恐ろしい力が満ちて居る。それで居て人を引き付けずには措かない此谷々。予は物に憑れた様になつてのぞき込んだ。

此夏赤石山脈を縦走した山口は、予に山稜のつゞき工合や、露營地の所在などを教へて呉れる。予は其説明に従つてむく〳〵と動いてゐる様な山の脈絡を一つ一つ丹念に追つて行つた。それ等は實に一つにまとまつた大きな生命あるものとして予の目に映つたのである。

少しく餘裕の出來た予は、立派について居る切開について千挺木の頂上の方にブラ〳〵歩いて行つた。同じ位の高さの小さな峯をいくつか越えて一峯に立つた。東の方が開けて居る。富士、七面山、毛無。沼津の海は金色に光つて居る。然し予はそれよりも、遠く淡い靄の中に春の夜の夢の様に柔かく快く波うつて居る秩父の山々を見た時、激しい雪の山の刺戟と對照して如何に面白く感じた事であらう。

予は更に國境を歩いて行つた、次ぎの小峯にかゝつたがつまらなくなつて直ぐ引き返した。後で考へるとその小峯が三角點のある最高點であつたらしい、あと二三分の事でこの尨大な、殆ど高低のない山頂の中で最高點らしいものを遁したのは一寸惜しい様な氣もする。

再び先の峯に歸ると、山口は此壯觀をカメラに收めてほつと一息ついた様な顔をして居る。豫定の一時間は既に去つて九時を少し過ぎた。今日中に硯島本村に歸り度いので笊の頭は殘念ながらオミッ

トする事にした。

四十五分で露營地に歸つた。由公はもう荷をまとめて先に下つて行つた後である。十五分休んで十時五分出發。本尾根に出たのが十時三十分。十一時には例の風倒木を過ぎて間もなく先に下つた由公に追ひついた。晝飯に三十分休んで一時二十分には一昨日の露營地に着いた。思つたよりも早かつた。二日振に潤澤な水を得て吾等は兒童の樣に喜んだ。一時半に此處を出て一時五十分下駄小舍。二時山の神。來る時には薄赤であつた紅葉が、もう赤茶けたチリ〳〵した葉になつて落ちて居る。顧ると笊の頭にはもう霧が來て居る。そしてズン〳〵下に下りて來る。吾等は吾等の不思議な好運を喜んだ。二時三十五分行者小舍。之からは道もいゝし、明るい中に着けるのも確かなので實に綏り〳〵歩いた。五時歸着。

十一月七日晴天。

九時半視島本村發。二時飯富着。二時半馬車で飯富發。四時四十五分鐵道馬車に連絡、六時過甲府着。

四

吾等の今度の行は初めの計劃に似もやらず、すつかり龍頭蛇尾に終つてしまつたが、氣付いた事を二三誌しつける事にする。

第一日は餘り近過ぎるけれ共、あれから上には水を得べき所がないから、吾等の泊つた處に泊るより外仕方があるまい。中村氏の泊られた所は、其所から尙ほ五十分程上つた所であるが、水は恐らくは無いのではあるまいか。第二日目には、空身なれば露營地から往復し得ない事もあるまいが、それは餘りにあわたゞしいし、且第三日の行程が短か過ぎる故、も一日山中に露營する計劃を立てた方がよくはないかと思ふ。さすれば第二日目には千挺木の尾根をズン〳〵上つて、途中から横に卷かない

◎千挺木山　守島

で、その儘標木を辿つて頂上に登り、それから樂に國境の切開けを笊の方に縦走して、適宜國境附近で泊るがよからう。但し水は例の大ガレに少量出るのみである。而も國境から往復二時間もかゝる場所ではあるし、又水の附近は山勢の最も急な部分に當つて居る故、とても恰好の露營地はあるまい。反つて大井川の方面が傾斜が緩であるから、適當の露營地があるだらうと思ふが、然し水の便は何とも云へぬ。尚吾等が行つた時には國境附近には、一尺以上の雪があつた事を御注意申して置く。

第三日目には、實際行つて見た事がない故保證は出來兼ぬるが、切開けの工合と距離とから考へると、笊を越えて生木割まで行つて、その日に硯島本村まで歸れると思ふ。

要するに吾等の第二日目の行程は、人夫が駄目だつたので時間を空費してしまつたのだが、それでも二日で笊迄往復するのは、現今では困難或は不可能と思はれる。宜しく此大森林と大眺望を持つて居る南方の尤物に對して、三日を捧ぐ可きである。尤も來年から伐木人夫が這入るとか云ふ事であるから、立派な道が出來るかも知れぬが、その代り大森林は見られなくなつてしまふだらう。

稻又谷は非常に惡いと云つて居た。保谷も餘りよくないさうである。此奥澤谷が一番よいさうである。

村人の常職は農であるから、人夫としては弱い樣である。吾等の連れた半次郎と由公は屢々測量部などに雇はれたさうだけれ共、五貫未滿の荷に可成りへこたれて居た。由公は馬鹿で用ふるに足らぬが、半次郎は此附近の測量には常に雇はれて行つたので相當に知つて居る樣である。奥澤は今度初めて這入つたのださうであるが、よく要領をのみ込んだ樣である。

中村氏の連れられた望月重吉には遂に會ふ事が出來なかつたが、山には詳しいと云ふ事であつた。登山第一日目に吾等が出會つた望月助次郎は、村長も勤めた事のある男で、山の事にも明るい故、以つて用ふるに足りるのであらう。賃金は一日六十五錢だが農繁期だから五錢增してやつた。

尚飯富本村間には、荷負人夫が往來するさうで、十二貫五十錢とか聞いたが、何時でもおいそれとあるかどうかは聞かなかつた。

予は本文中で笊ヶ森なる言を屢ば用ひたが、之は土地の用言を摸したので、土地の人は或は笊ヶ森と云ひ或は笊ヶ岳と云ふ。獨逸語の Wald と同じ用ひ方で、眞黒に茂つたあの様な山を指すには誰でも同じ様に森と云ひ度くなるのであらう。一寸面白く感じた故ノートに誌し止めておいた。（大正五年十一月十六日）

布哇キラウエヤ火山を見るの記

國府精一

布哇は太平洋上の樂園、常夏の國と歌はれ、軍事上通商上最も重要なる地位にあることは、普く人の認むる所なるが、山岳としても亦劣るべからざるものあることは知る人甚だ尠なきが如し、登山家として看過すべからざるもの多きが中に最も顯著なるは一座の熄火山と、二座の活火山なりとす、熄火山の名はマウナ・ケアと稱す、高さ一萬三千八百二十五呎、四時白雪を絶たず、頂上氷河の形跡ありと傳ふ、世界中最高の島嶼頂なりと云はる、富士山、新高山共に及ばず、活火山の大なるものをマウナ・ロアと云ふ高さ一萬三千六百七十五呎、頂きに雄大なるマクアウエオウエオの噴火口を有す、平日の噴火は格別激烈なりと云ふにあらざれども、其破裂度數の多き流出ラバの多量なるにより世界に於て最も活動せる活火山として知らる、最近の破裂として記錄に殘るものゝみにても、一八二三

年以來十三回に及ぶ、今又一九一六年五月十九日更に爆發を始めたり、（小生が其山腹火山ホテルに宿りしは一九一六年五月二十一日なりしが同夜十一時半更に大爆發を始め二十二日二十三日に及ぶ）今一つの活火山をキラウエヤと云ふ、獨立の火山と云ふよりもマウナ・ロアの中腹の噴火口なり、標高四千呎、周圍八哩計なる尨大なる舊噴火口の一隅約二十英坪更に新噴火をなす、赤熱せるラバの沸騰せる光景實に悽壯を極む、しかも聊かの危險なくして之を目擊し得べく、火口を去る半町の所迄自働車を驅り得べし、誠に天下の奇觀なりとす、幸ひに此大觀に接し得、其一事を記して貴誌の餘白を借らんことを欲す。

一、布哇の地理

此群島は一名サンドウイッチ群島と呼ばれ、太平洋上に西北より東南に亘りて千哩以上に連續せる火山島にして、西經百五十四度四十分より百六十二度、北緯十九度より二十三度に達し、大小無數の群島より成り、面積六千四百四十九方哩我四國に髣髴たり、西北より東南に數へて、カワイ、オアフ、モロカイ、マウイ、ハワイの諸島を主なるものとし、就中オアフとハワイとを最重要なりとす、前者には首府ホノルル、（人口五二、一八三）海軍要港、要塞等あり、ホノルルは橫濱より三四四五浬、桑港より、二一〇〇浬、バナマまで四六六五浬即ち太平洋の管鑰をなす、東洋汽船の寄航地なり、布哇島は、面積四千十五方哩、群島中の最大島嶼にして、最東南端に位し、最も新しく（現に火山は活動しつゝあり、破裂毎にラバは東南端に流れ島を擴大しつゝあり）最も美しく、最高きを以て名あり、マウナ・ケア、マウナ・ロア、キラウエヤ皆此布哇島にあり。

氣候は熱帶内にありながら海洋の影響を受けて左迄に暑からず、一九一三年の調査によれば九月の最高八十七度、二月の最低温度五十八度を示せり、但し一月猶八十一度に達することあるは流石に熱

帶地として爭はれざるものと云ふべし、九ケ月間東北の貿易風あり、毎日驟雨の來襲あり、凉味掬すべし、衣は年中一樣のものにて可なり、日本婦人は常に浴衣のみにて暮せるものゝ如し。

植物は最も豐富にして、熱帶の表章とも云ふべき椰子は到處に繁茂し、其他巨大なる羊齒植物、芭蕉、麵果樹、マンゴウ、橙、バンヤン、アルゼロバ等大に南國の光彩を添へたり、動物は甚だ貧弱にして、山羊野牛を稀に見る、蛇鰐魚なく、蚊は一八二六年、墨耳其より輸入せられ、蜜蜂も亦一八五六年の輸入なりと云ふ。

島内の人種頗る雜多にして世界人種の熔解爐と云はる、一九一〇年のセンソスによれば、

人種	數	百分比例
支那人	二一、六七四	一一、三
日本人	七九、六七五	四一、五
布哇人	二六、〇四一	一三、六
雜種布哇人	一二、五〇六	六、五
葡萄牙人	二二、三〇一	一一、六
ポルトルコ人	四、八九〇	二、五
西班牙人	一九、九〇	一、〇
其他高崇人種	一四、八六七	七、七
朝鮮人	四、五三三	二、四
比律賓人	二、三六一	一、二
黑人	六九五	〇、四
其他	三七六	〇、二
合計	一九一、九〇九	

即ち人口の四割強は日本人にして、白人は遙かに少數なり、しかも遂に白人種の占有に委するに至りしは如何にも殘念の至りと云ふべし、但し我同胞の生產率は最も盛にして、年々少なくとも三千を下

らず、愈其數を增加しつゝあり、到底排日などは布哇には行はるべくもあらず、爲めにガバナーは布哇の前途を悲觀し、普通選擧の法によるべからず委任統治の外なしと論せり、白人の立場より見ればさもあるべしと首肯せらる、日本婦人は皆和服にて街道を横行し、電車内の注意書には英文と日本文とあり、日本人街には饂飩屋の屋臺相連なる、人は其不體裁を難ずるものありと雖も、余は覺えず快哉の聲を禁ずる能はざりき。

二、布哇の歷史の梗概

布哇土着のカナカ人種はポリヂシヤ人種に屬し、紀元後五百年頃にサモア群島中サバイイ島より移住し來りたる者の如し、其海程實に二千哩木葉の如きカヌウに乘じて此大海を乘切りし彼等の祖先の冒險的進取的なりしを思ひ遣るべきなり、しかも此天然の樂土に馴れて其子孫は遂に今日の意氣地なしとなる誠に恐るべきかな、一五二七年には西班牙人コルテズの派遣隊此群島に來りたるが如し、一七七八年、英人カヤプテン、クック、オワフ島に來り、其保護者にして當時の英國海軍卿たるサンドウッチ伯の名を採りて此群島をサンドウッチ群島と呼ぶ、翌年二月十四日部下水兵の亂暴土人の怒を買ひ布哇島に於てクックは土人の爲めに殺さる、其紀念碑西海岸南コナにあり、布哇の歷史上傑出せるカメハメハ大王は一七三七年に生れ全島を統一し一八一九年死す、一八二〇年に後年布哇を掌握するに至りたるミッショナリイの徒群島に入國せり、此より白人の渡來漸く多く、其後英魯佛交々至り皆政治上の野心を遂げんとせしが果さず、一八五三年合衆國に合併の運動起り、幾多の曲折あり、リリオカラニ女王を最後の女王として終に共和政體となり尋で一八九八年、日本の抗議ありしにも拘はらず正式に合衆國に合併せられ了る、カナカ土人はクックの來りし時は四十三萬二千を算し、一八三二年には十三萬九千に減じ一八三六年十萬八千となり一八五〇年には八萬一八七二年には五萬六千、一九一〇年

には雜種を併せて三萬八千に減退せり、彼等の前途亦知るべきのみ、之に代つて年と共に實力と頭數を增加しつゝあるは我日本人なり、此次の政變は果して如何なるものか。

三、火山見物の發程

布哇に來るもの若し時間に餘裕あらば必ず見るべきものは火山なり、唯ホノルルより更に十七時間航程を要するを以て通過客には一便船を後れざる可らざるの不便あり、一九一六年五月十四日より同二十六日迄ホノルルに滯在するの機會を得て此際必ず火山見物を强行せんとす、恰もよし五月十九日マウナ・ロア爆發の飛報あり、火山見物團の募集あり、即ち千載の一遇と直ちに其一行に加はる、凡そ火山の破裂と云へば皆周章狼狽身を以て避難するを常とするに、布哇の火山破裂と云へば聊かも危險なく皆競ふて見物に出掛け、其噴煙流岩の壯觀に接せん爲めに別仕立の汽船迄出す程にて逃走などの話にあらず、それ丈け、破裂も猛烈ならず、全く女性的にして聊か物足らぬ心地するを免れず、ホノルルのヤングホテルの下に布哇諸島を紹介すべく Local Hawaii Publicity Committee なるものあり、(其主任 Vis Norton 氏甚だ親切に說明す、同氏見物團の團長たり、之に就きて火山見物團の行程を聞合せ三十弗のエキスカーション切符を求む(ホノルルより布哇島ヒロ市迄汽船往復二十五弗なるに見物團切符はホテル代自働車賃等凡ても含む)二十日午後四時島間航海會社のマウナケヤ號に乘じてホノルルを發す、ダイヤモンドヘットを左へ眺め、サファイヤの如く深碧なる熱帶の海上に銀色に光る飛魚の羽を見る、平凡なるモロカイ島の近傍に來りし頃日は暮れぬ、マウイには壹萬呎以上の熄火山ある由なれども暗中何者をも見ず、明くれば旣に布哇島の東岸を沿ふて南航しつゝあり岸頭悉く斷崖をなし所々に瀑布あり、雄大なるマウナケヤ山は徐ろに聳えて其背景をなす、亭々として矗立せる椰子樹の上に皚々たる萬年雪を見る、蓋し天下の奇觀と云ふべし、午前九時布哇島の要港ヒロ市に着、上陸し自働車に

◎布哇キラウエヤ火山を見るの記　國府

分乘してヒロ市に入る、ヒロ港は東洋汽船南米航路の寄港地なり、ホノルルに次ぐの都市にして目下大規模の築港計畫中なり、蓋し將來ある港灣なりとす、市中には日本人最も多し、自働車は布哇名物の甘蔗バインナップルの畑の間を走り、虹瀧と云ふを見物し、更にキラウエヤ火山ホテルに向ふ、過ぐる所見る限り皆甘蔗畑ならざるはなし、日本人村落到處に散布し、樫木高く聳えたる神社、日蓮宗の紋章を掲げたる寺院の屋根等を見る時身の布哇にあるを忘る、畑盡きて森林帶に入る、恐ろしく偉大なる羊齒植物、暗き程に生茂りたり、午後一時火山ホテルに着、行程ヒロ市より三十一哩。

四、火山ホテル又火山ハウス

火山ハウスは標高四千呎キラウエヤ噴火口の北岸に位し、周圍約八哩の噴火口大ラバ荒原を瞰下し、風物頗る悽愴なり、西に一萬三千餘呎のマウナ・ロアの雄峯を望み、北遠くマウナ・ケウの白雪を見る、蓋し稀に見る雄大の景なり、火山ハウスの記錄は一八二四年に始まり、女王カピオラニの爲めに設けられたり、當時は無論土人流の草屋たるに過ぎざりしが後幾多の變遷を經、一八七二年に建てられたるもの丶一部は今猶ホテルの一部をなす、目下火山ハウス會社の經營に歸し、凡ての文明的の設備を具へ、客室は五十以上あり、別に二三のバンガロウあり、氣温低くしてストーブを燃く、布哇に來りて始めての經驗なり、周圍に所々硫黄瓦斯の噴出あり、臭氣鼻を衝く。

五、キラウエヤ火山口

長さ二哩九三、幅一哩九五、周圍七哩八五、四方哩一四、約二千六百五十英尺、岸壁三四百呎より數呎、唯黒々たるラバの堆積して何物も生物を留めざる數千萬年以來の死の原見るからに悽し、此火口はマウナ・ロアの中腹に位し、一見マウナ・ロアの寄生火口の觀あれどもジャッガー博士の研究によれ

ば、二者は全く別個の火山にして兩者の距離二十一哩、キラウエアの方古き由なり、現に二十一日夜ロアの破裂の時もキラウエヤには格別の反應なかりき、噴火口の南西隅に近づきてキラウエヤ火山の核心とも云ふべきハレマウコウの噴火坑あり、ホテルより之れに達するには歩道と自働車道とあり、後者は約七哩許暫時森林中を迂回して火坑迄半町の處に達すべし、前者はホテルの前より直ちに火山壁の絶壁を降りて行く行程三哩弱、眞黒のラバの間に怪しげなる道を作り破目には橋を渡したり、其沿道到る所にラバによりて造られたる種々の形及洞穴あり、象圓錐溶岩塔（スペッターコーンス）鬼臺所、火山の女神ペレの浴室及其應接室等の名あり、ハレマウコウの北方數歩の所の裂目より盛んに硫烟水蒸氣を噴きつゝあり、其穴中に繪端書を挿入する時は忽ちにして其端は焦げ燒かる、皆紀念の爲め爭ふて繪端書を棒の先きに結びて坑中に推し込む、如何に危險なき噴火口たるかを知るべし。

六、ハレマウコウ

ハレマウコウは永久の火の家の意なる由、直徑約一千呎周圍三千呎、約廿英反の廣さあり、白人の始めて發見せしは一八二三年、當時の深さ岸壁より九百呎ありと云ふ目下は普通四百呎計り時によりて一樣ならず一八六八年には岸壁を超えて溢れ流れ一九一二年には一百呎迄に昇りたりと云ふ、赤熱せるラバは穴一杯に煮へ返り、表面は稍冷却して銀色と變せるも奈落の底より込み上ぐる勢に上皮は忽ち破れて眞赤の岩汁は雜然音を發して數十呎の中空に飛び上る自分の見し時は中央に一の島を殘し其周圍に數條の流をなして火の浪は相打ち相激し云はん方なく凄し、熱帶の日光が其銀色面に落ちて反射する時一層の暑さを覺え數百呎の岸頭に立つも堪へ難し、ラバの熱度は攝氏千七百五十度と註せらる、坑中よりの蒸氣及噴烟の全く稀薄なるが故に遺憾なく此偉觀を看望し得べし、蓋し全世界に唯一の觀物なり聞けば數日前迄はラバの面は四百呎の下にありしがロアの活動後は流石に一百呎高さりし由

にて七月迄には穴口迄一杯になるならんとの事なり、午後四時半、自働車の一行達す、案内者の説明を聞きつゝ附近を見物し、日沒後の壯觀に接すべく岩影に風を避けて待つ事二時間日落ちて夜色の加はると共に坑内の光景更に壯烈を極め晝間唯赤く見えしラバは閃光加はりて穴一杯は火の海と化し所々に火柱を噴上げ岩壁を打つ火の波は花火と散り飛び岩汁の相打つてバサバサと一種の底響ある音を傳へ、周圍の靜まるに從つて一層に悽し、火光高く照り返し自然の偉大に打たれながら恐る〳〵窺ひ居れる男女の顔色相好は恰も惡魔の群と見らる、午後七時半一行自働車に分乘し、黑く繁れる森林帶を潜つてホテルに歸る、キラウエヤ火口の近傍十三の小噴火竇坑あるも皆格別見るべき者にもあらず。

七、火山の神ペレの髮

ハレマウアウの近傍の岩陰に金髮樣の纖維が堆き迄に集積せるを見る其名を問へばペレの髮と云ふ、布哇土民の神話によればペレと云ふ女神は醜婦で我儘で嫉妬で始末に了へざる女なりしが、終に其夫に捨てられて惡鬼の本性を現はし火山の神となり、山を裂き地を動かし火を飛ばし溶岩を流しあらゆる者を苦しめて快とするに至れり、カワイ島より順次に東南に移り所々に火山を作りて其内に棲みしが今はキラウエヤの火坑に隱れ住み、時々人間を苦しむべく飛び出すと云ふことなり、其ペレの髮が飛び散つたものが此金髮なりと如何にも面白き傳說と云ふべし、此金髮は科學上より云へば即ち火山髮と云ふものにして、ラバが噴出せる際風の作用によりて細き線となり其儘凝結したるものにして全くグラスの線と同樣のものなり、されば一見毛髮の如くあれども脆く且つ鋭利にして衣服の布目にさゝくり、皮膚に觸るれば忽ち肉中に突入る、飽く迄も人を苦ませるペレの意ならん、聞けば男女の仲よきを見ればペレは忽ち嫉妬を起して荒れ廻る由なるが、一行には一組のホネームーンはありしもさしてペレの注意を惹かざりしと見え、格別の荒もなく至極平穩なりしは幸なりき。

八、マウナ・ロアの破裂

米國人は何事にも世界一と云ふ形容詞を附して喜ぶ國民なり、マウナ・ロアも此點に於て世界一と稱せらる、マウナ・ロアとは長き山の意、單獨の山として世界一長き且大なる山たり、布哇島の面積四千十五方哩其十分六以上はマウナ・ロアの占むる處なり、即ち約二千五百方哩は此一の山にて被はる譯にてしかも度々溶岩を南方に流して猶其山容を擴張しつゝあるなり、兎に角恐しく偉大なる山岳と云ふべし、蓋し數千萬年の昔より靜かに山火して徐ろにラバを流し〳〵して出來たる山なればかくは傾斜の緩き大山を形成せしならん、寫眞を見れば全く堤の如く京の東山よりも低く見ゆ、富士山以上の山とは想ひも寄らず、併し肉眼を以て見れば流石に高く、白雪を戴き雄然として天を摩する姿は又なく雄雄し、矢張り世界一の大山なるべし、今一つは前述の如く世界一活躍せる活火山なり、一八二三年以來十三回の爆發ありホテルより仰ぎ見るも幾條となくラバの流下したるもの或は赤黒く或は黒く年代によりて色を異にし當時の凄景を想はしむ、五年乃至七年毎に必ず爆發する由にて、本年は恰も其年なりしが果して五月十九日より南中腹に噴き出したり、頂山の噴火口はマクアウエオウエオ（煮ゆるラバの溶溜）と云ふ、名の示す如くラバ沸返へりつゝあり、噴火の時は此火口先づ活動し山腹にラバの吐き口生ずる時此頂上火口は治まる由なり、時として噴出物を數百尺に吹上ぐることありと云ふ、キラウエアに比して稍優勢なるものと見ゆ、火坑の全面積三方哩七、二千三百七十英反周圍九哩四七、長三哩七、幅一哩七四、亦大噴火口と云ふべし、此に登臨するには、火山ホテルにて萬事の準備を整え得べく往復に三日を要する由、山上の壯觀さぞかしと思ひしも時に餘裕なく終に思ひ留まる、二十一日夜は早く眠りに就きしが十一時過ぎに至り窓外騒に騒然たり、マウナ・ロア更に爆發せりと云ふ、扉を排し出で見ればマウナ・ロアの左肩七千呎の高さに於て噴烟天に冲し火光を受けて火柱正に二萬呎と云はる、偶來

◎布哇キラウエヤ火山を見るの記　國府

りて此壯觀に接す何等の幸ぞ、唯噴火の地點二十哩の彼方にあり山の尾に遮られてラバの流降る偉觀を見る能はざるを遺憾とす、二十二日午前三時に至りて最も猛烈を加へたりし由なれども寒さに堪へずして床中にもぐり込む、キラウエヤ火山の研究を以て有名なる火山學の泰斗たるヂヤッカー博士は終夜觀測をなし、早朝火口探檢に出掛けられたり。

今マウナ・ロアの爆發の記錄を見るに

一八二三年、傳道師の布哇に到着せし時爆發あり其後、一八三八年、一八四〇年、一八四八年、一八五一年、一八五二年と頻繁に繼續し、一八五五年の時は一萬二千呎の處より流出し十三個月間にヒロを去る八哩の處迄迫り來れり、一八五九年には頂上より八千呎の處に始まり又十一ヶ月間流れ布哇島の東北海岸に達す、尋で一八六五年、一八六八年、一八七三年、一八七五年、一八七七年と續き一八八〇年に二回（第二回の時九ヶ月間流れたり）あり一八八四年、一八八六年、一八八七年には三八八回の地震あり一月十八日午後八時には山の南腹より流れ二週間に三十哩を走り二十三日には一時間六乃至八哩の速度を以て流れたり次は一八九六年、一八九九年にして、一八九九年の分は七月四日より二十四日朝迄頂より五千呎八千呎の處で所々より噴出し當時頂上の噴火口も活動せし由なり、一九〇七年には再び南腹に起り、一九一六年の五月十九日二十一日の分も一九〇七年の火口の少し上手より始まり、途中三派に分れて流れ降りしが此度の分は格別顯著ならず三十哩位にして二十三日には殆んど停止したるが如し。

九、火山ハウスの曉

五月二十二日早起ホテルの裏手に登る、北遠くマウナ・ケヤの白雪を望み、近くロアの斑雪と夜來噴烟の益盛んなるを見る、前にはキラウエヤの大火口を瞰下し遙かに太平洋の水天髣髴たるを眺め今更

に其大景に打たる、此行、船と自働車とによりしのみ聊かも山岳黨らしき攀登跋渉の快味なく到底日本アルプスを踏破する壯烈なし、然れども靜かなる太平洋の平和の一孤島に立ち此悠容迫らざる山容を見る時云ひ知らず心の延びやかなるを感ず、成程火山の爆發と云ふものあれども唯ロアの中腹より思ひ出した時勝手の所より水の湧く如くにラバが少し宛はみ出る位のことにて驚天動地の活劇は到底望むべからず、海と山と火山との最も平和なるものを此所に示せるものと感ぜられぬ、布哇は誠に太平洋上の樂天地なり、氣候は酷熱にあらず勿論寒さを知らず衣と住とは左程心配するの要なく四時花と果實を絶たずされば聊かも食に苦まず猛獸毒蛇の害なく外寇の虞もなく椰子の葉影に月光を浴び琴を彈じ歌ひつ、舞ひつ、唯他愛もなく面白可笑しく遊び暮したる彼等土人カナカこそ正に天下の樂民、呑氣此上なしの種族たりしより終に習性となり懶惰無氣力意氣地なしとなり終り終に少數の白人の蹂躙に委するの亡國となりたるなり、此の如き國に久しく留まるならば自然の感化の偉大なる何人と雖も亦不知不識の間にカナカ土人の現狀に陷るなきを保せず、在留日本人の內にも早く此傾きを見得べしと云ふ、謹むべきかな、聞けば布哇の蟻は少しも貯藏心を有せずと蓋し常夏の國には食物を貯ふる必要なければなり、勤勉貯蓄は蟻の天性として常に惰民の敎草に供せらるべきに布哇の蟻は然らず他は以て知るべきなり、唯蜜蜂は今猶盛んに蜜を貯へ居る由なれども此れも漸く一八五七年の輸入なりと云へば遠からずして蟻と同樣惰蜂と化し終らんか、布哇は見物か避寒かには此上もなき國なれども生活するには餘りに氣樂に餘りに呑氣なり。

十、Tree mould（木の鑄型）

火山ハウスの近傍にて觀るべきもの火山博物館硫黃崖及木鑄型とあり、博物館はヂアガア博士の監督の下に火山に關する材料を蒐集せるもの、硫黃崖はホテルの西一町の所に斷崖をなして硫黃の表は

◎布哇キラウエヤ火山を見るの記　國府

◎秋　信　冠

れたるものあり、周圍よりは盛に硫氣を吹く、又木鑄型はホテルより西南十町許の牧場内に散見するものにして、往昔火山爆破の際ラバガコウ森林を絶滅せしラバ冷却して後丁度コア樹の幹を鑄型として深き穴をラバ中に殘したるものなり、當時の流出ラバの厚さ枝の岐れ工合、樹皮の模様迄明かに識別し得べし。

十一、歸　途

五月廿二日午前十時一同打揃ふて自働車に分乘しヒロ市に向ひ歸路に就く、緩漫なる傾斜を走り降る時熱帶植物の大廣野の彼方に太平洋の烟波を望みつ輕快云ふ可らず、途シュガア・ミルを一見し午後一時ヒロ市に着、午後四時再びマウナケア號に乘り出發す、ヒロ市の住民半以上日本人なりと聞く、埠頭の見送人を見るに八分迄は日本人なり、海上稍浪高かりしが廿三日午前九時ホノルルに安着す。

秋　信

冠　松次郎

栃本―眞の澤―甲武信岳―雁坂峠―鷄山

神無月この葉のをつるたびごとにこゝろうかるゝみ山べの里　　山家集

戀しい秩父の山、なつかしい荒川の水。その水上に憧憬の思ひを寄せてゐたのも隨分久しいことでした。折があつたらその溪澗を溯つて、甲信甲武の國境に足を延ばし千曲川、笛吹川、荒川の源頭に立つて、深い〳〵この山脈に包藏されてゐる深邃な自然に接し、春の若葉、秋の紅葉に腐れ易いこの

身を埋め盡して見たいと云ふ願ひのみ強くなりまさるのでありますが、生憎夏は越中の雪や偃松に惹寄せられ、冬は北風に怯けが付いて都會の古巢に惰眠を貪つて、春秋は又稼業が忙しい爲に、何時も何時も思ふまゝにはまゐりません。

秩父の山々に對して、私も幼時から僅かばかりの思ひ出を持つて居ります。それは多分八歳位の時でありました。その頃私は矢張り本郷に住まつてゐて、毎朝小學校へ行く前に漢學の素讀を習ひにやられました。そして朝な〳〵家を出て、菊坂の本妙寺と云ふ日蓮宗の寺の坂を上つては臺町の方へ拔けました。嚴冬西北の風が肌を刺す日なぞ、身體をかゞめ首をすぼめて、せつせと其處の坂を登つたものです。其頃は其處から秩父の山がよく見えました。ぎざ〳〵とした紺靛にさえた山々の皺に、鮮かに粧はれた新雪が氷藍色の光を放つて、雜然たる都會の屋梁を壓してゐるのを見て、私の小さな胸がどんなにか轟いたでせう。その頃初めて氷の樣な風の主のありかゝ分りました。あゝ『秩父おろしだ』私は幼な心にさう思ひました。何だか恐ろしい、又何となくなつかしい物にでも出會つたやうに、其印象を大事に懷に秘めて、毎朝その山脈に遭ふのを何よりも樂しみにして居りました。それから暫く後のことでした。確か火事があつた時で、出火の方向を見る爲に家の火の見に登りました。その時は丁度夕陽が富士の左に炎の樣な大塊を轉じ、もう西の空は鮮かな朱樺色が一杯に流れて、間近にある寺の大銀杏の枝や葉なぞが一つゞ、際やかに見え透いて、その後ろから富士は高く美くしく夕榮をしてをりました。そしてその右に連らなる秩父の山々は淡い紫紺色に溶け込んで、武甲山が其右端にピヨンと飛び放れてゐるのが如何にも孤獨に堪えない樣に見えました。その時です武甲山の名を覺えたのは。もう火事なぞはどうでもよかつたのです、碌々火元も確めずに、暗くなる迄山々の暮れ行く色彩に見とれて居りました。それからは町の中を歩いても西の方の開けてゐる處を通ると、屹度その方を見ては連山の姿を探し求めたものです。私は其頃から紫に匂ふ筑波の峯よりも、桃色の雪の皺華

◎秋信冠

やかな富士の高根よりも、砥ぎすまされた白雪にぎざ〳〵とした空線を連ねて居る秩父の山々が如何なにか戀しかつたでせう。

それが近頃になつて漸くその山々の奥へ分け入つて、抱擁の甘味に飽きるやうなことになつたのは、何んと云ふ幸福なことでせう。

一栃本まで

今年はどうやら暇が出來さうなので出かけて見ようと思つてゐる矢先に、丁度友人岡野德之助君が訪ねられて、話が直きに纏まつて早速出發することに致しました。

根よく降り續いた秋霖も漸く霽れさうなので、十月二十一日。(大正五年)午前六時五十分の汽車で上野を發ちました。朝の武藏野はそれは〳〵濛々たる霧の世界でした。午前九時頃から空がだん〳〵明るくなると、追々霧が山風に追ひまくられて、野末を海の方へとはひながら逃げて行きます。其跡が拭つたやうな秋日和となつて、秩父の山々はもう長閑に冴え返つて、其奥の方に一連の翠黛が高く天半に懸つて居ります。

あゝあれだ。秩父の奥山。あの深い谷を分け登つて明日は其頂きを極めることが出來ると思ふと、私共の心は既に連嶺の上をへづつてゐる様な氣持がします。それにしても兩神山の立派なこと、この方面にあの位い奇怪な形をした山は外に見えないやうだと、友は一人で悦に入つて居りました。

上武鐵道へ乘換て暫くすると、武甲山が周りの低山から特立して、兜を伏せた様なその雄姿は信州なら八九千尺の高山でせう。荒川の溪流と岩石は趣きがあるが、兩岸が開けて畑となり原となつて、矮い貧しい樹木が疎らに生へてゐるのを見ると、墮落したなと云ひたくなります。秩父の赤壁、こんな處にそんなたいそれた場所があるのでせうか。

道が西北に向ひ谷が開けると、行く手に屹と甲武信三山、破風、雁坂の連嶺が出てくれます。刻々に變り行くその山の色を見入つてゐると、流石に嬉しさが込み上げて來ます。

午少し過に强石に着いて晝食をつかひました。强石は何處にもありがちな神社や佛閣なぞのある山裾の宿場の様に俗惡な處です。飯を食つてゐると病で髪の拔け上つてゐる三十女が傍へ來て、ペラペラと饒舌りたてられるのには甚だ恐縮しました。

東西に彷徨ひ南北に流浪して、この山村に怪しげなるはひをしてゐるこの女等の來し方行く末を想像すると、何となく影の薄い様な感がします。彼等も世の寂しい味を知つてゐるのかしらん。秩父の連山が雪を戴き、日々西北の風が谷を鳴して、三峯の賽者が途絶えた冬枯の頃、空も山も畑も川も皆一様に靜寂の眠りに就いた頃、彼等はどんな思ひで暮すのだらう『遠い山見りや古郷戀し』其頃は恐らく荒みほうけた彼等と雖も、又しみ〴〵と家郷の戀しさを味ふことでありませう。

强石を午後一時に發しました荒川を左下に見て崖道をぶら〳〵行きますと午過ぎの日射が斜に山道を照して、ぽか〳〵して汗がじく〳〵滲み出て、何時の間にかヲーバーコートが邪魔になつて來ました。强石で少しばかり飲んだ興奮劑が馬鹿にきいて、咽喉がひり付くので清水をあさつたり、柿を噛つたりして行きましたが、流石に深山の道です、四時頃になると日はもう西の山の端にかくれ、蜀黍畑をがさ〳〵と搖がせて來る山風は、既に晩秋の冷たさを持つて居ります。

五時栃本へ着く頃は黄昏になりまして、谷向ふの山の中に巢くつてゐる炭燒小舍から立ち昇つて行く煙が、山村の夕暮を象徴してゐる様でした。例によつて大村氏の所に厄介になりました。

二　栃本

秋父の街道を甲州か信州に拔けるのに通る道筋の一番奥にある山村です。人家の五六十軒位はあり

ませう、如何にもふつくらとした山々の中に介在してゐるこの山村は、何となく暖か味がある上に家並が清洒で棲い心地のよさそうな處です。この宿の直ぐ前が少し計りの空地になつて、その先に往還が付いて、それからなだらかな丸い形をした崖が谷川へ續いてゐます。崖の上の方には畑が出來て、下は樹木雜草が茂つてその底に荒川の流れが閃めいてゐます。荒川もこの邊まで來ると水量は可なりありますが川巾が大分狹くなつて、この宿からは僅かに其せゝらぎの一部分が見えるのみです。

谷向ふに和名倉山の續きがのさばつて、炭燒小舍が燕の巢の樣に高く懸つてゐるのが、如何にも詩趣に富んでゐます。今年は紅葉が半月以上も遲れたさうです。然しこの山村を圍んでゐる溪山の趣きは中々心地よいものです。西の方に連らつて居る紺靑の山々が、上へ上へと重なつて、それに見入つてゐると何とも云へない奥深いそして物寂しい感じが起ります。一番近く聳えてゐるのが雁坂嶺で、その奥の方から木賊、甲武信の頭がこの山村を窺き込んで、その冷たい山の肌から放射してゐる色彩が、紫水晶の樣に美くしく透徹つて見えます。

この前に來た時には二階が板敷で、その上へ莫蘆を敷きつめてありましたが、今度は東側の方に十疊ばかりに劃られた座敷が出來て、疊も敷かれ、天井も張られ、蒲團、夜着なぞまで新調されて、尙更棲みよくなりました。只惜しいことに以前には障子を明ければ直ぐ前方に荒川の奥の山々が見えましたが、今は東方の下流の風情をのみ貪る樣になりました。

米や味噌は下の部落から上げるので、この附近で出來る物は豆、蕎麥、山葵、栃餠、大シヤモジ位で、養蠶丈は場所柄可なり盛んな樣です。十數年も前には猪がこの民家の傍まで餌をあさりに來たさうです。『栃本には猪が鍋を借りに來る』と云はれた位です。向ふの岸の山にはつい近頃まで群猿が蕎麥を食べに來て畑を荒して困つたさうです。その來る時には一と群れをなして、其中の二匹は必ず張番をして、人が行くと合圖をするさうです。すると皆ながキヤツ〳〵と云ふて、後足で蕎麥を摑んだなり

逃げて行く樣子が如何にも滑稽ださうです。つい數日前上中尾の學校の傍に熊が迷ひ出たさうです。秩父のこの頃はともすると夜半鹿の聲を聞くさうです。吻々として山谷に響き渡つて來るその靜寂の聲はどんなにか深山の秋にふさはしいことでせう。

この家の主人はまだ三十位の溫厚な人で、素朴な愛想のよいその母親が一切のことを切り廻して居ります。前の主人はもう十年餘も前中津川の親類へ行く爲一人で出かけましたが、大雨の後で所々橋が落ちてゐるので已むなく谷渡りをしましたが、運惡く一ヶ所の難場を踏み外づして濁流に押し流されて溺死をしたさうです。

栃本は周圍の山々がふつくらとして大まかなやうに、人々も又何となく惇朴の內に濕ひのある感じのよい風があります。私は數年前の秋、十文字峠を信州梓山へ拔けて、秩父の奥と千曲の奥との自然や住民の色調の變化の際やかなのに驚きました。その時は三峯邊はまだ漸く三四分位の紅葉で、栃本が五六分位でしたが、一山を越えて戰場ヶ原へ來て見ると、俄然紅葉が深刻になつて、燃ゆる樣な黃朱紅樺の落葉木はもう秋榮の絕頂で、一陣の木枯にも山々は火花を散らさんばかりでした。原を拔けると八ヶ岳がまざ〳〵として梓山村の屋梁を壓し、その山の皺から吹き下して來る山嵐に、旅の衣の薄きを覺えました。

梓山は秩父の部落の豐かなのに引き比べて、何となく山國の窮村と云ふ樣な感じのする處で、家々は暗くみじめで家並も秩父程に揃つてはゐず、去來する人々や路傍に遊んでゐる小供などを見ても、何とはなしに深刻に思はれました。時は十月十九日でした。白木屋へ泊つた深夜、厠へ行くのに氷の樣に冷めたい廊下の板のきしむ音に、山國の寒さを知つた私は、翌朝顏を洗ひに出たとき、洗面盥に薄氷が張り詰めてゐるのに驚きました。川端下の原は雪の樣な、霜柱が燦として、駒鳥が餌をあさつてゐるのがもう聲も出し得ない位でした。

三眞の澤

たしか栃本の宿を出たのは午前七時頃で、（十月十九日）それは中々寒い朝でした。洋服に身を固め、金剛杖を持つて、いそ〳〵と心地よい山の空氣を吸つて、山々に圍まれたこの街道を歩き始めたすがすがしい氣分は今でも忘れられません。名殘なく澄み渡つた秋晴の空に、浮び上つて見える國境の連山の深い冷たい色彩に見とれて、栃本のはづれに近づくと、道が二つに岐れて上へ行くのが十文字峠道で、私等は下の方の雁坂峠の道を降つて荒川に沿つて行きますと、カランー、コロンー、と音をさして、向ふの崖上から材木が幾本も縺れながら谷へ走り落ちて來ます。遠方からその音を聞いてゐると、美くしいリズムをして心地好かつたけれども、傍へ行つて荒れ果た山側を見るとうんざりしてしまひました。

荒川の谷もこゝ四五年の間でさえ大分荒らされました。滊車が追々と秩父の奥近くへ敷かれるのに從つて、山奥の深林が一寸〳〵に切開かれて、新綠の色細やかに紅葉の色美くしい、この濕ひのある山谷も、纔て荒蕪極まる衰頽鄉と化するのではありますまいか。

二十分程行くと瀧川谷入川谷との出合に出ました。瀧川谷は隨分大きいもので、本流の入川谷と選ぶ所がない位です。此處で橋を渡つて雁坂峠の道と分れ、入川谷を右下に瞰てその崖上の林道をつま先登りに行きますと、昨夜の寒さで道の兩側に霜柱が光つて、夏茂つた草々は黃色にすがれ、もう蟲の音一つ聞えません。この道には山仕事に入ると見えて、崖の斜面に貧しい畑が續いて處々に小さな小舍が掛けてあります。今月になつて栃本の者が林道の修繕を受負つて、この道を股の澤の方へ入つて居ると云ふことです。そのせいか道が立派に直されて、大分歩きよいことです。

栃本から一時間半も歩いた頃、向ふ岸に小溪流が落ち込んで居りました。ヤタケ澤と云ふので、赤

澤の落口まではまだ小赤澤と云ふのがあるさうです。暫く上り、小さな畑が處々に見えますと、崖下に一軒の山小舍が見えました、そこは葡萄平と云ふのださうです。山葡萄の多い爲でせう、入川谷もこの邊から奥はまだ炭燒も伐採も入らないで、原始のまゝの深林になつて居ます。十時半頃に赤澤の落口の上へ出ました。その流水は樹々の間に光りを碎いて見えますが、樹木が茂つてゐるので谷が深いので、落口の壯大な景觀に接することが出來ませんでした。

道は同じ樣に入川谷に沿ふて山側を通じて、ヒダナ澤と云ふのに出る、大きな澤ではあるが三ッの飛流を集めて、その下がヒダナの瀧と云ふ、十五丈位な凄壯な瀧になつて、隨分深く谷川を刳ぐつてゐるさうです。これは谷下まで降りなければ見られないと云ふので止めてしまいました。

それから大分谷川に反れて登りになります、顧みると直ぐ前方に堤の樣に續いてゐる高い尾根の紅葉が、美くしい淡紅の大屛風を擴げて、その奥の方にのぞき岩が見えました。あの高い尾根の上近くを十文字峠の道が通つてゐるのです。此方から赤澤の谷をのぞいて見ましたが、その粧は矢張り壯大なものでした。

約三十分もひた登りに上ると、今度は降りになるのです、可なり登つたので溪幅が大分廣さを增し、森林は一層の深さを加へ、荒川の溪谷はその潤澤と壯麗とを遺憾なく展開して來ました。谷底を見下すと濃紫色に澄んだ山靈の氣息が一杯に滿ち〳〵て、その奥深いバックの上に、目も綾に錯交してゐる闊葉木の樹幹樹枝の立派なのに、幾度も足を止めては深邃な溪谷の景色に見とれました。

電光形に大きく五六度も折れ曲つて、三十分程降ると河原に降りました。大荒川と小荒川の二流が合したのが、入川谷に落ち合つて居る處です。古生層の岩の上をする〳〵と流れて落ちる谷川の水は黝黑の色に澄んで、岸邊までも垂れ下つてゐる深林はトンネルの樣にヒシ〳〵と流水を散つて樺、栃、山毛欅等の葉は黃に褐色に色褪せ、楓、櫻、櫨なぞの葉は眞紅に燃えて、狹いけれども幽邃なこの溪

水に蘸す錦繍の山の裳は幽艶を極めてゐます。枯枝を集めて焚火を始め、身體を暖め中食を使ひなぞして、暫く休んで崖を登り、荒川の方に掛つてゐる危橋を渡つて、山側を暫く行きますと、道は幾度もうねつて可なりの溪流の上へ出ました。松葉澤と云ふので、その上の長い橋を渡つて股の澤の出合の上へ出ますと、遙か下に近頃新らしく建て替えられた柳小舍と云ふのが白く隱見してゐます。人夫は栃本から頼まれた茶と鋸とを、小舍に届ける爲に急阪を降りて行きました。

少し行くと前方が大きく擴がつて、股の澤の頭と眞の澤の頭（三寶山）が直ぐ近く聳えて、その後ろに澄み渡つてゐる藍靛の空を、吹流しの様な白い雲が東の方へ靜かに流れて行きます。路の兩傍の石楠が籔の様に密生して、躑躅やドウダンが一杯に蔓こつて、何處からとも知れず醱酵した土の香がツーンと鼻をついて來るのが、何とも云へない香ばしさを持つてゐます。秋の匂ひでせう。私は四邊を見廻してそつと土に口付けして見たくなりました。

栂や落葉松の大木が大分見えて來て、猿のおがせが闊葉樹と云はず、針葉樹と云はず藻の様に引かかつて、石楠の枝にまでまつわつてゐます。道が一回轉すると急に崖上に出て、轟々と鳴る地響きに驚かされて前方の崖下を覗くと、材木の様な屏風岩の右の方に傾いて落下してゐる瀑が二段になつて直立二十餘丈の水柱のうめきが四邊の霜葉を震盪させて居ります。高さがあるのに周りの岩が突き出てゐるので瀧壺までは見通せません。木賊の瀑と云ふのです。そして右からこの下で落合ふ澤を眞の澤だと卯吉が云ふた様に思つたので、私は眞の澤と木賊澤を間違へて、木賊澤を登つた積りでゐました。然し木賊澤にしては餘り長く入り過ぎるので、不審に思つてゐましたが、後に木暮氏に聞いてそれが眞の澤だと云ふことを合點致しました。瀧の上に掛けてある丸木橋を渡つて、崖上に續く林道を二十分餘も登ると、下の方に大きな廢屋がピシャ〳〵につぶれたのが見えました。その小屋に着いたのは未だ午後三時十五分でした。甲武信岳を越して甲武信の小屋迄行く豫定でしたが、案内の老人卯

吉が大分勞れたやうなのに、秋の日射しが大分傾いてゐるのを考へて、その夜はこの小屋で野營をすることにしました。

小舍の周りは可なりの平になつて、これから先にはこの位な野陣場は見當りませんでした。十數間もあるこの小舍は甲武信の林道を開鑿する時に人足共の宿つてゐた所ださうです。其頃は五十人位の人が生活をしてゐて、栃本から毎日そこに食料を送つてゐたのださうです。秩父の山歩きの樂なのは、こう云ふ贅澤な林道が澤山付いてゐる爲でせう。潰れた小屋の中程にその材料を組立てゝ小さな小屋がけをしました。こゝには小屋の廢材の枯れ切つてゐるのが山の樣に手近にあるので、薪木を集める要もなく、無性ものゝ夜營には御誂へ向きです。

この平から南方に破風、地圖の破不山の西の頭が丸く飛び出して、同じ山からの枝尾根が前に土堤の樣に連らなり、東の方を劃つてゐます。そしてその尾根の後ろが松葉澤だと云ふ事です。一しきり破風の項上を霧がぼかしてゐましたが、直きに霽れ渡つて空には白紗の樣な薄雲が高くたなびいてゐるのみで、西の山に沈む夕日の名殘が山々に反映してぼんぼりの灯程の光をかざして、名殘惜しさうに溪間を漂ふて居ります。

秋の日光の短きこと、栂、白樺、落葉松なぞの幹にもつれ葉に絡んでは立ち昇る露營の煙を見てゐる內に、何時しか溪間は蒼茫と暮れかゝつて、夕星の光りが冴えに冴え、山々はだん〳〵黑ずんで來ました。谷下を見下ろすと夕靄が一杯に罩めて、深林は烟り、溪聲は咽び、そして風なきに搖落する木々の葉は坐ろに寂寞の情をそゝります。

『騒たく露營の人の夜寒かな』と駄句つて見たが、實は深溪の秋の夜營としては非常に暖かいものでした。その筈です、翌朝起きて見ると、霜らしいものは更に見えず、假に結んだ庵の軒からはぽた〳〵と露が滴つて居りました。

◎秋　信　冠

◎秋　信冠

十月二十日。昨夜は暖かだつたので案外よく寢られました。眞夜中頃目を覺まして、焚火を盛んにして雜談に耽る。珍らしく風のない晩で、沈々たる溪谷の大きな暗黑裡に、光るものは露營の焚火と樹間にきらめく天上の星計り位なもので、溪聲が遠くなり近くなり、或時は人の叫喊の樣に、又哀音を曳ひて悲しみ泣く樣に、或時は俗謠でも歌ひ笑ひさゞめく樣に。眞の澤の流は面白い節廻しに、自然の妙曲を奏で出づるのに、うつとりとして耳を欹てゝゐますと、向ふの尾根の上がポーツと明るくなつて來ました。最早夜明かしら、明方にしては餘り早過ぎるなと見てゐる內、二十日の月の角が樹間に現はれて、驀て尾根を離れて谷上の方へひそ〳〵と歩いて來ました。朧ろ月です。その柔かい光が谷に差し入ると、今迄くら闇の塊りであつた森林の一部が薄明かるくなつて、直ぐ傍に矗々と伸び上つてゐる白樺や落葉松の樹枝が美くしい網目を織り出してゐます。

午前五時半頃になつて漸く明るくなり、飯をすませ辨當を詰めたりして、出發したのは矢張り七時を少し過ぎた時分でした。眞の澤の林道は何處までも立派に續いて、その絶壁や崖側に浮橋の如く連亙してゐる夥しい棧道の奇景はこの谷の美觀の一としても恐らく不當ではないと思ひます。少し登ると針葉樹の領分となつて、栂の大木が旺生して落葉松や黑檜が交り、石楠の大きいのが崖側を埋め盡して、眞の澤の水はつる〳〵に續いてゐる古色蒼然たる一枚岩の河床の上を、珠玉を轉がす樣に右に左に躍りながら飛んで行きます。遙か崖上に登つて木賊澤の出合らしい一溪の合流するのを見下ろして右へ〳〵と迫り込んで行く內に非常に高くなつたので、溪聲がかすかになり、向ふの尾根が對頭になつて、一杯に鎧はれた蒼黑の針葉樹林の中から落葉松の金色葉が其處此處に集團して、まばゆい程の光彩を放つてゐるのが深山の秋を獨占してゐる樣に見えます。深山や高原の秋を象徵するものは楓でも樺でもない、實に唐松の黃葉です。光りあり潤ひあるこの落葉木の色彩に恍然たらざるものは、未だ以て秋を語るに足らないと思ひました。

山の様子ではもう三寶山の間近く迄廻り込んだらしい。顧みると兩破風が一團となつて三稜形に凸突と聳えて、その山の肌が偃松に裝はれてゐる様な色彩をして頗る高山的に見えます。三寶山の後ろへ廻る時分から山側は白檜の密林となつて、茫々と密生してゐる深林の中を行くのが、墓原の中を歩む様な陰凄な感じがします。道が二つに岐れて左のが甲武信へ行く林道で、右のが十文字峠の方へ分れる林道です。右の方へ七八町も入つて林道を離れて、左の山側の深叢を分け登つて暫く行くと急に頭上が明るくなつて、三寶山の南に累積されてある大岩の櫓の上へ飛び出しました。

四　三寶山から雁坂峠まで

岩頭に立つて第一に目に映じたものは矢張り富士山でした。四方からはひ集まつて來る百足の様な無數の低山脈をよせつけずに、悠々たる大麓をなびかせて、新雪冠る麗頭を高く天に參して居る、この嵩岳には王者の威嚴と氣高さとがあります。

及の様な西北の烈風に面を向けてゐると、焼けつく様な雪の眩ゆさに引き付けられて、視線は何時しか白峯山脈の上を搖曳し始めました。濃藍色に突出してゐるコジンマリした廣河内岳（これは恐らく白根山脈の上に頭だけ突き出してゐる赤石山脈の荒川岳即ち鹽見岳であらうと思ひます、廣河内岳は秩父から見ては著しき山貌を呈してゐないやうです、雲で隠れてゐなければ屹度荒川岳に相違ありますまい。木暮）や、その右に大手を擴げた様な農鳥山の峭壁に鏤められた鹿の子斑の新雪も、間の岳まで來るとその大きな山容に叩き着けられた様な雪が一面にへばり付いてゐるのが、旭日を受けて燦爛の美を呈して居ります。主峯北岳は朝日岳に遮られ、尨大な仙丈岳がその大カールに溢れる様な新雪を湛えて、大事さうにそれを抱き揚げて、その前に曲折してゐる駒、朝與、地藏、鳳凰の一派が稻妻の様に走つてゐるのが、打てば鳴る程に緊張した強い線を引いてゐます。

金峯山の遙か右に胡跪をかいてゐる八ヶ岳の毛むくじやらの赤裸にはまだ白いものが見えません。その左に高大な御岳が葡萄鼠色に透き徹つて、八ヶ岳の右に高く抜け上つてゐる穂高山と槍ヶ岳の鋸の歯の様な空線が、桔梗色に霞んでする〳〵と天半を走つて行きます。そしてその谷を飾つてゐる氷藍色の雪の色が溶け入る程になつかしく、兩山を聯ねる大キレットのたるみが隨分立派に刳られてゐます、北の方で雪の多いのは白馬三山で、鹿島の槍も隨分白くなつてゐました。

暫く休んでゐましたが、直ぐ傍が三寶山の最高點なのに氣付き、無性に茂つて居る灌莽を掻き分けて三角點のある所へ出ました。少し許りの草原になつて其中に三角石標が植ゑられ、櫓が横に仆れてその前に焚火の跡が燻ぶつて、北の方の茂りの中を狹いが奇麗に均らされた細徑が一つ藪の中へもぐり込んでゐます。それを降れば戰場ヶ原へ出られるのださうです。(此道は私が南日君と梓山の安十郎を案内として登つた時もありました、そして下山の際安十郎もうつかり此道を取つて二十間も行くと小さな便所に突き當つてしまつたので、大笑ひをして引返したことを覺えてゐます。其後此處から眞直ぐに道が付けられたかどうかは知りませんが、其時は地圖にある通り三角點から南西の方へと横に白檜の矮樹の間をからんで漸く降路を見付けたのでした、後遊の人に精探を願つて置きます。木暮)

此處では先刻見えなかつた北岳が朝日岳の右に峻聳して、北方には熾んな噴煙を烈風に靡かせてゐる淺間が、絶倫の雄姿を挺んでゝ南信の野に臨んでゐます。

卯吉は三寶山のことを甲武信岳だと云ふて、甲武信岳のことは何とも云はずに、木賊山のことを秩父の國師だと云ふて居りました。武州側の山や谷に精通してゐる彼も、一歩を甲信境に出ればその山の名さへもよく知らないらしいのです。これは秩父の中でのみ仕事をしてゐる爲でせうが、兎に角秩父全體の案内は今の處一寸得られません。奥秩父を歩かうと思ふ者は其中樞の高山を二三登つて略見當が付いたならば、寧ろ屈強の若者で山に處することを心得てゐる者を伴つて、氣任せに歩いた方が

却つて面白い様に思はれます。

三寶山から甲武信岳迄尾根傳ひに行くと木の茂りの爲に時間がかゝると云ふので、もと來た途を戻り林道の岐れ目の左の道を登つて、約半時間位登つて甲武信の頂に達しました。遠望したのと同じ様に甲武信の頭は小さく、そしてこの山は何等の雄容も壯形も持つては居りません。

秩父山塊の掉尾の壯麗を甲信境に露出してゐる金峯山は、右に小川山を連らね、更に朝日岳の美くしい鈍角三角形を東北に起し、>の字なりに國師の悠大となつて、それから長大な山のうねりが延々とこの頂上までも連らなつて、このつゞまつた甲武信岳の頭のその眞中が甲信武の追分になつてゐるのです。國師奥仙丈の枝尾根がどれも皆壯大なる、どれが國境を連らねる山稜だか暫くの間見定めが付かない位でした。荒寥として幽暗なる笛吹川の水上を覗き、そこも分からぬ程に深邃な千曲の源をなす梓川の谷を見下ろし、扨て飜つて三峯から破風まで連らなつてゐる幾多の峯巒の潮のやうな山勢が、一世毎に悠揚のうねりを逞うし、默々としてひた寄せて來る蒼翠の波瀾の、浩蕩たる壯觀を打ち眺めてゐると、身は針葉樹林の尖波と共に何時の間にかその大浪に乘せられて、虛空にまでも押上げられてゐる様な心地がします。

高距三寶山に及ばず、雄大木賊山に敵しないこの山も、一度その頂きに立つて、此處を中軸として延展してゐる山脈の幽深を觀ずるとき、甲武信は好い山だと誰れも思はぬ者はないでせう。

甲武信から木賊山の頂上までは僅かの距りです。木賊山の頂きに着き、暫く休んで其處を出發したのはもう午後一時近くになりました。卯吉は是れから日のある中に雁坂峠までは迚ても出られないのに、水が無くて野營に不便だからと云つて戻りたい様な様子だつたが、私等は遲くも六時迄には雁坂峠までは出られると思つてゐたので、不精〳〵の彼を促して破風山に向つて降り始めました。この降りは長いけれども樂でした。

◎秋　信　冠

◎秋信冠

可なりの隆起を一つ越して南側の崩れの上へ出ると、砂を蹴散らして行つた鹿の足跡が無數に散らばつて、右に連らなるトッサカ山の蒼崖が峨々として深く東澤の谷に落ち込んで、壯麗とも幽美とも云い様もない程、滿幅の秋裝を凝らしてゐる笛吹川の大溪は、妻戀さ男鹿の跳梁に任せて居ります。トッサカ山には昔し武田信玄が愛鶏の死を悼んで、その頂上の處に黄金の鶏を祠つたと云ふことです。そしてその鶏が山奥で鳴いてゐて、時々その聲を聞くと云ふ傳説が山民の中に今だにあるさうです。

少し降つた頃、切開が二ッに分れてゐました。その右の方のを暫く降りて行くと生憎目的の破風山の右にそれてしまひました。遙か下に子酉川の流が藍靛の色を流して、その東側の上に廣瀬の部落が穩かに見え、立て掛けてある干板が午後の日を受けて光てゐます。目を放つと富士は飽くまでも澄み渡つて、その一尺程上に白い唐人笠の形をした小さな雲が靜かな秋空に懸つて、時々煙の様に襲つて來る霧が、笛吹の谷を越して木賊山の上をかすめては眞の澤の方へ消えて行きます。この尾根は東澤西澤の合流する二俣の手前にある長大な尾根（名は八町尾根（宛字）木暮。）で、この切開を付いて行けば自然に子酉川に出ると云ふことです。遭難された學生の目的とした尾根でせう。

道を誤つたのに氣が付いたが戻るのも馬鹿〳〵しいので、横に山脊を傳つて密林を縫つて、四十分以上も經つて破風に連らなる切開を目付け、漸く破風の裾に辿り着き、立派な森林の中を暫く行くと鬱て灌木の中に出て、それからは米栂や石楠や黒檜の下生が藪になつてゐる中を、かき分けたり乘り越したりして大分登りましたが、可なり急なのに夕日に照り付けられて熱いので、暫く休んで時雨してゐる甲武信岳の方を眺めてゐました。ふと氣がつくと直ぐ前の石楠の茂みに歸り咲きの赤い花が二三輪つゝましげに可憐な唇を開いてゐるので、別れかねて一枝をポケットに收めて間近い頂上を目がけて行くと、今朝から氣にしてゐた破風の偃松の其波頭がつい一尺程横にまで延び上つてこの山坂に

異彩を放つてゐます。

頂上に着いたのは四時半で、其處には竿頭高く信號旗がくゝり付けられて、下の處に空罐が四つ五つ轉つてゐました。破風山の北側は鬱蒼たる森林が晝尚ほ暗く、苦むす山坂は中々急勾配になつて、陰森の氣が人に迫る樣な趣きがあります。

破風山を降り切つて雁坂嶺へかゝる頃から朽木が錯倒して、歩行が頗る困難になりました。經尺餘もある大木だからと安心して乘るとぼろ〳〵に崩れて兩足ともろに穴へつっ込んで中々上れなくなつたり、水付いた幹へ足を掛けて横に仆れる、膝や肩をいやと云ふ程打つたり、大木の下を潜ると、鹿柴の樣な枯枝に引懸つて動きが取れなくなつたりして、漸く雁坂嶺の三角點へ付いたのは午後五時半で、六時過に日が暮れるものと思つてゐたのが、もう四面糢糊として山にも谷にも夕暗が一面にたゞよつて、森林がだん〳〵深みを增し、何となく悽愴の感じが起つて來ました。三十分餘も木下暗をひろつて行きましたが、餘り歩き惡いので甲州寄の笹原へ拔けてそれから尾根に沿ふて急いで行くと、日は全く沈んでしまつて西山の方から横ざまに吹き荒れて來る山風が、谷を鳴し森を騒がせてゴー〳〵と身邊を掠めて行くと、冷水を浴せられた樣に全身が冷たくなる樣です。『あゝ雁坂風が吹いて來た』と、人夫が一人言を云ひながら淋しさを堪えられない者の樣に、せつ〳〵と笹原の上を影の如くに走つて行きます。西山嵐と云ふよりも秩父嵐と云ふよりも、此時は雁坂風と云はれた方がどんなにか身にしみて嬉しかつたでせう。先へ行つた卯吉は峠の上へ付いたらしく、煙草の火を付けてゐる。一點の孤光を取り圍んで、傘程の大きさに白く朧ろに光つてゐる霜氣が如何にも寒さうです、午後六時半になつて漸く峠の標木の許に辿り着きました。

休んでゐるとピューウー、ピューウーと二聲、脚下の雲海の底から響く鹿の聲。柔しいが然し鋭い其聲は、澄み切つた秋の空氣の美くしい震動を起して、餘音が遠く山谷に滲み入る樣で、今迄茫然と

◎秋信冠

してゐた私は、遽然として自分の魂が蘇つた様な感じがして、突立つたまゝ暮れ行く秋の自然の清澄を味はつてゐました。

仰げば蒼海の如き大空に、銀砂の様な無數の星が燦々として、針の様に鋭い冷たい光を投げ、漠々として波打つてゐる雲海の彼岸に、怪物の様にそゝり立つてゐる行秋の富士山は眞黒でした。

又一しきり吹く雁坂風に幾度か蠟燭の火を取られ、漸く提灯の支度をして峠道を駈け降りて、一杯水で立て續けに十杯程飲み、午後八時になつて三富製材所のバラックに着き、事務所の人の好意でそこに泊めて貰ふことにして、野營もせずに安樂な一夜を過すことが出來ました。

五　鹽山まで

十月二十一日。幸に今日も又好晴です。昨夜はくらがりを來たので一向分らなかつたが、今朝になつて顏を洗ひに谷川へ降りて見ると、私等は何時の間にか燃える様な錦の中にくるまれてゐました。笛吹川の上流の紅葉は、秩父のそれよりかも遙に色濃く美くしい光澤を持つてゐたのです。

私は清い谿水に漱ぎ、高く晴れ渡つた瑠璃の様な碧空を仰ぎ、旭日を受けて血の様に染め出してゐる山の端の彩色を眺めて、つく〳〵と旅の名殘を惜みました。

卯吉を栃本へ歸し、事務所の人を賴んで荷を負ふて貰ひ、午前八時過に出發しました。

工場から廣瀨迄は一里半程で、廣瀨手前の峠から振り返ると、木賊山から古礼山に到る山々が手にとる様に間近に見えます。その中でも木賊山と破風山は秩父の方から見たふつくらとした姿と違つて、蒼黒い肌に幾筋かのガレを刻み込んで、中々豪壯な山容さして、トツサカ山が鋸の齒の様な頭を並べて物凄い山稜を突出させて谷中を威嚇してゐます。

この山脈の七八合目邊から下は全く闊葉樹の領で、この夏遭難者を出した獨立標高點のある丸い丘

の附近は、一段の光彩を放つて、穏かな秋の日和に心憎い程美くしい色を埋めてゐます。

私は當時を回想して、悵然としてその方を見入つてゐましたが、何時しか空想に耽つて暫くの間時の經つのを忘れてしまひました。自然は冷酷か慈愛か將た無關心か私はこれを知らないが、然し私等の單調な生活に刺戟と慰安とを與へてくれる自然、私等の無限の心の空虛を滿たし、生の享樂を甚深ならしめる自然、その生命あり感應ある大自然に、假令人は死し自分は傷くとも、私は尙ほ感謝の涙を注がない譯にはゆかないと思ひました。

笛川館で湯に入り中食をすませ、ぶら〳〵心任せに歩いて、松里村に出た時分に顧みると、秩父の山脈の上にはもう油の様な重々しい鉛色の雲が一杯に流れて、トッサカ岩が牙一つ殘して、虫食はれた様になつて聳えてゐました。惠林寺や向嶽寺なぞを見て、午後五時頃に鹽山に着きましたが、何時の間にか西山の方の空がどんよりとして時雨雲の前驅が近く甲府盆地に低迷して、その中を透してあかあかと照す夕日を見ても、すかれた畑を吹きまくる木枯の音に耳を傾けても、すさまじい山國の初冬の色が何となしに身に浸みて、旅の寂しさを一層に感じる様になりました。（了）

雪の惠那山へ

長谷川崚峯

先日少しく所用あつて靜岡まで旅行しての歸るさ、春にも似ず澄み渡つた空に、山又山の後ろから出たり隱れたりする白い山を見てから、たまらなくなつて急に惠那山へ行く事にした。回顧すれば既

◎雪の惠那山へ　長谷川

◎雪の惠那山へ　長谷川

に二歳の昔となつたが、白馬と御嶽とで暴風雨に惱まされて歸る途中、是非とも志して中津に一夜を明かしながら、又もや雨に阻まれて空しく歸つて來た事もあつた。その惠那山登りにN、S兩君と名古屋を後にしたのは五月の十一日（大正六年）今年は例年になく不順勝ちであつて、この朝の新聞は中央線三留野驛の大平峠には三四寸の降雪があつたと報じて居た程で、膚寒い日であつた。それに天氣もあまりはつきりしないで空に漂ふ黑い雲は、少なからず明日の天氣を危ぶませる。猿投の山を車窓に眺め、或は玉野の清流に沿ふて幾つかのトンネルを拔け汽車は中津の町に近付いたが、目指す惠那の頂は黑い雲に被はれて居て、その雲の下から現はれて居る山の膚には雪が白い。この分では雪は可なりに深さうだ。石楠花の花もまだ見られまい、然し又雪を踏んで山に登ると云ふ事は自分にはかへつて非常ななつかしさを覺えしめるのだ。劍の劍澤や長次郎谷の大雪谿や、昨年二月雪の中を江州の伊吹山に這ひ上つた時の事などが相ついで腦裏に浮んで來た。

中津の橋力旅館に小憩した後、『山は雪が深くてとても登れませんから御止めになつた方が御爲めでせう』といふ番頭の言葉を要らぬおせつかいと聞き流して、折からの雨の中を山麓なる川上（カホレ）に向ふ。中津の町を離れて間もなく路は中津川に沿ふて、南へ、山奥へと上つて行く、雨はしばらくして止んだ、山の綠の雨に濡れて一としほ鮮やかな間に咲き交る躑躅の花も美くしく、路傍に匂ふ山吹の花も愛らしい、相變らず鼠色の雲は兩岸の山の峯を掠めて過ぎるけれども空は次第に晴れて來て碧空は漸次に擴がつて來た。雪の白い惠那の頂上の一角を仰いで川上の人里に達し、川の右岸に葛折なる坂を上れば前宮の鳥居の前に出た。この鳥居の左、梨の花の白く咲いて居る家は自分達の宿るべき家であつた、別段に宿屋といふではなく一軒の農家に過ぎない、椽側には一面にひきつぶした麥が干してあつた、案內を乞へば上さんが『どーもそーましい所で、うい事ですが』と繰りかへし乍ら、時節外れの御客樣に狼狽して、しきりに部屋を片付ける、やつとの事で通して呉れた部屋の床に、惠那神社と

書いた掛け物とその前にある燈明とは御嶽途中の宿と同じ事だ。

自分達は先づ旅裝を解いて前宮へと幾十かの石段を登つた、N、S兩君が社前に禮拜したのは明日の天氣を祈つたのであらう、遙か下の方には川上の人家があちらこちらに散らばつて居る間に一條の路が、岩村へと西南の方へ山を登つて居る。社前を辭して山の鼻を一つまはれば、惠那山頂の一角が斑に雪を帶びて控えて居る、愈々明日はあの上に登るのだと思ふと愉快でたまらない。

日は既に西の山影に沒して空は紅に染められた、と見たのも少時、靜かな平和な山間の山里は次第に夜の幕に閉ざされて行く、空には多くの星が輝き初めた。日は全く暮れた。冷氣は中々に身にしみる、眼下の家々も寒さの爲めに固く戸締りをしたのだらう、洩れる火影さへなく全くの暗黑界となつた、星光る空にくつきりと浮き出でた山々のスカイラインは、山の精靈でも現れたかの樣に思はれた。

自分達は案内を賴まねばならぬ、勿論自分達には、頂上に達し得るや否やといふ事は全然問題にならなかつたのだが、只だ、積雪深き森林中に路を踏み迷はん事を恐れ、且つは飯田に下らうと云ふ事に決したのでそれには萬全を期する爲めに案内を伴ふ事にしたのである、園盧にあたり乍ら宿の青年會員に、案内の周旋方を依賴した所が飯田に越すなんて事は到底出來ません、そんな事は金の問題ではなくて、命の問題だから行く人は絕對にありませんとて全然とり合はない。それでは頂上までと云ふても、十五、六合目より上へはとても行けないと云ふ、いさゝか癪にさはつて來たが、更に一歩を讓つて、では行ける所までといふ事にした。勿論自分達には、行ける所までとは即ち頂上までといふ事なのだ。漸やくそれでは探して來ますと云ふて出て行つた。

自分達は薄い氣持ちの惡い蒲團にくるまつて寢に就いた、明日の樂しさを考へ乍ら。

翌朝は早く眼が覺めた、四時頃だつたらう、友はまだ二人共、いゝ心地さうに寢て居る、惡戲して起さうかとも思つたが、罪な事をして山の神に叱られると怖いから止めて獨りで外へ出た。外は中々

◎雪の惠那山へ　長谷川

風が冷たい、おぼろに霞み乍らも月は中空にかゝつて居たが、夜が次第に明け離れると共に、空模様は一層怪しくなつて來る、いそいそした心地を抱いて山の鼻を廻れば惠那の山には早くも黑い雲が……

誰も案內に行く者がありませんから私が行ける所まで御伴しますと云ふので宿の靑年を伴つて出かけたのは六時だつた。梨の白い花や桃の紅い花、山吹の黃色な花を路傍に眺め乍ら、幾つかの山の端を廻つて中津川の支流を渡れば、しばらく草原を歩いて後、路は闊葉樹の多い森林帶にと入つて行く、金山谷を距てた左手の山からはしきりに木を伐り出して居る、蓋し麓の製紙工場に運ばれてそして紙になるのだ、鶯の嬌音に交つて梟の重々しい氣味の惡い鳴き聲が何處からともなく響いて來る、さつきは自分達よりも高かつた隣の山々が次第に低くなつて行くのに、云ひ知れない喜びを感じ乍ら、笹を分け木の下路を通つて小一時間も登つた時、ふと左手に當つておぼろげ乍ら眞白な御嶽の姿が我が眼に映じた時は、どんなに嬉しかつたらう、しばらくは歩を止めてその姿に見入つたのであつたが、ぢつと見つめて居ると山の姿が次第に消えて仕舞ふ樣に思はれた位ぼんやりして居た、一時は晴れさうに見えた空は又一層雨もよひとなつて、展望は追々と狹められて行く、かくしてしばらく笹の間を登れば、自分の好きな白樺が三四本他の闊葉樹に立ち交つて居るのを見て間もなく中の小屋に達した、こゝは九合目と十合目との間である、時に八時半。路が小屋の中央をつらぬいて居るのも御嶽式だ、小屋の背後には不動明王の像が安置されて居る、木かげや岩のかげには殘雪が白い。

十合、十一合と左折右曲して次第にその高さを增すにつれて、殘雪は益々多くなつて滑り乍らも早く頂上へ、頂上へと急いだ。間もなく左手の小高い岩の上に一本の松が枝を橫に擴げて居る。これを物見の松と呼んでこの岩の上からは、麓なる惠那郡一帶が見下される、山の間を縫ふて動く白い煙は汽車であらう。あたりには石楠花の樹があつて滿開の時の美くしさを忍ばせるが今はまだ、雪から拔け出た枝には蕾をだにつけて居ない、頂上の一角はもはや右手間近に聳えて居る、しばらくこゝに休

んだが間もなく雪が降つて來たので出發。惠那山中第一の嶮といふ行者越も自分達には何程の事もない、岩の上に立つて御座る石像は役の行者ださうな、人間はうつかり偉い人になると銅像や石像にされて、雨に打たれ風にさらされ時には鳶や烏の糞を頭から浴びなければならない。

途中N君の寫眞撮影などで稍や時間を費したがそれでも間もなく所謂『空八町の險』にかゝる、路が少しく急になつた上に雪が固く凍りついて居るので、靴穿きの自分達はよく滑るのを樹にかぢりつき乍ら一町餘り登れば地は急に平坦になる、よく繁つた栂の林に白く深く積つた雪の上には明暗が美くしく、枝から葉に至るまで雪の凍りついて居る栂の木は砂糖細工の菓子の樣に、枝や葉末からは氷柱が長くさがつて居る、もはやこれからは大なる高低もなくこの美くしい雪の林を行くばかりだ。一面に積つた雪は深さは數尺に及んで居るらしいが凍つて居るので深く踏みこむ事はないが、そのかはりよく滑べる、御互に隨分よく滑つてひつくりかへつたが兩君の如き滑る毎に雪をつかんでは頬張る、案内の青年は雪の爲めにすつかり山の樣子が變つて居るので、路を失つて多少心配になつたらしい、雪に埋められた一の宮の屋根を發見した時は嬉しさうに合掌して居た。N君は『まるで大きな庭園でも散歩して居る樣だ』と云つたが、そんな氣がしないでもない、否、これこそ自分達に與へられた宇宙の樂園なのだ、偉大な深玄な宇宙の樂園なのだ、然し以前雪の伊吹に登つた時の事などを思ひ起しては、今日のあまりに樂なのに物足らない樣に思はれないでもなかつた。S君は『下界に碌々として居る人間に、一と目でもよいからこの美くしい景色を見せてやりたい』と、繰りかへして居た、實に美くしい雪の林、一面の雪は踏むのが惜しく思はれた。

かくて雪に滑り乍らもこの美くしい雪の林を辿れば間もなく眼前に現はれた頂上の神社、もはや幾何もない、足は自らに早い、十一時半頃には二棟の小屋に着いたが休む暇もなく頂上指して急ぐ、十一時四十分には遂に頂上に達した、永い間あこがれて居た惠那山頂に立つたのだ、然かも雪白き山頂

◎雪の惠那山へ

に、故大槻禎郎氏の

ことはりなく泪あふるゝ今我はこの高山の頂に立つ

と云ふ一首は以て今の自分の心地に移し得らるゝと思ふ。頂上には大きな樹木は殆んどなく、雪は強い風に吹き拂はれるのであらう、所々には黑い土さへ現はれて居る。神社に禮拜を捧げた後、半町ばかり離れた所にある、美濃と信濃とを限る境界標に達し一歩を東に踏み入れて『信濃に來たんだ』と云ふ友の言葉も嬉しい、然し自分には山で一番なつかしい三角標の檜の形もなくなつて居たのは何となく淋しく思はれた。雪は又襲つて來た、嗚呼、これが晴れて居たらと思ふと殘念でならない、樂しみにして居た赤石や御嶽、駒、槍などの雄々しくも又神々しい雪の姿も見られない、北方の山の中腹には一條の林道が吸ひこまれる樣に雲の中へ消えて行く。自分達は再び神社の前に集まつて、天皇陛下萬歲を三唱した。雪と雲とに閉ざされた靜寂な惠那七千尺の山頂に自分達の叫んだ聲が森林に木靈をかへして響き渡つた時、自分乍ら敬虔の念に打たれて四人の間には、しばらく沈默が續いた、嗚呼、この瞬間の心地、何と形容してよからうか、自分も大日本帝國の臣民であるといふ喜びを痛切に感せざるを得なかつた。

頂上の展望は諦めねばならぬ、自分達は小屋に歸つて休んだ、漸やく一昨年來の目的を達して山頂に立つ事は立つたが頂上の大觀を擅にする事の出來ないのはかへすがへすも殘念だ、けれども又、夏に於ては見られない美くしい雪の林に失望の多少は償はれたものとも云へやう。自分達は火を焚いて冷えきつた足をあぶり乍ら今朝宿で用意させた握り飯を開けたが、いかにもまづいのでやつとの事で一つだけ平げた。小屋は御嶽や立山の樣な立派なものではないが間口五間、奥行き二間位のが二棟ある。共に川上靑年會の建てたものだ、小屋の中には頂上の物價表が貼りつけられてあつた、自分はこの眞白な山頂の小屋に、風の音や氣味惡い乍らも梟の聲でもきゝ乍ら一夜を明かして見たいとも思つ

た。

降るのは惜しいと云つても何時までもこうやつて居るわけにも行かないので十二時半には惠那の山頂に別れを告げて歸途に就いた、多少氣温が昇つたらしく雪は雨に變り、樹の枝に凍りついて居た雪も溶けてサラサラ音を立て乍ら白く舞ひ落ちて來る。突然行手に何處からともなく飛び出した茶色の小兎、元氣なS君は雪に滑り乍ら追撃したが兎の方が早かつた。枝から落下する雪を幾度か頭から浴び乍ら上つた時の足跡を辿つて降りる、嗚呼、惠那の山頂を、美くしい雪の林をも今は去るのかと思ふと誠に名殘り惜しい、自分は幾度か歩を止めては頂上の方をふりかへつては故大槻氏の

極まれるこの悲哀の堪えがたな淋しく山を降りなんとする

といふ歌を口詠んだ、去らば惠那の山靈よ、惠那の山よ、又學校から御前のおとなしい中にも犯し難い姿を眺めて今日の樂しさを想ひ起さう、さらば。――下の方では餘程雨が降つたらしく上る時に殘した足跡も消えんばかりにうすくなつて居る。上る時にも滑るのでいさゝか閉口した空八町は降りには一層滑るので皆妙な腰付きをし乍らも下りきつて、一息いれ乍ら木の間から眺めやつた時、頂上は全く雲に包まれて仕舞つて居た。雨は相變らずしとしと降つて居る、眺望はもうまるでない、仕方がないのでひたすら路を急いで二時間半あまりで川上に着いた。宿の番茶で渇を醫してから更に雨をついて中津に向つた。やつと汽車に間に合つてその夜は木曾福島へ行つて泊つた。

翌日は福島から上松まで木曾川に沿ふて歩み、雪白い駒を雲間から見て胸をおどらせ更に寢覺の床に遊んで歸名した。丁度この日名古屋では米國の青年飛行家アート、スミスの宙返り飛行が行はれた。

備考

惠那山は信濃、美濃に跨り標高二一八九米突（測量部）

吉田東伍氏の大日本地名辭書には、吉蘇志畧、湯舟澤の條に曰くとして、在惠那山北麓、岩石形如櫃、里民曰、是天照大神降誕時所浴也、村名職是之由、且藏胞衣於此山、胞衣儺訓惠那、則惠那山名、亦復攘之、其山下所出水溫煖、則所謂溫川也、云々と

◎雪の惠那山を　長谷川

◎大雪山登山記　小泉

ある。蕙那さ胞衣との說は牽強附會の說かも解らないが、天照大神との傳說は詳しく調べて見たら面白からうと思つたが稿を急いだのでそれにも及ばなかつた。頂上の神社には伊弉諾尊、伊弉册尊が祀つてあるさうだ。

中津川驛から川上まで約二里、車を通ぜず。川上では自分達の泊つた今井辰次郎方と今井松助方とで登山者を泊める。

川上の前宮から頂上まで二里七町といふ、路は至つて樂だ。途中を二十合に分つて居るが十合に改めるといふ事だ。頂上二棟の小屋には宿泊する事が出來る。

大雪山登山記

小泉秀雄

第一日　旭川區より松山温泉迄

時維れ大正三年八月二日議熟し同志を募つて本道の勇鎭北海道第一の高峯大雪山を登破することゝなつた、同行の士は營林區署から大島署長、太田氏外に大倉氏、上川尋高小學校よりは太田、木村、新井田の三君旭川中學校よりは齋木君と小生、卒業生の横山、米倉の二君、外に有志者五十嵐、大槻の二君並に人夫の成田を合せて同行十三人。

集合は二日の夜十二時であるが、夜來の雨はショボ〳〵と絲の如く深くも闇をこめた、空を見ればどんより雨曇り、陰雲は上川の原野に低く垂れ下つて、明日の天氣は駄目であると強い宣告を與へて居るではないか、心細い次第であるがこんなことは一向苦にしない吾等は、萬事落ちなく取り揃へ、輕裝鞋を穿ちて出づれば、陰雲空を閉し雨さへ細く降りしきり、軒に滴る雫の音は、如何にも淋さを添へる、然し前途に希望を持つ吾等は、雨などは元より覺悟のこと物の數とも思はない、實際登山す

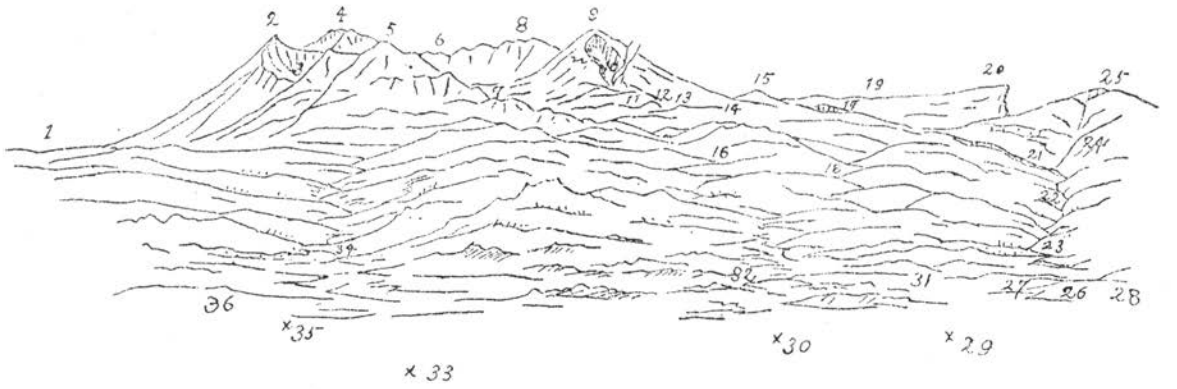
る人は雨などを恐れる様では到底駄目である、やがて午前一時過ぎに出發し、大正橋から御料地の道路の方に向つた、雨は益々降りしきるばかり、一同トボ〳〵と淋しい提灯の明りをたよりに橋の方へゾロ〳〵と闇を潜つて行く、何のことはない百鬼夜行と云ふ格好だ。

四隣寂として聲なく、實に淋しい夜だ、家々の軒が三寸下ると云ふ丑の時に雨を添へて、一入の寂寞を增して居る、やがて橋の袂近くとなれば、大雪山より出る大雪溪の末は忠別川となつて、二三日以來の雨に水量を增した勢ひは鋭く、轟々として河原に唸くのが手に取る様に聞える、提灯は雨の中にほんのりと光りの輪を畫く、水勢は矢の如く堤防の決する音は氣味惡るく聞える、橋を渡りて一同漸く安心して東へ東へと進んで行く、何と云ふ陰闇な夜であらう、闇は深く立ちこめて萬籟寂たる道、人子一人通るでなし、雨の中を十三人がスタ〳〵〳〵、一個の提灯が其間をユラリ〳〵と動いて行く。

道が惡いのに眠い、腹が空くと來るから、一同少からず弱つた、休む度毎にコクリ〳〵と頭をかしげては時々ビックリして睡眠不足の眼を大きく見張り、眞面目腐つて一同を見廻しては又コクリ〳〵、横から見て居ると吹き出さずには居られない、罪のないのは人の子にもあるかな、御料の市街地に着いたのは四時頃で、雨も晴れ夜はほの〴〵と明け離れて、忠別河畔の丘陵は白霧立ち罩めて漸く眠りより醒めた樣、冷氣は犇々と身に迫つて來る、昨年までは三々五々飛び〳〵の家も、今年は軒を並べて稍々市街の體裁をなして來た、實に發達の早いのには驚くの外はない。

旭川は海拔百十三米で略三百六十呎、全く新生代の第四紀沖積平原の西南方に位するが、此廣大なる沖積地は石狩、牛別、忠別三川の領する所で、南方に沿ふて走る第四紀の丘陵は、此平原の南邊を限るもので、其一圓は凡て火山岩地である、此市街地は海拔（以下同）四百十呎を算する。

此所から二里計り行くと、平原は盡きて丘陵となるので、先づ朝飯を食し元氣を附けて、愈々羊腸たる坂路を登り初めた、峠は廣い原で南面した所には、シラヤマギク、ツリガネニンジン、ミツバヒ



圖念概の近附其に並彙山火雪大るた見りよ（米三一一）街市川旭

谷溪川狩石 1
（米八五一二）岳別愛 2
口火裂爆谷キヅノ大 3 ｝永山火山
（米四五一二）岳布比 4 ｝永山火山
（米〇〇一二）岳山永 5 ｝永山火山
（米〇四一二）岳ノ中 6 ｝大雪火山
平合醐 7 ｝大雪火山
（米一〇二二）岳ク熊 8 ｝大雪火山

（米五八二二）岳旭 9 ｝旭岳火山
口火裂爆谷獄地 10 ｝旭岳火山
池見姿 11 ｝旭岳火山
（米六八五一）岳旭前 12 ｝旭岳火山
焼藏地 13 ｝旭岳火山
畑花御 14 ｝旭岳火山
（米〇五六一）岳旭小 15 ｝旭岳火山

イナケユピ 16
崖斷流上川別忠 17
ツベマコユ 18
（米〇六七一）原ク蟲高 19
（米六二九一）岳別忠 20
置位の泉温山松 21
（峡仙勝）川別忠 22
日落イナケウピ 23
イナンウヲク 24
（米九三九一）岳雲化 25
イナヒシ 26

所電發 27
峠シ晴見 28
村川東 29
村川旭東 30
イマロラク 31
川ンパベ 32
村山永 33
川ツベユシウ 34
村麻當 35
イナマウト 36

ヨドリ、エゾニウ、ヲトコヨモギ、カラマツサウ、アキカラマツ、イワウサウ、ススキ、ミゾスゲ、ハンゴンサウ、ハギ、オホバコ、ワラビ、アキノキリンサウ、ヨモギ、ヲミナヘシ等入り亂れて混交叢をなし、今を盛りと咲き誇つて居る有樣は、實に得も云はれぬ風情で、心なき人も足を止めて暫しは自然の美景に恍惚れて居る、植物學的觀察は漸く之より始まるので、手帳を出して餘さじと記き始めた、八百十呎より道漸く急峻となり、河に面せる方には、ミヅナラ、ヤマハンノキ、イヌエンジユ、アヲダモ、ハリギリ、シナノキ、カシハ等の混交林を形成し、下草には、アキノキリンサウ、ヒヨドリバナ、ハギ等を見る、南方溪を隔てゝ開展する鬱蒼たる濶葉樹林は、深綠滴らんばかり、清新の氣は油然として湧いて來る。

傾斜せる陽地には繖形科の尤物エゾニウ、アマニウが尺大の花序を擡げて羣叢中に擢んでゝ居る、高いのは一丈に餘り、內地では決して見ることの出來ぬ壯觀である、恐くは本邦の草本中最大なるものであらう、少し降つて又爪先登りとなり頂に達する（一一〇〇呎）、頂附近にはオホヤマフスマ、サイハダカンバ、コヌカグサ、ウド、タンポポ、エゾノキツネアザミ等、下つて志比內に至る間にはウシタキサウ、キツリフネ、ヤマブキショウマ、ヤナギラン、クルマバサウ、イラクサ、ヤマニンジン、イケマ、カウゾリナ、シモツケサウ、カハラハハコ、トモエサウ、ツルソバ、マヒヅルサウ、クガイサウ、オホイタドリ、キンミヅヒキ、ヤヘムグラ、ホザキシモツケ、ヤブマメ、ヤマアハ等を見る、右の內、マヒヅルサウ、オホヤマフスマ、ヤマアハ、ヤナギラン、クガイサウ、ハンゴンサウ、オホイタドリ等は、凡て高山性の植物で、奥羽地方では三千乃至四千尺、關東では四千乃至四千五百尺の高所でなければ容易に得られぬのに、上川地方では平地丘陵に普通であると聞いたら、何人も植物の水平分布の歷然たるに驚くであらう、林間にオホヒカゲテフ、ヒトスヂテフ、ヒヨウモンテフ、キアゲハ等が悠々として飛びかふを見る。

だら〳〵坂を降つて行けば、轟々たる響きと共に林間より白銀の絲を束ねて落すが如き瀑布を見る、云ふまでもなく旭川區に電力を供給する發電所である、重い足を勵まして志比内（一千呎）に着いたのは九時過ぎで、旭川より行程七里と稱する。

見渡せば谿を罩めて立ち昇る朝霧に所々の峯が頭を擡げて來る樣は、疲れたる眼に夢の如く映り行く、一休みの後出發したが、荷が重いのに眠けが頻りに催して來るのだから、一同の眼は皆朦朧として居る、水門口に達した頃は疲勞と空腹に耐えかねて、河岸の木蔭に陣取つて大休息を宣した、一同中食を濟まし、思ひ思ひに寢轉んで暫し夢路を辿つた（一二五〇呎）。

途上見受たものはカツラ、ノリノキ、タラノキ、カナムグラ、ニガナ、クロクモサウ、ミヤマタニタデ、オホバユキザサ等で、此邊一帶桂の老木が多い、水門口邊を採集してクジヤクシダ、フツキサウ、オホバショリマ、オホバニハトコ、ハシドヒ、ホザキカヘデ、ツタウルシ、コタニワタリ、ホホノキ、オニシモツケ、トドマツ、ホテイシダ、ミツデウラボシ、カブトゴケ（カラスアゲハ）（ミヤマトンボ）等を得た。

一睡の後水門口を發した、右に曲れば道路平坦砥の如く、曲折もない一直線道路で誠に變化に乏しい、大陸的道路とでも云ふのであらう、此邊は忠別河畔の沖積地で、地味は相應に肥えて居るから、作物も可なりの出來である、開墾の民は道路の兩側に本の假り小屋を作つて細い煙を擧げて居る。見れば桂や柳の大木は皆切り仆されて、太古の森林は化して人煙豐なる村里とならんとして居る、北海道は斯う云ふ農民の努力に依て開かれて行くかと思へば、苦心の程も思ひやられるが、又一方には文明の力がかゝる山間僻地にまで及んで、世を擧げて人類の蹂躙に委せずんば已まないかと思ふと、人間と云ふ動物は甚だ我儘勝手なるに驚かざるを得ない、道の極まる所は十線六十號で海拔千四百呎を算する。

路は急に左に折れて太古から未だ一度も斧の入つたことのない様な大森林に一行は吸ひこまれると、カツラ、ナラ、カヘデ、エゾウハミヅザクラ、アヅキナシ、ガンピ等の老木は鬱蒼と茂つて晝尚ほ暗く、上葉を渡る風は木の精がさゝやくかと怪まれる、下草となつて繁茂するものは、ハンゴンサウ、カハホリサウ、ヤマブキショウマ等で、皆偉大なる發育をなし、北海道特有の植物景觀を現はして居る、是は實に內地では見ることの出來ない壯觀で、北海道の山草羣落の偉觀は實に此にあるであらう。

丈に餘る叢の中を踏み分け河原の方に辿り行けば、俄然として亂石白泡を噛むの壯觀、大雪羣峯の雪を啜つた水は流れて忠別の急湍となり、底を穿つて流水は轟々たる不斷の聲を沈默の谷に鼓つのである、此邊は實に大雪山の南麓に當るので、忠別岳の横谷は旭岳火山彙とオプタテシケ連峯との境界線を劃するものである。

二本の丸木橋をよろめく足で渡つたのは午後の三時頃、濶葉樹林の枝を交へたる青葉のトンネルを潜つて行けば、風が持て來る青葉の香り、馥郁として心身共に爽快を覺え、げに深山ならでは味ふやうもなき心地ぞする、徑に可憐し氣に咲き誇るクロクモサウ、アヂサヰ、タウバナ、シホガマギク、タツナミサウ、アカバナ等を愛でながら、又丸木橋を渡り、柳、桂、山樺、椴松の深林中に微かに溪流の私語を聞き、すが〳〵しく梢を渡る風を聞いては山靈の奏づる琴線の音かと怪まれる、此邊一帶の深林中には小屋掛けをして下駄の細工をして居るが、荒細工の下駄は圓形に積み重ねられ、用材は柳、針桐等を使つてある。

御山の大將我一人羆如きは何者ぞ、我に鐵腕の有るありと云はんばかりの顏付で、さも豪らさうにゾロゾロガヤガヤして歩いて居るが、一寸此處に横合から羆でも御免なさいとも何とも云はずに顏を出したら、此納りがどうなることであらうと思ふと、後から意氣昂然と路も狹しと歩いて行く一行の

姿を見送つて、可笑しくも脆いものだと思ふた、閑話休題一行は河原に沿ふた砂道を行けば、カハラハハコの羣叢は道の邊に白妙の雪の飛び散るやうで今を盛りの滿開である。

行くこと二三町、右手に當りて峨々たる絶壁面を屏して聳立すること幾百尺、一行は此の偉大なる自然の彫刻に對して今更の如く驚愕の眼を見張つた、誰かから一休みしようと云ふ聲がかゝつたので、一同腰を降して思ふ存分此の壯觀に恍惚れた、流紋岩は高崖をなし、明瞭なる柱狀節理を現はして地文學上火山岩凝固の好適例となる、實物敎授活きた學問の眞價は即ち此所にあるのだ、岩壁には所々に岩燕が巢を構へて居るから、一同燕岩と命名することゝした（此行新に所々に命名する所多し、以下倣之）。凡そ忠別川上流に嶄然として峙つ岩壁の風景は實に之からで、山又溪と進むに從つて變幻極る所を知らない、此所は本の入口で云はゞ序幕と云ふ格で、奇岩亂立飛瀑懸垂の絶景は漸く之より始まるのである、右方はヤマハンノキの純林で林間紅花鮮かに見ゆるはタカネナデシコ、蝙蝠の飛ぶが如きものはカハホリサウである、（一六〇〇呎）此邊普通に見受くる植物はオホバヤナギ、バツコヤナギ、ドロヤナギ、メンマ、コクワ、アヂサヰ、ヤマモミヂ、ナガジラミ、ノウゴウイチゴ、トクサ、ウマノミツバ、コンロンサウ、トウバナ、トリカブト、ネコノメサウ、アカバナ、ヌスビトノアシ、コメススキ、イヌツゲ、マユミ、ムシカリ、ツルニンジン、エゾニウ、シヤク等で之に混つてマヒヅルサウ、サンカエフ、ホザキフタバラン、モミヂカラマツ、ギヤウジヤニンニク、タケシマラン、ダイモンジサウ、クロクモサウ、ミヤマタニタデ、タニギキヤウ、シホガマギク、オホバヨツバムグラ、イハハタザホ、ミツバタネツケバナ、エゾミヤマハタザホ等の高山植物を見るは山の深きを語るものである。

河を徒渉すれば爪先登りの小徑となり、熊笹生ひ繁れる中を鶯の優しい聲に勵まされ、森の中を山懷々々へと辿つて行く、所々に三抱へもあらうと思はるゝ程の大木が朽ちて自然のまゝに横はつてあ

る、其上には青々と生ひ揃ふて居る苔に交つて、穂咲一葉蘭は正に果實を結んで居る、此邊は海拔一七五〇呎、温泉まではまだ一里半餘りある、山は一面の山躑躅で大雪山に殘んの雪まだ深き頃ほい、人も通はぬ此山路で紅杜鵑血を滴らす滿開の光景はさぞかし見事なことであらう。

此邊は喬木帶林の中心で其景致雄大、深林は皆鬱蒼として白日を蔽ひ、蔭暗く谷として亦綠簾を懸けざるはなく、綠蘿は人の頭に垂れ、霧藻は煙の如く、怪鳥の啼く聲は木靈に響いて、其の幽邃さ何に例へん術もない、主要林木は桂、椴松、蝦夷松、エゾウハミヅザクラ、タケカンバ、サイハダカンバ、ヤマモミヂ等で、下草にはクルマムグラ、トウゲシバ、サラシナショウマ、ミヤマカタバミ、ヤマブキショウマを見る。林間碧玉を飾るものはツバメオモトの果實である。

採集怠らないが自然の風景の美しさに暫しは恍惚れて進み得ず、嶮崖に懸る瀑に三伏の暑さを忘れ、清冽玉を轉ばす清水を掬んでは凉味肺腑に徹る思ひをなし、尚も山又山の深山を指して進み行く。仰いで林間より空を見れば山と山との間に紺青の天柱がくつきり立つ、脚下は忠別川の奔湍岩に激して白雪を噴き、轟々殷々たる響きは椴松風に和して偉大なる自然の音樂を奏でるのである、嗚呼ラスキンあらば天才の琴線は如何に響くであらう。

深潭紺碧を湛ふる所、水鏡となつて岩頭を飾るものは、黄金花咲く、イハオトギリと、可憐云ふばかりない、クロクモサウ、フキユキノシタ、イハアカバナなどで、今を盛りと咲き亂れる其風情の美しさ、暫時は浮世の善惡も打ち忘れ採集に餘念もなかつた、河中一大岩石の突出して水之に激し、遠雷の轟く如きものに一行は轟岩と命名した、薪を並べて作つた橋（落合橋と命名）を渡れば溪は右となる、温泉までは最早や十數町、今日の行程も無事に終るところだ、身體は隨分疲れて居るけれども温泉と云ふ慰藉物と自然の美景とで少しの疲勞も感じない位だ、岩間に咽ぶ苔清水涓々滴つて天女の琴を奏づる樣、遙かに聞ゆる駒鳥の聲は白雲の間に朗かである、さても美景の多い此山路かな。

◎大雪山登山記　小泉

◎大雪山登山記　小泉

見上ぐれば白雲の去來する所、流紋岩の大絶壁嶄然數百丈、皆柱狀節理を示し、遙かに連亙して莊嚴又偉大よく筆舌の及ぶ所でない、山骨峭稜霄漢を摩し、危岩突兀白雲に沒し、直ちに頭上を壓し人をして悚然たらしむる、或ものは劍の如く或は地藏尊の岩上に踞するが如く（劍岩、地藏岩と命名）或は獅子の狂ふが如く（獅子岩）或は屏風を建てたるが如く（屏風岩）危岩亂立變幻極まる所を知らない、豪然として長嘯すれば山鳴り谷應へ、冷霧直ちに襲ひ來つて久しく立つことが出來ぬ、步一步益々神域靈境に入るのである、余は此溪谷を靈仙峽と名づける。

此連續幾千尺とも知らない流紋岩の大絶壁は、實に第三紀の噴出に係るもので、石狩川の上流地方には特に壯大無比なる高崖を以て發達するのである、之等の高崖は奇岩亂立截するに蝦夷松の常綠を以てし、更に加ふるに所々に淙々たる飛瀑を懸けて、此所に北海道屈指の絶景となるのである、此莊嚴なる風景に接すると山は皆靈氣を含み、樹は凡て神靈を宿す樣に思はれて、今更の如く自然造化の彫匠が神秘の鎚を振ふて造り上げたる光景に對して驚かざるを得ない、東坡をして之を見せしめたならば、必ず節を打つて赤壁を嘲り、山陽をして此所に遊はしめば、額に手して馬溪の未だ誇るべからざるを悟るであらう、惜い哉筆を載する者未だ親しく茲に遊ばず、空しく此絶勝を獨り樵夫の蹂躙するに任せ、寒月の照去に委するとは、低徊願望覺えず時刻の移るのを忘れた。

温泉はもう直ぐだと云ふ、疲れた足を踏みしめて坂を下りると向ふに湯氣の立ち昇るのが見えるではないか、新しく葺き代へられた屋根は、青葉の綠りを背景とする溪間にくつきりと鮮かに浮いて居る、足の痛いのも忘れて一同元氣を鼓舞して進めば、話聲も自然と高くなる、橋を渡つて直ぐ温泉に着いて腰を下した其時の愉快と安心さはなかつた、一行の顏を見れば何れもニコ〳〵ものだ、苦は樂の種と云ふ諺は此邊を云ふたものであらう、一同直ぐ湯に入つて旅の疲れを治した時の氣持も亦格別であつた、何時味つて見ても新なる考をするのは、旅路に疲れて温泉に宿つた時の心持ちである。

庭前に出て山のたたずまいを見れば、温泉は丁度桶の如く深い谿の底にあるので、左右の岩壁は高く聳えて突兀天を摩し、夕霧は崖腹に横つて靈氣人を襲ひ、俯して下を眺むれば白水碎くる所珠玉を綴り、碧潭湛ふる所藍青を凝らすと云ふ有様、前面銀糸亂れ落る如く見ゆるは糸引きの瀧と名けられ、後方に嶄然として空を劈いて峙つは蠟燭岩、此他神威岩、獅子岩、烏帽子岩、西行法師岩、皆其形に依て名づけられたものとの話、前面に聳ゆるは丹尺岩と稱し、木材を並べて立てた様である。

抑も此温泉は明治三十年に松山爲藏氏（現温泉主人）に依て發見せられ、三十三年に湯を開き、幾多の困難を排して今日に至つたさうで、泉質は透明なれど酸化鐵を多量に含む爲めに多少赤色に濁つて居る、元より山中の一軒屋、白樺や蝦夷松の林に圍まれた山懐の温泉、何の設備もある筈はないが、然し其所は所謂深山大澤の靈氣を味はふには屈強な所で、俗膓腐敗に傾いた人があるならば宜しく此山奥に來つて洗ひ去るべし。

手拭提げて湯に入る人は入り代り立ち代り引きも切らぬ有様、此狹き松山温泉は今を盛りの繁昌である、浴槽は四疊位の木槽で、温泉的氣分には乏しいけれど、靜乎として頸まで浸りながら、一面に漲り流れ出す湯瀧の音を耳にし、次第〳〵に淡く消え行く湯氣が明け放しの窓から外に逃げ行くのを飽かず眺めた、よい氣持ちである、ふと湯氣の絶え間より糸引きの瀧の白糸は手に取る様に見え、實に何とも云ふに云はれぬ感じを得た。

風呂から揚つて寢巻に着換へ、そして一同爐を圍んで十三人車座となつて暖を取り、一日の愉快と明日の樂みを談じて居る、中には得意の快辯を振つて山に登らぬうちから頻りに漫錄の種子を蒔いて居る勇士も御座る、白雲は軒を廻つて去來する、實に我が一行は海拔二千呎雲の中に談笑して居るのだ、やがて夕飯も温い汁で舌皷を打ちて濟ました、ふと外を見ると雨が降つて居る、いやな氣がした、一日採集せる植物を整理し、腊葉となし、其夜は雨を聞きながら、明日の天氣を氣遣つて眠りに就い

たが、長途の疲れで朝まで夢圓らかに眠り通した。

第二日目　松山温泉より宿り岩まで

明くれば八月三日、轟々たる渓流の音に眼を醒されて、やをら起き上り、窓押し開けば、夜來の雨も晴れたる様子、心勇んで戸外に出づれば、空さりげなく晴れ渡り、紺青の天空が谿間の底からくつきり鮮かに眺められる、六根清淨御山は晴天と、勇んで仕度を調へ、今日こそは思ふ存分採集して龍宮危巣をも探らばやと松山氏を案内と頼み、米、味噌、鑵詰等を用意なし、一同莞爾として松山温泉を出發したのは、朝霧の寄せ來る八時頃であつた。

今迄の道路は誠に平々坦々で、吾々には御茶の子さいさいであつたが、之れからがほんとの力の入れ場所で危險極まる所が數ケ所あつて、一度足を失すれば萬に一も生還なしと主人は話した、行く行く採集すれば、フキユキノシタ、クロクモサウ、タウバナ、ツバメオモト、フヂスミレ、イハアカバナ等、樹間懸崖に笑みを漏らして居る、一行の面々思ひ〳〵の仕度で忠別川の一支流なるアイシポプの渓流を渡れば、温泉の流出口は程遠からぬと見えて、樋が通つて湯氣の立ち昇るのが朝霧の間によく見える、今日は此のアイシポプと云ふ渓流を草本帶五千呎の邊まで遡るのである、附近を採集してタケシマラン、スギナ、ミツバタネツケバナ、カナムグラ、スベメウリ、ツルニンジン、キツリフネ、ミヅナラ、オホカメノキ、イタヤ、ノリノキ、ホザキカヘデ、オヒヨウニレ等を得た、渓川の流れが淙々として耳を洗ふも心地よきに、遙か渓間を隔てゝ雲深き中に北海の名鳥、ミヤマカケスが頻りに鳴いて一同の行を盛にする様に聞える。

温泉の出口は宿から四五町先にあつて岩の間から溢れて出る、出て來る時は無色透明であるが温熱の放散と共に種々の鑛物を沈澱するが、就中酸化鐵は最も多量を占むる爲め、湧出口附近には此の鐵

の沈澱に依て木の葉苔等の化石が屢々發見される。

道の程十町も來たかと覺しき頃轟々殷々の響きが吹き送る霧につれて聞え始めると、やがて、噴霧濛々として半空に水簾を懸けたるが如き羽衣の瀧は、青葉の繁みを通して見え始めた、聞きしに勝る此北海第一と稱せらるゝ大瀑布の壯麗無比なる形狀は、たゞ一行をして感嘆の聲を放たしむるのみである。

瀧は大雪山より噴出せる流紋岩の大絶壁に懸つたもので、三段より成つて居る。見上ぐれば峯頭岩石磊々落々たる所、皆年古りたる蝦夷松を載せ、白雲其間を纏うて見え隱れする所は誠に墨畫の樣である。其の間一大岩峯の突出する左右より流れ來つた溪流は、直ちに落下して、山姫のヴェールを垂れ下げた樣、左の大なるを男瀧と云ひ、右の小なる方を女瀧と稱する、それが直ぐ落ち會ふて第二段の水晶簾を垂れるが、やゝ、左に流れて直ぐに第三の大飛瀑となつて、此所に白妙の羽衣を漂すと云ふ、羽衣の瀧一流の美觀を呈するのだ。

遠く見れば天女が天下る時、白妙の羽衣を翩翻として軟風に飜へすが如く、近く眺むれば、瀑水麗々として柳枝の雪を帶びて舞ふが如くである。霰と亂れ雪と散り煙となつて走り行く。時に半空紅虹を吐き、瀧壺に激しては白浪をしき立て、岩に碎けては花と咲く。誰かよく人里遠い此山奥に、壯美、艶麗、壯嚴、華麗あらゆる形容詞を用ゐても其の眞相を現すことの出來ない一大瀑布の岩頭に懸るとは想像し得るであらうか。一同はたゞ此の瀧を見たゞけで、既に登山の價値は十分にあると賞贊したのである。

此瀧は全體として大觀しては日光華嚴の瀑の如く、直下七十五丈、瀑壺目がけて一瀉千里の勢で落下する壯大勇猛の觀に乏しいが、然し會ては分れ分れては會ひ、數段になつて落るあたり中々以て變化に富んで決して單調ではない。之が即ち彼に優る所で、此瀑の特徵は飽くまでも壯美艶麗にあるか

◎大雪山登山記　小泉

と思ふ。高さは日光の華嚴瀑と伯仲の間にあつて、雌瀧から測れば（バロメーターにて實測せしものなれど、氣壓の高低により時に多少の差あるべけれど）六百六十尺、男瀧から測れば七百尺以上に達する。

羽衣の瀧の絶景は、見れば見る程去り難く、あかぬ眺めにくれつゝも、一行は道を左に曲る。之よりは兼ねて登山中第一の難所と聞き及びし、親不知、子不知の難所を越えねばならぬ。吾等の一行は草鞋の紐を締め直し、足に力を籠めて一歩は一歩と高く、此大絶壁を登り初めた。一歩登れば一呎登ると云ふ急勾配、傾斜は五六十度は普通で所々に直角に近い傾斜が間々あるので、一行中之を眺めて心膽を寒からしめた人は少なくなからうと思ふ。

仰げば、天にも近い岩峯は雲表から吾等の一行を眺めて其健氣さを笑ふ様だ。誰か負傷でもしなければよいがと思ふと急に不安の心を起させる。前途程遠いのに此大嶂壁は高さ一千呎、傾斜五、六十度より八九十度と聞いたなら誰か悚然としないものがあらうか。登り登つて羽衣の夫婦瀧を右手に眺めながら、一歩は一歩と高く、呼吸も絶え々々に登り行けば、今までの晴天遽かに激變して險惡となり、谷は白霧を濛々と立ち罩めれば、背中の汗は足の滑る度毎に膽を冷して凍る様な思ひをさせる。

折から吹き來る天風に白雲が眼前を疾風の如くに飛んで行くと、今にも吹き飛ばさるゝ心地して只々ひたとばかり岩石に身を伏すより外になかつた。喘ぎ喘ぎ、木の根にしがみ附き岩角を頼り、呼吸をはづませて登り行けば、靈風が肌を掠めて、岩角を手掛りに垂直に聳つ嶄岩を辛つとの思ひで縋つては攀ぢ登る一行を、底をも知れぬ千仞の溪谷に振り飛ばさうとする。時々危險な所は鐵鎖に縋り、絲繩を頼りとして危き道を辿りつゝひた登りに登ると、折々は後の人の頭や肩を蹴つてビックリさせる所は、丁度猿の一群が深山で岩壁を攀ぢ登る様だ。いや其危さ加減は到底之と比較にはならない。飛行船からでも見て居つたならば、さぞかし慘憺な光景であらう。

時には頼りと思ふ岩角が剝落して、あはやと胸を躍らせるなどは屢々あつた。若しも此處で摑んだ岩角がごろりと剝げでもしたならば、白雲迷ふ無限の谿谷下を目がけて眞倒さま、生還は再び期す可らずだ。そして剝げた岩石は下の岩角に當つて彈き飛ばされて、落ち行くのだから下から登つて來る人の危險は言語に絶する。

二千七百呎の處まで登ると岩壁は殆んど直角をなして一行の前面を遮つた、八、九十度の急勾配である。實に危險なること話の外だが一行は幸にも無難に此岩をも通過して、ほつと一息ついた。一行は此岩壁を親子不知の岩と命名した。

此所より少しく登ると白樺の木の下に二坪ばかりの平地がある。一行は此所ぞとばかりよろめく足を十分に休めた。あたりを見廻せばシラカンバ、ダケカンバ、エゾマツ、マタタビ、ミヅキ、オヒヨウニレ、ナナカマド、ミヤマハンノキ、イタヤ等の大木は混交林をなし、岩が根こごしき所に蟠屈して盤根錯節をなし、下を瞰下せば全く一面の雲の海で、底が知れない。右は斷崖の下遙かに蝦夷松の深林を望み、左の崖下は是れ千仞の谿谷、一歩の外實に身骨粉碎の境である、岩角にはイハツツジ、ホツツジ、コイチヤクサウ、ミヤマハンノキ、ミミカハホリ等が生ひまつはつて居る。

一行は白霧の寄せては返し、返しては寄せる其中を再び勇氣を皷舞して登り始めた、喘ぎ々々胸を突く程の險しさにも僻易せず、尚も匍匐ひながら岩角より岩角へと縋つて漸く頂に達した、バロメーターは三千呎を指して居る。時は正さに九時半、一行は漸く蘇生の思ひをなし、胸を撫で下して御互に無事を祝ひ合つた、そして一同の顏に漸く安心したわいと云ふ樣な色のほの見ゆるのは決して無理でないと云ふことは、一度此の恐るべき大絶壁を昇降した人の直ちに首肯する所であらう。

一同は大休息をなし、此峯を羽衣の瀧に因んで天人ケ峯と命名することゝした。海拔正に三千呎直立一千呎に達する。

◎大雪山登山記　小泉

◎大雪山登山記　小泉

吾等は一千呎を無事に登つたのに力を得て元氣充溢し、色々の滑稽を演ずる人もある。附近を採集すれば、ミネカヘデ、アカミノイヌツゲ、タウゲシバ、ヒモカヅラ、ツルリンダウ、ナナカマド、サイハダカンバ、ツルツゲ等を得べく、エゾマツの老木には、サルヲガセ、ミヤマサルヲガセの長く樹上より垂下し、朝霧罩めて木の間を走る山風に、フハリ〳〵と搖らるゝ有樣は實にも深山の景色と肯かれる。

一行はツルリンダウの紅花眞盛りの美しさに眼を樂ましめ、エゾマツの林を越ゆれば不圖美しい湖畔に着いた。見渡せば綠り滴る樣なエゾマツの深林に圍まれた眞只中に七八町四方位の草原を眺められる。其中には二つの沼を湛へて居るので、たをやかなる水面は深く碧玉の色を凝らして、天に映じ空行く雲を宿しては別れ、別れては又宿す平和の姿は又なく一行を喜ばせた。其形は丁度瓢の樣であるから一行はひさご沼と命名して置いた、湖畔を飾つて五色に彩るものは、モウセンゴケ、ミヅゴケホソトンボ、サハギキャウ、ウメバチサウ、サギスゲ、ギバウシ、ミカヅキグサ、ワセワタスゲ等で、原野に普通なるは涉草科の數種で、草間を點檢して珍品ホロムイサウを得たのは實に嬉しかつた、外にコトンボサウは尺大に伸びて唇に笑みを含み、エゾマツの矮小なるものは原頭に點々して見える。

一行は此幽寂な瓢沼の紅、白、紫、黃の可憐なる草花を以て彩らるゝ汀線に吾等一行の姿を寫した時、此物靜かな景色に見惚れずには居られなかつた、天晴れ氣澄むの日、旭岳は池心に其影を投じて沼は小波をも寄せぬであらう、あはれ優雅なる山水の風景は飽くまでも平和に、さうして夢の如く淡い。長閑なる大雪山中の此景色よ、何時までも沈默を續けてくれ……。

草地の下は年々歲々枯死、堆積する水蘚や、禾本、沙草科の數種によりて成る泥炭地で、エゾマツ等の生育に適しない故に、此地勢の變らぬ間は高山濕原のフロラを保つのである。湖中にヒルムシロを見る、此湖水は湖沼學上純然たる凹地湖である。(湖水は海拔三〇〇〇呎)。

湖水の水は溢れて硅藻ヶ谷となり、東北に流れて、アイシボプに注ぐのである。此溪の水に浸蝕されて凹んだ所は、白と赤色又は褐色の粘土様物質から成つて甚だ滑り易いが、之は皆水生單細胞植物の一種硅藻類の死殻が無數に堆積して成つたものである。

蝦夷松と根曲り竹の繁つて居る間を下ること五六町で、又溪流に出會ふ、此處は丁度羽衣の瀧の水上で、此水は西に流れ、千仞の絶壁を落下して羽衣の男瀧となるのである。大雪羣峯の雪を啜つた水は、流石に足が痺れる程冷いが、長く渡渉して居るうちに慣れて來て左程困難でなくなる。溪中に在て左顧右盼、採集頗る勤めたが、一行の先立が餘り早くて心急く爲め、足を石に打ちつけては時々飛び上る程痛い思ひをする、草木は登ると共に一新を加へ、モミヂカラマツ、ダケカンバ、ミネカヘデ、サンカエフ、ダイモンジサウ、ネマガリタケ、カラフトブシ、ナナカマド、トリカブト、フキ、カハホリサウ、カブトゴケ等が嬉々として溪畔に我が一行を迎へるのである。

昨夜の雨に水量を增してアイシボプの激流は、飛び石を隱くし霧の如く水煙を立てゝ我が一行を押し流さんとする、一行は膝まで水に浸りながら案內者につれて澤を登り、時に山草生ひ茂つて狹ひ路の中を露に濡れながら進み、時に岩角を攀ぢ登つては心膽を寒からしめ、時には深潭藍を湛ふるあたり、注意に注意して飛び石に足をかけたと思ふうちに、靑苔滑かなれば遂ひ足を滑らし、淵を目がけてざんぶとばかり飛び込むので、蛙の行水か河童の河流れの樣に周章てふためいて上らうとしては、岩角を摑むと命と頼んだ岩がつるりと滑つて手が空中に悶へる一刹那、又もや有り難くもない水の中にザブン……と來る。エヽシマッタと思つて咄嗟の間に水際に差し掛つて居る草をシッカリ摑むとプッツリ切れて又もヨロ〳〵、あせればあせる程マゴ〳〵するので癪にさはること夥だしい、冷たさは骨に徹り、寒さは身の毛を振立てゝ慄然とする、寒いのを我慢し腰から下は濕れ鼠の樣になつて石を

◎大雪山登山記　小泉

飛び越え笹につかまつて溪流を上る。

高山に登る人は常に斯う云ふ難儀をし、千辛萬苦を嘗めて研究もし採集もするのであるから、採集した生品や標本に對しては、唯山から採つて來たのだと云ふ單純な考でなく、同情の眼を以て見て貰ひたいものである、水に漬る位はまだよいとして、時には六千尺も高い所で一晩ハヒマツの下で雨に打たれ、又は暴風砂を吹き上げて、身體は千仞の谷底に吹き飛ばされる思ひをなし、或は炎熱燒くが如き火口を過ぎつて採集し、或は山腹に日の暮れて、笹の上葉を渡る風も熊かと怪まれ、或は荷ふ標本を入れる新聞紙や胴籃や食料品や米の重さで肩は拔ける樣な思ひをする、實際死力を盡して奮闘することは屢々ある、大平樂を構へて机上に空論を戰はすとは日を同うして談ずる事が出來ないが、然し其處に眞の愉快と他人の得ることの出來ない或物を得るのである。

却說一行は略一里を遡つて一大岩石の側に休息した、一行は此岩に壽岩の名を命じた、湯から此所までは長い時間でもないが、非常なる險難を冒したので空腹を感じ、中食した人が多かつた、時は正に十一時半頃（三二〇〇呎）。

一行は壽岩を出發した、又々飛び石を跳ねて川渡りの藝當をやらねばならぬ、石に滑つたり、岩に轉げたりして上り行くのである、奔湍激しては白雪となり、合しては藍を湛ふる淵となる、附近は皆鬱蒼として天を刺すトドマツ、エゾマツの大密林晝尙ほ暗く、陰森の氣は人を襲ふて來る。

岩を跳び、淵を涉り、上ること略十四五町で轟々たる響きは遠雷の如き瀑聲を耳にする、道を左に取つて丈に餘る熊笹の間を通つて瀧の頂上に出た、此瀧は高さ二三十尺で、二見ケ瀧と名付けられる。海拔三二五〇呎、瀧を超ゆるあたりは一帶の岩山と、岩石にて一面に地衣類、蘚苔類、石松類で黃白を彩つて、隱花植物採集地としては屈強の場所である、其主なるものはサルヲガセ、ハナゴケ、ツメゴケ、ヒロツメゴケ、カブトゴケ、ミヤマスギゴケ、シツポゴケ、トウゲシバ、ヒカゲノカツラ、ア

スヒカヅラ等で皆岩石一面に敷き詰めて美觀云ふ計りなく、之に交つてゴゼンタチバナ、イハツツジ、エゾマツ、クロウスゴ、ミヤマカタバミ、オホバミゾホヅキ等は、それ〴〵盛りの花を競ふて居る、一行はクロウスゴの黑紫色に熟して居る玉の如き果實を忙はしく採つて食べ始めた、咽喉が渴して居る所に甘酸其宜しきを得たる汁が咽喉を下つて行くから堪らない、一同舌皷を鳴らして其美味を賞した。

登ること四五町で谿川は二つに分れて又一つになる所には所々に大なる自然の蕗畑があつて、エゾブキが大なる葉を傘の如くに擴げて單純羣落を作つて居る、丈の高いのは八九尺、莖の直徑二三寸、葉の大なるは驚く勿れ直徑實に四五尺に達する、何と偉大なるものではないか、試みに一本ナイフで切つて翳せば、優に雨傘の代用となる、之では蕗の覇王と云はれて居る秋田蕗などは到底足下にもつかぬであらう。

尙も密林の中溪流を遡り、根曲り竹の中を掻きわけ行けば、草葉に宿す露の爲めに又々全身ビショ濡れになり、或は蘚苔の香の鼻を打つ老木の一本橋を跼蹐き渡り、或は苔の一面に蒸して居る石塊の堆積して居る處を辿りつゝ朽ち葉の上を踏み分けて、珍品小葉の一葉蘭を採集した、此外に地衣類蘚苔類は、岩石に附着するものは非常に多く採集した。

こんもりとしたエゾマツの林を後に送れば流れは稍々緩かに、兩岸の景觀は一變して來た、斷崖峭然、直立數百尺、長松枯柏崖畔に針立し、愴絕の氣は心膽を寒からしむ、進むこと百歩にして愈々奇、益々高嶮に、脚下の岩石猥藉横臥するあり、直立するあり、水勢轟々益々猛激を加ふ、吾等は老松天嶺を頭上に弄し谿流琴瑟を脚底に彈ずる所、石を踏み砂を蹴て遡れば、唯見る前面斷崖數十丈、危岩人頭を壓して上より落下せんず勢ひ、一歩を踏み込まんか、將に身骨粉碎せずんば已まざる光景、身の毛も捩立つに一同氣を呑まれ、頭を上ぐれば霹靂天地を震動して直下十二丈、聲萬岳に震ひ響き、千里を轟かし瀉ぐ音、百川の空中より落つるが如く、激することと萬琴の齊しく發するが如くと支那流に

◎大雪山登山記　小泉

駄法螺をふけばちと大げさであるが、實際雪となり花と飛び煙と散り、一碧染むるが如き瀑壺中に落下する有様は實に猛烈を極むる、名にし負ふ幣（ヌサ）の瀑とは是である、此瀑の外觀は華嚴瀑型で一瀉千里の勢ひで猛烈に落下することもよく似て居る、故に羽衣の瀧の如く變化に富んで優美壯麗の觀に乏しいのは止むを得ぬ。

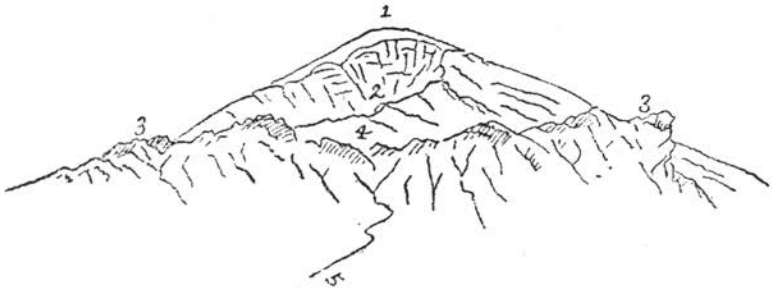
幣の瀑なる名稱は、其の形が恰も幣を立てたるが如きより來つたもので、全形一大氷柱を建てたるが如く、水勢猛激に岩角を噛んで百斗の虹を吐く景色は、周圍の黑みがかつた針葉樹の密林と相照應して、本山中壯烈無比と稱して宜しからう、吾等は夏の何處にあるをさへ心に浮べなかつた。

瀑下に於てバロメーターは三五〇〇呎を指す、二見ヶ瀧からは略二里、温泉から略三里半位來たことになる、此邊の地體は安山岩から構成されて居るから、瀑勢如何に猛烈であつても深く瀑壺を堀ることゝ、大岩石を流下し去ることは出來ぬ、そが爲めに瀑壺も淺く、磊々落々たる岩石は瀑下に積み重なつて山をなして居る。

此瀑の右側には又一小瀑布の美しいのが安山岩の小崖に懸つて居るが、一方が餘り猛烈なる爲めに勢力を奪はれて一向引き立たぬが、又捨て難い趣きがある、藤瀑と命名された。

幣の瀑壺のあたり岩面に咲き誇れるものはダイモンジサウ、クロクモサウ、ヅダヤクシ等の虎耳草科植物を始め、ヤマブキショウマ、アキノキリンサウ等がある、谿畔にはミヤマハンセウツルの纏絡するのを見た、滿開の節はどんなにか美しいことであらう、又瀑邊にて、イハヒゲ、ガンカウランを採集したのは一寸珍らしかつたが、之は無論流下されて來たものに違ひない。

尚も丈に餘る根曲り竹を掻き分けて瀑の右手の急坂を攀ぢ登つて瀑の頂上に出づれば、一五〇呎を加へて三六五〇呎となる、昨年七月下旬中學生十數名を引率して登られし人々が、丁度今僕等の居る此點から生憎く道を右に取つてずん〳〵登つた爲めに、遂ひ方角を失つて遺憾ながら目的を達する事



旭岳火山（大雪山彙中の一峯）の西南麓なる藤根小屋（凡四千尺）より旭岳の地獄谷爆裂火口を見る

1 旭岳頂上（二八五二米）
2 火口爆裂谷獄地
3 旭岳熔岩流末端
4 後見岩
5 登山道

が出來なかつたとの話、さうして此人々の曰く、吾等は未だ嘗て古來何人も登つたことのない峯に登つたのだ、お前達は行きたくとも行かれないだらうとは、ちと痩せ我慢でなからうか。

一行は之より又々溪流に下りて飛び石を渡つて、ひた上りに上ると、水晶の様に澄んだ清冽の谿水は岩に激して奔湍となり、飛沫を四散して居る、行けども、行けども密樹茂林は盡くる所を知らない、大雪山の森林帶は一體何處まで續いて居るだらう、案内者は先へ先へと急いで後を顧ぬ、自分は採集に忙がしいので時々カーブの所で見失ふ、唯一人で淋しさも淋しいがさりとて採集せずに行くことは到底出來ぬ、一行の急ぐのを自分一人の爲めに頗る迷惑をかけたことは度々あつたことゝ思ふ、一行の人々には此段深く謝する次第である。

尚も澤を上り上つて四千呎の邊に來ると、草木も俄かに一變してエゾマツ、イタヤ、シラカンバ、タケカンバ、オホカメノキ、ヤマヂコヤナギ等漸く多く、周圍の景觀は何となく高地性を現はして來た、山は急になだらかな勾配となつて殆んど平地の如く、今迄の急

◎大雪山登山記　小泉

湍も此處では小さき流れとなり、百花咲き匂ふ叢の中をうねりうねつて至極穩かに若草の影を映して流れて居る、行くこと十數町で着いた所は藤根の宿舍で、海拔四〇〇〇呎に達する。

此所はアイシポプの上流、昔乍らの俤が無くとも秀麗なる大雪山の姿と、アイシポプの小波寄する瀬の音のみは今も尙ほ人間を知らなかつた昔の樣に、此溪を圍み、此溪に響いて居る、其の瀬の音を夢か現の思ひして耳にしながら、猶も夢路を辿つた一行は、水面を照す柔かい日光の光線を浴びながら山懷へと入り行く。

あはれ清き雪の大雪山よ、其の雪や氷が解けて、純美類もなきアイシポプのほとり、イタヤ楓さては典雅な白樺が風もなきに其の青葉をそよがせて、柳絮がひら〳〵と舞ふては流れに漂ふて行く。秋はアイシポプの溪間に深くして、木々に錦繡を織り、峯に牡鹿の鳴く頃は、瑠璃色に湛えたる水の面に燃へ立つばかりの汀の木影と、鮮明なる旭岳の倒影が寫るであらう。神秘なる此谷川よ、ゴエフイチゴの花が散つて輕い波紋を描く、實にや海拔四千呎、藤根宿舍の夕は、鶯啼きて春の宵よりも長閑である、附近を採集して、フタバラン、コイチエフラン、ゴエフイチゴ、ツマトリサウ、コイチヤクサウ、ミヤマタニタデ、ハクサンチドリ、アキノキリンサウ、イハアカバナ、イハオトギリ、オホバヨツバムグラ、マンネングサ、タケシマラン、カラマツサウ等を得た、あまり景色の美はしさにそゝのかされて、

鶯の啼く音につれて谿川は散る花浮べ日は長閑なり

深山路に鹿の鳴く音や如何ならん藤根の宿に秋風の頃

吾等が一行は此のちよろ〳〵と草葉の蔭に咽ぶが如き可憐しき流れを夢心地して遡ること十町ばかりで、又もや溪川は細流となつた、見れば今迄のなだらかな勾配の盡きる所、峨然として聳ゆる一大障壁又々我一行を食ひ止めた、一同は再び此膽を冷やす絶壁を越えて玉なす汗を絞らねばならぬ。

溪川に沿ふて登れば一の濕地に出た、前方でワイ〳〵騒いで居るから何事ならんと急いで登れば、一同熊公が荒れ廻つた跡があると云ふ、成る程一寸廣い濕地が一面に羆の足跡だらけで草が恐ろしく倒れて居る、多人數で登山すれば熊などは念頭に置く必要がないとは云ひながら、只今眼のあたり御本尊の御働らき遊ばした跡を拝見しては、直ぐにあの恐い唸り聲をする大兵肥滿の御姿を思ひ浮べずには居られなかつたので、一行は少からず氣持を惡るくさせられた、此所で禾本科、沙草科の植物に交つて蘭科の稀品シロウマチドリを得たのは嬉しかつた。

此所よりは今迄の谿川は右に離れて道は一直線に前に向ふので、愈々之よりは殆んど垂直屹立する巨岩累々たる岩壁を攀ぢ登ることゝなる、巨岩の角に片手を掛け、片手に採集篭を携へ、一歩高く踏まんとすれば忽ち岩角が滑つて其片手は空中に悶へる、はつと思つて木に縋れば、足を乘せた岩は俄かに動き始めて今にも崩れ落ちんばかり、心をはら〳〵させること二度三度、名にし負ふ胸突八町の難所である、登りつゝ鍬蔭を見れば蘭科の珍品ミヤマチドリを得たるに勇氣百倍し、又も岩を傳ひて登り始めた、前を見上ぐればまだ〳〵巨岩磊々落々として前途に横つて居る、實にや嶮秀獨歩と崇められて居る北海道第一の高峯大雪山の登山は決して容易なるものではない。

登り詰めた所は、一面の笹鍬で、路の程二三町も登つたと思ふ頃、一大岩石の下に達する。一同休憩して思ひ〳〵に握り飯を頬張つた、岩石は上面平らかで四疊半程の面積を有し、休息するには持て來いと云ふ岩である、岩石面には一パイに蘚苔、地衣の類が附着し、それに交つてコケモモ、ガンカウランや禾本科のものが生へて居る。

岩の上に腰打ち掛けて四方の景色を眺むれば、今迄の天を刺す如き密林は丈け漸く低く、鬱蒼として晝尚ほ暗いと云ふ樣な森林の影を認めざるは、之れ全く此邊は本山の灌木帶の入口（四二〇〇呎）であると云ふことが了解される、一行は此岩を休憩岩と命名した。

是よりは笹の一面に生へて居る緩漫なる傾斜であるが、四五町行くと又々嶮峻なる坂路にかゝる、登りつゝ採集すれば、エゾノダケカンバ、ミヤマハンノキ、ベニナハクサン、シヤクナゲ、ミヤマナナカマド、ウコンウツギ、ミネカヘデ、ハヒマツ等は矮小なる灌木林をなし、下草にはムラサキシヨウジヨウバカマ、タニギキヤウ、タケシマラン、ウサギシダ、アヲスゲ、ホソスゲ等を見る。



（尺百四千四約）岩憩休るな腹中の岳旭南西の彙山雪大
（一分萬十そ凡）る見を峯連山高央中海北に南東りよ

の山同右 6 岳雲化 5　岳別忠 3 野羅の岳旭 2（米十六百七千）原ケ嶺高 1
10（米七十六百九千）山シウラムト 9（米二十六百八千）山黄硫奥 8 泉温山松 7 雪殘狀饅
（米十二百九千）（山瑛美）12（米十八百九千）ケシテタブオ 11（米七十五百八千）岳黄硫中
ノラフ上 16 泉温イエビ 15（米二十三百三千）山黄硫 14（米二十百八千）烟噴同岳勝十 13
（米三十三百九千）岳ノラフ中 18 泉温ノラフ上 17（米五十三百九千）岳

登り登つて四八〇〇呎の所に至れば、灌木林は盡きて眺望頗る濶達となり、此所に待ち焦れたる旭岳の草本帶五色の雲の漂ふと云ふ御花畑の入口となる、向ふに聳ゆるは後見岩で、温泉から此所まで行程五里に達するであらう。

石南の紅花を賞し、ウコンウツギの黄花を愛でつゝ登れば、灌木帶は此處に終りを告げて草本帶と

なる。後見岩の崖下に辛うじて辿り着いた一行は最後の絶壁を登らねばならぬ、崖下より見上ぐれば崖上は緩漫なる草原となり、黄白、紫紅、濃艶類もなき高山植物は、濁り果てたる下界は我れ知らぬと云ふ様で、雲の中に咲き誇つて居るのが手に取る如くに見える、嗚呼何たる絶景ぞ、待ち焦れたる旭岳の草本帯御花畑の入口は此處ぞとばかり、岩角こゃしき岩壁に兩の手掛けて我れ遲れじと躍り越えて後見岩の側面に出づれば、下は一面の御花畑で、高嶺に匂ふ草花は何れ劣らず咲き揃ひ、何から手を下してよいか、足を地に踏むのもいたはしくて堪らなかつた、黄金色に映ゆるは、キングルマ（ウサギギク）とアキノキリンサウで、之に混つてミヤマリンダウ、タカネトンボ、ツガザクラ、ガンカウラン、コケモモ、マルバシモツケ、エゾツツジ、マヒヅルサウ等で何れ劣らず咲き亂れて居る、岩壁には、紫紅濶らんばかりのエゾツツジに混つて、シロバナエゾツツジが咲き誇つて居る、其間にエゾツガザクラの紅花が提灯の様に垂れ下つて居る景色は、一同をして唯々感嘆の聲を漏らさせるばかりであつた。

我々は昨日今日まで此靈峯を神々しいと打ち仰いだ身であるが、今と云ふ今に至つて全く他から打ち仰がる身となつたのだ、岩に腰打ち掛けて下界を見下せば、混濁の下界は全く雲に閉されて、雲の海と變化して居る、渺茫たる雲の太洋の中から神々しく聳え立つ靈峯の嶺近くに白雲を蹴つて登り詰めたる一行は、暫時我を忘れて萬歳を絶叫し、跳躍して互に喜び合つたのである。

左顧右盼、採集頗る多忙を極め、珍品簇々たる中にエゾツツジの咲き匂ふ山の傾斜をくるりと廻れば、此處は一大草原で又もや花毛氈を敷き詰めたるが如き御花畑は、紅白紫紅色を凝らしてとりどりに、霞の奥まで咲き續く、蜂は飛びかひ蝶は舞ふ、景色妙なる其のさまに、浮世の善惡も打ち忘れ、心は花に醉ふ如く、漂ひ來る白雲に誘はれつゝも翼生へ、羽化登仙の思ひに耽けりしことも理りなる哉。

◎大雪山登山記　小泉

何れ劣らぬそが中に、ヨツバシホガマの可愛らしい唇の様な瓣の上には、尚ほ珠玉を宿して互に咀やいて居るやうである、エゾコザクラは濕地に簇々と咲き揃ひ、一行を迎へて微笑んで居る、滿目の光景炯爛として去るに忍びざらしめる。

嗚呼吾等は海拔五千呎、雪上の極樂園に彷徨うて、詩を語り、人生に思ひを廻らせば、露一點の汚れもなき此の清淨無垢なる高嶺に匂ふ草花に對して、罪の深い人の一生を情なく思ふ。やはり人間と云ふ動物には、宗敎も哲學も必要なものであらう。

原頭を飾る草花は此他にミヤマリンダウ、チシマニンジン、ハクサンバウフウ、ミツバワウレン、ミヤマキンバイ、チングルマ、コケモモ、イソツツジ、コメバツガザクラ、ツガザクラ、アヲノツガザクラ、エゾツガザクラ、ムラサキシヨウジヨウバカマ、アキノキリンサウ、ウサギギク、マルバシモツケ、ミヤマオトギリ、ミヤマヌカボ、タウチサウ、オホバシヨリマ、コバノイスランドゴケ、ラツバゴケ等で、此純美比類もなき高山草原の背景をなすものは、ミヤマハンノキ、エゾノタケカンバ、チシマザクラ、ハヒマツ、ミヤマナナカマド、等より形成せる濃木森である。

遠く浮世を隔てし白妙の高嶺に香ふ花園は、低徊顧望人をして去るに忍びざらしめる、一行は先を急ぎ足を早めて行く程に、太陽は西山に傾き、日は刻一刻に暮れなんとして、殘光を雲間から斜めに投げてゐる、下界を見れば忠別川上流の谿間を罩めし雲霧は、烈風に吹き上げられるよと見る間に大雪山の全部を蔽ひ隱くし、濛々咫尺を辨せず、道もさだかに見えわかず、寒きこと物凄きこと例ふるにものなく、此所彼所でオーイ〳〵と友呼ぶ聲は、風の叫嘆に和して、雲間に微である、前に居る人の姿は一向に認め得ず、暫しためらふ折柄、烈風は吹き募り、帽子は飛ばんとし、雲霧は悉く四周を鎖して物凄く、日は刻々と遠慮なく暮れ行くと云ふ寂寞たる光景となり果てた。

危い哉、我が一行は風伯の怒りに觸れ、日は暮れなんとして尚ほ未だ宿所さへも定まらぬ、案内者

は頻りに先を急いで止まないが姿見の池は見當らず、已むを得ず一大岩石の下に焚き火の跡あるを發見し、一同荷をおろして今宵一夜の宿を此所と定めた。(後で姿見の池から二の陰の澤であることが判明した)。

此所は、大雪山草本帶の中頃で海拔五二〇〇呎を算し、チシマニンジン、ハクサンバウフウ、エゾツガザクラ、ミヤマヌカボ、デムカデ、コケモモ、ミヤマリンダウ、マルバシモツケ、ミヤマウラジロイタドリ、ガンカウラン、ウシノケグサ等の高山植物よりなる草原をなし、所々の陽地にはハヒマツの羣落が横はつて、千鳴笹の羣叢が一面に跋扈してゐる、我等は此岩を宿り岩と命名した。

時は正に午後六時半、一刻も油斷が出來ぬので一同野營の準備に怠りなく、十三人協力して各受持ちの仕事に取りかゝつた、或人は岩の上から天幕を張る、或人は松の枯枝を集める、鋸で偃松を切る、運搬する、積む、火を焚く用意をする…と云ふ樣な風で一心不亂に手先の見える中と思ふて働いた。幸ひ薪も澤山集つたから次は御飯を炊く用意をせねばならぬので、水を求める爲めに水筒鍋等を持つて水汲みに出掛けた、岩から西の方山の脊を越へて陰の澤に下れば、町餘にして一の雪溪に達する。谷を埋めた雪は高く尾の上に迫り、表面を吹いて來る風は、身を切るばかり冷かに、手も足も一時に凍る思ひをした、雪は融けて流れて百花咲き香ふ千草の中を潜り行き、岩に激して雲間に咽んで居る。

水を汲みながら流れのほとりを見やれば、エゾコザクラ、チシマニンジン、ミツバワウレン、エゾツガザクラ、ミヤマヌカボ等は、此荒涼たる雪間に美しく香つて居る、雪消の水を汲めば攝氏正さに一度、冷氣は骨髓に徹する。

野營の準備も出來上り、火を焚き附け岩に踞して眺むれば、折も善く雲が切れて夕日は激しく照り返し、谷一面は美しい輝きに映ゑ渡る麗はしさよ。

◎大雪山登山記　小泉

◎大雪山登山記　小泉

見下せば萬仞の谿谷は已に綿々たる白霧立ち罩めて全く霧の海と化し、暗の帳は下された、仰ぎ眺むれば今しも怒濤の如く寄せ來る白雲は、大雪山の頂を凉めて陰の盆地に下りると……偉大なる哉驚くべし、大雪羣峯の盟主と仰がるゝ旭岳は威風堂々雲を拂つて鮮かに鎗の如き尖峯を天に冲し、怒濤逆巻く白雲を蹴破つて嶄然頭角を現はし、北海の天地を睥睨して居るではないか、嗚呼何たる壯嚴無比の光景ぞ、三角標は天空遙かに鎗の切尖に點の如く、噴火口より立ち昇る白煙は綿々として棚引いて行く……　見る間に雲間を漏れ來りし夕日の殘光が强く大雪尖峯の半面を射返せば、峯は夕陽を浴びて紅の血汐が滴るやう、洋紅、印度藍等に燃ゑ立つて居る、嗚呼何たる絶景ぞ、崇高、雄渾、壯美、偉大、至大、至高の造化の神が一瞬にして造り上げたる其妙工に對して、宇宙の一端をも覗ひ知り得ぬ人類は、何等の是を表示する詞を知らぬ、暫時唯茫然として動くことも出來なかつた。

あはれ夕風は五千呎の雲の上なる神苑を撫でゝ、萬象悉く晝の競ひに倦み疲れ、靜かに夕陽の殘光を啜つてゐる、下界は已に闇の幄を下ろし、旭川は雲の底となり、あらゆる人生の羈絆は遙かに下層に纏綿するも、高き自然の殿堂には、靈化清淨の幄は奇しき神籟の響を鑛す、羣巒此所に朝宗して、日は全く西海に沒し、嶮絶比儔なき旭岳の雄姿は刻一刻に闇の中に暮れなんとする。

一行は夕飯の仕度を始めたが蚊軍四方八方から寄せ來つて、所嫌らはず刺し廻るので一同手足を跼いて苦んだ、六千尺に近い高所に此寒さにも辟易せず繁殖するとは、今更の如く自然界に於ける生物の應化適應の偉大なるに驚愕せざるを得ぬ。

天幕の外で叫んだ『月が出た、出た』、どれと先を爭ひ外に出で、小手を翳して空を仰げば、今や三五の月は雲を離れて大雪山の肩に懸り、明鏡氷の如く水も滴らんばかりの有樣、嗚呼何たる絶景ぞ、森羅萬象悉く其の容儀を改め、四隣寂として聲なく、大雪山の切尖は銀の月を貫いて壯嚴に星斗煌く天空に聳えてゐる、脚下に横はる白雲は渺茫として大海の如く、遙かに際涯を見ず、實にや海拔六千

尺、高嶺に宿る月影の洗ひ淨めし月夜の美觀は、安んぞ人間の拙い筆を以て形容し能ふものぞ、人の筆はまだ〳〵此の美景を形容する力を持たぬのである。

今强いて形容すれば痛快の二字に盡きると思ふ、天下何物をか痛快と云ふ、何處にか痛快と稱するものを求め得べき、大雪山の嶮峻に攀ぢ登り、寒風肌を掠むる六千尺の高所に一夜を明かし、以て高嶺に懸る隈なき月影を眺めつゝ快哉を絶叫する時を措きて他に徒らに痛快を口にすること勿れ、痛快の二字は宜しく大雪山頂に滿盈する月を眺めつゝ發す可き言葉に外ならぬ。

齷齪として滿都の塵の巷に惑溺する人々よ、出でゝ高嶺に香ふ造化の秘苑に自然創造の神髓を探れ、而して雲外に聳ゆる大雪山頂の月を眺め、無限の詩囊を肥せ、花に宿る朝露も滴りつゞひて千草の中に美妙の音樂を奏づる清冽なる流となり、大海原の癪痺せる神經にも無限の歡喜を齎すであらう。

一同は此壯嚴極りなき月夜の美景を眺めながら、無限の詩想に憧憬れつゝも十三人車座となつて、談笑の間に夕餉を濟ました、鹽辛い福神漬も、心ある飯も渾然として自然の美に融化されてあはれ又俗界の物ならず。

終日の奮闘に依て採集せる植物は蠟燭の火をたより、一々腊葉に造つた、其終つたのは十二時近くである、一同は嶮惡なる道の疲れに焚き火の側にごろり横になつて前後も知らず寢入つた時で、百籟聲を納めて唯鼾聲の高く響くを聞くのみであつた、長座に身體は冷え、夜陰を谷から吹き上ぐる風は骨まで徹る樣だ、火の側で暖を取りながら空を仰げば、月は西に傾いて水の如く冴え渡り、木星は青く連山の頂に泛ぶ、嗚呼廣大無邊なる宇宙よ、項を上げて默思すれば魂魄空に飛んで詩想頻りに湧く。

やがて寢に就きしも、笹の上葉を渡る風はザワ〳〵として、幾度か夢を破られたが、終日の疲れは無我境中の人たらしめた。

登山第三日

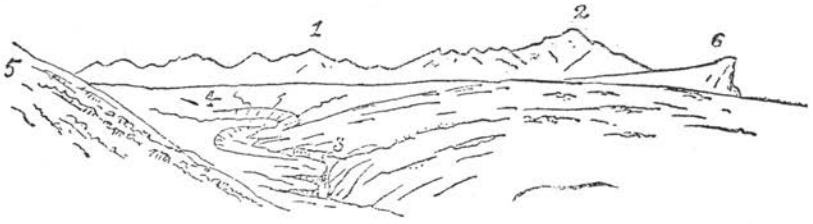
天幕を音づるゝ風冷かに、うとうとした睡りより醒むれば、黎明暁を告げて夜は已に明け渡り、朝日の眩い輝きは、高原の空氣に麗かな匂ひを心ゆくまで漂はして居る。

見渡せば廣々と灌木帶の中まで喰ひ込んでゐる寛かな原、今しも立ち昇る朝霧の間から隱顯する此所彼所に羣れ立つ灌木林、その上には淺黄色の光が彷徨ふ、然して灌木帶以下は凡て渺茫限りもなき雲の大海原である。

朝飯の仕度をする爲め、雪渓に下りて水を汲めば、水は半ば氷つて流れず、草葉に宿るは露ならで、白妙に輝く霜であつた、靈氣漂ふ深山の奥は三伏の暑さも何處へやら、神々しさに驚かざるものなく、冷たき手もて朝飯を濟ました。

是より一行は結束鞋を締めて、兼ねて思ひを焦したる草本帶、地衣帶を採集せんものと、十三人宿り岩を後に見て意氣衝天の勢ひを以て出發した。時は午前五時半、峯は薄雲のヴェールを被つて、まだ玉の肌を見せぬ。

朝露を踏み、百花咲き揃ふ草原を進めば、ツガザクラ、エゾツガザクラ、コケモモ、マルバシモツケ、チシマニンジン、ミヤマウラジロイタドリ等嘻々として一行を迎へ、採集の好材料ならぬはなく、登り登つて五六〇〇呎の邊に至れば、山に漂ふ朝霧は漸く晴れ來つて、朝日は心地よく全山に輝き渡る美しさ。五八〇〇呎の邊に腰打ちかけて眺むれば、さしもに廣き草本帶も一眸の中に集り、偃松の枯木は累々と連つて居る、其附近は一面の草原で、高山にはよく見る所であるが、峯の裾野なる草本帶中には美しい沼が此所彼所に散在する、就中眼に立つは姿見池と其西に在る滿月沼で、共に天を浸して靜かに睡つてゐる、其側の小噴氣孔よりは白煙眞直に立ち昇り、風は全く止んで雪渓は青地に白



旭岳火山の爆裂火口壁（凡そ六千二百尺）より東南方に石狩山脈を見る

1 石狩山脈 2 石狩岳 3 忠別川上流斷崖 4 高嶺ヶ原 5 旭岳の一部 6 忠別岳（千九百二十六米）

くくつきりと浮いてゐる、其側にあるのは宿り岩だ。

顧りて後を仰げば、偉大なる旭岳（旭川より見て最南端の尖峯）は雲の被ひを捨てゝ赭身突兀、其雄大なる英姿を一碧拭ふが如き蒼空に現はした、僕等一行を迎へてくれるのか、此雄姿に接した時、異口同音一齊に快哉を絶叫せざるを得なかつた。

之より道漸く嶮に、平均二十度の傾斜は俄に四五十度の急勾配となり、一面燒砂の道は人面を磨して起り、水蝕作用と、風化作用とを蒙りし岩は、山骨を露出し、嶄然たる絶壁をなす、皆安山熔岩である。

植物分布。　偃松は五三〇〇呎以上には發育せず、又此附近までは草木密生すれども、五六〇〇呎以上は傾斜頗る急に全面悉く砂礫を被り、草木は特別なるものを除くの外は其生育を許さないから、五六〇〇呎を以て本山の草本帶を二分することが出來る、即ち五六〇〇呎以上は分布學上所謂高山寒原と、高山岩野を含み、草本帶の最上部を形成するものである、然して四方に放射する谷々に高山禾本羣落の發達するは本火山の特色である。

噴火口。　登つて六千呎に達すれば旭岳の半腹を爆裂して生じたる噴火口を眼下に見下すことが出來る、火口は一帶の凹谷となつて巓に迫り、所々より大小三十三個の噴煙を吐いてゐ

る、其聲轟々雷の如く、立ち昇る噴煙は綿々として棚引いて行く、誰れかゞ噴火口に大な喇叭を當てたなら、旭川まで聞えるだらうは頗る滑稽で一同を笑はせた、火口の周圍には黃く硫黃が輝いて、所謂針狀結晶をなすものも少くない、試みに礫を投げ入るれば五六尺も吹き上げる、吾等には凡て生きたる標本活敎育ならざるはない、火口壁は所々に絕壁をなし、金庫岩閻魔岩が聳立してゐる。

眺望。　六千呎の邊より道更に嶮峻を加へ、流汗淋漓として肌を濕す、岩上に踞して眺むれば天氣淸朗空に片雲なく、一望の下に集る山河の風光、胸の動悸は激しく耳につく、旭川盆地に開展する上川原野の麥隴萬頃、駿々として黃波を漂はす間をうねりうねつて銀線の如く流るゝは忠別、石狩の二川で、其間に白壁の斑々たるは我が同胞の市街云はずと知れた旭川である、東南の方忠別川の溪谷を隔てゝオブタテシケ連峯を仰げば、トムラウシ、オブタテシケ、硫黃山、十勝岳の諸峯二千米突に近き峯頭參差として雲表に出入し、桔梗色に鮮明なる雄姿を蒼空に描いてゐる、東方怒濤の如き連山の後より嶮峻無比と稱せらるゝ本道の靈山石狩岳は、瑠璃色の峯頭を天に冲して十洲島に君臨するものゝ如く、西北方增毛山脈は海波にも例ふべく、其の盡くる遙かに增毛岳の圓顱を望み得べし、一同歡呼の聲沸くが如く快哉を絕叫して止まず、低徊去らんとして去るに忍びず、長嘯呼號しては大自然の權威の前にひれ伏すことを餘儀なくせられた。

六千呎の邊よりは植物俄かに一變して草本帶最上部のフロラを現出し、皆崩壞せる燒砂の間に樂しい小唄を吟じて居る、其主なるものはエゾクモマグサ（新變種）エゾミヤマツメクサ、タルマイサウ（イハブクロ）、イハヒゲ、イハウメ、メアカンキンバイ、ホソバオンタデ、ミヤマノカリヤス、ミヤマヌカボ、ミヤマスゞメノヒエ、ミヤマ井、ミネハリ井、ミネヅワウ等で、是等の植物はそれ〴〵獨立せる羣叢を形成してゐる、雲間草、深山種附花等は草本帶の最上部を占むるもので、其の淸楚なる姿は、雪の如き白花を翳して淸秀佳麗、俗塵を避けて、雲間に匂ふ香ばしさ、誠に雲間草の名を辱か

しめざるものである。

路は一歩々々嶮難となり、三角測量標は目睫の間に迫つて來た、バロメーターは七千呎を指すに一同元氣旺盛となり、勇躍一番奮起して先を競ひ、遂に多年東天を跳めて其雄姿に憧憬れたる北海第一の高峯大雪山の絶巓に攀ぢ登つた、時は維れ大正三年八月四日の午前八時、七千二百呎に加ふるに五尺數寸、眺望十州に跨り氣宇内を呑まんとす、其時の愉快さは登山者以外には到底今此處に言ふべく、傳ふべくもない、唯讀者の推察に任すのみである。

絶巓に直立して四方を展望すれば、前方は眺望頗る豁達を極め、上川の大盆地を眼下に見下ろし、西北は古生層南は中世代の山脈を繞らし、東は大雪火山之を擁し、盆地の水はカムイコタンの峽谷を破つて、日本海に注ぐ、視線を延長して西北を眺むれば、雲煙糢糊の間に禿頭を現はすは增毛火山羣で、右に當つて白線一道陸地と界するは留萌の濱に白浪の壞るゝのであらう、日本海は渺茫として水天髣髴青一髪、北は天鹽山脈連亘起伏して波濤の如く、西南ォプタテシケ連峯は峯頭參差として呼べば答へんと欲す、其右方遙かに枯槁色の膚清らかにアシュペツヌプリの雄姿は天の一角に其尖峯を刺し、夕張岳の斷崖は巍峨として霄漢を摩して居る、之等の諸峯は何れも白皚々たる殘雪が斑らに美しき縞を織りなす、石狩岳は殘雪ほの白く、連山の背後に秀麗比類もなき輪廓を鮮明に描いてゐる、其瑠璃色に聳え立つ英姿の壯嚴崇高なること、恰も無限の威武を藏めて一行を睥睨する樣で、森嚴と靜肅とに包まれて自然創造の權威の前に跪く一行は、之を嚴肅のシンボルと認めざるを得なかつた、さても豪壯なる眺望かな！胸中何等の邪念無く野心無く怨恨無く唯々偉大なる自然に同化されて自己も亦有らず、唯茫然として自己を忘れたる時、胸中に印せしインスピレイション！大雪山頂に長嘯せし人ならでは語るに由なし。

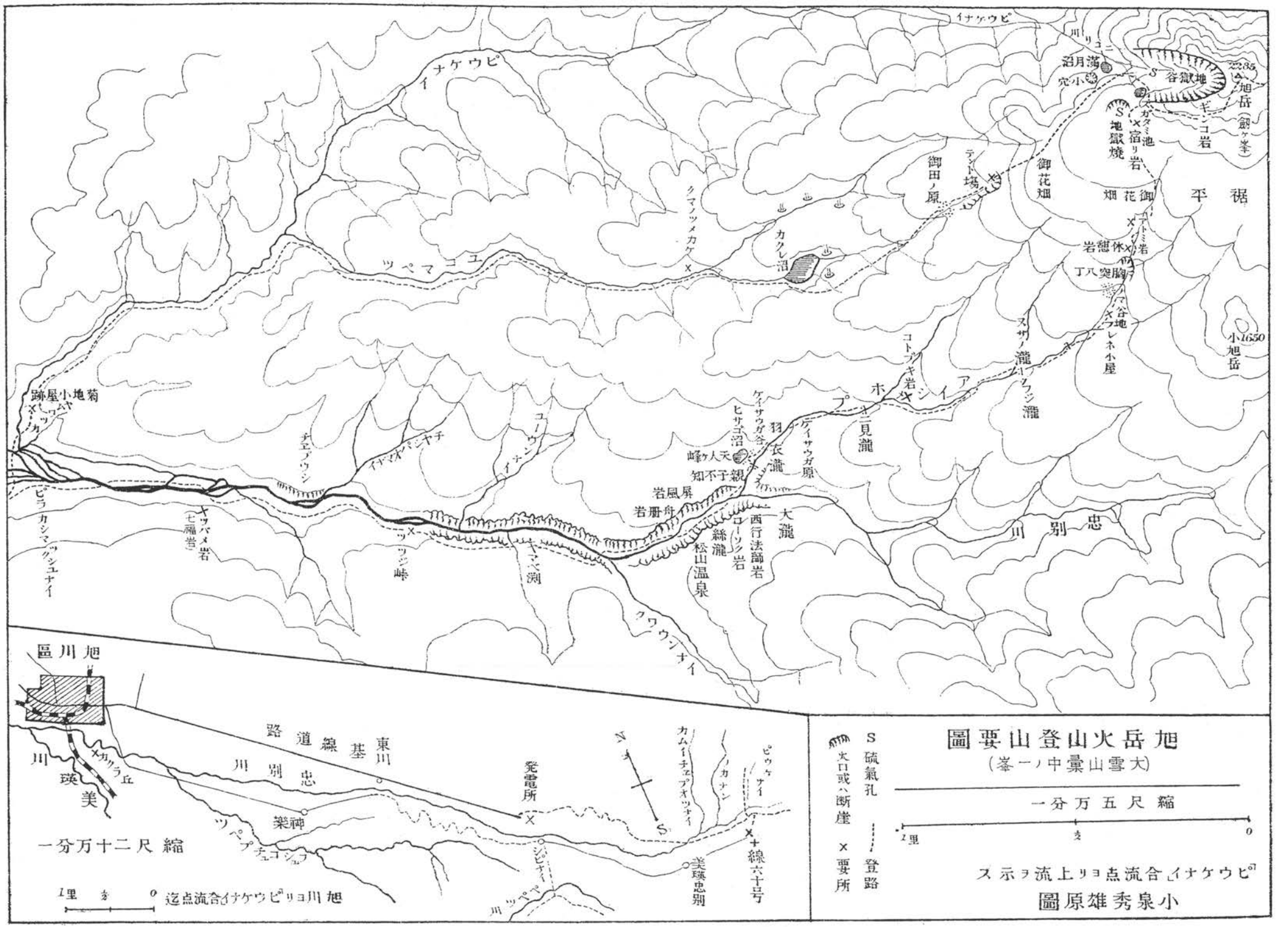
瞳を廻らして背面を一瞥すれば、旭岳の傾斜は眼下の一大高山草原に迫り、其殆ど全面を蔽ふて横

はる大殘雪は白皚々、三伏を貫いて夏尙ほ寒冷を覺ゆる、此大草原を圍む峯岳は更に分水嶺を隔てゝ其背後に一大盆地を擁し、盆地を圍繞する峯頭は何れも二千米突を越え、赭峯連立嶄然として雲表に聳えてゐる。

蝦夷が島根に聳え立ち長へに搖ぎ無き大雪山は、實に北海の鎭めにて、春は山櫻咲きて山隈に靄靄たる綺霞を懸け、夏草は茫々たる裾野に其花を開落し、月は旭岳の山頂に滿虧す、秋は忠別川の溪間に深くして木々に錦繡を織り、冬は滿山白妙の雪を宿して玲瓏玉の如し、實に其の壯嚴淸高なる姿は、吾人精神鍛練の良師友たらざるはなく、渾々一百數十里、石狩川に宿る月影は崇高潔白なる人格修養の鏡であらう、宜なる哉、旭川中學の靑年が花の晨、月の夕、此純美壯嚴比類もなき山河の風光に憧憬るゝことや。

山頂には、エゾクモマグサ、エゾミヤマキンバイ、エゾイハツメクサ、等の羣叢點々する所より見ると、此所は草本帶の極限で地衣帶に達するものである、故に本火山は五帶を完備して居ると云ふことが出來る。

天晴れ氣澄める日は夕張山脈の背後に秀麗なる蝦夷富士の靈峯（マクカリヌプリ）を眺め、東は遠く阿寒山を隔てゝ根室半島を雲煙漂渺の間に望むべく、樽前、札幌、余市、雷電の諸岳亦一眸の中に入り、十州を睥睨して眺望の豁達なる本道無比と稱せらる、一隊は尙ほ奥を極めて採集することゝなり、我等四人の一行は頂上に、キバナシャクナゲ、イハギキャウ、メアカンキンバイ、エゾイハツメクサ、ミヤマヌカボシサウ、ムシゴケ等眼も醒むるばかりに叢生するを眺め、天界の極樂園もかくやと肯き、南方の斜面に橫る旭岳の大殘雪を足にまかせて辷り落つると云ふ天下の壯快事となる、踵に力を入れ白雪を蹴立てゝ底知れぬ草原に向つて一瀉千里、疾風の如く走り辷つた、一度足に力をこめれば白皚皚たる殘雪上、身體は唯是れ疾風の如く到底足を止むる事が出來ぬ、一瞬にして千餘尺を下り廣き御花



旭岳火山登山要圖
(大雪山彙中ノ一峯)
縮尺五万分一
S 硫氣孔
火口或ハ断崖
× 要所
登路
ピウケナイ合流点ヨリ上流ヲ示ス
小泉秀雄原圖
イナケウピ
ツペマコユ
クマノツメカケ
カクレ沼
御田ノ原
テント場
御花畑
御花畑
裾平
地獄焼
宿リ岩
ギンコ岩
旭岳(劍ヶ峯)
2285
小旭岳
1650
ヌサノ瀧
コトブキ岩
ホシイア
プ
ニ見瀧
ケイサウガ原
羽衣瀧
ヒサゴ沼
ケイサウガ谷
天人ヶ峰
親子不知
屏風岩
舟冊岩
大瀧
西行法師岩
ローソク岩
絲瀧
松山温泉
クワウシナイ
ツツジ峠
チヤマベ渕
ユーウンナイ
チエプウシ
イナマオパシヤチ
ツバメ岩
(七福岩)
ピラカシマ
ツシユナイ
菊地小屋跡
ヤウコツカ
旭川區
東川
基線道路
忠別川
美瑛
カクラ丘
神楽
ツペプチュコシュフ
発電所
ジピナイ
ツペペ川
美瑛忠別
カムイチエプオツナイ
ノカナン
ピウケナイ
線六十号
縮尺二十万分一
1里 ½ 0
旭川ヨリピウケナイ合流点迄

畑に出た、暫時休息してポッケットより砂糖を出し、殘雪を盛つて氷水を造りて之を飲めば清涼肺腑に徹る、乞ふ三伏の苦を脫し、自然の妙味を知らんと欲せば、須らく大雪山に登れ、然して一杯の氷水を味はん哉。

草の床に腰打ちかけて四方の景色を見渡せば、前面は茫々と開展せる草原で、廣袤數百町歩に渉り平均五千五百呎の高度を保つて居る、本邦中草本帶に如此大草原大御花畑を有する高山は殆んど無からうと思はれる、見渡す限りは紅黃白紫色も妙なる千草の滿開、吹き渡る風も薫る有樣である、中央に集る輻射谷の水はそれ〳〵岸邊に咲き匂ふ高嶺の靈花を寫して、チヨロ〳〵とうねり〳〵て流れてゐる。

嗚呼天地開闢以來降り積つては將さに消えなんとし、消えなんとしては又積る、過去より現在に而して未來永劫に積つて永久に消ゆる隙なき彼の白妙の花園には、必ずや美しい女神が紅の唇を顫はし、其雪よりも純白な潔き腕を投げて我々を歡んで迎へるに相違ない、吾等四人は此靈岳に登て神の懷に入り、そして其の寵兒たり得たのである。

雪消の水の岩間に咽ぶあたり可憐しげなミヤマリンダウ、チングルマ、チシマニンジン、エゾコザクラ等は、影清らかな水鏡に自分の姿を恍惚れて居る樣である、一つの美しい谷川を越えて荒廢に荒廢を重ねた所謂高山岩野に登れば、北海道では蝦夷富士のみと思ひしエゾマルバヤナギ、エゾフジアザミ（宮部博士命名）、ミヤマタネツケバナ等の珍品を發見し、實に嬉しかつた、此他に熊ケ岳より北方に採集すれば、イハギキヤウ、コメバツガザクラ、コマグサ、エゾタカネトリカブト、ヒメヤマハナサウを採集すべし、見下せば美しく草原を彩る植物は、吹きすさむ風に縺れ縺るゝ雲霧の中に樂しい小歌を吟じて居る、見上ぐれば峯頭凹陷せる所は高山植物帶の所謂高山寒原をなすもので、高山植物は如何に豐富なるか、垂涎三尺と云ふ所なれど今日中に下山しなければならぬのに、時は十時近いの

◎大雪山登山記　小泉

で止むなく割愛して、旭岳の續きなる後旭岳に登つた。

日光は強く燒砂を射返し、コヒオドシ蝶の雲間草の蜜と香りに憧がるゝ有樣は、人跡絶えたる此上頂では天使の如くに親まるゝのである。

峯頭に直立して十州を睥睨すれば、身は之れ新世代火山岩上に長嘯して、今や原人時代より飄然として、天界に上昇せんとするに似たり、一同の魂は地にあらず、天にあらず、新にあらず、古にあらず、幽かに偃松を渡つて吹き上ぐる松風は自ら清高の調をなし、將さに一行を天界に導かんとするものゝ如く、魂飛び魄滅して、五體は之れ大宇宙に歸するにあらざるなきかを疑はしむる、靈界久しく止るを許さず、茲に多年の宿望を果たして十一時下山の途につきぬ。

南面せる砂礫地を下る時、コマグサ（駒草）を發見して欣喜措かず、此他に、エゾフジアザミ、イハギキャウ、ミヤマタネツケバナ（果實）等を採集した。

之よりは元來し道を一瀉千里の勢で下山し、十二時半頃無事宿り岩に到着したが、半日の奮闘により足の疲れと空腹とは話の外であつた。

一同晝食し、下山の用意萬端を調へ、再び松山氏を先立てゝ温泉に向つて一瀉千里の勢で下山した、千草咲き香ふ御花畑に別れを惜み、エゾツツジの花美しき後見岩を見返りて、灌木帶にさしかゝると、道は急坂となるので、二日間の惡戰苦闘に依り足は疲れ切つてゐるにかゝ加へて、背中の荷が重いので身體がヒヨロ〳〵して、今にも倒れんばかりの危さ、木の根や笹を頼りに漸くの事で休憩岩まで下り、一休みして又々胸突八町の懸崖に膽を冷し、足を痛めて再び思ひ出多きアイシポプの水源に出た、一同ほつと安心して此緩かな流れを辿り辿つて行く頃は、太陽は西に傾いて黄昏近く、一同の足も疲れ果てたので温泉まで歸ることを中止し、日暮には少し間があれど藤根宿舍に一夜を明すことゝ一決した。

一同は此處に荷を下して野營の準備に取りかゝり、やがて薪も澤山集つて此に夜の幕が始つた、提灯に火を點ける炎が搖らめく、夕飯も濟んだ、夜が更け渡るに從つて、四隣寂寞として靜肅な中に、天地自然の奏でる神秘の樂には思はず耳を傾けて恍惚たること暫時、忽ち肌に徹るやうな山氣が襲つて來る、オー寒い晩だ、寒い筈だ、此處は海拔四千呎、下界とは沒交涉なのだ、外套を頭から足の先まですつぽり被つて橫になつた。

互に盡す友誼と友誼、溫い心の情と燃る續く焚き火を賴りとして安らけく睡りについた、夜も十二時に近い頃、雨がちらほら降つて來たと見えて、上葉を渡る一時雨ザア〳〵と聲淋しく顏を打つに夢驚かされて起き上がれば、此處彼處には大理石像が冷かに橫つて時々蠢いて居る、火は將さに消えなんとしては木の間を漏るゝ夜嵐にバチ〳〵ブチ〳〵と音をさせて燃え上る淋しさ、其中に幸ひ雨も止んで又うとうとゝ睡りに就く。

第四日

藤根宿舍に音づるゝ山風に夢破られて起き出で見れば、夜はほの〳〵と明け離れ、小鳥は塒を出でて徐ろに淸露を掬して居る、一同朝飯を濟まして用意を整へ、午前六時藤根宿舍を後に見て又々溪川の飛び石をふみつゝ下つた、歸る時は早いもの、またゝく隙に幣の瀑、二見ヶ瀧、壽岩も早や過ぎて一行は瓢沼に出た、之よりは又その嶮岨な親不知子不知の難所を下ることゝなる、天人ヶ峯に一休みして英氣を養ひ、注意に注意して一千呎を無事に下りて、羽衣の瀧に別れを惜み、溫泉に到着したのは午前の十時頃、先づ先づ一行の登山も無事に濟んで重荷を下した樣な氣持をした。

晝飯の御馳走には溫泉の名物エゾブキの漬物で舌鼓を鳴らし、談笑の間に各自思ふがまゝに日を暮し、夕飯の後は一同安らげく華胥の國に遊んだ。

◎大雪山登山記　小泉

第五日

明くれば八月六日、夜もほの〴〵と明け渡る午前四時頃一同温泉に別れを告げて、愈々旭川に向つて出發した、一行の背には數々の高山植物が荷はれてゐる、橋を渡つて懐かしさに松山温泉を顧れば、無限の諸情はセンチメンタルな心に浮んで來る、噫！松山温泉よ、緑の色深き蝦夷松の森よ、さては藤根宿舍の夕よ、今日は御前等と別れねばならぬ。離別の悲哀に充てる若い旅人の胸中を御前は知つてるか、人類の文明てふ亂潮は何時までも此の神域、靈境を襲はぬであらうか、此清く美しい姿を傷けずに居られやうか、傷けずに居ることを許すであらうか、さらば、いざさらば、さき幸あれ！

途中忠別川を船にて渡り、發電所を一覽し、長途恙なく旭川に着いたのは、小雨そぼ降る午後五時頃、一同紀念の爲めに寫眞を寫して解散し、此に此有益なる旅行は終りを告げた。

高山植物檢索便覽（一）

武田久吉

前に三好、牧野兩氏の『日本高山植物圖譜』出でゝ、愛山家、愛草家の好侶伴となりしが、忌憚なく言へば、該書は高山帶及亞高山帶に産する略四百種の植物を、何等の順序なく、何等の關係によらずして羅列したるものなれば、苟も一木一草の名稱を索めんとすれば、勢ひ卷頭より初めて「盲捜（めくらさがし）」を試むるの外に道なく、又圖版の解說も簡略に從ひあれば、植物に精通せざる人は、時に隔靴搔痒の感

なくんばあらず。該書出でゝ已に十年を經るも、未だ世人の滿足を買ふ可き圖書の出版を見ざるは、假令我が邦の植物學者が、高山植物の研究を等閑に附するの例證たらずとするも、亦以て高山植物に對して冷淡なりとの誹を免るゝを得んや。

頃者各地の登山家、採集家より、高山植物の檢定を依頼さるゝこと頻々たるを以て、素人用としての高山植物檢索表の編纂を試みたれば、今其の一部を披露して、大方の叱正を乞ふ事とせり。

此處に高山植物と呼ぶは、高山帶即ち灌木帶以上に産するものにして、亞高山帶即ち喬木帶以下に産するものを含まず、夫等は漸を追ふて編入する事ある可し。又便宜上低地性植物と雖も、高山帶にも生ずるものは、成る可く之を加ふるに努めたり。

檢索表は最も人爲的とし、植類分類學の素養なき人にても、苟も中學二年級以上の學力さへあらば、容易に名稱を鈎出し得る樣仕組みたれど、時には花葉を細密に檢査するを要するとあり、此の點は豫め了知されんことを乞ふ。尙一言附記す可きは、萼が色を有して（即ち綠色以外にて）、一見花瓣の如き場合には、之を便宜上瓣と呼び、若し萼、瓣相類似して區別し難き時には、花被なる術語を用ゐるを避けて、同じく之を瓣と呼べることなり。

檢索表は、先づ高山植物を十二類に分ち、更に其の第十二類を四群に細別して、其の各に對し種別檢索表を設け、以て種又は變種、品種の和名を索むることを得べくしたり、但し表中には一々變種、品種等の別を明記することなし。

類別檢索表

一（無花植物……二
一（有花植物……三

二　葉は大形、扁平、切れ込みあり、裏面に胞子嚢を著く……シダ類
　葉は小形、針狀又は三角形、葉腋に胞子嚢を著く……ヒカゲノカヅラ類
三　二尺乃至數尺に達する木本……灌木類
　草本又は高さ一二尺をこえざる矮小木本……四
四　花は多頭狀に密集して、いはゆる頭狀花序をなす……キク類
　花は頭狀に攢簇せず……五
五　蝶形花を有するもの……マメ類
　蝶形花を有せず……六
六　葉は平行脈を具ふ……七
　葉は網狀脈を具ふ……十一
七　瓣は六片、其の一個下方のものは他と著しく形を異にし、いはゆる舌瓣をなす……ラン類
　花は舌瓣を有せず……八
八　葉は三稜ある莖上に三列に並び、葉鞘を缺く、花は穗狀に集りて瓣なく雌花と雄花とは雜居せず……スゲ類
　莖は圓壔形、葉は三列ならずして散生又は輪生狀……九

九　瓣は殆んど缺如し、花はボート形の苞に包まる、雄蘂の葯は十字狀……禾本類
　瓣は六個……十
十　瓣は小形、綠色又は褐色を帶ぶ……井瓣類
　瓣は概して、美しく、白色、黃色、又は赤色……ユリ類
十一　矮小木本にして花は顯著ならず、穗をなす……ヤナギ類
十二　花は蓁蕚を綴らず……十二
　花は紅色又は紅紫色
　花は紫色又は菫菜色
十三　花は黃色又は帶黃或は黃綠色
　花は白色

以上の如く高山植物を先づ十二類に分ち、第十二を更に四部に細別す、而して內地及北海道の高山に產して、通例登山者の目に觸るゝものは左の如し、シダ類約十、ヒカゲノカヅラ類約九、灌木類約十六、キク類約十七、マメ類約十、ラン類約十、スゲ類約十、禾本類約十五、井類約七、ユリ類約七、ヤナギ類約二、双子葉類中紅色又は紅紫色のもの約三十三、紫色には菫菜色のもの約二十、黃色には帶黃色のもの約二十六、白花のもの約五十あり、總計二百四十三に上ると雖も、其の中には、一種にて數變種あるものあり、又高山帶特有のものゝみにあらざれば、狹意の高山植物の種類は、これより

も遙に少きは論を俟たず。扨次に是等の各類中の種を見出さんには、可成簡單を旨とし、肉眼又は低度の郭大鏡を用ゐて見得る特徴による、即ち葉の單葉なるか複葉なるか、花が四瓣を有するか五瓣を有するか等なり。

今次に灌木類、黃花を著くる双子葉類及びマメ類の種別檢索表を揭げ、以て大方の是正を俟つ。

◎灌木類種別檢索表

一　葉は針狀（針葉樹）……二
　葉は扁平（闊葉樹）……七

二　幹は平臥匍匐す……三
　幹は直立す……六

三　葉は長く、五個一所より出づ……ハヒマツ（まつ科）
　葉は短く、個々莖上に着く……四

四　葉は强壯にて尖り、皆一樣なり……五
　葉は尖れるものと、然らざるものとを交ゆるか、皆一樣なる時は鱗狀をなして莖につく……ハヒビャクシン（まつ科）

五　葉は粗に莖につき、內方に鉤曲す……リシリビャクシン（まつ科）
　葉は密生し只微に曲る……ミヤマネズ（まつ科）

六　葉は十數個一所に叢生す……カラマツ（まつ科）
　葉は個々莖上に單生す……シラビソ（まつ科）

七　葉は單一……八
　葉は羽狀複葉……十八

八 葉は略三角形、樹皮は白色にて離脱し易し……九
　葉は楕圓形又は長楕圓形……十

九 葉底は葉柄に向ひて尖り楔形をなす……シラカンバ（はんのき科）
　葉底は心臟形をなす……ダケカンバ（はんのき科）

十 花は葇荑を綴る……十一
　花は顯著にて葇荑をなさず……十二

十一 葉は鋭き細鋸齒を有し、上面深綠、下面淡綠にて粘る……ミヤマハンノキ（はんのき科）
　葉は鈍き鋸齒を有し、上面は乾いて往々黑色となり、下面は帶白色……ミヤマヤナギ（やなぎ科）

十二 花は合瓣……十三
　花は三乃至五個の瓣片を有す……廿二

十三 葉は互生……十四
　葉は對生、花は纖枝の頂に孖生す……オホヘウタンボク（すひかづら科）

十四 葉は革質にて大、其の緣は鋸齒なく、花は大形白色……シロバナシャクナゲ（しゃくなげ科）
　葉は一年生にて革質ならず……十五

十五 花は鐘狀、濃紅紫色又は半ば白色……ツリガネツツジ（しゃくなげ科）
　花は白色又は帶白色……十六

十六 葉は小形、鋸齒なく、兩面に毛あり……十七
　葉は長楕圓形にて、上面平滑下面白色、花は壺狀にて小、
　粗に攢りて長き總をなす……ハナヒリノキ（しゃくなげ科）

十七　葉は中央に一個の脈あるのみ……シロバナノコメツツジ(しゃくなげ科)
　　葉は三個の脈あり……オホコメツツジ(しゃくなげ科)

十八　花は紅色……十九

十八　花は白色、小形、葉は七個以上の細長き小葉より成り、莖に刺なし……廿
　　花は大形、淡紅色、莖に刺あり……タカネバラ(いばら科)

十九　花は小形、深紅色、莖に刺なし……ベニバナイチゴ(いばら科)

廿　葉は表面平滑、裏面白色……ウラジロナナカマド(いばら科)
　　葉は表面有毛、裏面淡綠色……廿一　(又ミヤマナナカマド)

廿一　葉は四五對の小葉より成る……オホミヤマナナカマド(いばら科)
　　葉は三四對の小葉より成る……タカネナナカマド(いばら科)

廿二　花は淡紅色、五個の瓣片を有し、葉の緣に鋸齒あり……オホマメザクラ(いばら科)

廿三　花は帶綠色、三個の瓣片あり、葉に鋸齒なし……ミヤマホツツジ(しゃくなげ科)

◎双子葉黃花のもの種別檢索表(キク類及マメ類を除く)

一　草本……二
　　木本……卅一

二　花は四乃至七片の瓣を有す……三
　　花瓣は其の下部癒合して明に筒をなす……廿八

三　花は四瓣又は五瓣……四
　　花は六七瓣にして斜向し、其外部に毛あり、葉は數回細裂す……ツクモグサ(うまのあしがた科)

四　花は四瓣……五
　　花は五瓣……八

五　葉は對生、花は距を有す……ハナイカリ（りんだう科）
　　葉は散生又は輪生、花に距なし……六

六　葉は扁平、散生、花は顯著……七
　　葉は針狀、六乃至十個宛輪生、花は小にて莖頭に攢る……キバナノカハラマツバ（あかね科）

七　鮮黃色の小さき花、短き莖の上に攢り著く……ナンブイヌナヅナ（十字花科）
　　綠黃色の大形の花、只一個莖頭に著く……チシマヒナゲシ（けし科）

八　葉は多肉、多漿……九
　　葉は多肉多漿ならず……十

九　莖は細く、葉は圓壔形にて小さく、往々赤色を帶ぶ……ミヤママンネングサ（べんけいさう科）
　　莖は強壯、葉は扁平にて白色を帶び、緣に粗鋸齒あり……イハベンケイ（べんけいさう科）

十　花は大形、直徑一寸內外、鮮黃色にて美しく、莖葉共に無毛……シナノキンバイ（うまのあしがた科）
　　花は直徑八分をこえず……十一

十一　花瓣は厚味を帶び、光澤あり……十二
　　花瓣は其の質薄く、光澤なし……十四

十二　莖は六七寸以上、莖葉共に毛あり……ミヤマキンバウゲ（うまのあしがた科）
　　莖は五寸をこえず、平滑……十三

◎高山植物檢索便覽（一）　武田

十三　花は直徑五分内外、萼片の外部に褐色の毛茸あり、葉は其の質稍々厚し……タカネキンバウゲ（うまのあしがた科）
　　花は直徑二三分、萼は瓣よりも大きく、無毛、莖は纖細、二三寸……クモマキンバウゲ（うまのあしがた科）

十四　花は直徑五七分ありて美し……十五
　　花は小くして顯著ならず、莖頭に攢り著く……廿四

十五　葉は單葉……十六

十六　葉は複葉……廿

十六　葉は對生にて小黑點あり、花に距なし……イハオトギリ（おとぎりさう科）

十六　葉は互生、花に距あり……十七

十七　葉は薄質……十八

十七　葉は厚質、脈に沿ひて凹み、無毛……十九

十八　葉は主として緣に微毛あり、花は一莖二個……キバナコマノツメ（すみれ科）

十八　葉は無毛、只葉柄に短毛あり、花は一莖三個に上る……オホバキスミレ（すみれ科）

十九　葉柄は平滑、無毛……タカネスミレ（すみれ科）

十九　葉柄に短毛あり、葉は紫色を帶ぶ……シソバスミレ（すみれ科）

廿　葉は五個以上の小葉を有す……廿一

廿　葉は三個の等形の小葉を有す……廿二

廿一　葉は先端にある小葉は著しく大にして圓く、他の小葉は極めて小し……ミヤマダイコンサウ（いばら科）

廿一　小葉は皆橢圓形にして、葉底尖りて楔形をなす……キジムシロ（いばら科）

廿三　葉の裏面は帶綠色……廿三
　　葉の裏面及莖上に綿毛あり……ウラジロキンバイ（いばら科）
廿三　小葉の綠には多數の鋸齒あり……ミヤマキンバイ（いばら科）
　　小葉には其の先端に只三個の鋸齒あるのみ……メアカンキンバイ（いばら科）
廿四　葉は單一……廿五
　　葉は三個の小葉より成り、其の各は先端に三個の鋸齒あり……タテヤマキンバイ（いばら科）
廿五　葉は細長くして鋸齒なく、莖は平滑にて花は複繖形花序をなす……廿六
　　葉は外形略圓くして鋸齒あり、花は繖形花序をなさず……廿七
廿六　複繖形花序は十個內外の繖形花序より成り、莖は一尺內外……トウゴクサイコ（繖形科）
　　複繖形花序は二三個の繖形花序より成り、莖は三五寸……レブンサイコ（繖形科）
廿七　葉は淺く五乃至九裂し、裂片は圓く、緣に細鋸齒多し、雌蕊は只一個……ハゴロモグサ（いばら科）
　　葉はカヘデ形に深く五乃至九裂し、緣に粗き鋸齒あり、雌蕊二個……アラシグサ（ゆきのした科）
廿八　花冠は五裂せる筒形……廿九
　　花冠の上部は嘴となり、下部は脣となる……卅
廿九　花冠は大形、淡黃白色、葉は細長くして鋸齒なし……タウヤクリンダウ（りんだう科）
　　花冠は小、鮮黃色、葉は深く大小の切れ込みあり……チシマキンレイクヮ（をみなへし科）
卅　花は帶黃白色、葉は無柄にて、淺き鋸齒あり……キバナシホガマ（ごまのはぐさ科）
　　花は黃色、葉は有柄、深き切れ込みあり……タカネキバナシホガマ（ごまのはぐさ科）

卅一　葉は互生又は散生……卅二
　　葉は對生、花は短き柄の頂に孖生す、果實は黑紫色にして白粉あり……クロミノウグヒスカグラ(すひかづら科)

卅二　葉は角質、常綠、鋸齒なし……卅三
　　葉は薄質、一年生、綠に細鋸齒あり、果實は黑色……ウラシマツツジ(しゃくなげ科)

卅三　花は黃色、花柱は雄蘂よりも長し……キバナシャクナゲ(しゃくなげ科)
　　花は淡黃色、花柱は雄蘂よりも短し……ウスキシャクナゲ(しゃくなげ科)

◎マメの類種別檢索表(皆マメ科に屬す)

一　花は紫色又は紅紫色……二
　　花は白色、帶黃白色、又は黃色……四

二　莖は一尺內外、花は多數枝上に著き、葉は下面のみに毛あり……三
　　莖は二三寸、花は淡紫色、一二個づゝ枝上に著き、葉は兩面に毛あり……オヤマノエンドウ

三　花は紅色、長き總をなして枝上に著く、小葉は銳頭……チシマレンゲ
　　花は紫色、小葉は圓く、其の先端やゝ凹めり……ムラサキモメンヅル

四　花は白色、雌蘂の柱頭も白色にしてやゝ膨む……シロウマワウギ
　　花は帶黃色……五

五　葉は悉く根より出で、莖上になし……タカネワウギ
　　葉は莖上に著く……六

六　莟は外面は平滑にて、たゞ縁に沿ひて微毛あるのみ……七
　　莟の外面は毛あり……八

七　小葉は往々十對以上、其の頂に小凸起あり、托葉は二個合して一となり、子房にくびれあり……イハワウギ
　　小葉は四五對、其頂はやゝ凹む、托葉二個、子房にくびれなし……リシリワウギ

八　雌蘂の柱頭はほそく、子房には長き柄あり……タヒツリワウギ
　　柱頭はやゝ膨みて橙赤色を呈し、子房の柄は極めて短し……アラカハワウギ

雜錄

後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎

後立山（ウシロタテヤマ）といふ名は、黒部川の峽谷を隔てゝ立山の東に連亘してゐる信越國境山脈中の一峯として、夙くから地誌地圖等に記載され、一個の山體として取り扱はれてゐたらしいにも拘はらず、元來が越中の稱呼であつて、此方面からの登山は、甚しく困難でもあり且つ危險でもあるから、偶に入込む獵師などの外は登山者絶無といふ有樣であつたと想はれる。その爲にどの山がそれであるかを判定するに充分なる證據となる可き資料が殘つてゐないので、今まで深く論究されずに有耶無耶の中に放棄されてしまつた觀がある。日本の山岳研究の權威といはれてゐる小島君すら、山岳第五年第三號に載せた「日本北アルプス風景論」に於て、後立山山脈なる新名稱の條下に、

第六（後立山山脈）は黒岳山脈の最短なるに反して、北アルプス中、最も長大の脈で、私は總括して後立山々脈と呼んで置く、勿論越中方面からいふ「後（うしろ）」で、信州方面からは立山の前に當るのであるが、立山が最も古くから知られ且つ開かれた名山であるのと、後立山（ウシロ）なる名が、早くより往々地理學者に呼ばれてゐるのと（その癖、後立山といふ一箇の山體の存在は、未だに何處だか、確には解らないのである）に敬意を表して、さう言つて置く。

と說明されてゐるに過ぎない。尤後立山々脈なる名稱は、後立山なる一箇の山體が存在すると否とに關せず、此山脈が北アルプス北半の最高峯にして且つ古來の名山たる立山（立山の三角點の高度

は二九九二米突で、劒岳よりも六米突低いが、最高點は慥に三千米突を超えてゐる。)背後の山脈であるからといふ理由だけでも、私は此名稱に贊成する者である。

北アルプスの地理に精通せられてゐる榎谷君は、曾て「信越國境脊梁山脈登攀記」(山岳五年三號所載)中の「餘滴」と題する項に

五龍を後立(ごりう)とも書くさうだ。これは大黒鑛山主爲田文太郎氏及び同所支配人高橋朝太氏から親しく聞いた所で、氏等が該鑛山採掘願書提出の際、鑛區地圖作成の必要上、種々調査せられた結果、古くは立山背後の山といふやうな意味で、その邊一帶を後立(ごりう)と呼んで居たのだが、現今ではそれが一山岳のみの名稱になつたさうだ。それ故後立と書く方が正しく、五龍は後に誰れかが製造したんだらうとさへ言はれた。

と紹介されてゐるが、別に意見は發表されなかつた。

明治四十二年同四十三年と續けて此山脈に登られた辻本君は「祖父ヶ岳の二日」(山岳四年三號所載)と題する文中に於て

鹿島槍ヶ岳以南を、自分の管見から記して見ると、尾根は一旦餘程低くなつて、直に祖父ヶ岳に連り、夫から山脈は西南の方向に折れて赤澤ノ頭(アタマ)(一名赤澤岳、後立山と云ふものは即ち之であらう)となり南に走つて針木峠の西に聳える尖峯(名稱不明「附記」參照)となる。

と疑はれたが、山岳六年一號所載の「後立山連峯縱斷記」に於ては、

後立山なる名稱は名詮自姓、越中の用語にて、信州にては絶えて此名を聞くことなし、名稱の由來は明かに知り難きも、越中人が立山山上より黒部谿谷の東方に當り高峻立山に劣らざる大山脈の蜿蜒するを望み、而かも個々の山名を明かにし得ざるに因り、後立山なる概括的名稱を與へしこと蓋し其濫觴ならん(富山市附近より後立山は立山連峯に遮られて全く望見す可らず)今日立山に登る人は先達祠官等が山上にて此名を呼び居るを氣付かるゝことなるべし。

と言はれ、且つ

◎雜錄　後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる事

◎雜錄　後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎

近頃、鹿島槍北方のゴリウ岳（北城村の割菱岳）を後立山と書き、後立をゴリウと音讀することゝ大分流行の樣子なるが、ウシロタテヤマといふ總括的の大名を何故、鹿島槍の如き高峯を措きて、北方に偏り、而も比較的低小なる此峯に與ふることゝなりしか、甚だ怪むべし、如何にも立山をリウザンと讀むことはあるやうなれど後立山まで音讀するは、似非漢學者流の筆法と思はれて、頗る附會の嫌あり。

と氣焰を吐かれた。之に對して小島君は、山岳六年二號の雜錄欄に「鯉鮒山五龍山及後立山」と題して、後立山問題を面白い見方で議論されてゐる。茲に全文を引用する譯には行かぬが、詮する所は榎谷君の記事を參照されて、鹿島槍ヶ岳北方のゴリウ岳（或はゴリフ岳）を、五龍山と書くか後立山と當てるか、孰れが正しく（もしくは正しいらしく）考へられるかといふと、少しく餘分に後立山説の方に傾きたく思ふといふに歸着してゐる。

今までに山岳で發表された後立山に關する意見は、以上の外に七年一號、八年二號及び八年三號

等の雜錄欄に載つてゐる。然し其等の説も後立山といふ一箇の山體が存在してゐるといふことを主として取扱つたものではなく、此立脚點から見れば稍や根本を離れたものであつた。私がこれから述べやうとする説は、多くは零碎なる而も少數の資料に據つたものであるが、後立山が一個の山體の名であり且つ鹿島槍ヶ岳と同山であるといふ、謂はゞ世人のかくあれかしと期待してゐたことが事實に於て合致してゐるといふことを證據立てやうとするので、あの山脈に就て體驗の乏しい自分には、聊かならず荷が勝ち過ぎてゐるのは是非もない。これは預め諒恕を願つて置く。

先づ順序として從來世に現はれてゐる諸書の後立山に就て記述するのが當然であるが、餘り必要でもないからこれ等は一切省略して、直に本文に取りかゝることにする。

越中遊覽志（此書の著者は明治十八年八月芦峅寺から立山に登つた。）を見ると別山から劍岳方面を展望した記事の後に次のやうに書いてある。

東はすべて數千尺の斷崖絕壁にて、崖壁の下は

黒部川の源流の出るところたり。之を隔て東に列る諸山は、越中信濃の界をなすものにして、針木、栂、後立、餓鬼、赤鬼等の名あり、其中に後立山最高し、餘は高低を論ずるにも及ばず。この針木とあるものは、恐らく針木峠の北に聳えてゐる針木岳のことであらう、栂は赤澤岳に對する越中人の稱呼である（このことは後に述べる）次の後立はウシロタテと讀むのか又はゴリフと讀むのか判然しないが、順序からいふと祖父ヶ岳に相當するらしいので、祖父ヶ岳としても差支ないやうであるが、「其中に後立山最高し」と明瞭に斷つてある所から推せば、これはどうしても鹿島槍ヶ岳を指したものである。實際別山から東方を眺めて、これと頡頏する高さを有する山は、白馬連峯は距離が少し遠いので、鹿島槍ヶ岳の外には見當らないことになる。これが私をして越中の所謂後立山は鹿島槍のことではないかと想はしめた最初の記事であつた。餓鬼、赤鬼といふのは、鹿島槍の北に連なる五龍、唐松あたりをいふたものであらう。陸測五萬の黒部圖幅には、現に大黒鑛山の西北に餓鬼山を記載してあるが、これは目に立つ程の高い山ではない。茲にいふ餓鬼は後立に連なる國境山脈の山でなければなるまい。餓鬼の田から餓鬼谷や餓鬼岳の名が導かれたのではあるまいか。赤鬼といふのは其餓鬼に對しての名稱と察せられるから、あの赤いギザ〳〵した唐松岳などには相應した名であらうと思ふが、これらは單に想像に過ぎない。

◎雜　錄　後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎

明治四十三年三月の出版に係る高岡新報の記者井上江花といふ人の著した「黒部山探檢」と題する書（これは辻本君の所藏を借覽したのである）に「黒部奥山公儀御用帖」の中から拔萃した山廻り役の見分記が載つてある。原本は前田家の所藏で、之を全部渉獵したならば、多くの有力なる資料が得らるゝに相違なからうと想像するが、前田家では容易に所藏圖書の閲覽を許容しないから、私は關係の人に賴んで漸く「黒部山探檢」に抄出してある見分記を寫して貰つた。活字の誤りと思はれる箇所や其他不明の箇所を原書に據りて正したいと思つたからである、が、矢張り不明の箇所

◎雜　錄　後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎

が少くない、其文は次の如くである。

一、當九日針木谷落合の小屋發足、信州細野入より黑部山へ入込む人可有之向寄のヶ所、小狹梅谷右兩ヶ所へ登山仕候處、小狹峯に先年狩人にても入込み候哉にて、古小屋一つ倒れ御座候、尤も道筋も幽かに御座候得共、何れ兩三年已前にても通行仕候哉の樣子にて、當時仕候道筋も見請不申候、夫より梅谷へ相移り、所々見廻り仕候處、是又前段同樣古小屋一つ御座候、此分人數四五人計も住居罷在候程の小屋跡と見受申候、外に倒れ小屋跡一つ御座候得共、小屋木等朽居候故、年限難計御座候、同所道形も、前段小狹に有之候道形等は、少々人多通行仕候樣にも見請候得共、何分近頃通行人有之道形とも難見請御座候、乍併山中之小屋、若人少にて罷越通り候得ば、慥成足跡等の儀は相難知儀に御座候、別て御伐出御座候に付、先頃風便にも江戸中村屋七兵衛代人傳四郎より、人を以て山內の樣子爲內見、萬一右ヶ所へ爲入込候哉も難計奉存候に付、重念右道筋見分仕申候、然上にも先

年入込候哉、手排の筋も無之やと、所々見分相搜候得共、外に疑敷儀無之、前文の通り小屋跡道形の儀のみにて、相替儀無御座候、猶更梅谷頂より後立山續際迄罷越候へ共、右之外無覺束儀も見分不仕候、尤も後立山並に餓鬼ヶ岳及び蓮華岳迄の間、信州路より越可入込儀迚も、嶮岨通行相成申箇所にては無御座候、乍去道筋より入込人可有之も其儀難計御座候、右後立山際より罷歸り、尙更打返見分不仕候に付、前文之道筋通り信州路へ移り、夫より又候黑部針木峠を越、同落合へ昨夜小屋着仕候、依て右道筋等、素繪圖一枚相添、此段御達申上候、

天保九年戌六月十五日

繪圖は既に散佚してしまつたものか、見當らないのは實に惜しいものである。文中の小狹は何と讀むのか判斷に苦しむが、私の考ではスバリと讀むのではなからうかと思ふ、或はコスバリと讀む方が適切であるかも知れぬが、當時辻本君の一行が命名したやうに大小スバリの名があつたと考へることも餘りに拘泥し過ぎる嫌がある、想ふに辻

本君が「後立山連峯縦断記」の中に「信州の方言スバルは狭まるの意に當るものゝ如く、此附近の山谷の急峻なることを形容するものゝ如し」と說かれたのは、頗る當を得た解釋で、信州では古く針木峠をすばり越と唱へて、針木越とも針木峠とも呼んでゐなかつたらしいことゝよく一致してゐる。享保年中の編纂に係る信府統記の安曇の條を見ると、

越中飛驒信濃ノ三國境ハ、深山ニテ山名モ無シ、峯ヨリ東面ハ信濃國ナリ、西ノ方ニテ南ハ飛驒北ハ越中國トス　是ヨリ北ヘ信濃國ト越中國トノ界ハ山深ク嶮岨ナル故通路ナシ、四シ山中ニだいら川ト云フ川アリ、是ヲ界トスルナリ。だいら川ハ加賀川ノ入ニテ、野口澤本谷ノ北すばり越ト云フ邊ヨリ奥ヘハ通路ナシ。此すばり越ノ邊マテモ山師釜人ノ外ハ行クコトナシ、夫ヨリ北方ニさらく越ト云フ所アリ、昔シ天正年中信長公ノ臣佐々内藏助、越中國ヨリ此さらく越ヲ通リテ、當國ヘ來ルコトアリシト云傳ヘタルハ、此邊ヲ越テ加賀川ニ沿ヒ、野口村ノ方ヘ出テタリトカヤ。だいら山ヨリ越中國立山ノ信濃堂ナトイフ所見ユ、山傳ヒニ立山マテ五里許リモアルヘキナリ是ヨリ越後越中信濃三國界マテノ中モ國境分明ナラス

といふ記事がある、勿論此書は松本藩の編纂したものであるから、他領の山川には不行屆の點もあらうが、兎に角すばり越といふ名の方が信州では普通に行はれてゐたものと見ることが出來やう。

◎雜錄　後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎

針木峠といふ名は越中方面の稱呼であつたものが、後に一般に行はれるやうになつたものと想像して不都合はあるまい。此等から推して私は小狹をスバリと讀み、現今の針木岳スバリ岳等を指したものと認めたい。越中遊覽志に所謂針木に當るものである。

栂谷頂といふのは遊覽志の所謂栂で、越中の稱呼である。其澤はどの澤に當るかといふに、下新川郡史稿の黑部川の水系を記述した文を讀むと容易に判斷することが出來る、其文には斯う書いてある。

水源より凡三里にて西側より下り谷落合、更に下ること約三十町にして、東の方より岩苔谷落合ひ、凡そ三里にして南の方より中嶽谷落合、一里にて東の方より針木谷落合、其の西側よりは越中澤落合、立山の東にて御前澤谷落合、凡そ一里許りにして東より栂谷落合、西岸より內藏助谷落合、更に東岸より後立山谷落合、東岸よりは餓鬼谷落合、更に樺平の向に於て東岸より祖母谷川落合云々。

◎雜錄　後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎

御前澤の下凡そ一里許にして、內藏助澤と相對して東から落ち込む澤といへば、赤澤である、乃ち栂谷は赤澤と同じ澤であることが分る、從つて栂谷頂とあるものは赤澤岳と異名同山であるに相違あるまい。

前記の推定に據つて山見廻りの道筋を想像して見ると、針木岳附近から尾根傳ひに赤澤岳に登り、更に進んで後立山の續際まで行き、「前文の道筋通り信州路へ移り」とあるから、其邊の道形を辿つて信州方面へ出で、針木峠を越えて出發點に歸着したのであらう。尤もスバリ、赤澤共に、信州細野入より黑部山へ入込む向寄の箇所とは受け取れぬ、細野入からは反て五龍、唐松、白馬の方へ入込むのが順であるから、私の解釋の仕方は誤つてゐるとの非難があるかも知れないが、當時細野入から黑部奥山へ入込む者があるといふ風聞があつたので、見廻りの役人は唯だ風聞の儘さう書いたものと大ざつぱに解釋してよからうと思ふ。

栂谷頂は赤澤岳或はも少し之を押し廣めて其連脈鳴澤岳、岩小屋澤岳等をも含むものとして、後立山續際とは何處をいふたものであらう。若し種池平の邊であるとすれば、後立山は祖父ヶ岳を指したものと考へられるし、又夫が冷の池附近であるとすれば、其山は鹿島槍ヶ岳を指したものと考へられる。(尤も種池の邊であるとしても、續際の文字を廣義に解釋すれば、比較的低い祖父ヶ岳は之をさし措いて、鹿島槍をさしたものと取れぬこともないが)。これだけでは後立山の特長が記載してないから、鹿島槍であるかそれとも祖父ヶ岳であるか、何とも判斷の下しやうがない。唯だ後文に後立山竝に餓鬼岳及び蓮華岳と駢記してあるので、少くとも後立山は栂谷頂から餓鬼岳に至る間に位する一個の山體の名であり、且つこのあたりの山の中で後立山といふ大名を與へらるゝに充分なる資格を有するほど傑出してゐる山である事が察せられ、從つて鹿島槍ではないかとの考を起さしむるのであるが、これは推測の範圍を脫して想像の域にまで進入した說であるかも知れぬ。序に書くが、此文で見ても餓鬼岳は國境山脈の一峯でなければならないと思ふ。餓鬼の田から餓鬼谷、

其上流に蟠る五龍岳は、或は餓鬼岳の名で呼ばれた事がないとは限るまい。

前に記した小狹栂谷兩山の私の解釋が誤りないとすれば、見分記の山名の記載は幾んど全く遊覽志と同じである。しかし若し私に後立山と鹿島槍ヶ岳とは同山であることを證據立てる材料がこの二つより外になかつたならば、如何に向ふ見ずで物好きな私でも、此文を草する氣にはなれなかつたであらう。幸に尙一つの材料がある、日本山嶽志の記事がそれだ。

後立山　越中國下新川上新川ノ二郡信濃國北安曇郡ニ跨ル、登路未詳（補遺には「下新川郡山崎村大字山崎ヨリ十里ニシテ其山頂ニ達ス」とあり。恐らく富山縣統計書に據りて補はれたるならん）。

この僅に五行に足りぬ文字が、遊覽志や見分記の記事に極印を打つもので、中下新川二郡及信濃の北安曇郡に跨る山といへば、鹿島槍ヶ岳の外には斷々乎としてない筈である。私は見分記や遊覽志の文を讀んで頻りに頭を惱してゐる間に、なせ幾度となく目を通した山嶽志の此記事に早く想ひ到らなかつたかと、其迂濶さを思ふて苦笑せずにはゐられなかつた。尙ほ念の爲に地理局蒐集の郡村誌の記事を抄出して置く。

後立山　本郡（下新川郡）ノ極南ニシテ、中新川郡ノ界ニ在リ、信濃國北安曇郡ニ跨ル。

是に至つて私は後立鹿島槍同山說を主張して、梃でも動かぬ考である。

餘談として五龍のことも少し書いて見たい。

元來山名の起原は一樣ではないが、平地から容易に山體を望むことが出來ないやうな深山であれば、其山から發源する澤の名で呼ぶのが普通である。獵師や山稼ぎの人などが或澤を遡つて、ひよつこり今まで知らぬ山の頂に出る、それで便宜上何澤の頭とか何澤の岳とか呼び慣はしてゐたのが其山の名となることが多い。然し山の名から澤の名が導かれることも少なくない。後立山谷なども其一の例であらう。越中側から後立山に登ることは、尾根傳ひ又は澤傳ひに登るにせよ、現今でも非常に困難である事實から察して、これは矢張り

◎雜錄　後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎

◎雜錄　後立山は鹿島槍ヶ岳に非ざる乎

立山附近から望見して名付けたものに相違ないとすれば、下新川郡史稿に謂ふ所の後立山谷は、つまり山名から導かれたものであつて、棒小屋澤か新越澤の孰れか一に當る譯であるが、棒小屋澤の方が後者よりも遙に適切であることは云ふ迄もない。中村君の話に據れば、音澤村の佐々木助七は現に棒小屋澤を東ゴリョウと呼んでゐるさうである。(同人は棒小屋澤と向ひ合つて西から黑部川に落合つてゐる劒澤のことを西ゴリョウと呼んでゐる。同じやうな澤が東西から本流に落ち合つてゐる際、一方は名があり一方は名がない場合には、單に東西を冠して同名で呼ぶことは珍らしくない)。後立山谷がゴリョウと呼ばれる爲には、後立を音譯してゴリフ、ゴリュ乃至ゴリョウと呼ばれるやうになつたものと見るのが至當であらうと思ふ。

北城村では五龍岳を劍菱岳と唱へてゐなかつた譯であるが、ゴリフの名も全く知られてゐなかつた譯ではないらしい。十五六年前にあの邊を旅行したことのある私の友人は、其時土地の人から大黑岳の南の山を北ゴリフだと敎へられ、更に其南には南ゴリフと呼ぶ高い山のあることを敎へられて頗る得意となり、さういふ山を知つてゐるかと聞かれたのには大に閉口した事がある。今思へばこの南ゴリフは確に鹿島槍のことであらう。獵師などが後立山の名を越中の同じ仲間から聞いて、而も二山(鹿島槍及五龍)の孰れが夫であるか判然せぬので(或は判然しても便宜の爲に)南北を冠して區別してゐたのが傳つたのかも知れぬ。東谷(越中の稱呼)のことを北城の人夫が南ゴリフ澤と呼ぶのは、鹿島槍即ち南ゴリフから出る澤である爲に名付けられたものと解せぬこともない。古く越中の所謂餓鬼ヶ岳は、或はこの北ゴリフを指したものではないかと想はれることは前に述べた。然し以上はすべて私の臆說であるに過ぎない、間違つたら御敎示は謹んで受けるが、矢面に立つことは御免を蒙りたい。

要するに後立山は鹿島槍ヶ岳のことであつて、それが一遷して其邊一體の山を指す名に用ゐられ、ゴリフと音讀され、更に南北を分ち、再遷して單に北ゴリフのみの稱呼となつたものと考へら

れる。私は信州梓山村の三方山が次第に其附近の山の總稱となり、甲武信岳の名が世に顯はるゝと共に、三寶と字を代へて其北隣の山名となつたことを認容するのと同じ理由で、後立山（シロウタテヤマ）ではない此山に、偶然とはいへゴリフ、ゴリュ乃至ゴリョウ共に融通のきく五龍の二字を當てたのは、大に妙であると賛成する者である。（木暮）

八ヶ岳の北

八ヶ岳の記事は本誌に度々出でしことありて、其信州方面も亦甲州側の登路も、人のよく知る處にて今更に追加する事なけれども、其れより北部の山岳に關しては、蓼科山を除いてはあまり記錄なきが如し。目下手元に既刊「山岳」の一部分を有するにすぎざれば、多少の誤あらんも、予の知れる限りにては、本誌第四年第二號に、篠原志都兒氏の筆になる處の「横嶽登攀遊草」なる記事あるのみ、これには紀行の後に案内を略記しあれば、登山者には參考となること少なからず。又此横岳登山發足地より立科に登る記事は、同年第一號に「諏訪方面よりの立科山」なる題にて辻本博士の掲載さるゝ處あり、尚同博士は其記事中にも、横岳に登山せんことを勸められたり。

八ヶ岳以北蓼科山に至る間の雄大なる連峙を一眸に收めんには、諏訪郡の湖東村、豐平村等に屬する或る地を以て最上とすべし。此方面より見る時は、稍弧を畫きて走れる連山を其凹側より見るを以て、凸側に當れる千曲川流域より見ると異りて、全容を最明瞭に認むることを得ると同時に、其距離も近ければ、晴天の日、殊に午後、湖東村の南大門附近に立てば、連峯の小皺まで手に取るが如く見えて、地理學的の觀察を行はんには絶好と云ふ可し。本誌第一年第三號一六六、一六七頁に出せる城數馬氏のスケッチより、諏訪郡に於ける東望が如何に壯大なるものなるかを窺ふに足る可し。

八ヶ岳山彙中、狹義に於て八ヶ岳と呼ぶ可きものは、專門學者の研究によれば、西岳、編笠岳、權現岳より、最高峯の赤岳を經て横岳に至る迄に

◎雜錄　八ヶ岳の北

て、之に接して北に硫黄岳（又箕冠）あり、それより甚しく低下して夏澤峠に至れり。此までは人のよく知る處にして、此處に予が蛇足を添ふるを要せず。夏澤峠以北は、是に接して直に根石岳あり、三個の奇峯鼎立するを見る可し、殊に其中央の者は著しく崩壞して赭赤色の膚を露はす處何となく愛山家の好奇心を唆るに足れり、其中最北の一峯は大正三年出版の五萬分一の地圖に天狗岳と記すものにして、高距二六四五米突を算すといふ。根石岳の北には、二五〇〇米突にも足らざる中山、丸山の平凡なる二峯あり、望見する處何等の奇もなく、登躋の價値もなきが如し、只丸山の肩に位する高見石は眺望大に良しと聞けど、予は未だ之を實見せず。丸山は北に緩漫なる傾斜を以て大石峠に臨み、其北に茶臼、縞枯（シマガレ）の二山あり。茶臼は何等の奇なきが如しと雖も、縞枯は全山を蔽ひて生ぜる針葉樹の或者が枯死して横に數個の縞を織出せるを以て名あり、古來諏訪の七不思議の一なりとか聞けり。此枯木帶は樹木が充分生長して或年齡に達すれば自然枯死し、暗綠色の間に白褐色の横縞を現出するものにて、數年を經れば幼樹再び此處に生じて枯木を隱すと共に、同樣の枯木帶を生ずるものとか、故に所謂「縞」は移動して定まらずといふ。今此處に其原因を臆測するは、假令抹殺の恐れなしとするも、餘りに主題に遠かるを以て記さず、只其現象を記すに止めて、山林家の研究を俟たん。縞枯山の北に續きて偉大なる横岳あり、八ヶ岳の横岳と同名にして異物なり、暗黑色の巨巖針葉樹の間より露出して、登躋の困難を思はしむ。横岳の北に其の一支峯とも見る可き大岳あり、それより一度低下し、二子池より再び僅に上り二二二三米の無名（地圖上にて）の一峯を起し、更に百餘米突を下りて大河原峠の頂上に至れり、大河原峠の西南は直に蓼科山にして、之を以て此山彙の北鎭となす、標高二五三〇米突と註せらる。

以上列記せる內、夏澤峠以北の山岳にして、登躋の面白味あるは、根石、横岳、及蓼科の三峯となす可し、而も予は其の何れにも登りしことなくして、大膽にも本篇を筆する所以は、他日此方面

の山野を跋渉せられんとする人士に根據地の概況を報じて多少の參考の資料となさんと欲するに外ならず、若し自身登攀の機あらば重ねて報告するを怠らざる可し。

一、蓼科山、　本山の登路に關しては已に辻本博士の精密なる記事本誌第四卷第一號一一一頁以下に出でたれば、予が敢て蛇足を添ふるの要を見ざれど、只一言したきは、根據地としては北山村湯川よりも瀧ノ湯を選ぶ方得策なるが如し、此地は湯川を去る一里許にして、道路よく馬を通ず、瀧ノ湯には温泉宿一軒あり、甚壯大なる建築にして、私設電氣を起し電燈を用ゐるを以て、燻りたる洋燈など用ゐるよりも清潔にして不快ならず、温泉は其温度體温よりも稍低く、多量に流出して十數本の瀧となりて懸れり、夏時は數百名の浴客あり、伊那郡の客最多きを占むといふ、飲食物に不便を感せざれど、自分の嗜好にかなへる鑵詰などを携帶すれば更に可なる可し。只登山に最不便を感ずるは適當なる案内人常住せざるが故に、萬一浴客中にて同行を諾するものを得難き時は、豫め湯川又は芹ヶ澤にて適當の人夫を得る事を宿に交渉する必要あり。蓼科には可なり明なる路あるが如くなれば、入口さへ見當ればあとは迷ふ事少なからんと考へらる、五萬分一の地圖に示せる路の外、更に大河原峠道を登りて約一七五〇米突の地より左折して蓼科に向ふ路あり、標木を立てゝ示しあれば之を見出すこと難からず、後に至つて此れが地圖上にある路と合するものなるや否や予は確言することを能はず。

立科山は辻本博士も言はるゝ如く、高山植物採集の爲め、又は興味多き登山を行はんが爲めには不充分なる可しと雖も、寧ろ山岳のパノラマ的大觀を擅にせんには他に比類稀なる山なるべし、所謂日本北アルプス、中央アルプスは申すに及ばず、南アルプスの一部も駒ヶ岳山塊の後方に現はれ、金峯國師の方面を言はゞ裏側より見る可く、東方には遠く會津の燧ヶ岳より日光の白根を萬山の中に識別すべく、東北には淺間以北の諸山重疊するを認む可し。北方には戸隱、妙高を前にし、其左には白馬以南の連山波濤の如く起伏するを見る可

し。

二、横岳、横岳も同じく瀧ノ湯を根據地とすれば、一日にして上下し得可しといふ、但し本山には登攀するもの極めて稀なるを以て、良導者を得るを要し、又多くの困難あることを覺悟せざる可からず。登路は五萬分一の地圖に示せる點線により て縞枯山と横岳との間に出で、遂に尾根に出で て郡界を傳ふより他の方法なきが如し、下山路は大岳に出で、出來得べくんば二子池に下り、それより路なき草原を少し登りて南佐久郡鬱ノ口より大岳川に沿ひて大河原峠に出づる路に出で、標高二二二三米突の峯に登り（峯頭には小石祠と破壞せる三角櫓二基あり）大河原峠の頂上に下るを最良とす。二子池より大河原峠頂上の稍南に出づる點線の路は道路困難なる上何等の面白味なし。

元來此邊の山には笹の密生せる所多く、地圖に荒地の記號を以て示せる所は大抵笹原なるを以て其用心ある可し。又大河原峠の路は近く大修繕を施して、南佐久郡より諏訪郡への通路となす計畫ある由なれども、現今は極めて狹き山路にて、馬をも通せざる惡路なり。

三、根石岳、予は此山の登路を確むる機を失したれば、今責任を以て述べ難きも、恐らくは本澤温泉より夏澤峠に出で、それより郡界について登り得るならんと考ふ。下山路は澁湯より稻子湯に通ずる間道に出で、再び本澤に戻るも、或は塲合によりては澁湯に出づるも可なる可し。

四、丸山、特に何等の奇なきが如しと雖も、或は高見石に登り、或は白駒池（牛池）を訪はん人は、澁湯を根據地とするを可とす。此地は海拔千九百米突に近く壯大なる浴舍ありて、夏時は浴客の群をなす者數百名に上り、八ヶ岳山彙の浴塲中最繁盛を極む、而も食物は甚粗惡なる由なれば、其覺悟を要するや言を俟たず。

本篇を終るに臨み、八ヶ岳山彙中登山の根據地となし得べき温泉に到るの道程を記す可し。

一、本澤温泉、近來鐵路によりて中央線茅野驛より、槻ノ木を經て本澤に至る人多し、時間の經濟上と、登山前に山彙の大部分を見得る點とに於て此路は獨特なる可きか、然し裾野を登るダラ長

き路は夏澤峠の近くに至るまで、木蔭なくして甚暑きを覺悟せざる可からず。南佐久郡の馬流又は海尻より稻子を經て登る道は東京より行く場合、前者に比して不便稍多けれども、路甚ものゝ趣味は一層深きものあり。予私に思ふ、夏澤峠は佐久より登りて諏訪に降る可きものなりと。

二、澁ノ湯、本澤温泉より根石岳と中山との間を過り、二里餘の險路あり、通過不可能ならざれども針葉樹林中に道を失はざらん樣充分の注意を要すべし。

諏訪郡方面より行くには茅野より須栗（スグリ）、笹原を經て上るべし、道路甚よく、又往々標木を樹てゝ路を示しあれば迷ふ患毫もなし。途に明治ノ湯あり、澁川溪間の小浴場にして二屋に分れたり。此溪の兩岸相せばまりて景佳ならずとせず、殊に秋期に於て良し。明治湯は澁ノ湯を距ること一里とす。

三、瀧ノ湯、茅野驛より山寺、松原、芹ケ澤を經て到るを順路とす、四里餘あり、茅野より湯川行の乘合馬車あれども、寧ろ人夫を賃して荷を負はしめ、自身徒歩するにしかず、但し茅野驛前の人夫（車夫）は甚不廉なり。

瀧ノ湯附近には尚小齊（コサイ）ノ湯及新湯の二浴場あり小齊ノ湯は瀧ノ湯の數町手前より右折して達す、小浴場にて甚しく衰微せるが如し。新湯は昨年迄の浴場主極めて不評判にて浴客少かりしが、本年より新浴場主を得て、或は改善されんかと聞く。此邊の浴場は村有にして、毎十年入札を以て村民に貸與する慣例なれば、浴場の取扱振は往々變化あるを免かれず、温泉の榮枯盛衰亦之に伴ふを見れど、最繁榮せるは澁ノ湯にして、瀧ノ湯、新湯、明治ノ湯之につぐ。澁ノ湯の南半里許の地に唐澤ノ湯あり。白濁せる硫黄質の温泉にして、浴客亦少なからず、近來夏澤峠の直下諏訪郡側にも一新浴場設置されて、本年頃より開業さる可しとか聞けり。

瀧ノ湯は附近の丘上よりの眺望甚佳なれば數日の滯在に倦かざれども、盛時は浴客充滿して逗留に不便なしといふ可からず、殊に浴客の種類は箱根、伊香保等に於けるものと雲泥以上の差あれば、温泉場といふ名稱に捉はれて多少の贅澤を豫期す

◎雜綠　八ヶ岳の北

る時は大失敗を招くを注意せざる可からず。

瀧ノ湯より明治ノ湯へ一里、澁ノ湯へ二里にして達す。途上の眺望惡からず、只往々草刈路ありて不明なるとあれ、概して十字路等の附近にある標木を賴りて路を發見することを得べし、只五萬分一の地圖上に明治湯の西北數町の所にて、澁ノ湯路と瀧ノ湯路と交叉するが如く記せる地點は、實際は十字路をなさずして✓字なりの路と∧字なりの路と數間を距てゝ背合せをなすに過ぎざれば、注意するを要すべし。更に注意を要するは諏訪郡にてはウツカリ俚人の言を信ずることなく、寧ろ地圖をたよりに磁石と相談して步行するを安全の策とす、然らずんば意外なる廻路をなすか、乃至は飛でもなき所に迷ひ込む恐れなしとせず。

（笹魚生）

相州蛭ヶ岳

登山前記　相州の大山と云へば昔から大分參詣者も多くあつて、東京とは離れられないよい山の樣に思へるが、そのすぐ裏の丹澤山となると大分深山の樣に話されてあつて、同人間でも先年武田久吉君が登られた（第八年五五二頁所載武田久吉君の丹澤山參照）の位であまり記錄を持て居ない、更に其奥の蛭岳となると、この丹澤山塊の最高點で兼ねて相模國の最高所であらうが、一向に顧られない樣に思はれる。

自分は以前から、この山塊が好きであつたが、つい近い處にある樣に思はれて何時でも行けると云た樣な氣がする故か、つい〳〵登る機に接しなかつた、大山へは二三回登つたが、明治卅八年に高野鷹藏君達の一行が塔ノ岳へ登られた折（第一年第一號五八頁所載高野鷹藏君の塔ヶ岳參照）にも御誘を受けて御伴をするつもりで居たのが、つまらん用事でつい志をはたし得なかつた樣なわけであつた。

其後たしか明治四十一年であつたと記憶して居るが、同志四人で、最高點の蛭岳を目掛けて出掛けたことがあつた、其の折には同志の一人山川默君が豫め、登山の根據地と思ひ得る山麓の靑根村

にあてゝ問合せの手紙を出して、同地の井上喜助氏と云はれる方から親切に御返事を得て居たので九月末にちと惡るい天氣を推して、市河三喜、武田久吉兩君をも御誘して四人で出掛けたのではあるが、青根は與瀬、上野原兩驛いづれよりも三里ときいて居たので、與瀬驛で下車して相模川を渡つて對岸の日連村へ行つて人夫を探したが、如何した工合か一人もなかつたので（こゝの河原やその附近は紅葉が非常にいゝ處故秋に遊びに行くにはよい處だらうと思ふ、然し妓樓がある位ではあるが、碌な食物なんかは無さゝうな處ではあるが）可なり重い荷を各自に擔いで歩き出したが、峠樣の處を一つ越えて篠原と云ふ處であらうと思ふ處へ出た時分には頗弱つてしまつて、道々の景は惡くもないのだがそれを眺めて居る元氣もなく、愚圖愚圖して行くわけなので思ひの外時間がかゝつて、殊にそれからの道が妙に曲りくねつて迷ひさうな氣がするので大に困つたが、それでも親切な醉拂ひが案内をしてくれたり等したので大久和、小船等を格別迷ひもしないで、道志川畔の長俣へ出たのはもう日暮で、與瀬から五時間以上かゝつたと覺えて居る、それから對岸へ渡つて道をきゝきゝ漸く上青根の井上氏方へ八時過に着いたのであつた、そこで井上氏の御親切に甘へて同家へとめて頂いて、同氏の推擧によつて杉本斧吉と云ふ老人を案内者に賴む事として、斧吉に萬事を相談した處、蛭岳は青根の裏から燒山から蛭岳へとつながつて居る尾根の山稜へずつと登つて、山稜傳ひに頂上まで登るがよからう、それからは目下の處路が荒廢して居て歩きにくいが山稜傳ひに丹澤山まで行く事も出來る、それから尙塔岳へ出て松田惣領なり曾屋へなり降りる事も出來ると云ふ話しで、大に氣に入つたが、蛭岳へ尾根傳ひに登るのはどうも妙でない樣に思はれるので、青根から道志川を溯つて行き其支流の神野川を溯つて、蛭岳へ登つて行くと云ふ案を相談した見た處、神野川の上流は崖もひどいし、以前あつた道も全く荒廢したであらうから頗困難だとは思ふが、まだ跡は處々あらうから登り得るであらうと云ふ話なので、それではその案を執る事にしやうきつと上流

は面白いに相違ないと一同賛成してその事に定めたが、其翌日から雨になつて翌々日も頗惡い天氣で荒れると云ふ方ではないのだが、雲切れさへもなく降つて居るので、とても出發する氣になれず、と云つてとても天候恢復の見込はないのでとうとう登山の念を斷つて斧吉老人に四人の荷を背負つてもらつて、上野原へと出た、この道は與瀬への道とちがつて頗分りよく且樂で——尤も荷が無かつた事を考へに入れねばならぬが、一方雨が降つて居た事故、差引大した違ひはあるまいかと思ふ、——青根から四時間とはかゝらずに上野原驛へ出られた、これが失敗の第一回である。

其次には、大正元年の秋に獨りで再擧を計つたが上野原から出發して長俣へかゝつた頃に妙に天氣が惡くなり出したので少々心細くなつたが、兎に角月夜野へ行つて宿屋へ泊つて案內者を賴んで——當時の手帳をなくして宿も案內も名を忘れてしまつた、三十餘の口の重い男であつたと云ふ事だけは手帳へ書かなかつた爲に今でも記憶して居るが——翌日をまつたが朝霧雨が降り出したので

宿できまつ事とした、處が十時頃に霽れ始めたので、兎に角と思ひ立つて大群山に登る事とした、月夜野から進んで大渡で道志川を渡つて登にかゝるので、道は頗よくついて居るので、殆案內不要であつた、尾根と云ふ程はつきりして居ないので、殆平を登るのではあるが、急と云ふ程ではなし、雜木の間も別に引かゝる心配なしに二時間半程で頂上（海拔一五八八米）の標石についた、此大群山は東京の方から見ると立派な金字塔形をして居る樣に見えるが、實は東西に長い幅の狹い頂上をもつて南北へ下つて居る山なので、其上も大群山から西へ行く程低下して居て、其西の端が加入道（海拔一四一九米）に當つて居るわけである、加入道から直接に、道志川の岸へ降りる道があるとの事を後にきいたが、其時には知らなかつたので——五萬分之一圖に示してあつたのだがつい宿に忘れて登つたのだつたらうと思ふ——自分は舊路を月夜野へ歸つてしまつた、其翌日は再雨になつたのでまた、また蛭岳を斷念する事として神野川を溯つて蛭岳と大群とをつなぐ尾根を横切る峠——大犬

越路と云つたと覺えて居る、其他に小犬越路と云ふのがあるかも知らぬが聞かなかつた樣だ――を越えて中川村へ出て神繩村から東海道線の山北驛へ出て歸京した――この大犬越路の中川村へ降る處は頗面白い道で、晴れて居たら眺も仲々よからうと思ふ處があつた、紅葉は大變によかつたと覺えて居る――これが失敗の第二回である。

二度ある事は三度あると御幣をかついだわけでもなかつたが、何だか氣が進まなくつて其後ついつい行かなかつた、尤も東京で富士山を見るとすぐ蛭岳が目について、登りたいなと思はせるし、相模野に遊びに――小島烏水君の相模野の一文にそゝのかされて一度遊んでから、自分は相模野が大好きになつた、淵野邊から西南の林（土地ではヤマと云つて居る樣だ）が最相模野的ではあるが、それへ近づく道がまた面白い――行く爲に八王子から南下して御殿峠を越える時等は峠の景色も頗面白いがその背景となつて居る丹澤山塊を見るとたまらなくなるのである、その度々の刺戟でとうとう思ひ切つて大正三年の九月に三度青根へ行つた、天氣は依然として惡い、然し雨が降らないのをせめてもの心やりとして燒山の尾根に登りはじめた――此折の案內は前々年に大群山へ行つた男である事しか覺えて居ない――やがて山稜へ登りつくと吉例の雨がはじまつたが、スヽキの中を苦しんで案內者の導くまゝに登つて行くとひどい笹原に出た、はじめは案內がしきりに鎌を振つて見たがとてもやり切れないと云ふので、惡辣無雙にガサ〳〵やつて行くと路があつた、占めたと思つて進むと頗心細くなつて來てとう〳〵消えてしまう、またガサ〳〵やつて行くと路がと云た風で處々路の跡がある、――後で知つた事だがこゝは根氣よく探しさへすればちやんと通れる路はあるんだとの事だ、然し案內を知らないでは迷ふ事請合と云てよろしい程度のものらしい――その內に笹は無くなつて木立に入る、其頃は雨も激しくなり風も强くなつて頗心配にはなつたが、雨具の用意は充分だし、辨當も二食分ある事故とに角進む事にした、處がその森がとてもひどいもんで倒木があるのはまだしも低い枝が無暗に出て居てあらゆ

る處に引かゝる、午前十時頃なのにうす暗いのは天氣の故ばかりではない樣だ、それでも流石は案內者で多少の上下はあつたし一寸急な處もあつたが大體としてはたいしてひどくもない登りでどうやら蛭岳の頂上の標石（海拔一六七八米）をめつけ得た、然しその時分には殆完全な嵐になつてしまつたので眺望どころか一向頂上の樣子も分らぬのでとても前進の見込はなし、愚圖々々して居ると歸る事さへ怪しくなるので少し辨當を食ただけで引返す事にした、木立の中はそれでも登りよりは樂であつたが、笹原へ出ると、急に思ひ出したかの樣に風が當て出してまるでやり切れない、と云て這ふ事も出來ないので、案內者の後にくつついて引づられてゞも行く樣にがき〳〵降りた、笹原を出てまづうまいと思つたのは大考違ひで、スヽキの中を進むのゝ困難は殆出鱈目であつた、自分は風によりかゝつて歩いたので幾度風に息をされて横倒しになつたか知れなかつた、流石の案內もすつかり弱つてしまつて、自分の後につく樣になつてしまつた、それでも路はどうやら見分け得るので、やつと山稜から左へ降りる處へ來た、こゝから降りにかゝると大分風も尾根にへたてられて勢をそがれて當りが緩くなつたので樂にはなつたそれでも急な處では、下は辷るし風は後から推すし、辷つたり、推されたりして轉げた事もあつたが、輕い打疵と擦疵と半分の辨當とが土產で左したる事なしに靑根へ降りついた、案內者の弱つたのは全く寒氣の爲で、木立や笹原であんまり方々が引懸るので自分が雨具をとつたのをまねたのでずぶ濡れになつたのでやられたのであつた、自分も濡れはしたが氣がたつて居たせいか大してひどい事もなく燒酎の御厄介にならずとも口はきけた——ふるえては居た相だが——この登りは四時間半降りは六時間近くを費したが、普通の天氣ならもつとずつと早くなると思ふ、その翌日强雨をついて上野原へ出て歸京したがこの回は頂上へは到着したには相違ないが、何等得る處はないの故やはり失敗に數へて差支へない方であると思ふこれが第三回の失敗である。

二度ある事が三度あつて、しかも三度目の正直

で手ひどく雨に苦しめられたので、すつかり閉口して蛭岳の話は人にもしない位にして居たが、見ると登つて見たい様な氣はする、何だか癪にさはる様な氣がする、三度ある事は四度あると云ふ話はきかないから今度は大丈夫であらうとも思ふ然しとに角頂上へ立つたのだからもう如何でもいいと思ふ、一向心がまとまらなかつたが、此夏神奈川縣廳で丹澤山へ登る企があるときいて、折角これまで企てゝ居たおいらのお藏へも近々火が付きさうな氣がしてたまらなくなつたので、どうとう今夏第四回の企をやるに至つたわけである、そしてやつと第四度目で成功したわけである。

登山後記　蛭岳と云ふ名から思ひついたのであらうが、この山には山蛭が澤山居ると云ふ話がある、自分は燒山山麓の二三箇所でもこの話をきいたが、何か書物に書てあるのがあつたとか聞込だ事がある、然しこの蛭岳なる名はその山容が毘盧帽子に似て居る事によつて名を得たので、正しくは毘盧岳であるべきのだとの事故——毘盧帽子と云ふのが俗に云ふ尖り頭布の事なら不當な名ではない様に思はれる——山蛭とは全く沒交渉の名であると思ふ實際自分はこの山では山蛭は見かけなかつた、勿論居ないと斷言はしないが、無暗に澤山居はしない事は確かだと思ふ。

蛭岳へ登るには青根の裏から登るのが正道である、神野川を溯る事は出來ない事はあるまいが、頗困難である事は多くのものゝ言に徴して推定し得る、然しその路はよほど面白からうと思ふ、青根から直接に登る方はひどく苦しい處があるわけではないが、隨分面白くない路である、眺望はスキを刈つた後なら（刈らないのなら枯れてしまつて後なら）尾根の下の方はあるであらうと思ふ而して關東平野一目で大によい事であらうと思ふ左様に相違ないと斷言しても宜しい、然し木立の中へ入つたら、葉が皆振つたとしてもさうとはとても行かない事と思つて居る、神野川方面の路の眺望については何等の材料もない全く分らない。

燒山と云ふ山は、毎年火を失して燒けるからだとか聞いた、自然に發するのだとも云ふし、故意に燒くのだとも話す人があるとに角燒ける事は確ら

しい、その山から蛭岳の頂上へつゞく尾根の西に尾根を一寸離れて一寸した頂上があつて標點（海拔一四三二米）がある筈である、こゝは長俣あたりから見るとゆるく尖つて仲々立派で、そこをキビガラとか呼ぶ由を第一回に行た折に醉拂ひに敎へて貰つたが確かだか如何かは知らない、今年自分はわざ〳〵尾根からそこまで行て見たが、ヒメザヽをわけてスヽキをわけて大に苦んで登つたが標石の位置さへ分らぬ程のスヽキで、それが自分の丈より高いので、何も分らず、最高點を踏んだか否かさへ分らずに尾根へもどるの止むを得ざる譯になつてしまつた、勿論大切な地點ではない。

蛭岳へは靑根からでなくとも燒山の麓の西野あたりからでも燒山へ登つて尾根傳ひに靑根からの道と合する事が出來る樣に地圖には書てある、ちと遠からうが、その方が樂かも知れない、その方面の案內者は何處で求められるか知らない、靑根からならば靑根には宿屋はない樣子故月夜野へでも泊つて同所附近の獵師を賴めば大抵は山へ行つた事はあるであらうと思ふ、賃金は對手次第で一向相場はない樣である。

蛭岳から丹澤山へかけては仲々鹿が居るとかで外に鳥や獸も居る事ではあらうが、大分獵師が入る、それ故獵期になつて登れば殆路は踏んであつて非常に樂だと云ふ事である、如何にも左樣ありさうな事だ、それに紅葉も仲々よい樣子故十月末か十一月初が一番よろしからう、スヽキやヒメザヽの中でもがく必要はないし、本立の中もとに角通れるだけに切明けはある相だ、然し獵師等は最高點なんと云ふ處に何等の執着もありはしない事故、頂上まで切明が通じて居るか如何かは保證の限りではない。

蛭岳の頂上から北へ六七町降つた東側にボッチ小屋と稱する小屋が昔あつたと斧吉老人は云た、然しそれは全く廢滅したものらしい、自分が第三回に企てゝ登つた折に頂上から二町程も距つて居樣かと思ふ處に小屋の舊跡にすればなると云た樣な木片があつて、それを組合せてとに角一休して晝食をした事があつた、然しそれは勿論ボッチ小屋ではない。

蛭岳の頂上から丹澤山へは尾根傳に行ける、がこれも獵期でないと仲々困難だ、根氣よく切明けをさがして今夏どうやら通つたが、折々しか切明通りに進まなかつたもので無暗に方々引懸かゝる木立で眺望も何も殆なくつて實に面倒な處でありその蛭岳と丹澤山との間に千六百米以上の高距を持た處がある、斧吉老人はこれを不動ノ峯と稱へた而してその中央の最も高いのに不動が祀つてあると云た、遠望すると三つ位頂上が見える、自分は今夏その山稜を通つたが、その邊で妙に急な登が二箇所程あつたとは思つたが不動ノ峯の頂上に立つたか否かは全く分らない、木立の枝がこんだ中でどつちが高いか、等云ふ形勢は全く分らぬもの故餘程根氣よく時間をかけて歩かないと最高所だけを傳つて行く等と云ふ事はとても考へもつけ得ない、今夏は蛭岳の頂上の標石さへも見付け出さなかつた位であるから。

不動ノ峯の蛭岳寄りの處から南へ下りて玄倉川上流の方へ行ける道がある——と云ふよりはあつたと云た方が宜しいかも知れない——それを行くと山稜から五六町降つて一寸した平な處があつてその一町程下に水がある地點があつた、自分は今夏其處へ泊つたが雨が降らねば三四人の野營には差支へのない處である。

不動ノ峯から丹澤山へ近づくと漸々路はまづよくなる方だ、丹澤山へ中津川の早戸川に沿ふて登つて來る路はかなり立派なものらしく思はれる、勿論通つたのではないが上から見た處では可なり判然とついて居るから。

丹澤山からは塔ノ岳へ出て松田總領へ下りたのだがこの路については前に一寸參照しておいた二つの記文に詳しいので自分が蛇足を添へるがものはない樣である。

丹澤山塊は到る處小鳥が多い不動峯附近の駒鳥なんか五月蠅い程だ鷲も大分きいた、この山脈には熊も可なり居るとの話だが勿論羆である筈はないの故人に害を加へる樣な事は少しもない、蝮は下の方には少しは居るらしいが、自分は一向見かけなかつた。

蛭岳から大群山への尾根傳ひはとても木がひど

◎雜錄　東京市內所望の山岳高度表に就て

くてそれに大犬越路と蛭岳との間に大分惡い處があつて殆出來ないと云ふ話をきいた、難所はちとあやしいが木のひどい事は確かだらうと思ふ、然し切明が全く無い事はあるまい。

登山記　自分は今年の八月末に夜汽車で田町から上野原へ行き長俣で人夫――案內者のつもりだつたが何も知らない男だつたから結局人夫になつたわけだ――の長三郎さんとか云ふのをやとつて米と麥酒瓶四本の水と雨具と火具と其他を用意して青根から第三回の路をたどつて蛭岳へ登つて不動峯の下で泊つて翌日丹澤山へ出て塔ノ岳へ行て松田總領へ下りて汽車で歸京した。この記事を書た處で草いきれと笹と木立の困難――第三回の時より路がやゝ判つて居た處が多かつたし、ちと利巧に立廻つたからいくらかよかつたが、と云てとても樂ではなかつた――とをならべたてるばかりで――雨には會はなかつたが蛭岳の頂上では霧に會たこの外でも左して眺望のある處はなかつたから、而してどんな處を歩いたかは詳しい事は分らないし雜とした處は地圖の山稜に線を引て見た位の處故特に爲になる事もないの故――恐らく汗と云ふ活字が無くなるであらうと思はれる事故、と云てそれを引拔くと前に後記に書並べた事以外に何も無くなる事であるから、本文抜でこれで蛭岳の記事を打切る、もし根氣が續けばいづれ獵期中に登つて見る氣である、而して充分な記錄をとつて來て報告を書く事も出來ませう。（梅澤親光）

東京市內所望の山岳高度表に就て

森林に彷徨ひ幽壑に逍遙するの興趣は、都會の地に於て覺むることは到底不可能である。それ所ではない、わるくすると今に青い物は野菜の外に見られなくなるかも知れぬ。人口の增加と工業の發達とは、一步の地を剩さず寸苗の青を殘さゞらんとしてゐる。殊に彼の煤煙といふ生物に取りて恐る可き大敵は、纔に餘喘を保つてゐる都會の樹木に先づ其害毒を及ぼして、之を枯し盡さゞれば止まざるの勢がある。此の如くにして鳥も鳴かず

蟲も歌はず、殺風景にも目に視るものは煤煙、耳に聞くものは騒音の時代と化し去るの日が遠からずして來るであらう。然れども人は決して自然と離れて生活し得るものではない、或は自然に逆らふて決して生活し得るものではない、自然を嘆美するは即ち自己の生命を嘆美するのであるからだ。富める者が其邸宅に廣大なる庭園を營み、貧しき者が緑日の草花に九尺の陋屋を飾るも、自然を樂しみ自己の生命を樂しまんとする所以であつて、吾等が萬難を排して山に登り谷を探るのも畢竟この心が更に強烈の度を增して發現したものに外ならない。天外に湛えたる積翠、雲表に閃く白雪の句を煤煙と騒音との巷にあつて樂しむことを知るものは、何たる幸であらう。

東京市内から望見し得る山岳の目錄は、本誌八年二號九年一號及び十年一號に挿入せるスケッチに據りて、日光火山群の一部、高原幷に那須火山塊の外は畧ぼ盡されてゐるが、今其中から二千米突以上の高山を選びて列擧すれば、凡そ左の如くである。

◎雜　錄　東京市内望の山岳高度表に就て

山名	（米突）位置	眺望の場所
龍ばみ山	（二〇一二）秩父山塊	市内北部の高臺。
雁ヶ腹摺山	（二〇一四）大菩薩連嶺	市内各所の高臺。深川八幡の富士。
雲取山	（二〇一八）秩父山塊	同上。日本橋々上。深川八幡の富士等。
仙ノ倉山	（二〇二六）上越界	凌雲閣。田端。赤羽臺
神樂ヶ峰	（二〇三〇）越後魚沼郡	同上。
上ノ間山	（二〇三三）上越界	凌雲閣。赤羽臺。
八十三山	（二〇三四）上越界	同上。
和名倉山（地圖白石山）	（二〇三六）秩父山塊	市内北部の高臺。
大菩薩嶺	（二〇五七）大菩薩連嶺	市内各所の高臺。深川八幡の富士。
笠取山（地圖笠ヶ岳）	（二〇五八）上野利根郡	愛宕塔。赤羽臺。
大黒山	（二〇六〇）越後南魚沼郡	凌雲閣。田端。赤羽臺
大洞山	（二〇六九）秩父山塊	市内各所の高臺。深川八幡の富士。
大高山	（二〇七九）上信界	凌雲閣。赤羽臺。
山名不詳	（二〇八〇）上越界	同上。
大倉山南峰	（二一二〇）信濃下高井郡	同上。
山名不詳	（二一二〇）上越界	凌雲閣。田端。赤羽臺
白砂山	（二一四〇）上信越界	凌雲閣。愛宕塔。赤羽臺
皇海山	（二一四三）最高點上野利根郡	凌雲閣。愛宕塔。田端
苗場山	（二一四五）信越界	赤羽臺。
武尊山	（二一五八）上野利根郡	凌雲閣。田端。赤羽臺
御飯岳	（二一六〇）上信界	凌雲閣。愛宕塔。田端赤羽臺。
		凌雲閣。赤羽臺。

◎雜錄　東京市內所望の山岳高度表に就て

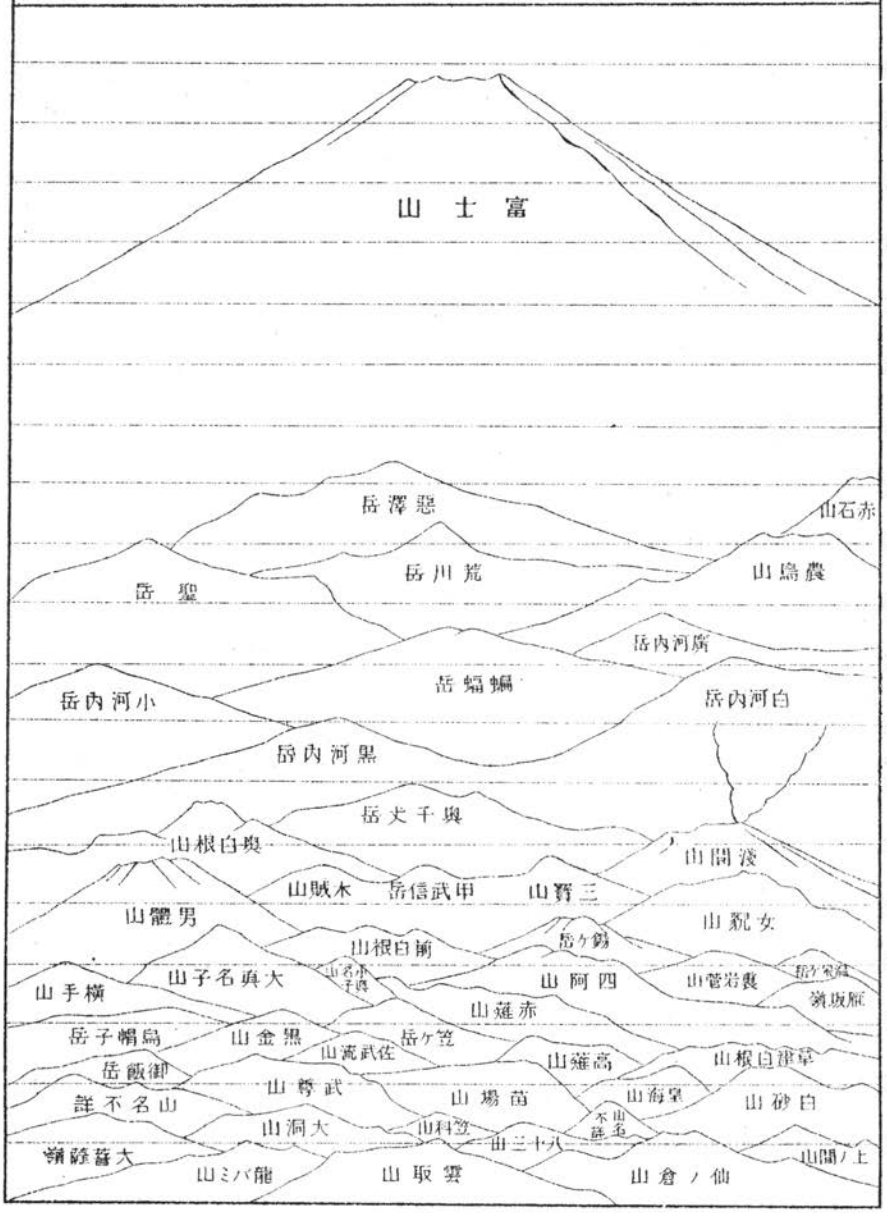
草津白根山（二一七六）上野吾妻郡　凌雲閣。愛宕塔。赤羽臺
高薙山（二一八〇）下野塩谷郡　凌雲閣。田端。赤羽臺
外山（二一九〇）下野上都賀郡　同上。
佐武流山（二一九五）信越界　凌雲閣。赤羽臺。
烏帽子岳（二二三〇）信濃下高井郡　凌雲閣。愛宕塔。赤羽臺
黑金山（二二三二）甲斐山梨郡　市內北部の高臺。
山名不詳（二二三二）日光湯元の北方　凌雲閣。田端。赤羽臺
笠ヶ岳（二二四六）上野利根郡　同上。愛宕塔。
赤薙山（二二七二）日光火山群　同上。
山名不詳（二二八〇）日光溫泉岳北方　同上。
雁坂嶺（二二八九）秩父山塊　凌雲閣。駿河臺。牛天神。本鄉元町臺。
前岩菅山（二二九五）信濃下高井郡　凌雲閣。赤羽臺。
橫手山（二三〇五）上信界　凌雲閣。愛宕塔。赤羽臺
破風山（二三一七）秩父山塊　凌雲閣。駿河臺。牛天神。本鄉元町臺。
小眞名子山（二三二二）日光火山群　凌雲閣。田端。赤羽臺
裏岩菅山（二三二九）信濃下高井郡　凌雲閣。愛宕塔。赤羽臺
溫泉岳（二三三三）日光湯元西北　凌雲閣。田端。赤羽臺
四阿山（二三四〇）上信界　凌雲閣。赤羽臺。
大眞名子山（二三七五）日光火山群　凌雲閣。愛宕塔。田端
前白根山（二三七七）同上　同上。
錫ヶ岳（二三八八）上野州界
女貌山（二四六三）日光火山群
木賊山（二四六八）秩父山塊

甲武信岳（二四七五？）同上　一六〇
三寶山（二四八三）同上
男體山（二四八四）日光火山群
淺間山（二五四二）上信界
大唐松山（二五五五）甲斐南巨摩郡
日光白根山（二五七八）上野州界
國師岳（二五九一）甲信界
奥千丈岳（二六〇〇）甲斐山梨郡
黑河內岳（二七一八）白峯山脈
小河內岳（二八〇一）赤石山脈
白河內岳（二八一二）白峯山脈
蝙蝠岳（二八六四）赤石山脈
廣河內岳（二八九一）白峯山脈
聖岳（三〇一一）赤石山脈
農鳥山（三〇二六）白峯山脈
荒川岳（地圖擅見岳）（三〇四六）赤石山脈
赤石山（三一二〇）赤石山脈
黑澤岳（地圖東岳）（三一四六）赤石山脈
富士山（三七七八）甲駿界

同上。
日本橋々上。愛宕塔。
青山練兵場。
大學赤門前。凌雲閣。愛宕塔。田端。赤羽臺
凌雲閣。愛宕塔。赤羽臺
高輪御殿山。
凌雲閣。愛宕塔。田端
赤羽臺。
愛宕塔。青山練兵場。高輪御殿山。
同上。
愛宕塔。高輪御殿山。
愛宕塔。
行人坂。高輪御殿山。
愛宕塔。凌雲閣。青山練兵場。高輪御殿山。行人坂。
愛宕塔。
高輪御殿山。池上にては間ノ岳を望み得。
愛宕塔。青山練兵場。
行人坂。高輪御殿山。
凌雲閣。牛天神。（駿河臺。本鄉元町臺。）
凌雲閣。愛宕塔。牛天神。駿河臺。本鄉元町臺
市內隨所。

二千米突以上十四座、二千百米突以上十一座、二

東京市内及近郊所望二千米突以上山岳高度表



備考

東京市内ノ高臺高塔若クハ近郊ヨリ望見シ得ル二千米突以上ノ山岳ハ總計六十座ヲ超過スルガ如シ今茲ニハ主要ナル者五十座ヲ揭グルノミ山名不詳トアル者ノ中一ハ上越國境ノ上ノ間山ノ東ニ聳ユル二千八十米突ノ尖峰他ハ之ガ東ニ對立セル二千百二十米突ノ長大ナル連峰トス共ニ山名ヲ知ラザルモ展望上重要ナルヲ以テ特ニ採錄セリ

千二百米突以上八座、二千三百米突以上九座、二千四百米突以上五座、二千五百米突以上四座、二千六百米突以上三千米突以下六座、三千米突以上六座、總計六十三座を數ふることが出來る、尙ほ此上に一二座を加ふることはあつてもこれより減ずることは決してない。二千米突以上の山を斯くも多數に望見し得る所は、それが山岳地の都會であつても珍らしいことであらう。其點からいふと東京市が日本最大の平野たる關東平原の東隅に位してゐることは、望岳都として眞に好位置を選んだもので、今少し西であつても或は北であつてもこれ丈の山は望めないことになる。殊に三千米突以上の山になると富士山を除けば一つも見えなくなつてしまふのである。尤も南の方川崎邊からは白峯三山が望まれ、北の方下野の東部からは日光火山群上に掲げた山岳を(一)上野州界及日光火山群(二)上越信越及上信界(三)奥秩父(四)赤石山系等に分つと、(一)が十七座、(二)が二十座、(三)が十四座、(四)が十一座の割合となり、更に之を南北に二大別すれば、北が三十七座、南が富士山を加へて二十六座となる譯である。

　展望の場所は何といふても淩雲閣が第一で、次が愛宕山の塔である。殊に愛宕塔は其所からでなければ見られない山が二座ある、即ち小河内岳と聖岳とが夫だ。但し玆に記載した場所は誰にも自由に展望することの出來る場所を擧げたのであるから、此外にもまだ幾多の好展望臺の存してゐることは言ふ迄もない。現に淩雲閣や愛宕塔から見て、あれに登つたならばと思ふ公私の建物は非常に多い。若し淩雲閣や愛宕塔が取り毀たれた曉には、望岳家に取りて大なる損失であるには相違ないが、以上の諸山が市中から望見されるといふ事實は決して變るものではない。

　高度表は以上の諸山の中から五十座を選んだものであるが、能く見える山で掲げてないものもあ

◎雜錄　東京市內所望の山岳高度表に就て

り、絶頂若しくは其一部しか見えぬ者でも、全體を望み得るが如くに最負目に書いたものもある、例へば小河内岳の如きは頂上のはづれから右の斜面へかけて見えるに過ぎないが、想像を加へて全體が現はしてある。從つて山の形も實際に近きものもあり、又想像的のものも少なくない。農鳥山の如きも實際とは大分異なつてゐる。要するに形に於ては餘り正確なものでないと御承知を願ひたい。（木暮）

黑部峽谷の春

峽谷の春程來ることの遲くして、過ぎゆく事の早きはあるまい、十二月の初め頃から降り出した雪は、翌年の四五月に至つてまだ消えない、陽春三月、世は春の風に音なはれて、近道山野には、はや菫や蓮華草の、ちらほら咲き初むるとも、峽谷にはまだ春の音沙汰もない。

四月の初頃、煙の樣な小雨が、しんみりと降り濺ぐと、南向の谷々では雪が融け初める、實際峽谷の春信は雪融の遲速に支配されてゐると云ひたい、同じ谷も南向と北向とでは一月位の差が生ずる、雪が融けかゝると、もう其下に生白い下草が芽ぐんでゐる、之れがさし初むる春の陽光に、二三日も照らされると、其芽が著るしく膨らみて芽が伸び、蕾が破れる、かくていつしか春の色に輝き渡るのだ。

南向の谷では若草が萠え初めて、美しい花盛であるのに、向ひの谷ではまだ雪深い冬の觀を呈してゐる事は珍しくは無い、それで山の尾根一つを堺に、こちらではもう花が終つて果實を附けてゐるのに、あちらでは同じ植物であり乍ら、まだ漸う雪が消えた許りの、じぶじぶした泥に塗みれた枯葉の間に、靑白い首を擡げた許りなのに驚く事は屢々である。

四月の下旬になると、近い谷々ではもう大概雪を見ない、其頃になると、內山の桃平や、ウナヅキ谷あたりでは、桑などの下蔭に、アサツキの靑いのが、なつかしく萠え初めて、其間に赤紫のカタクリの花の濃艶なのが、廣くて白粉を帶びた、

チユリツプに似た葉の間から抽き出たのが、一面に咲き亂れてゐる、雜木の間には、暗紫色の四瓣のマンサクの花が咲いて、ダンカウバイや、サンシュユの黃色の花と共に、風鈴の樣なキフヂの花の垂れてゐるのも面白い、谷合の水田にはころころとタニシが鳴て、山椿の咲いてゐる雜木林の間に、雉子のほろゝうつも此頃である。

山地の春は何とも云へぬ長閑さだ。

四月の末から五月に入ると、峽谷では一日毎に暖い風が、谷から谷へと吹き渡る、而して暖い小雨の能く降るのも此頃である、此れが四五日も續くと、谷々の雪が驚く許りに融けて行く、而して今まで谷々に懸つてゐた雪橋には、大きな龜裂が出來て、片端から、がわりがわり落ち込んでゆく これが黑部の本流に落合ふと、さなきだに怒り狂うてゐる激流が、益奮族の榮えを矜るやうに、関を揚げて下流へ下流へと荒ぶれて行く、途中に遮る何物をも粉碎し、破壞し、押流さずには措かないのだ、此時だ、國有林の吊橋を押流したり、下流では堤防を破つたりする。

◎雜錄　黑部峽谷の春

かくして雪も大方消えて、木々の梢も漸く芽ぶくれて、下草などが急に春めいて來る。

峽谷の温泉では、もうそろ〳〵湯を開いて、ぽつ〳〵湯に行く人もあるのだ、此頃になると「佛石」あたりから、黑部の谷々に、イハウチハの咲き續ける樣の美しさ、深山の春としては、第一に私は此花の美しさを想はずには居られない、長い葉柄の先に、丸形の厚い光澤に富んだ鋸齒のある常綠葉が、短い莖から叢生して、其間から三四寸の花梗を抽いて、徑一寸にも及ぶ櫻色の切れ込みのある、合瓣花を一つづゝ附けてゐる。

それが小首を傾けて、横向きに咲き匂ふてゐる風情の可憐なる、それが落葉灌木のまだ冬木立の根方を占めて、一面に咲續いてゐるのだ、岩の上と云はず、崖の間と云はず、さし初むる春の陽光を浴びて、咲き匂ふてゐる、如何にも艷麗で、如何にも高潔な感がする。

惜しい事には、春の峽谷は殆んど訪ひ來る人が無い、偶々黑薙あたりの湯に通ふ人達の通る位のものである、併しそれが此植物には、どの位心長

閑な春であるかも知れない。

イハウチハと共に深山の春を飾るものに、雪割草がある、黑薙や鐘釣などの、木立深いあたりの雪の村消えの處を見ると、三角形のさゝやかな、薄い常綠の葉の簇つてゐる間から、四五寸の花梗を數多く抽いて、總の樣に群つてゐる、之れが白いのや、淡赤いのや、交りなどの小さな可憐の花を附けてゐるのだ、而して一重のもあれば、八重のもある、花屋では福壽草などゝ共に、早春の床を飾る爲に、葉を除つて花ばかりなのを、室咲として賣出してゐる、併し此花は矢張り深山の殘雪の間に、春の柔かい陽光を受けて咲いてゐるのは其の天眞を發揮してゐる譯で、そこらには山櫻や山椿や、キフヂなどの一群づゝ咲き匂つてゐる下蔭に、ちらほら見えて、如何にも柔かな、深山の春の情趣の漂うてゐる氣分がする。

是等と共に目を惹くものには、ミヤマカタバミがある、三つの小葉からなつて、春早く雪消を待つて咲き出る、樹立の深い陰濕の地に咲いてゐる、白色五瓣で、光線の少ない下蔭に、きつぱりと咲いてゐるのは、如何にも淸楚で高雅である。

峽谷の春は、はかない程短い、五月の末になると、林道のあたりでは、雪は大方消えて、木の葉が一雨毎に伸び出す、而して雲の變化の多い新綠の夏となるのである、而して次第に暮れ行く峽谷の春を飾るものは、實に石楠の花であらう。

五月の末六月の初頃になると、黑部の谷々は石楠の花に照り輝くのである、常綠の長く厚い深綠色の、全緣葉をつけて、妙に枝張つた灌木の梢に淡紅色の躑躅の樣な、大形合瓣の花が簇つてゐる、それが峽谷の林道を歩くと、頭の上と云はず、足の下といはず、或は岩脚にぶつ突かつて、白沫を揚げてゐる激流の間に、垂れかゝつてゐるのだ、黑薙の附近にも多いが、石楠の壯觀は何と云つても鐘釣から祖母谷に行くあたり、殊に小黑部の登り詰や、猿飛附近や、祖母谷の途中などに多く、殆んど行く處として此花を見ざるは無い。

石楠は岩壁の地に最も多い、梅とか姫子松とか、チズコなどのどす黑い常綠樹の根元、又は一般に青梁のあたりを占めてゐるのが常である。

石楠は矢張り深山で見るべき花である、殊に岩角の峙つた間に、咲き撓んでゐる此花を通して、遠く白雪に被はれた高山を望む時、深山的氣分がしみじみ味はれるのだ。

高楠博士のヲポール國の旅行談中に、ヒマラヤ山中、八千尺の月山横斷中、此花の美觀に就て述べて居られる。

『其山の頂上近くなると、悉く石楠花であつて、淡紅の色で全山が滿ち〳〵てゐる、路の兩側から花が人の顏を照らして面白い、此花の山から前を見ると、眞白な雪山が屏風の様に大空に横つてゐる、石楠塡澗絳霞簇。雪嶽撐空白玉浮、と云ふ拙作は實景である、自分の目の前に石楠花の赤い霞が湧き立つてゐる、其反對に眞白な廣大無邊なる雪山が、清らかに見えるので、自分は自然畫中の人となつて、無窮の眞理を瞬間に感得した様な心地がして、天下の絶景とはかやうのものかと思ひました』

ヒマラヤ山中の石楠花の壯觀は、世界に有名なものであるが、一たび黑部山中の春を訪れた者は、眞に此花の美觀を知る事が出來るであらう。

此等の深山の美觀も、遂に見る人なしに其盛を空しく過すのである、而かも其處に幽邃にして閑雅な、深山の春の情趣が漂うてゐるのだ。

長閑な暖かい風が木々の若芽を吹いて、一日毎に綠の色を增して行く、遲咲きの山櫻が尙あちこちに咲き匂ふて、遠くに筒鳥がポンポン！ポンポン！と鳴いてゐる。

恁くて峽谷の春は夢の様に過ぎて、白雲の奔騰する夏に移り行くのである。（吉澤庄作）

しらたまのき

高山の喬木帶に廣く分布して居るシラタマノキは、多少植物に注意する登山家の熟知さるゝ處であらうと思ふ、信州の諸高山、殊に八ヶ岳に七月中旬頃に登ると、喬木林の綠や、岩石の間に、其可憐な花を見ることが出來る。花は數個集つて總狀花房をなし、其各は帶綠白色で其形は一寸アケビの花に類し、大さは直徑曲尺二分に滿たぬ程の

小さなものである。

八月の末から九月にかけて登山した人は、此植物の果實が漸く膨大して、且白色を呈し初めるのを見るが、其れが充分成熟するのは九月の中旬から十月にかけてゞあらう、躰積は花の八倍もあらうかと思はるゝ雪白色の果實が枝頭に累々として下垂して居るのは、花のない此頃の山路を飾る唯一のものであらうか。

果實は挿圖1に示した様なもので、之を上面から見ると、挿圖2に於けるが如く、五つの切込みがある。八月頃此果實が未だ若い時分には、堅くてカリ〳〵して居るが、充分成熟したものは、いくらか軟くなるので、此五個の切込みを無理に開くと、挿圖3に示した様な工合に、中に本當の果實があつて、彼の雪白色の多肉な部分は、果實には屬して居ない事がわかる。事實、雪白色の部分は、花時微細なりし蕚が肥大し、且多肉となつて果實を保護するにすぎないのである。果實は通常花柱を伴ふて居る、そして、子房は元來五個の心皮が合一したものであるから、熟すれば五ツにわれ、中から無數の微細なる種子が出でる、種子は挿圖4——9に示した様なもので、緣に狹翼ありキールを具へ、色は淡褐色である。

再び蕚に戻つて一言する必要がある。元來シラタマノキ屬の植物は、何れも花後蕚が肥大するもので、熟すれば紅色（例へばアカモノに於けるが如く）白色（シラタマノキ）或は藍黑色を呈するに至るのである。斯の如く蕚が肥大生長する例は少くないもので、サクラサウの蕚も花後著しく膨大するが、これは多肉にはならない、且大して果實を保護もせぬ様であるが、ホヽヅキの類では蕚が膨大して果實を全部包んでしまうのはよく人の知る通りである。

シラタマノキに於けるが如く蕚が肥大生長して且多肉となれば、果實が保護さるゝは論ずるまでもないが、後來此美しい雪白色の果實が鳥などに啄まるゝ機會を偶然作らないとも限らず、隨て此植物の分布を助くる術ともなることがあらうと思はれる。

充分成熟した蕚の內部は柔組織より成り、これ

を貫いて蔓の各裂片に至る維管束即ち繊維が走つて居る。柔細胞の一個を取出して顯微鏡下に窺へば、其形には多少の差があるが、概して挿圖10に示した様なもので、胞内は細胞液で充ちて居て、之を縦横に縫ふて顆粒質の細胞質が恰も蜘蛛の巣の様にかけわたされて居る、そして之を熟視すれば徐に流動して居るのが見える。細胞の略中央に位して一個の核がある、恰も蜘蛛の巣の中央に蜘蛛が留つて居るやうな工合である。核の中には一個の仁が明に認められる。シラタマノキに限らず水氣ある果實は斯様な柔細胞が多く集合して形成するを常とするのである。（武田）

日本の山地に見るオダマキの種類

日本の庭園で、春の花の一つに數へらるゝオダマキは、人のよく知るところのものであるから、今更精しく述べるにも及ばないが、夏月山地に向ふと、再びオダマキの種類に出會ふものである。

◎雜　錄　日本の山地に見るオダマキの種類

登山者が必ず通過する山麓帶――中部日本で海面上三四千尺迄の地――にはヤマオダマキがある、高山の絶頂附近にはミヤマオダマキ一名ヒメオダマキの生ずることは、多少なりとも山地で植物に注意した人のよく知つて居る處である。

ヤマオダマキは莖の高さが一尺以上もあつて、枝の頂に帶黄色又は黄褐色の花を着けるものである。北海道へ行くと海拔何程もない平地に、已にヤマオダマキを見るが、其の花を仔細に檢査すると花瓣の後部が長く延びて作れる、いはゆる距が、甚しく花の中央に向つて彎曲して居る。然るに内地に見るヤマオダマキは、距がまがらずに、殆んど眞直にツンと立つて居る。此の點は可なり變化不同がないので、據て以て此の兩者を區別する要點と見做すことが出來る故、距の曲つて居る方をエゾノヤマオダマキとし、距の直なるをヤマオダマキと呼ぶことゝする。

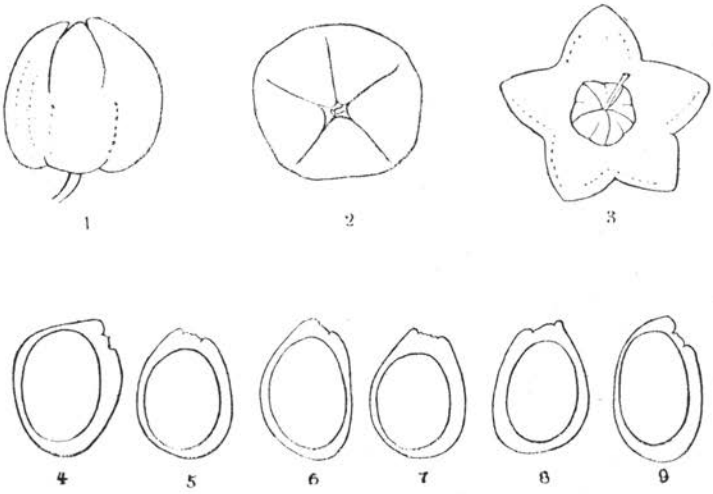
さて此の内地にあるヤマオダマキは、萼が褐紫色で、瓣のみの淡黄色のものと、萼が淡黄色にやゝ綠を帶び、瓣と同じ様な色をなして居るのがある。

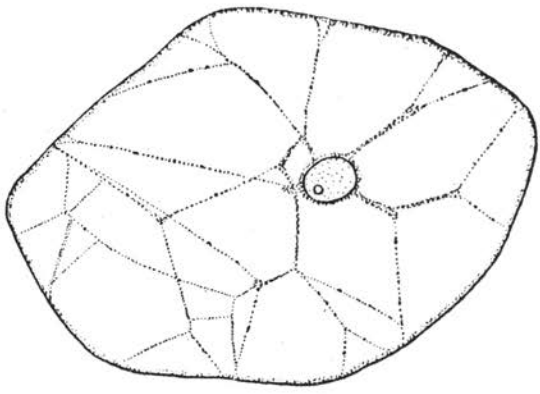
此の兩品は時に相接近して、兩者の中間とでも言つた樣な色をなして居るのもあるし、又蕾の中は蔕が紫褐色を帶び、花が開くと淡黃となるのもある故、種類が異るどころではなく、別の變種とする程の價値もない、只一變品として取扱つて置くだけである。

次に高山の頂上のミヤマオダマキなるものは、庭園に見るオダマキによく似て居る、そして其の異る點は只形が小さく、草もやさしいだけで、他には少しも特異な點を見出すことが出來ない。從來區別の要點として知られて居たのは、ミヤマオダマキは距が眞直で、又若い葉柄などに少しばかり毛があるといふ位であつたが、高山のものを澤山集めて見ると、距は或は極微しか曲らないのやら或は著く彎曲して居るのやら種々あつて、之を以て兩者の區別をなすことは不可能である、また庭園のオダマキも精密に檢査すると、若い時にはミヤマオダマキと同樣に葉柄などに毛がある、只此の他に異る點を求むれば、常のオダマキは莖葉が、ミヤマオダマキに比して一般に强壯で、白粉が多く、蔕と瓣の幅が狹く、距が著しく彎曲して居ると云ふにある。

嘗ては庭園のオダマキの原產地は北海道の山地と考へられて居つた、然るに北海道の高山にあるのはミヤマオダマキであることが知られ、隨つてオダマキは產地が再び不明となつてしまつた、予の考では、庭園のオダマキは元來ミヤマオダマキから出たもので、多分日本北部の山民が、ミヤマオダマキを山から採り來つて培養し、これがよく風土に馴れて、數百年後の今日では、今見る樣なオダマキに變化し了つたものであらうと思はれる。

ミヤマオダマキは日本本嶋の諸高山、蝦夷（即ち北海道本嶋）の高山より、千嶋及樺太に迄產する、海外ではこれと同一のものはないが、只西比利亞にシベリアオダマキとも稱すべき Aquilegia sibirica といふ種類があつて、日本のミヤマオダマキによく似て居る、たゞそれが日本のものと異るのは、莖上に著く葉の數が多いことで、花は少しも異らない、そこで、ミヤマオダマキをば、その





10

1. シラタマノキの果實×2.　2. 同じく上面より見る×2.
3. 多肉なる萼を開きて內部を示す×2.　4.–9. シラタマノキの種子×30
10. シラタマノキの成熟せる萼の肉を成せる柔組織の一細胞×400.

變種と見做すことが適當であると思ふ、そして庭園のオダマキは其の亞變種となすが宜しからう。

前記のヤマオダマキは日本本嶋以外に生ぜぬ樣であるが、エゾノヤマオダマキは、東部西比利亞にも分布して居るもので、古くから知られて居るものなので、我がヤマオダマキは其の變種として取扱ふ譯である。

最後に學名を列記して、其れに和名を配りて見ると左の通りである。

Aquilegia sibirica Lam.

var. flabellata Finet et Gagn.

ミヤマオダマキ

Subvar. hortensis Tak.

オダマキ、これには種々園種に見るところの變形品があるが、山地に自生するものでないからこゝには省略することゝする

Aquilegia oxysepala Trautv. et Mey.

var. typica Tak.

エゾノヤマオダマキ

var. Buergeriana Tak.

ヤマオダマキ

forma discolor Tak.　夢の紫褐色のもの

forma flabescens Mak.　夢の帶黄色のもの

（H・T・）

◎雜　錄　臺灣の高山

臺灣の高山

臺灣の高山に就ては曩に報道せし處ありしが其後實測の進むに從ひ漸く眞相を明にし來り今や臺灣全島中實測を了せざる區域は南部蕃界の內本鹿社附近の一小部分となり而かも一萬尺以上の高山は全部の實測を終りたるを以て最近の調査に依り七千尺以上の高山を紹介することゝせり元來臺灣の中央山脈の殆んど一萬尺以上の標高を有する者も無人の域未だ命名せられざるもの多きを以て今は只其名あるものゝみを掲ぐることゝせり。

從來山岳標高の差異に付二、三氏より垂教或は照會を寄せられたる向ありしが其差異は要するに初期の概測と後日の實測の結果の相違にして今回の發表は目下の處最信憑すべきものとす現に陸地

測量部に於て三角測量に從事しつゝあり其結了は更に一層の精度を高むるを得べしと雖現在の測定は測地學上相當の手段を講じたる結果なれば大差なきを斷言するに憚らざるなり余は臺灣蕃地の地形測量を主宰し今日に至れる緣故に依り茲に高山表を調製して同好諸士の一粲に供す。

富士山其他の內地高山中余が曩に例示せる標高に付高頭義明氏より是正を蒙りしが感謝に堪へず內地山岳の高程に就ては確實なる資料を有せり偶々參照せるものゝ精確を缺き誤を傳へしは慚愧に堪へず然れども我臺灣が高山國（タカサゴ）と稱せらるゝ如く內地の高山に比して著しく峻秀なるは爭ふべからざる事實にして而かも其雄大壯嚴なる所謂山岳秀靈の氣磅礴として帝國南方の鎭護として卓越せるを見るべし臺灣蕃界の探檢測量家にして久しく蕃界に出入せる財津久平氏の撮影せる「シルビヤ」山及大覇尖山の寫眞數葉を揭げ以て聊か此光景を彷彿たらしめんとす。

臺灣高山表

I	一萬三千尺以上　一座				
		1	新高山	三、九五二尺	
II	一萬二千尺以上　七座				
		2	新高南山	三、七六八尺	
		3	新高西山	三、六九八尺	
		4	マボラス山	三、五六〇尺	
		5	南湖大山	三、五三一尺	
III	一萬千尺以上　十九座				
		9	薺萊主山北峯	二、八五五尺	
		10	東郡大山	二、八五五尺	
		11	大雪山	二、八〇〇尺	
		12	大覇尖山	二、七九二尺	
		13	雲峯	二、七七八尺	
		14	薺萊主山	二、六五五尺	
		15	東巒大山	二、四三六尺	
		16	合歡山	二、二〇〇尺	
		17	北合歡山	二、二〇〇尺	
		18	東合歡山	二、二〇〇尺	
IV	一萬尺以上　二十一座				
		28	卑南主山	一〇、九〇五尺	
		29	千卓萬山	一〇、九〇三尺	
		30	カシバナン山	一〇、八六九尺	
		31	郡大山	一〇、八六五尺	
		19	南玉山	二、九一尺	
		20	桃山	二、八八尺	
		21	シンカン山	二、五七尺	
		22	畢祿山	二、五一尺	
		23	丹大山	二、二四尺	
		24	白姑大山	二、〇五三尺	
		25	薺萊主山南峯	二、〇〇三尺	
		26	南双頭山	二、〇〇〇尺	
		27	能高山南峯	二、〇〇〇尺	
		32	タロコ大山	一〇、八六三尺	
		33	卓社大山	一〇、八一六尺	
		34	小關山	一〇、七四〇尺	
		35	能高山	一〇、七三二尺	

累計　二十七座

累計　八座

累計　四十八座

36 屏風山 一〇、六三二尺
37 大武山 一〇、六五五尺
38 尖山 一〇、六三三尺
39 パトツノフ山 一〇、六三〇尺
40 ハイノトーナン山 一〇、四七八尺
41 マピーサン山 一〇、四五〇尺
42 白石山 一〇、三五四尺

VI 九千尺以上 十七座

49 望鄉山 九、九九二尺
50 雲水山 九、九三四尺
51 ブラクサン山 九、八七三尺
52 ロンダブレ山 九、七七七尺
53 治苅山 九、六三三尺
54 石水山 九、五八三尺
55 ココルボ山 九、五一四尺
56 平岸山 九、四〇〇尺
57 石山（阿緱） 九、四九三尺

VII 八千尺以上 二十四座

66 キナツー山 八、九五四尺
67 石山（嘉義） 八、八九〇尺
68 三雞山 八、八八二尺
69 鹿場大山 八、八五六尺
70 大塔山 八、八三〇尺
71 溪南山 八、七一〇尺

累計 六十五座

43 ウハノシン山 一〇、三二四尺
44 安東郡山 一〇、一九三尺
45 巒大山 一〇、一五〇尺
46 關門山 一〇、〇三三尺
47 大石公山 一〇、〇二〇尺
48 小雪山 一〇、〇一三尺

58 鹿林山 九、四六四尺
59 錢頭雁山 九、四四四尺
60 八通關 九、三七四尺
61 南面山 九、三三二尺
62 南大武山 九、二四三尺
63 霧頭山 九、一三三尺
64 東埔山 九、〇六九尺
65 スーラバタン山 九、〇六五尺

78 塔山（嘉義） 八、三一六尺
79 木瓜山 八、二九七尺
80 祝山 八、二五三尺
81 塔山（花蓮港） 八、二一八尺
82 新望嶺 八、一八七尺
83 萬歲山 八、一七〇尺

累計 八十九座

72 水山 八、六六九尺
73 兒玉山（阿里山） 八、六五六尺
74 二子山 八、五〇〇尺
75 杉山 八、四四一尺
76 リンバラバラ山 八、四三一尺
77 郡坑山 八、三五六尺

90 ポアーバ山 七、九九八尺
91 守城大山 七、九八二尺
92 霞山 七、九五〇尺
93 八仙山 七、九二四尺
94 マリコワン山 七、八四七尺
95 透仔火山 七、八二六尺
96 知本主山 七、八一七尺
97 カラサン山 七、七五五尺
98 東洗水山 七、七五九尺
99 シャカロー大山 七、六四三尺
100 稍來山 七、六三六尺
101 チガチガル山 七、六二〇尺
102 鹿屈山 七、六一〇尺

VIII 七千尺以上 二十六座

103 針山 七、六〇〇尺
104 タナイク山 七、五九四尺
105 烏松坑山 七、五三五尺
106 三星山 七、四七四尺
107 加裡山 七、四四五尺
108 五叉山? 富山 七、二五四尺
109 飯包服山 七、二五〇尺
110 鳶嘴山 七、二三五尺
111 水社大山 七、二〇二尺
112 タマレ山 七、一四六尺
113 マイバライ山 七、一四五尺
114 バボークル山 七、〇六三尺
115 金柑樹山 七、〇二四尺

累計 百十五座

84 ダイボボ山 八、一四〇〇尺
85 對高山 八、一〇一尺
86 ゲリロー山 八、〇五〇尺
87 清水山 八、〇六六尺
88 七脚川山 八、〇四五尺
89 シツキュス山 八、〇三〇尺

◎雜錄 臺灣の高山

一、一萬三千尺以上　一
二、一萬二千尺以上　七
三、一萬千尺以上　一九
四、一萬尺以上　二一　計　一一五
五、九千尺以上　一七
六、八千尺以上　二四
七、七千尺以上　二六

（臺灣　野呂寧）

「菅沼」なる名稱に就て

前號四三頁に上州利根郡山中の一湖菅沼の名稱に就いて一言せる折、生憎地質調査所の地圖を參照する機なくして止みしが、其後明治二十一年出版の同圖を見るにこれにも菅沼と記しあり、されば此名は可なり古より用ひられあるものなるを知る可し。而して是はスガヌマと讀む可きものにてスゲヌマにてはあらず、或學者がスゲの類の多く生ずる事もなきに菅沼と呼ぶは名實相そはずと言はれしを聞きたれば、一寸附言すること然り。

又本誌前號に「……笈岩なる名は笈沼にちなんで命じたものかと云ふ說もあるが、……」は笈沼なる名は笈岩にちなみて命せるものと記す可かりしを、かく書き誤りしか、又は印刷の誤かにて、辻褄の合はぬ樣なりしは申譯なし。尙序に一言すべきは、「笈沼」なる名は陸地測量部の二十萬分一輯製圖に出でたる外に、予は見受けたる事なし、水產講習所一派の人々は此名を用ひらるゝ樣なるが何か根據のある事にや、或は單に從來の慣例に據るにや不明なり。（武田）

山中の傳說

○山村には山に關する傳說も少くない。此等の傳說にして自然界に關係するものは今日の科學の立場から考へて見ても、萬更有り得べからざる現象でない樣に思はれるものもある。

○或る高山の頂上附近に一つの深い沼があつた。此沼には主が住んで居る。一般に主と言ふのは沼なら沼全體を統御する王者の樣な意味で、普通龍大な魚族とか蝦蟆とか龍又は大蛇の樣なものが主になつて居る。基督敎などの「主」とは全然其意

味が違ふ。さて此沼の主は何であつたか確めた人もないが兎角甚だ尨大な恐しい怪物である事は一般に信じられてゐた。昔一人の旅人が山路を辿つて此沼のほとりに休息した。其日は非常に静穏な好い天氣で沼の水は鏡の様に光つて周圍の景色が皆綺麗に水底に映つて居る。沼の主も静穏に任せて安らかに眠つてゐた。旅人は此の静な光景に見とれてゐたが少し退屈になつたのでフト戯ら氣を起して、小石を拾ふて沼の中にボンと投げ付けた、之れが爲に繁吹が飛ぶやら泡が立つやら、水面の平和は忽ちに破られ小石を中心に小波は四方八方に波動した。さうして石の落ち込んだ處から小さな白い霧がポツト出來浮き上つて次第々々に上に昇り見る々々暗黒にして濃厚な雲團となつて沼の附近は忽ちに大雨となつた。旅人も此不思議な現象に驚いて後も見ずに急いて山下に逃げて歸つたと云ふ話がある。此事を地方の人々は沼の主の安眠を妨害したが爲に主の怒りに觸れたのだと言ひ傳へて居る。然かも其雨は山上の沼の附近だけで沼から少し離れた處は相變らず晴天であつたさうだ。

○右の傳説中、主の有無や怒りに觸れたとか何んとか云ふ事は別問題として、静穏な天氣に山上の沼に石を投げたのが動機となつて一局部に雨を降らしたと云ふ事は全然否定する事は出來ぬと思ふ

静穏な天氣が續くと空中の細塵は下層に多く上層に至るに從ひ少くなるものと言つて差支ない。空中に浮游する細塵の數は都市では一立方糎中に十萬乃至十五萬田舍は五六萬、海上に數千、山頂でも數百を算すと云ふから、一萬米も高い上層は兎も角、人間が通行する位の海面高の空中では細塵が全然取り去らるゝ事がないであらう然し空中の一局部に就ては細塵が殆んどなくなる事がないとも限らぬ。空中に細塵がないと空中の陰陽イオンを心核として水蒸氣は凝結するものであれど、細塵ある時は水蒸氣の凝結に大に補助をなし、即ち水蒸氣は細塵を核心として其周圍に凝結する。然るにイオンの働き殊に陽イオンなどは過飽和の場合に限られる様であるが、細塵の作用は飽和即ち露點に達すれば直ちに起る様である。空中から

細塵を取り去る時は、空氣が露點を過ぎても或る程度までは水蒸氣の凝結を見ないで所謂過飽和の狀態で居る事がある。其過飽和の程度が進むと空中の陰イオンの働きで水蒸氣の凝結を見るにしても或る程度までは過飽和の狀態で居る。

靜穩な天氣には山頂の如き高い所の空氣は、細塵が一時非常に減少して或る局部には殆んど細塵がなくなつたとする、さうすると其處の空氣は過飽和の現象を呈する事がある。彼の旅人の石を投げた山上の沼の附近の空氣が丁度過飽和の狀態であつたかも知れぬ。其沼の水面に石を投げると同時に微細な水滴が空中に飛び上がつたとすれば、今迄核心となるべき媒介物がないので不本意ながら過飽和で我慢して居つた水蒸氣が沼の水面からは水滴が飛んでくる。水滴に含んでる塵埃も一緒に飛んで來ると云ふ騷ぎで水蒸氣は忽ち凝結して白い霧となり、空中の平和も破れて上昇氣流を生じ凝結に凝結を重ねて、見る々々濃密な亂雲となつて其附近に一時雨を降らしたものかも知れぬ。其山上だけ降つたと云ふのは、山から蒸發した水蒸氣の量だけであるから遠方まで及ぼすことは出來ない高山特有の私雨の現象である。斯樣な氣象的現象に對しても何んとか智情意の解釋を付けて見たがるのは人間の特性と見えて沼の主の怒りに觸れてだとか何んとか言ふただけで、氣象的現象には相當の原因結果があつて何も不思議でない。之れを不思議なりと解釋するが爲に主の怒りの樣な情的解釋を下さねばならぬ樣になるであらう。

右の如き傳說を聞いて主云々の事は否定してもよからうが山上の沼に石を投げたつて雨の降る樣な事は有るべき筈はない、丁度降る樣になつて居つたから降つたので投けた石には關係はないと言ふ事は出來ないと思ふ。

○羽後の森吉山はさう高い山でないが緯度が北によつてるので頂の東北面と暗綠の森林の中には盛夏の候まで殘雪が消えずに居る。單にこれだけの事實に對しても何か智情意の解釋を付けずには居られなかつたものか次の樣な事を言ふて居る。森吉山の主は蛙であるから蛇を恐れて夏でも雪を消さないで秋早く雪を降らすのだ、と。つまり氷雪

を以て蛇を防衛すると云ふのである。こんな解釋を下すに天才を持つたものが地方々々に一人二人ある樣だ。雪の消えない原因を蛇と蛙に結び付けたのは童話として面白いと思ふ。

○秋田縣の北秋田郡と岩手縣との境界山脈は日本本島の中央山脈の一部である、岩手縣と秋田の鹿角郡とは昔れ南部藩で秋田は佐竹藩であつた此兩藩の境界山脈に近い北秋田郡の山村に行けば、南部の殿樣に附いた山の面には五葉の木通が生ひ佐竹樣の面に出來る木通は三葉であると云ふ樣な事を言ひ傳へて居る藩が違へば何事も一致する事は容易でないが木通の葉の數まで違ふ。即ち三ッ葉木通の生える土地は元來から南部藩に屬すべきものでない。三葉木通は佐竹さんに附いたもので植物でも藩主と密接なる關係を有する事を木通の葉を以て例證したのである。實際上境界山脈の東面には五葉木通多く西面は三葉が多い然し何れにしても但一種類に限つた事はない、西にも東にも三葉も五葉もある。之れを其地方の人に言はすれば御維新このかた海內一統の世となつたから明治になつて兩方に三葉も五葉も生えたのだと言ふであらう、植物の分類に依ると木通科にムベ屬、アケビ屬ありアケビ屬にアケビ、ミツバアケビ、其變種にゴエフアケビ Var. pentaphylla, Makino がある。アケビは五葉掌狀複葉、ミツバアケビは小葉三個、ゴエフアケビは小葉五個を有するから昔から此木通の葉に注意を拂つて居つた人があつたに違ひない。

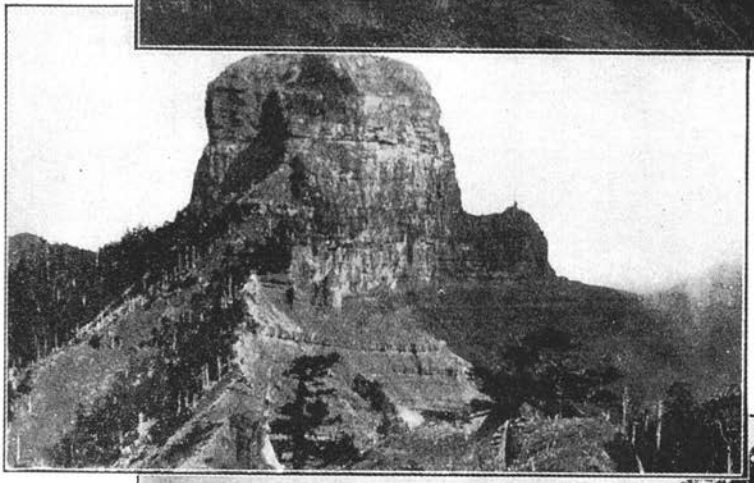
○秋田縣の阿仁地方には柳田國男氏著「遠野物語」にある樣な童話若は神話の樣な傳說が多い今一々それを申述ぶるだけの記憶もないが一般に豪壯の氣に富んだ頗る男性的なものであつて其地方の民族思想を表現せるものである。仙人でも天狗でも神靈でもない豪壯なる人間を理想化して角のない鬼の樣な五體で然かも多少の神通力を有する一種怪偉な「山人」なるものゝ話である。其山びとが雲から生れたか、岩から生れたか、兎も角古い昔から尨然と山奥に存在するものゝ如く、蒼蒼にして頗る粗大な空漠雲を摑む如き中に詩趣溢るゝばかりなりと伊藤銀月氏が何處かで言はれた樣に、

◎雜錄　山中の傳說

他の地方の山男とは其系統を異にし、人間の出來事などに何の干渉もしないで自分の身の廻はりだけの事は自分ですると云ふ樣な極くおとなしく大陸的のものである。容貌怪偉で人を愕ろかす樣な事は決してしないが、せつばつまれば驚くべき怪力で人間でも兩股を裂いて棄てる樣な事は何んとも思はない。奥山に行けば、山びとの作る田と云ふものがある。それは山中の沼澤地や濕地に或る種の水草が群落をなして居る所であるが、それが丁度稻株の樣に點生し、降雨の後などは根株の弱い水草は水流に洗ひ去られ、根株の丈夫なものばかり點々に殘つて其他は綺麗に掃除せらるゝ事になるから恰かも人工で除草して田面を掻均らした樣になつてる事がある。それで之等の沼澤地を山びとの田の樣に言ふ。山びとは容易に人間に姿を見せないものであるが五月頃に奥山に行つたら、山びとが今田から上つて行つたかの樣に田面がところ〴〵に均らされて居つたとか、山びとが田から歸る後姿をチラと見たとか、今日でも眞實らしく言ひ傳へて居る。山びとの有無や、田を作る作らぬは別問題として斯樣な傳說のあるのは此地方の人々の頭腦の創造に係る山びとは、無暗に人里を荒し廻はる山賊的性質は少しも具備しない、自己の生活の爲めに人間に迷惑を掛けない、自分の生活必需品は自分で拵らへると云ふ事を意味するものである。山中の小都會に市が出來ると山びとが人間に化けて簑や笠を着て買ひ物に出る樣に今でも言はれて居る。何處やらの大酒屋に大男が入つて來て一夜に酒を何斗とやらを飮んで錢を置いて姿を隱した、あれは山人であつたと云ふ話もある。神と化物と人間との中性を持つた樣な山びとの事であれば地方の人々は山びとに對して惡感も懷かず敢て怖れもしない、寧ろ理想的豪壯な偉丈夫の表現として之を尊敬するのである。酒屋で人間並はづれた飮み方をすると山びとゝ見込んで酒代を請求しないと云ふ風がある、之れは決して恐しいからでない。怪力や神通力を有しながら人間に害をなさない山びとに對して敬意を表する爲めである。

此等山人の行動に關し理屈を超脫した詩的な童







野呂寧氏藏

上シ大南投ピ尖社ヤ山シ山頂カ頂の奇ウ巖社より見たるシルピヤ山
中下

話が數々あつた樣であるが殘念ながら其一つでも纏つて覺えてゐない。本會々員泉茂家氏は秋田縣北秋田郡の方であり、同地方に永住して山人の物語にも精通せらるゝ事であれば山地住民の頭腦を支配する山びとの物語を此誌上に紹介せられん事を望むものである。（山本德三郎）

空と雲

○私が本誌第十年第一號に書いた山岳の聯想中には、雲を摑む樣な事が大分有つたと見えて、ッルモドキ氏の御忠告に次で今回又森の人氏のお示しがある。無名の吾々が書いた物に間違があつても唯一笑に附し去られるのが恒であるに、「山岳」と云ふものがあるが爲に、吾々如きに對しても篤學の士が續々と忠告を與へて呉れるを悦ぶものである。然し如何なる忠告でも唯聞き流しに沈默して居るのは、忠告者に對する禮儀を失し、折角の厚意を無にするものなりと信ずるが故に、空と雲とに就て再び私の意見を述べて、森の人氏の敎を乞はんと欲するものである。

○現今行はれてゐる雲の分類はホーワード氏の七級法にヒルデブランドソン及アーバークロムビーが多少の修正を加へて十級としたものであるが其創揭はホーワードであつて萬國氣象學會に於て同氏の分類を採用しそれに修正を加へて十級としたものと記憶して居つたのでホーワード氏の分類を採用云々書いたまでで、修正提案者を無視した譯ではない。それにしても字句の足らなかつた點は何處までも私の落度であるからお許しを乞ふとして、雲を十級に定めた西曆紀元と萬國氣象學會開會地に就ては、森の人氏の忠告に依て新しい疑問が起きて來たのである。私が何に據つたのであるか判らないが私の覺帳に「千八百八十九年巴里に開會……」とあり、確實な典籍もなし原書を取寄せて拾ひ讀みしても却つて間違を生ずる元であると思ふて、田舍の圖書館で邦文の氣象學を借覽したら馬場氏の「氣象學」には森の人の言はるる通り、我國に於て明治二十一年一月一日より採用せし雲形階はアバークロムビー及ヒルデブランドソ

ン二氏が多年研究の末に彼のホーワード階級を修正したるものにして明治二十四年（一八九一）ミュンヘン萬國氣象學公會に於て之を萬國共通の雲級と認めたりとある。

然るに農學博士稻垣乙丙氏の氣象學に依れば雲の分類は實用上に於て極めて必要なるを以て千八百八十九年巴里に開かれたる萬國氣象學會は全く人爲的なる一種の分類を採用することとし、雲を分ちて十級となせりこは百餘年前英國ホーワード氏の分類せしに基きたるものにして其原形は左の四類なりとす……以上四原形を結合して更に左の六類あり……とあり即ち私の記憶と一致して居る。森の人氏が理科大學物理學教室の書物や御自分の藏書に倚られた事であれば何れ間違はないであらう。而して若し森の人氏の主張が眞實でありとすれば稻垣博士を初め同博士に依りて教育せられた幾多の農學士及農科大學々生の誤謬を正すことになるから日本國に少なからざる影響を來し森の人氏の効や大なりと言ふべしである。典籍の依るべきものを手にする事の出來ない私には唯之れを疑問として篤學者の教を待つより外はないのである。

○尙同氏は霄壤の差の霄の字を卷雲に當てはめたのに疑念を抱かれた樣であるが之れに就ても少しく自分の意見を述べて見たいと思ふ。

霄の字は高い大空と云ふ樣な意味もあるから霄壤とは天地と解してもよいであらうし雨とかみぞれとか消え易い雪とか種々の意味もあるらしいが、「玉篇」には雲氣也とあり「廣韻」には近天氣也とある。天に近き氣なりの氣は詩文の神氣などの樣に、今で言へば瓦斯體、水蒸氣、雲と云ふ風なものを指したもので此場合雲氣と解釋しても差支ないと或る漢學者も言はれるので、天に近き雲氣即ち最高雲と解釋し卷雲に相當すると自分は思ふだけで、一般世間の人に是認せらるるや否やは問題である。

○次に同氏は色彩と波動說との關係から、私が塵埃のない晴天の靑色に見えると言ふた事を非難せられた樣である。物理學界の一大偉人ニュートン氏が固守せられた微塵說も光の干渉廻折等の諸現

象が發見せられ、フーコーの光速の實測によりて全く敗滅に歸し、今日では和蘭人フイケンスの波動説を無視することは出來ない。扨て私は空の色の説明としてはケムブリッヂ大學總長レエレイ卿の説を最良と信ずるものである。私が水蒸氣、塵埃其他の媒介物がなければ云々と書いたのは……媒介物が小さければ云々の誤で塵埃が小なるときは波長の小なるものを反射し、細塵が稍大なる時は各種の波長を有するもの反射し、細塵は光に對して所謂撰擇擴散（セレクテウスカツタリング）の作用をなし、波長の長きものは其短きものに比し塵埃を通過することが割合に大であり、波長の小なるものは反射せらるることが多い。而して又光が幾多の氣層を通過し數回反射し吾人の眼に入るは其殘物に過ぎぬから波長の餘り小なるものは其大なるものと共に自然に凋落して、中間の波長を有するもののみ吾人の眼に映ずるから細塵が粗大ならざる時は天空青色を呈する譯である。高山の頂に登れば天空の輝きは減じても空の色は鮮かな碧色を呈するは粗大な塵埃が少なくなるからだと思ふ。故に高山の頂からの空の青は濃いと言ふたので、其青は光の波動説に依る青相當の波長を有して居るから青く見えるので青以外の波長を有するものが青く見えたのではない。森の人氏は私が宇宙の光のない部分は青く見えると言ふたので光のない暗黑の部分が青く見えると取られたので、波動説に不突合の樣に思はれたものらしいが、單に天空と言へばよいのを、太陽の近くでない即ち太陽から遠ざかれる天空と云ふ意味に於て宇宙の光のない部分と言ふたのは私の言ひ樣の惡いのであらう。

○尙同氏は私が雲の十階級中の積雲を雲峰に當てはめたのに疑議を挾まれた樣である。

これは邦文で書れた氣象學、地文學の書籍には積雲の記述として大抵「其上面は圓頂閣の形をなし雲峰諸處に起伏す」とか「上部は夥多の圓凸面をなし恰も綿の湧出するが如く即ち雲峰起伏すること多し」と云ふ樣な文字があるから俳諧も露伴も子規も知らない私も思ひ切つて積雲即ち雲峰と言つたまでゝある。

○それから斷崖絶壁より蒸發する水蒸氣は水平面

より蒸發する水蒸氣より濃厚の狀態に上昇すると私が言ふたのに對し、ひどく評すれば荒唐無稽と斷言せられた。全然荒唐無稽と云ふに非ず、ひどく評すればと云ふ有り難い前提が置かれてあるので大に意を强ふするに足るのである。蒸發と、温度、濕度、氣壓、光線、蒸發物體の性質等の關係の如きは六ヶ敷い式をこね廻はさなければならないが、水蒸氣が蒸發する場合に其蒸發面が角度をなせる時は其水蒸氣は濃厚なる狀態に集中すると云ふ事は何も物理學者を苦しめる樣な大問題でないと思ふ。譬へば湯釜の蓋を取り之を裏返しにして水平に保てる時の湯氣よりも、之を斜にした時の湯氣の方が小なる空間に集團して濃密な狀態に上昇する樣に、蒸發面が水平である時よりも角度をなせる場合は水蒸氣は比較的小なる空間を占領して濃厚の狀態に上昇すると言ふた迄で六ヶ敷い蒸發上の研究でなく蒸發した水蒸氣が地形によりて如何なる狀態に上昇するかと云ふ問題であるから、藤原博士の大論文に比較すべきものでもなければ、あれはあれで大した落し物もない樣に思はれる。落し物としては、濃厚な水蒸氣が蒸發面の附近に出來れば蒸發力が鈍るから在程濃密にならないと云ふ關係かも知れないが、直ちに上昇するものであれば此關係は僅少で、矢張り傾斜地より上昇する水蒸氣は平地より蒸發するものよりも濃厚になると云ふ事は、六ヶ敷くこね廻はさくとも言へると思ふ。

○以上は森の人氏の忠告に對する私の感想を無遠慮に述べたのであるが野人禮に習はざる段は偏にお許しを乞ふ次第である。

○レエレイ卿の主張以前にヂョン、テンダルは空の色の說明として高空中には微小な水滴が浮游して、之れが太陽の白光中の青光線を反射するがためであると主張し實驗によりて之を證明したが其後レエレイ卿は小水球のみならず、天空に浮游する無數の細塵に關係するものであると附加した樣に聞いてゐる。

○暗黑な森林とか大なる山岳を背景とせる烟霞は時として青色を呈する事がある。之れは烟霞の小粒は青色光を反射擴散する爲であらうか。太陽や

明るき空を背景として烟霞を見る時は、暗黄色か黄褐色に見える。之は日光が路程の大なる空氣中を通過せんとするや、光の中で波長の長いものは其短きものよりも通過することが割合に大きいものであれば、日光は黄色となり、氣層の厚き時は紅色を呈すると云ふのは眞實の様に思はれる。

○空中に於ける細塵の大小と光の波長の大小とにより光線が通過するか反射するかを極むれば、粗大な塵埃を多く含む地平線に近き部分の高所に比して青色の薄ぐ所以も、粗大な塵埃が少なくなれる高山の頂から天空を見ると鮮かな碧色を呈する理由も、海上の空色が大陸上の空色よりも蒼青である譯も、雨の爲めに粗大な塵埃が地上に落下された後の空の蒼翠も皆一通りの解釋がつく様である。

○朝燒及夕燒の現象も太陽が地平線附近に在る時は、光線は氣層を斜に通過するから、空中通過の路程大なるのみならず、地平線附近を通過すれば比較的粗大な細塵、水滴、の浮游するに出會すから、反射と通過の關係でも說明が出來る様である

◎雜錄　机上談山

が、地平線の天空が朱色に染まりて恰も燃出せんとする程になるのは、前述の關係の外に光の屈折及光波の廻折（Diffraction）に依りて生ずる現象もあるさうだ。

○空の色合ひや雲の生ひ立に就て誰れかに明確な說明をして貰ひたいためにこんなことを書いて見た、吾々如き淺はかな知識の缺點を指摘して空と雲とに關する新知識の注入に吝ならざらんことを望むものである。空と雲と云ふ様な事は何時考へて見ても興趣の深いものであるが殊に高山の頂上に宿泊し、全く人間界の事を打ち忘れて、遠山の薄紫、落日の名殘、紺青の空、黄金の雲を眺むる時に一層深く私は空と雲とに就て深い感興を生ずる。さうして益々之等に關する科學の光を求めようとするものである。（山本德三郎）

机上談山

○自分の様な足の弱い人間は、元氣の盛であつた昔でさへ、山へ登ると兎角歩みが捗らないで、い

つも同行の人に氣の毒な思ひをするのが常でありましたが、今日此頃は體の工合がわるくて、登山は殆んど中止といふ有様であります。さうなると烟草がないと彌々喫ひたくなると同様に、益々山に對する執着が強くなつて來ます。止むことを得ないから只地圖を眺めたり、記文を讀んだりして僅に渇望の一部を醫して居るばかりでありますが、さうなると「山岳」の發行がいよ〳〵待遠しくなつてたまりませぬ。最近の號はすつかり讀み了つて、そろ〳〵古い號を讀み直して見ると面白いことを發見するのです。

○此の頃ではよくわかつて居る山岳の名を、なんのかんのと水かけ論をして居る人もあるかと思へば、生眞面目に古書古圖を調査して、堂々と論じて居られる方もある様に見受けます。今から見ると寔に今昔の感に堪へぬ次第でありますが、又日本の山岳史上に貴重な材料だと思ひます。

○ふと第八年第二號二〇八頁をひろげて見ますと小島烏水先生が「……英國といふ國をあまり好まなかつたゝめである、何故と言つて、英國には火山も、その他の高山も、無いぢやありませんか」と言つて居られます。その「火山も、その他の高山も」と言ふ口調が何となく妙に感じられて、私の様な彌次性な、聊か影辨慶式な人間には、何だか横槍を入れて見たくなるのです、何も日本に槍、鑓、鎗などゝいふ、恐ろしさうな字のつく山がたんとある譯でもありませんが……。

○地質とか鑛物とか申すことは、私にはよくはわかりませんが、聞く處によると、地球上最古の岩石は火成岩だと申すことではありませんか、一例を上げて見ますと、烏水先生も火成岩と御認めになるだらうと思はれる花崗岩は大層古いものださうで、其の主成分の一の長石はいはゆる加里長石で、硅酸礬土と硅酸加里から出來て居るさうです、處でこの硅酸加里が分解しますと、一部は硅酸となり、一部は炭酸石灰となり、其の後者は水に溶けることから、流水に運ばれて終には海に達し、前者は炭酸亞爾加里に溶解するので同じく水に運ばれるし、硅酸礬土は水中に懸垂狀態として流水に運ばれて、皆終に海に達します、すると硅酸礬

土は沈澱して粘土となり、又花崗岩の他の主成分の石英も流水にさらはれて來て終には砂となり、雲母も同じく水の爲に流されて來て、砂の中などに埋積し、時に雲母質砂岩などをも作りますし、又海水中に溶けて居る炭酸石灰は、動物の原形質の爲に吸收されて、其の介殻となり、これが死ぬと殻が堆積して終には一種の水成岩をなすさうで御座います。さうして見ると水成岩はもと矢張り火成岩から出來たものでありますから、水成岩の山はもとを糺せば火成岩の山に負ふわけかと思ひます。

○處で此の花崗岩から出來て居る山は、英國（廣意の）には可なりあります樣で、スコットランドのグランピアン山系は皆花崗岩の樣に聞いて居りますし、又イングランドのダートモーアも同樣と承はります。

○勿論花崗岩は深成岩であつて、火山から噴出したものでない故、火山岩でないと仰せられますならば、他の例を一二申上ませう。石炭期と申したら、古生代の中で一番新しい所ではありますが、古生物學で大分おなじみな名でありまして、新火山岩の山の出來た第三紀よりは舊いものです、然るに此の頃に噴出した火山もあるさうで、それがスコットランドやイングランドの諸方にあると聞きました。ウェストン長老が梓川と御比較になりましたとか伺ひましたダーウェント川の流れる（「山岳」第九年第三號二〇四頁）マトロックの附近にも、石炭期に噴出した熔岩の殘りがあるさうですし、又アイルランドにも火口の殘りに玄武岩などが一杯つまつた所もあるさうで御座います。又スコットランドにも折々は石炭期の火山の殘物があると承はつて居ります。アイルランドで名所の一つのヂァイアンツコーズウェイは同じく玄武岩が海中につき出して居るところで、またスコットランドのスタッファと申す嶋には、大きな玄武洞があるさうで、私も寫眞や繪葉書で見たことがある樣に思ひます。又ウェイルスの北方の聳立するスノウドン山彙は、石炭期よりももつと〳〵古い、サイリュールリアン期以前のオードヴィシァン期の頃噴出した火山が、幾千萬年の風雪に削磨されつ

◎雜　錄　机上談山

つも、尙嚴然と扣へて居るものださうで、此他には、いはゆる「溯沼地方」にある山岳も其の頃の火山岩から成るものがあるさうで御座います。何も山岳や岩石を骨董視するのではありませんが、同じ火山岩でも斯様に古い事が、何だか感情の上から申しても、面白いぢやありませんか。

○もしこれが事實とすれば、烏水先生が、英國には火山がないと仰せられるのは如何で御座いませうか、勿論先生のこと故充分種々の書籍などを御調べになつた上か、又は夫々の專門家に御尋ねの上の御說と拜見致しますが、淺學の吾々にはどちらの說に從つてよいのか一寸迷ひますので、こゝに先生の御高敎を願ふ次第で御座います。

○「その他の高山」と仰せられることについては、英國最高のベンネヴィスさへ、僅々一千三百四十三米突では、ローセンヂエルス邊よりは高いかも知れませんが、高山の仲間入りはチト如何かと存じますので、英國には高山がないといふ、先生の御說に服することゝ致します。

○山に登れもせぬのに登山案內などを購ふのは、愚の樣ではありますが、大層有名でありますから、矢澤、河野兩先生の「日本アルプス登山案內」とかいふ本を一寸拜見する光榮に浴しました。まづ第一に氣づきましたのは、登山といふことよりも、山岳の動物や殊に植物の方が主になつて居て、肝心要の案內記のところは、不親切と申しては語弊もありませうが、隨分思ひ切つて簡略にしてあるには、一方ならず驚いてしまひました。

○そして最も奇妙に感じますのは、種々珍奇な動植物を、これ等の山中に發見したのは、大抵信州の方々の樣で、他國の人はまるで其の權利がない樣に見えることで、私にはどうも一向腑に落ちません。勿論新發見だとか、又はその遲速などをとやかういふ位稚氣に富んで居る方は、あまり澤山もあるまいかとは思ひますが、誰が第一の發見者だとか、でないとかを云々する樣では、日本の科學も未だ〳〵前途が遼遠すぎる樣で、心細くてなりませぬ。そして案內記などに、一々發見者の姓名年代を列擧するのは、書物の性質上如何かとも思はれます、そんな事を書いたり印刷したりする

時間や紙を、も少し肝要な記事の方へまはして頂きたいことです。

○一種の高山植物採集案内とでもいふべき本書中に、私共がチャウノスケサウと覺えて居る植物をミヤマグルマと呼んだり、トガクシシャウマやキヌガササウ等の喬木帶産の植物を、仰々しく高山植物と呼ぶなどはよいとしても、ヒカリゴケの原絲體(Protonema)を、「前芽」と呼び、而もProthalliumといふ原語まで添えてあるのは、まさかに植物專門の方々の御間違ではなからうかと存じます。それからモ一つ伺ひ度いのは、第二十八圖のミヤマウスユキサウは、日本のものと大分異つて見えますが、あゝいふ標本も木曾の駒ヶ岳には生ずるのでせうか。序に申しますが、第二十三圖、第三十六圖の二つは何やら私が嘗て見たところとは異る樣で御座います。

○甲斐駒ヶ岳の頂上には、高山植物はあまり生じても居ない樣ですが、而も地獄谷には一言も及んで居ないのは如何ですか、私が一兩度參つた時には、何の花かは知りませんが、大層美しく咲いて居りましたと思ひます。又鳳凰山彙の植物は、未だ之を詳記するを得ずとありますが、「山岳」第四年第一號に、辻本博士御採集の植物目錄も見えて居る樣で御座います。又書中諸山岳產植物目錄が揭げてありますが、山麓のみに產するものが大分加へてある樣見受けます、私などは斯樣なものは寧ろなくもがなと思ひます。(笹魚生)

◎雜錄　信越線附近スキー練習地の主なるものに就て

信越線附近スキー練習地の主なるものに就て

一、田口（赤倉温泉附近をも含む）
二、關山（關温泉「又は原温泉」附近を主とす）
三、高田
四、野尻

一、田口、赤倉

在京者には至便の地である、其理由は概ね左記の通り。

イ、東京よりの距離他のスキー地に比し近き事。

上野驛より田口驛迄約八時間を費す故往復共夜

行列車を利用せば一兩日の休暇を利用しても可成の活動を試みる事が出來る。(瀧車乘換の不便なし)

ロ、驛より旅館まで遠からず。(數丁)

ハ、練習場所遠近至る處に存す。

初步者練習の爲めには平地、傾斜地とも旅館附近にあり。

稍上達せる者の爲めには赤倉温泉附近の練習地あり(同地に宿泊するも可、田口より日歸も可)登山研究の爲めには妙高の峻嶺が眼前に控へて居る。

ニ、スキー練習に適する期間近傍諸地に比し永き事。

雪の名所の越後中に在ても積雪量多き方にて加之最初に降雪を見て最後に融解するを以て(每年十二月下旬より四月中旬迄スキーを行ひ得)在京者殊に學生は冬期及春期の兩休暇を充分に利用し得。

ホ、高田直江津等にも遠からざる爲め必要なる物品、器具等を調達するにも便宜し。

ヘ、初身者は敎官を求め得る便宜あり。

ト、防寒具を必要とせず。

氣候は田口、赤倉とも東京と大差なく凍傷に罹る憂なく更に無いのみならず練習中は發汗する事多く宿舍に在ては入浴して暖を求むる事を得るのである。

チ、貸付スキーの準備。

旅館及スキー倶樂部には貸付スキーがある故自用のスキー具を携帶せずとも借用し得る便あり以上は只、輕便にスキー術を研究せんとする場合を考へ最良の點を擧たに過ぎぬ故若し雪の性質とか地形とかを主眼とする場合には他にも澤山好適地の存在するは勿論であるから斷て置く。

「日本スキー倶樂部妙高温泉支部」は田口附近の有志者に因て數年前組織されたスキー倶樂部の名稱である「田口支部」とも云て居る事務所は赤倉温泉分湯株式會社内に置て在て支配人の吉澤菊治氏が萬事を取扱て居る故田口、赤倉の事に就て照會の必要ある場合には同氏宛にするがよい。

田口には右の分湯會社の外東京電化會社、亞鉛工

場、發電所等もあるので其役員（東京より赴ける人も多い）中にはスキー熱心家もあり隨て同地スキー支部の幹部と云ふのは大部分夫等の人々を以て組織されて居る。

次には田口、赤倉兩地に於ける旅館を紹介しやう。

イ、鹿島屋（田口）

田口には此外數軒の旅館があるけれども最大にして分湯會社に關係深く隨てスキー練習者に最も便利なのは此鹿島屋である。

宿泊の最も多きは夏で春秋二季が之に次ぐのであるからスキー季時分には客至て少い夫故土地繁榮策として分湯會社及旅館は協力してスキー客吸收法を講じて居る。

宿泊料　一泊（三食共）　七十錢

浴客は一圓なるもスキー客には特別に割引を爲すのであると云ふ事も聞込で居る東京方面よりスキー研究の爲め同地に赴く者が增加し團體として繰出す樣に成た曉には掛合次第にて更に格安にて投宿し得らるゝ方法も出來ると思て居る（吾人が湯治とか避寒とかを主眼とせずしてスキー術研究を唯一の目的として赴くものとするならば各地に夏期に於て設けらるゝ諸學校游泳場の宿舍と同樣でなくとも兎に角今日よりも少額の經費にて濟む樣に爲したき希望である）。

投宿客は貸付スキー（瑞國式スキー數臺の備付あり）を無料にて使用し得。

昨年末別館を新築し浴槽便所等には大理石、人造タイル等を使用したから頗る爽快である。

ロ、高田屋（赤倉）

浴客の多きは田口と同じく夏季を第一として其前後に亘るのであるから積雪期間は旅館の大部分は閉鎖して居る營業を續けて居るものゝ內最大なのは高田屋である（家屋浴槽等淸爽なる點に於て鹿島屋に及ばざるも湯元に近き故湯加減は曖い）宿泊料は鹿島屋と大差なからん。

田口と赤倉との距離は一里半位でスキー穿用の場合往路には一時間半乃至二時間を費すも歸路には二三十分を費すに過ぎない。

二、關山、關

此附近には未だスキー倶樂部と云ふが如き形式的

の團體は組織されて居ないが驛員、郵便局員、温泉宿の有志者等協力して研究し且つ高田より教官を聘して迄も練習をして居るので實質に於ては他のスキー倶樂部に勝るとも劣る事は無いのである關山附近には良好なる練習地ない爲め同地の者も大部分は練習の爲め關温泉に赴くのである、關温泉は原温泉とも云ふ、關山驛西南約二里に在て驛より温泉迄は爪先上りで至て緩なる傾斜を爲して居るが積雪上を行くは可成困難で殊に技術未熟の者がスキーを使用して赴くには相等の勞力を費さなければならぬ、然し温泉附近には良好なる練習地がある故多少の心得がある者が赴くは適當である。

關温泉の西方約半里（圖上にて）に在る燕温泉に赴くには大田切川の懸崖の中腹を縫て行くのであるが初春より雪崩襲來の季節となる爲め危險區域としてある。

關温泉の旅館は二大浴場を圍で其周圍に建てられてある予は三月下旬に妙高山麓を視察の途次同地の朝日屋に憩て同地の模樣を多少聞知る事が出來たけれども時間が乏かつた爲め充分見聞するを許さなかつたのは遺憾である、去る冬期の休暇には學習院學生十數名が同地の笹屋に投宿して盛なる練習を爲し春期休暇にも再來するとの話を聞いた丈けで其後の模樣は未だ承知せぬのである。

次手に云て置くが赤倉温泉と關温泉とは圖上では半里位の距離であるし赤倉温泉の裏山に登れば關温泉は指呼の間にあるから一寸行かれさうであるが然し大田切川の斷壁に隔てられて直進は不可能である、夫故赤倉は田口に又關は關山に夫々附隨させて記述するが至當となつた。

三、高　田

同地に在るスキー倶樂部の名稱及所在地は次の通りである。

日本スキー倶樂部　　高田偕行社内
日本スキー倶樂部高田支部　　高田市役所内

但し同地のスキーに關し照會の必要あらば左記の通りにしてもよい。

高田市吳服町
高田新聞社　高橋翠郊（實名進）氏宛

往年長岡、堀内兩將軍等指導の下にレルヒに因て墺國式スキー術が創めて我國に傳へられ、雪に鎖されたる北越の情氣を一掃して越信スキー倶樂部興り、次で日本スキー倶樂部と改稱して日本國内各地のスキー倶樂部を總括する筈に成て居たが、其首腦に變動の有た外軍籍に在る者の大部分は滿洲に駐屯したので一時は先年の盛況を見る由も無かつたが、今や復活の氣運に際して居るのは慶すべき次第である。

何を云ても夙にスキーが鼓吹唱導せられし土地の事故、技術殊に墺國スキー術に優秀なる士に富み隨て敎示を仰ぐには至極都合がよく、練習地としては良好なる場所に富み（第十三師團の練習所は市の西方金谷山に設けられある藥師堂が在るので藥師山とも云ふ）且つ器具材料等を調達するには他のスキー地よりは非常に便利である、然し東京より遠來の客殊に學生に取り最大不都合と云ふ點は他でない冬期、春期の兩休暇には高田市附近の練習地にスキーに充分なる積雪を見出し得る事が不確實であるからである、毎冬の例に依れば降雪を見る事田口附近より後れ融解亦彼の地に先んずるのである、其スキー季と云ふべきは一月中旬より三月中旬迄と見積らば宜しいであらう。

猶宿泊料も前記の場所よりも稍高價故學生には少しく不向である（勿論温泉が有る譯で無いから田口、關等の如く入浴勝手と云ふ事もない）

四、野尻

田口驛よりするも柏原驛よりするも一里半乃至二里に在る野尻湖畔で練習されるのである、此地には長野の人々來る由名手も多いと云ふ話であるが、未だ實地に見聞したので無いから詳しい事を述べる譯には行かぬ。

諸費用及物價の概算其他の注意

一、汽車賃（三等片道）上野、田口間　二、一〇圓
　　上野、高田間　二、三〇
二、宿泊料（一泊）　一、〇〇
三、靴（歩兵用編上靴一足）　二、〇〇
　　防水スキー靴（アルプス山岳兵用靴一足）　八、〇〇

◎雜錄　信越線附近スキー練習地の主なるものに就て

◎雜錄　信越線附近スキー練習地の主なるものに就て　一九〇

四、毛絲製スキー用長手袋（一對）　一、〇〇
五、毛織運動帽（一個）　三、〇〇
六、毛絲製運動着、毛絲製上着（一着）　五、〇〇
七、雪眼鏡（黑硝子製一個）　五〇
八、墺國スキー（普通人用一臺）　七、〇〇
九、登山用背囊（一個）　六、〇〇
十、參考書（邦語）
「スキー術」山口、金井共著　六五
牛込區矢來町一番地二九號大日本
新聞學會發行
「スキー滑走」金井氏編、田中鐵工場發行　一二
「スキー術」鶴見氏著　厚生堂發行　二五
「スキー術」稻田氏著　一、〇〇
十一、スキー用具販賣所（東京、高田、直江津）
東京　美滿津商店
高田　田原鐵工場
高田　大原器械店
高田　月岡鐵工場
直江津　田中鐵工場
十二、防水スキー靴製造所
高田　山善靴店
高田　浦澤靴店

說明

右の諸事項に就き不案內者の爲め稍說明を加へて見やう。

一、汽車

夜汽車を利用する者（スキー練習を主眼とする者は諸經費と時間とを節約する爲め大抵之に據る）は現行の時間表にて午後九時四十分上野發に搭乘するか宜し、田口への到着は翌朝六時頃故稍早過ぎる樣に思はれるけれども、元來の目的がスキーに行くのであるから隨て雪の多のを望む譯である、信越線は其雪の多い地方に敷設されてある故稍ともすると故障を生じて汽車の發着は定刻より後れ勝である、又年末に出發するに當ては大勢の女工が歸省するので大混雜を爲す等の爲め豫定の九時四十分に便乘出來なければ午後十時十分のを利用し得る望みがある故田口、關山、高田何れに行く場合も九時四十分出發の豫定にして置く方が

宜しい（春期休暇にても同様）

二、宿泊

スキー旅行に限らず一般の旅行の場合にも同様に考へらる事が少くないが宿屋は其地で第一のを選ぶ方が色々の便宜を得る事多くてよい、第一等のものだとて宿泊料が他店より左様高價でない事もあるし假令多少高價でも又便利な點もあるので結局割合が安く考へらる事は屢經驗する所である、スキーを練習に行く場合にはスキー客を取扱ひ付けて居る家に泊らぬと種々なる故障に遭遇する事がある、越後地方にては降て間もなき（十二月、一月頃の）雪は練習中衣服、靴等を濡すので使用後宿屋にて適當な所置を執て呉れないと靴は全く其用を爲さなくなる事もあるし、スキーが結氷の爲め狂ひ又破損する様なこともある、練習者各自が注意を怠らぬ事は勿論必要であるけれども猶宿屋も多少其邊の心得が無いと飛だ迷惑を蒙る事がある、田口、關、高田等に於ける各一流の宿屋では多少其設置あり處置を心得て居る、但し春期の雪では衣服靴等が濡れて困る様な心杯はない。

三、靴及脚袢

普通の靴は一兩日間の練習の爲めでも殆ど其用を爲さざるに至る事もあるから他の準備は偖て措き靴のみは可成適當の物を豫め準備する必要がある

一、編上兵隊靴

スキー（最初の者は墺國式スキーを使用するがよい故此場合も主として此式のスキーを指す）の穿具合確かりとする爲めには底革が厚くて丈夫なるを要求し且つ革條で緊め付ける故、普通の靴では傷む故廉價で丈夫な靴は先づ兵隊靴である、且つ一寸間に合せの品としても踵の變形して居るのは宜しくない。

大さは過大も過小も共に悪い、越後地方の練習地では凍傷に罹る憂が無いから靴下を幾枚も穿く必要もない故、厚靴下一枚穿で稍寛きか若しくは普通靴下二枚穿でキツチリとして居る位で丁度宜しい。

兵隊靴には防水法が施して無いから濕氣ある雪中で穿用すれば水氣が浸み込む故其程度を幾分なりとも少くする爲めにはラード若しくはワセリン等

の油脂類をよく塗り込み置き甲革と底革との間の縫目の部には鬚附油でも詰め置けば稍有効である猶使用後乾燥の方法を講ずれば毎日の練習に少しも差支はない（靴油は特製の品もあれど一時間に合せに使ふ兵隊靴などには冗費に屬す）

二、防水スキー靴

目下高田で製造して居る防水スキー靴はレルヒより傳授の品で即ち墺國式スキー用の靴である、墺國式スキーにはアルプス登山に使用する靴を其儘使用する故此防水スキー靴と云て居るのは元來はアルプス登山靴の事である。

東京の靴屋でも此種の靴の製造法を傳聞したり又は書物等に因て知て居るかも知れぬが、實際造た經驗は少い故完全な品を造る事は困難であらう——又造るとしても高價であらう、高田は東京より見れば職人の賃金は廉い故細工は田舍染で居るかも知れぬが、比較的廉價で販賣して居るし防水も殆ど完全と云ひ丈夫に造り上げられる。

偖てスキー練習者は普通靴や兵隊靴等を使用するよりも此靴を使用した方が具合は宜きも必ずしも最初より用意する迄の事はない、少しスキーを了解してから先輩にも相談し自らも熟慮して注文するが宜しい、登山に使用せずしてスキー專用とするならばレルヒが敎へた通りの登山靴其儘を造らしむるに及ばず且つ價格も稍低廉にも出來るのである。

今迄云た防水スキー靴は前に述べた通り元來は登山靴で墺國式スキーに兼用するのである、先年諸威式スキー專用靴を或外國人が高田の山善靴店に示した事があるから今猶其製造を覺えて居るかも知れぬ（レルヒより敎はりしも山善靴店である）越後の土地の者は藁靴にスキーを穿て居るのを見掛けるが斯樣に穿きこなす事が出來れば輕便である）

三、脚袢

卷脚袢、從前の脚袢何れにても人の好き好きで宜しいが地質は毛織物がよい木綿、麻の類ならば防水を施した品に限る、或る雪國で用ふる蒲脛巾（がまはばき）も宜し、半ズボンに長靴下を穿た輕快なる扮裝は見恰好はよいが元氣ある活動家には稍不適當かも知

れぬ。

四、手袋

寒氣は甚しく無い故防寒の爲ならば普通の毛絲手袋にて宜し（元氣者は手袋なしにても濟ませて居る）然し轉げると雪が袖口から入て氣持が惡しければ毛絲スキー用長手袋を使用するがよい（防水布製のは具合宜しくない）。

五、帽子

越後の冬期には折々寒風が吹くので寒さを厭ふなら覆面の運動帽を用ふるがよい、然し冬と雖も晴天の折には暑過ぎて困る事もある、鳥打帽などでも濟むが只濡た時困るので吾々は矢張毛製の運動帽を使用して居る。

六、毛絲製運動着

冬期には二着位持て居る方が都合が宜しい、殊にスキーにて遠方に出掛る場合には一個を着用し一個を携帶して休憩時に更に上に着用すれば感冒に罹る憂が少いが始めより二三枚所有するに及ばず一枚もあれば澤山である、又普通のシャツにても宜しきも地質はメリヤスにてもフラネルにてもよいが可成毛織物の方が宜しい。

以上三種の品（長手袋、防寒帽、毛絲製運動着）は東京にては勿論、高田にても買へるが、田口へも高田の商人が持參する便宜もある。

七、雪眼鏡

雪眼に罹り易き故使用するがよく、田口、赤倉、關等にては求め難き爲め粗品にて宜しき故豫め用意し置が宜し。

八、スキー

最初に使用するは塊國式スキーが宜しく、殊に未熟の內は使ひ古しのスキーを借用するがよい、故に田口に赴く者は旅館のを使用するが都合が宜しい、基本演習でも終へてから先輩に相談し自らも篤と考へて販賣所にて自ら現物を見て撰擇する方が得策である、餘り急で買ふと後悔する事もある。

九、背嚢

既に登山用背嚢を所有する者は携帶するが宜しい一週間や十日位のスキー旅行には背嚢一個で澤山である、未だ所有せぬ者は特に新調する必要もないが、其代り雜嚢を行李中に入れて携帶せばスキ

ー地に到着して後便利を感ずるのである。

十、參考書

歐文のスキー參考書には色々あるが邦語にて書かれたるものも數種ある、其內、山口、金井共著スキー術は初步の者には稍詳し過ぎるかも知れぬが外國のスキー書に日本に於ける經驗を加味したので現在發行されてあるもの丶內では一番宜しからうと思はる。

摘要

初步の技術を習得する者に對し

イ、場所

一、田口

良好なる敎官を得る事稍困難、(自己流は最も忌む)數人にて團體を作り得れば高田より敎官を聘し講習會を開くが最も宜し。

土地にも講習會にて修了せる者數人ある。

スキーは最初の練習中は旅館のを借用するが宜し。

田口支部(即ち分湯會社)にも貸付スキーの準備がある、若し使用者が增加すれば此貸付スキーを猶買足す。

二、高田

良好なる敎官を得るに困難なし。

基本演習を確實に習得せんとする者は先づ同地に赴くがよい(但し田口に於て講習會を開き得る場合ならば其必要はない)。

スキーは高田に於て貸付くる處あるや不明故に同地に赴く者は豫め自用のスキーを準備する不便がある。

三、關溫泉

自用のスキー準備ある者の最初の練習地として田口高田に次ぐ便利がある。

ロ、着裝品

頑丈なる靴(廉價なるは兵隊靴)は準備すべき必要品、其他は特に準備するにも及ばず有合せの品にても充分間に合ふ。

但し帽子、上着、ズボン、手袋脚袢等は毛製若しくは防水になつて居るのが宜しい。

多少準備するならば左の品々

毛製運動帽、毛絲製運動着(一着)、スキー用長手

袋、雪眼鏡。

ハ、携帯品

登山用背嚢を既に所有する者は必要品を之に入れて持參すれば他に荷物を要せず。

未だ所有せぬ者は荷物と共に雑嚢を携帯すると都合よい、冬期赴く場合にはズボン下、ズボン、殊に靴下等は穿替の品を豫備し置く方が都合宜し。

（外山高一）

白馬詠草

古家實三

糸魚川にて

白馬の山の殘雪一目みて輝きわたるわが心かな

大蓮華ま青き空にほのしろく花のうてなを擡げけるかも

白雲の輕くたゞよふ白馬嶽あすの天氣をふと思はしむ

姫川

らん〳〵と夏の眞晝の日は照りつ心に涼し姫川の岸

かゝる村かゝる谿間を辿りつゝゆけば尊き雪の山あり

姫川の岸の阻道夏草のしげるを見たる淡き哀愁

蓮華温泉まで

夕日あびてはるばるたどる草山の麓に遠し谿水の音

行商に教へられたる大所の里はこれかも大杉立てり

美しき月の光に照されて高き山ありふかき谿あり

默しつゝ大森林を登りゆけば梟なきて人の世遠し

さまざまの鳥が音きゝつつ森の中一人のぼれば人の世遠し

山小屋に男三人居たりけり中の一人は名にきく萬藏

萬藏は峯を指しいちいちに峯の名をよび無邪氣に誇る

大蓮華八葉蓮華それ〴〵に雪を光らせ聳え立つかも

◎雜　錄　白馬詠草

岩陰の玉の眞清水手に掬び飲めばつめたし日本一かも

蓮華温泉

これぞこの名にきく蓮華温泉と心ときめき憩ひけるかも

温泉の人の眞實心のうれしくてほゝゑまひつゝ湯にひたりけり

險路百町

深山の木々の姿の尊くて涙ぐみつゝ辿りけるかも

殘雪を始めて踏みたる心持あなかしこ人には語らじ

高根草あやに咲けれど名を知らず知らずともよしあやに咲きたり

山いちごよく熟したり蓬萊の珍果と稱し貪りて食ふ

註日白馬裏の山いちごは殘雪帶

以上にもあり

山雲は狂ひ亂れつ躍りつゝ暫し不安に我れを捉りける

殘雪の絶え間たえまに花咲ける高根小草の生の喜び

いつしかも徑を失ひひたぶるに死ぬなら死ねと雪を攀ぢ登る

何といふ麗しき谿谷ぞこしばしばもふり返りつつ雪を攀ぢ登る

山頂奇遇

峯つゞき小さき人の影三つ見つけてわれは蘇りけり

いやどうも奇遇でしたと志村氏は頻りに山を語りたまひし

朝日岳

山雲のうすれし刹那ふと仰ぐ峯の姿は聖者なりけり

御來迎

御來迎ながめて立ちつしみじみと山の功德を感じけるかも

雷鳥

はひ松のかげにたゝずむ雷鳥はわが顔見つゝ何思ふらんか

山頂暮景

美しき暮雲の幕に樂しけきけふの一日は暮れにけるかも

山頂夜色

石室の一夜の宿は樂しかりき外には月の皎々として

立山は月の光りに淡かりき谿又谿の遠きかなたに

山頂の曙色

この印象永遠に消えずもあれよかし白馬高嶺のこの曙の

わぎもこに見せまほしきは白馬山高嶺花咲き雪光る光景

鑓ヶ嶽杓子ヶ嶽に消え殘る雪おもしろみじつと見つむる

大正五年七月はかり越中國立山にのぼりけるときによめる

田口虎之助

撫木坂のあたりにて

神代より杣人すらも斧ふれぬみやまの木立しみさひにけり

高嶺へときほひてのぼる人心しりてやいさむ駒とりのこゑ

こまどりの鳴なる山の岩か根のこゝしきみちもたゝにこえ來ぬ

遙に稱名瀧をみやりて

那智はあれとふたらはあれと此瀧はなちに二荒にましてかしこし

彌陀原にて

山陰は雪こそのこれ野邊みれはなつとはしるくさ百合花さく

室堂にて

のぼり來る人かけ絶て此日頃やまの室やはしつけかりけり

◎雜錄　圖書紹介

立山乃雄やまにて

み越路の國のみ中に天そゝりたてるたち山かみさひにけり

高嶺より雲霧はれて打わたすくぬちこと〳〵さやに見えけり

たち山はよろしきみ山ひねもすにあそひくらさむくもなかくしそ

別山より劍嶽を見やりて

事しあらは仇を屠らむ丈夫のつるきの嶽を見らくよろしも

淨土山にて

鷲と云ひ鳶と名に負ふ高山をこひ越え行かむつはさ得てしか

飛驒人の山路をゆくと取着つるかさの嶽かもくも間より見ゆ

立山温泉にて

おく山の温泉をあめは塵の世のなつのあつさも忘られにけり

都人うらやむはかり此夏はやまほとゝきす聞はやしけり

五色原にて

夏ながら千草はな咲く此野邊にひるけのかれひ打ひらかはや

此野邊にかりねをすこや草枕たひ行くひとの寵たてけむ

鳴神のひゝくやいつこ大空のあまつ日かけは曇るともなし

圖書紹介

△高山植物の研究

定價壹圓五拾錢

長野高等女學校長　河野齡藏氏著

會の事務所から頭書の書物を送つて來て、自分に批評を書けといふ命令である。然るに自分は著者と一面識ある上、年齡から言つても私に一日の長ある人の新著を批評することなると、どうしても筆が鈍る、其の上自分は「高山植物」と名づくる小冊子の著者である以上、若し例によつて忌憚なく批評したとすると、世間にいくらもある狹量な人

達は、自分が所謂商賣敵といふ立場から、無暗と悪口を言つたのだと曲解するかも知れない。夫れ故自分は此の役目を御斷りしたのだが、再三の嚴命もだし難く、止むことを得ず筆を執つて、只本書を紹介すると共に、通讀の際感じた事共を二三附加することとする。

菊版本文一〇二頁に附錄として「本邦産高山植物目錄」一六四頁、十四行へ四分あきで三十五字詰の、一頁の字數四百九十字といへば、『山岳』半頁よりも四十字多い譯故、讀みでがどの位か御わかりのことゝ思ふ。紙質は白菱の六十五斤位で、印刷も鮮明で心持がよい、挿圖は口繪の三色版の外に、コロタイプ四十九葉といへば、まづ贅澤な書物と肯かれやう。内容は第一編總説として高山植物及び高山植物の分布を説き、第二編高山植物の生態中に高山の氣象、土質より、高山植物の生態的分類、形態、形態の由來、極地植物との比較、生期及越年に關して述べ、第三編高山植物の栽培に就いては高山園の位置、土壤、岩石、高山園の構造、各種の高山植物園、高山植物の栽植、保護繁殖及び盆養の九章を掲げ、第四編高山植物の栽培各論は乾生植物、陽生植物、隱生植物及濕生植物の各について説くこと詳密である。

五十葉の圖版の大多數は著者の撮影に係るもので、或は自然に生育する高山植物を、或は乾臘標品より寫眞したもので、中にはタカネマンテマ、ハヽコヨモギの如き稀品もある。

本書の性質、内容を一言にして盡せば、第一編第二編は今年の山岳會大會で拜聽した御講演と大同小異で、圖版の多くも其の折拜見した幻燈と同一である。しかし第三編第四編は「植物の栽培を畢生の事業とする」著者が二十餘年間研究の結果を披瀝したもので、一字一句苦心の跡が見えて居る、それに比べると、第一編第二編は附錄の觀があるが、高山植物に關する知識を得ようといふ人には頗る參考になる事と思はれる。卷末にある高山植物目錄は「高山植物及准高山植物に限りて之を記載し」樺太及臺灣産のものも一二加へてある、然し内地産のもので古くから知られて居る種類で選に漏れて居るのがあるのは、何か其の間に理由

のあることであらうか。此の目錄は高等隱花植物及顯花植物を科によつて配列したもので、各種に學名を配すると共に、尙乾生植物なるや陽生植物なるやを附記してあるのは、栽培家にとつては便利であらう。これによつて見ても、本書が培養を主とすることが明瞭で、內容から見れば、高山植物培養全書とでも名のつきさうな本である。

紹介はこれで止めて置いて、體裁其の他に關して氣のついた點二つ三つを、御約束通り申上げると、布表紙天金云々といふことは、出版書賈岩波書店の意裝によるものと見えて、御定まりの哲學叢書用の布の染めないもので、丈夫なること此の上なしとでも言ひさうなもの、但し製本者何の某と奥附に名乘りをあげる程丁寧な製本ではない樣である。扉は例の岩波好みとあつて、長方形を三ツ割にして、書名を中央に著者の名と發行所の名を右左に入れ、總て一色の墨刷。口繪は「高山植物生態圖」と銘打つた三色版なれど、山に神韻なく、草に生氣なきは遺憾至極である、由來高山植物を描く者といふて、五百城文哉を第一に推すも、同氏の作は單に標本を陳列したにすぎないで、腊葉よりは色があるだけで、活氣は少しもなく、一枚四錢のフォトクロームの繪葉書にも見當りがする位故、高山植物の描畫の六ケしいことはこれでもわかる。

本書の內容に喙を入れては、或は御叱りを受けるかも知れないが、愚鈍な私の頭には意味の通じない箇所などがあるから伺ひますが、七頁の「……ハゴロモグサ Alchemilla vulgaris L. は歐洲に產するレデースマントル Lady's mantle と異るなく」とあるのは一體何のことか珍らしい語法の樣に思ふ、私の知る所ろによると學名 Alchemilla vulgaris といふ植物の和名はハゴロモグサで、英名は Lady's mantle 而も和名は元來英名から導かれたものであるとか仄に聞いたことさへある、どこころで今此の二つは「異るなく」といふのは何やら徹底しすぎた觀があつて少々くすぐつたい。然るにそれにすぐ續いて「ミヤマウスユキサウ Leontopodium alpinum Cass. は歐洲アルプスに產するエーデルワイス Edelweiss に近似せるものにして唯其

形態の少し小なるのみ」とあるが、元來此の學名はエーデルワイスの學名であるのに、その二つが異るなくでなくつて近似せるものだとはチト受取れませぬ。事實日本のミヤマウスユキサウとエーデルワイスとは多少異るので、隨つて日本のものは歐洲のものゝ變種又は亞種として取扱はれて居るのである。それを親切に學名まで入れたのが禍をなして、學名の何たるを知らぬ人には誤謬を傳へ、知つて居る者には一向に有難味を感じさせない。尙序に伺ひますが、黒岳にミヤマウスユキサウが產するでせうか、私はやゝ疑點があるので、どなたか完全な標品を見せて下さる篤志家はありますまいか。

高山の氣象に關して色々と表や何か掲げてあるが、一八頁にあるハンの表は私の持つて居る原書にあるのとは地名（の少くとも綴り）が違つて居る、但しどちらが正確なのだか私は評することは出來ない。尙同頁に「ヒマラヤ山脈の三千米突の高度に於て日向攝氏五十五度日蔭の雪中に於て五・六度……」とあるは何か誤植があるらしい。

此頃の書物に誤植のあるのは通弊ともいふ可く殊に自著に誤植や誤字のあることを知つて居る小生は、他人の本に誤植のあることを指摘する資格はないかも知れないが、河野先生の新著に頻々として誤植と思はれるものゝあるには驚嘆せざるを得ない、中にも「……地衣類の附着せるを呵とす」（五八頁）などには首をひねる人があるかも知れない、又ナラヰシダをナラヒシダとしてあるのは（三頁）、先達而名古屋の或る書店から頒布した、日本アルプス登山用五萬分一地形圖一覽表といふ一枚刷のものに鹽尻を假名でしをぢりと記してあるのとよい取組だと思はれる。それから書中往々にして隱生植物なる語を見るが、これは初めは肉眼に映じない樣な微小な植物の謂かと思つたが、どうも陰生植物といふ語も見當るから、或は後者のことかも知れない、さうすると此頃は中等學校では私達が小供の時分に漢字の區別をやかましく敎へたのとは反對に陰でも隱でもインだと見える。隨つて、濶葉樹、唇形科などと書いても呵なりなのであらう。

◎雜錄　圖書紹介

最後に高山植物目錄を拜見して居ると學名の面白いのが目につくから一寸御參考の爲めに申上げて置きます、但し誤植でないのはタマにしかないのだから、それは一切拔にして置く。

ヒメスギラン、コスギラン、タカ子ヒカゲノカヅラ何れも違つて居る。ユーバリカニツリは自分が先年 Trisetum leve として記載して置いたものを、なぜか Calamagrostis 屬に入れて居る、實を申すと自分も此の植物を精檢しない內は或はカラマグロスティスの一種かと思つた程のものであるが、それが今河野先生によつて變更されたのを見ると、どうしても其の理由を說明して頂かない中は、腹の蟲が承知しさうもない。

クルマユリ、シュロサウ何れも變更を要すると思はれる。

ホザキイチエフランが一八頁にあげてあるに係はらず、更にホザキフタバランなる名稱の下に一四頁に重出して居るのは、如何に著者が學名を重大視するかがそゝろに窺はれるが、此の二つは同一種である事を保證する。

ミヤマハンノキの學名は常のハンノキの學名を用ひてある。元來ミヤマハンノキといふのはハンノキが高山上に生じたものではないこと諸君も御承知の通り。

オンタデ、オヤマソバ、タカネミミナグサ何れも學名が違つて居る。ビランジのも變更した方がよろしい。ミヤマオダマキも同樣なりと知る可し。

シコタンサウとヒメクモマグサとは入れ違つて居る。それとも著者に御異存があるなら御敎示を願ふ。

シロバナノヘビイチゴ、ミヤマキンバイ何れも誤名。

タヒツクソウギは本文九二頁のと附錄三八頁のと異つて居る。

シラ子ニンジンのは大間違ひ。イハナシのも變です。

未だ大分あるがあまり面倒故一足飛に最終の六四頁を開いて菊科のところを見ると、タカ子タンポポの學名にタカ子トンボ（蘭科）のが記入してあるが、これはトンダ間違ひと思ひます。

此の如く學名の誤謬が目につくと、何の目的で學名を記入するのか自分には了解が出來ない。左樣申しては失禮だが、此の種の著作に事々しく學名を列べ立てた處で、讀者が何等かの利益を享けるだらうか。著述は讀者の爲になす可きもので自己標準にすべきものではあるまいと私は常々考へて居る。高山植物培養家とか、自然愛好者とかいふ讀者を相手にする（のだらうと自分は考へる）處の此の書物に、專門家のみが重大視する學名を、而も誤謬や誤植で、充滿して居るものを、麗々と列べたてるのは、眞面目な著者の爲めに惜むところである。しかし、假令何等の權威はなくとも、此れ丈けの學名を記入するには相當な時間と勞力が入る、それを敢てするには理由も口實もあらう、しかし私は今それについてまで論ずる必要を認めない。

何がさて新聞記者や雜誌記者が無責任な書物を出版したり、或は新聞に連載したものを書物體にして、これに朦朧地圖をつけて二度のつとめをさせたり、人の寫眞を裏返しに使つて世人を誤魔化したり、同一の寫眞を横と竪とに入れて別々な說明を與へて人を欺く書物が盛に出る世の中に、眞面目に自己の經驗を基とした著作を印行して、世の同好者を裨益しやうとする著者の篤志は、私が少からず感謝するところで、本書が高山植物培養家の良參考書であることを證し、併せて著者に對する無禮を謝して筆を止める。（武田）

△高山植物　理學博士　武田久吉氏著

大正六年六月廿八日初版發行

發行所　東京　同文館　　定價金六拾錢

四六版紙表紙本文百二頁圖版コロタイプ刷十六葉挿圖三版。

日本で高山植物に關したる學術的圖書の最初である、高山植物に關したる圖書は、在來多少書店に飾られてあれど、何れも培養法採集法などを說いたもので、高山植物に關したる學術的記述をしたものではない、此本は比較的平易な、云はば通俗に向く樣に書かれたものであらうけれど、內容は全く學術的である、高山植物學概論とも云ふべ

きである、日本の高山植物に關したる本である、よくある樣に外國の事例を取つたものではない、此點に於て特に紹介するに足るものと思ふ、著者は自分の友人である、そして此本の種々の點に就て、關係があるので、——批評をする事は好しくない、少くもいゝ本と思はねば、御手傳ひは出來ぬわけである、初版は發行間もなく絕本となつた、今度第二版を印刷中である、第二版は總ての圖版を變へて多少增加し裝禎も、內容も訂正增補し、紙數も增加したのである、つまり第二版と云ふものゝ初版とは全く異るものである、今後第三版第四版と版を重ぬる每に、斯くするつもりであると著者も云はれて居るし、發行者も承知して居る、第二版と云ふ事は、更に版を作り直す事で、前の儘の版で刷るならば、むしろ增刷とでも云ふべきである、斯くあるべきが、著者も本屋も當然であつて、敢て珍とするに足らぬのであるが、今日の著書の有樣を見ると、此の如き事も多少目に立つ樣になる、世は澆季なりと云ふのであらうか。目次を揭出して筆を擱く。

一、登山、二、高山に於ける植物帶、三、高山植物の分布、四、高山植物の生態、五、高山植物の種類、六、高山植物の採集と培養、附錄日本特有高山植物目錄。（大正六年八月七日　た、た、生）

△日本アルプス縱斷記

大鐙閣刊行　定價金壹圓貳拾錢

一戶直藏、河東碧梧桐　長谷川如是閑氏共著

「大正四年八月『日本アルプスの縱走』と題し、一戶直藏、河東碧梧桐、長谷川如是閑氏の名を以て、大阪朝日、東京朝日の兩新聞に揭載せしもの、同八月九月に亘り『雪線踏破七日記程』と題し、碧梧桐の名を以て『日本及日本人』に揭載せしものを」碧梧桐が合して書物の形にこしらへたもので、尙末に「著者の實經驗より生れたる」『登山者の心得』なる一篇を附したり。

三六版三百八十頁、布表紙に山を三色に打込み、口繪にはコロタイプ一葉、網目版十四圖を入れ、尙「日本アルプス縱斷記附略圖」と銘打つたる、四色刷の地圖（？）一葉を附加したり。順序上口

繪から批評して見れば、どれもこれも不鮮明にて、折角の神域も俗惡な人間に汚された感あり、中にも「黑岳大雪溪の一部」なる寫眞には、文字を倒に刷り込みたるは、皮肉か惡戲か、兎に角ほめたことには非ず。次に十七萬分の一に調製された平面圖は、素人をおどかすには宜しからんも、鷲羽の北に「ワーモリ岳」といふ聞きなれぬ山名を初めに、東天井と思はるゝものを「東大井岳」と呼び、中尾峠に「燒岳峠」なる新稱を附したるなど大手柄、又仙人山の位置も事實と遠ざかれるなど、いかにも此の衆のやりさうなことなり、それに標高も最近測量のによればよいのに、殊更に怪しげなのを襲用した上、コンマ以下の桁まで御丁寧に入れて而も其のコンマを切抜きたれば、萬位の標高を有する高山も大分出來たり、碧梧桐氏の「朦朧地圖」とは此の如きの謂なる可しと感心せざるを得ず。

三宅雪嶺博士の序文もふるつたものにて、先づ「ブレリアク」「ケアンゴーム」などいふ奇天烈な山名に讀者の膽を奪ひたる上、著者三人を十返舍一九と比較したところなど、よくいつたのやらわるくしやれたのやら、あまり有難からぬことなり。

本文の用紙は薄手のラフで、見るからにきたならしい印刷にて、目をわるくしたい人でなければ讀むべからず。其の上白馬をハクバ、大天井をダイテンジヤウ、大蓮華をダイレンゲ、燕岳をツバメクラと無理によましてあるなどから推測しても到底、參考にはなりさうもなく、文章としても、「一時間もかゝつて落ちた人夫は上つて來た」などいふはあまり御上手だとは見受けず。また、シノハチと吾々が呼ぶ岳だらうと思はれるものを、ヒノハチとして、而もそれは火打と書いてかく讀むのだと說明せるはいかにもヤヽコーシし。

卷末に附錄とせる「登山者の心得」中「一知半解にて、名もなき草木類を食するはあしゝ」との御注意あれど、名あつても有毒なものは惡かるべく、萬一無名にても食用となるものあることは、常識あらばわかるべし。

之を要するに、本書はあつても無用、なければこれに越したことなしといふ、際物的書籍の一な

る可し。（H・T）

△信濃の山　（信州登山案内）

松本高等女學校教諭　津島壹城氏著

大正六年七月廿一日再版發行

發行所　東京　松陽堂書店　定價金參拾五錢

三五版紙表紙本文百八十六頁口繪網版三葉、略圖八葉開卷目につくは見返しに、文晁式の佛掌蓬然たる山岳圖あり、「信濃著名高山略圖」と云ふ、全體を通して印刷紙質總て粗惡、所謂田舍にある名勝案内記然たり、各頁上欄に登山の印象記の欄あり、小さき本愈々活字の數少くなれり、印象を書くには餘りに場所少し、徒ら書きに終るべし、折角の著書、無駄書きを勸むるも異なものなり。

第一總論より第六秩父山塊と千曲川以東の諸山迄信州主要の高山に就て登路を說く、極めて簡單なる略圖及び詩歌を添へたり。

包紙には「日本アルプスと信濃の山」とあれど表紙及び、題字は「信濃の山」（信州登山案内）とあり、日本アルプスの名に憧るゝ、發行書肆の戲れか、或は別に松本高等女學校教諭津島壹城氏著の「日本アルプスと信濃の山」なる刊行物のあるにや、まさかに羊頭狗肉的には非らざるべし、良非共山に關する刊行物を蒐集さるゝ方々に御勸めする。（岳雄）

△鹿澤温泉と高山植物

鹿澤温泉紅葉館發行

三六版百〇二頁に口繪やら挿繪やら八九個の網目版が入つた小冊子で、表紙には晩霞翁伯のスミレの様な花の小さなカットを用ひ、書と文字と二色に刷つたアッサリとしたもので、温泉場の案内としては俗氣の少い、そして何かの參考になりさうなものなり。

地は群馬縣吾妻郡嬬戀村大字田代村にあるにかかはらず、隣國の信州の人達におだてられてか、かぶれてか、ヒカリゴケに就いて大分に書き立てあり。又近傍の名山なる湯の丸、烏帽子、小座池棧敷、籠の塔、淺間等を紹介する内にも、何の彼のと高山植物の名稱を挿みあるは、編者か又は温

泉主が、餘程植物好と見えて臭床し、但し淺間を一萬尺の靈岳と呼ぶはチト誇張に過ぐる様なり。又同書五二頁より九〇頁に亘りて高山植物の目錄あり、地衣類のサルヲガセを筆頭に菊科のミヤマカウゾリナを以て了り、更に補遺として約四頁の小目錄ありて、あまり高山植物らしからぬものを混へたり。こゝろでこの目錄には植物を分類的に列記して、イロハ順等の通俗的なものよりは一見えらさうで、又各和名の下には學名の音讀(但し出多良目の)と思はるゝものあるは何の爲にや、例へばアスヒカヅラの下に、リコポディウム、コンプラナツム、ブァラィイティーキヤメチバリッススとあるは何のつもりか、若しもLycopodium complanatum var. chamaecyparissus のことゝすれば、此の學名は間違に御座ると申すより外なし、又カウリンクワの下にセネシヲ、フラヌネウスとあるのがSenecio flammeus の音讀と氣の付く位な人には、こんな學名(?)は無用の長物なる可し、又白山女郎花(ハクサンヲミナヘシ)の下にバトリニア、バルマタ又キンレイクサと記したるは、何やら狐につまゝれた感あり。それからモ一つ奇拔なのは、五二頁より七六頁までのものは一々番號をつけて、一より七四に終り、七七頁より九〇頁のものは番號なしで、只「尙他に注意すべき植物」として取扱はれ居る、しかも目錄の何れの部分にも高山植物と見るべきものと、左様でないものと混つて居るのはえたいがわからず。

何も序故記載の方も一寸御紹介すると、イワヒゲは「磊河たる淺間の rava 上に細い〳〵平打紐の如き葉の偃ひ廻れる間より白色の筒狀花の下向に咲ける小灌木のあるは此れなりと知るべし」といふ調子なり、淺間には rava といふ珍らしいものがあること、東京驛から Expless train といふ列車が出るのと好一對と感嘆せざるを得ず、尤も「ツーリスト」第二十六號によると Himaraya といふ山がある由故、寢覺の床を Sleepless Bed と譯したり、含滿淵を a deep fool と意(?)譯する人達の親類には通ずることなる可し。要するに、學術上にあらぬこんな册子に、書く當人さへも碌にわからぬ學名などを記入するのは常識のない人のやる

可きことで、田舍の學校の先生等なら一寸は感心するかも知れねど、いはゆる白痴おどしに外ならず、此の高い紙とインキを浪費するのみならず、之を除けば、植字工も手間が省けるし、印刷費もチトは安くなりて、出版者も得策なる可しと思はる。是等は强てあら搜しをしたものにて、此他の點に於ては、鹿澤温泉に遊ぶ人には手頃の案内書なるべしと信す。（H・T）

各地の山岳會彙報（五）

一高旅行部大正六年度夏期旅行日程

風は日に晩春の暖を加へ、新綠は彌が上に濃きを加ふ。青春の氣天地に滿つると共に我等が魂は早や山に飛ぶ。雪田の傍、高山の大氣に吹かれて首うな垂れし駒草の薄紅。五千尺の高原梓川の流に沿ひて茂れる川楊も春の再び訪るゝと共に、滴るが如き綠を常綠の栂の間に飾り、子馬は嬉戯して林間に駈け、牧牛、砂白き河邊に悠遊して雪と吐く溪流に首を入るゝとき、山岳の榮光は穗高連峯を輝さん。或は一萬尺の峯頭、星斗欄干として輝く時、あらゆる山岳は高く黑く靜かに眠り、萬籟寂として聲なくたゞ這松の燃火のみ赤く淡し。

美しき哉自然。美はしき哉山岳。宜なる哉ラスキンが、「山岳は自然の美の始めにして終りなり」の言。炎暑堪へ難き夏は實に吾人の最も期待する所、その夏も早や數旬の中に至らん。山岳は新裝を着けて吾人を迎へん。向陵の健兒來りて此の行に投ぜずや。

第一班　赤城尾瀨日光方面

第一日　午前七時二十分淺草驛集合—同八時出發—午前十一時三十八分相老驛にて足尾線へ乘替—午後零時四十分水沼驛下車—水沼—一ノ鳥居—柏山開墾地—鳥居峠（一三九三米）—大沼湖畔大洞猪谷（だいどういがや）—地藏岳（くろび）—猪谷泊。（四里半）

第二日　大洞—黑檜山（一八二八米）—五輪峠—二本檜—日向南鄕—薗原—追貝淀屋泊。吹割瀧見物（七里）

第三日　追貝—須賀川—戸倉—舟ヶ原鑛山—三平峠—尾瀨沼—長藏小舍泊。（九里）

第四日　尾瀨沼—燧岳（二三四六米）—沼ノ平—沼山峠—赤法師—麟麟手—檜枝岐（ひのえまた）　丸屋泊。（五里）

第五日　檜枝岐—畑小屋—引馬峠（一八九五米）—平五郎山—川俣　湯本湯泉塲泊。（六里）

第六日　川俣—西澤金山見學—山王峠—戰塲ヶ原—湯本　板屋泊（五里）

第七日　湯本—白根澤—前白根山（二三七七米）—五色沼—奥白根山（二五七七米）—前白根山—白根澤—湯本　板屋歸着。泊。

（六里）

第八日　湯本―戰場ヶ原―光德沼―御澤―志津小舍―男體山（二四八四米）―中禪寺湖畔中宮祠―華嚴瀧―馬返―清瀧―日光町　解散。（八里）

出發期日　六月二十三日朝　費用概算　六圓五十錢。

參考地圖　（二十萬分ノ一）宇都宮、日光、（五萬分ノ一）沼田、追貝、藤原、燧岳、檜枝岐、男體山、日光。

第二班　金峯山八ヶ岳方面

第一日　午後十時飯田町驛集合―同十一時出發。

第二日　午前五時甲府驛下車―和田峠―昇仙峽―御嶽瀧―御岳―金櫻神社―猫坂―下黑平（くろべら）―黑平溫泉泊。（七里）

第三日　下黑平―上黑平―檜坂―水晶峠―御室―金峯山（二五九五米）―川端下（かはばた）―梓山　白木屋泊。（九里）

第四日　甲武信岳（二四六九米）登山―梓山滯在。（八里）

第五日　梓山―秩山―居倉―大深山―御所平―樋澤―市場―海ノ口―海尻―松原湖―稻子―本澤溫泉場泊。（九里）

第六日　本澤溫泉―夏澤峠（二三九二米）―硫黃岳（二七四二米）―橫岳―赤岳（二八九九米）―阿彌陀岳（二八〇七米）―八手―拂澤　青柳驛　解散。（八里）

出發期日　六月二十三日夜　費用概算　五圓。

參考地圖　（二十萬ノ一）甲府、（五萬分の一）甲府市、金峯山、鹽山、八岳、瞽科山。

第三班　日本北アルプス南部方面

◎雜　錄　各地登山會彙報（五）

第一日　午後十時飯田町驛集合―同十一時出發。

第二日　午前九時三十七分松本驛下車―信濃鐵道乘換―午前十時五十三分有明驛着下車―宮城（みやしろ）―中房溫泉泊。（四里）

第三日　中房―燕岳（二七六三米）―蛙岩（げーろ）―切通岩―大天井岳（二九二二米）―二俣小舍泊。（六里）

第四日　二俣小舍―常念岳（二七五七米）―一ノ俣―二ノ俣ノ池―二ノ俣ノドゥ―鎗澤―赤澤岩屋泊。（五里）

第五日　赤澤岩小屋―鎗澤雪渓―鎗ヶ岳（三一七九米）―鎗澤―梓川―宮川池―上高地養老舘泊。（七里）

第六日　大正池―中尾峠―燒岳（硫黃岳）（二四五八米）―田代池―上高地滯在。（三里）

第七日　前穗高岳（三〇九〇米）登山　上高地滯在。（六里）

第八日　上高地―德本峠（二一三三米）―岩魚留小舍―島々（馬車）　松本市　解散。（五里半）

出發期日　七月十日　七月十五日　七月二十日　費用概算　拾參圓

參考地圖　（五萬分ノ一）池田、鎗岳、燒岳、松本。

第四班　日本北アルプス北部方面

第一日　午後十時飯田町驛集合―同十一時出發

第二日　午前九時三十七分松本驛着信濃鐵道に乘換―午前十一時四十一分大町着　對山舘泊。

第三日　大町―大出―籠川谷―針木峠雪渓下に野營。

第四日　針木峠（二五四一米）針木岳（二八二〇米）―蓮華岳（二七九八米）―柴丁場―針木澤に野營。

◎雜　錄　各地登山會彙報（五）

第五日　黒部川籠渡―平小舍―温谷峠（一二三五三米）―五色原―奥大鳶山―五色原野營。

第六日　五色原―佐良峠―鬼岳―龍王岳―淨土山（二八七二米）―立山室堂泊。

第七日　室堂―一ノ越―立山雄山（三〇〇〇米）―大汝―富士ノ折立―別山（二八八〇米）―劍澤―長次郎谷入口野營。

第八日　長次郎谷―熊ノ岩―劍岳（二九九八米）―長次郎谷―劍澤池ノ平―小黒部鐵山泊。

第九日　小黒部谷―黒部川渡渉―祖母谷川―祖母谷温泉―南越―大黒鐵山泊。

第十日　大黒岳（二四〇五米）―唐松岳（二六九六米）―奥不帰岳（二八一二米）附近に野營。

第十一日　鑓ヶ岳―杓子岳―白馬岳（二九三三米）―白馬尻野營。

第十二日　白馬尻―四谷（糸魚川街道）―青木湖―木崎湖―大町解散。

出發期日　七月九日（東京發）　費用概算　貳拾參圓。

參考地圖　（五萬分ノ一）大町、立山、黒部、白馬岳。

第五班　日本北アルプス中部地方

第一日　午後十時飯田町驛集合―同十一時發。

第二日　午前九時三十七分松本驛着信濃鐵道に乘換―午前十一時四十一分大町着　對山館泊。

第三日　大町―大出―高瀬川―葛湯―濁澤附近野營。

第四日　濁澤―濁ノ頭―烏帽子岳―濁ノ頭野營。

第五日　三岳（二八四四米）―野口五郎岳（二九二四米）―赤岳（二九一三米）附近に野營。

第六日　黒岳（二九七七米）―赤岳―鷲羽岳（二九二四米）―三俣蓮華岳（二八四一米）―黒部五郎ノ池に野營。

第七日　黒部五郎岳（二八三九米）―赤城岳―上ノ岳（二六六一米）太郎兵衛平野營。

第八日　太郎兵衛平滯在。

第九日　藥師岳（二九二六米）―岩井谷ノ頭―數河谷の附近野營。

第十日　越中澤岳（二九五九一米）―奥大鳶山―大鷲岳―五色原野營

第十一日　五色原―佐良峠（二三五三米）―温谷峠―平小舍―針木澤野營。

第十二日　針木澤―針木峠（二五四一米）―籠川谷―大出―大町着解散。

出發期日　七月二十日（東京）　費用概算　貳拾參圓。

參考地圖　（五萬分ノ一）鎗岳、立山、大町。

注意　概算費用は東京出發より解散地迄の總額とし歸途旅費を計上せず。

申込はなるべく早く願ふ。試驗終了日正午より打合會を開く。

暑中休暇中一切の交渉照會は、第一高等學校生物教室内族行部宛の事。

私の族行の行程、或は天幕貸出しに就ても出來るだけ御便宜を計る。比較的險阻なる登山を企つる方々は一應委員とも相談せらるゝ事を希望す。

尙不明の點あらば左記委員に問合はさるべし。

一、二、一　伴野　清（南七）
一、二、二　渡　正監（南七）
一、二、三　辻　二郎（南九）

慶應義塾山岳會夏期登山計畫

第壹隊　木曾駒ヶ岳及御嶽

第一日　飯田町（午後十一時發）―辰野（午前八時廿四分）―伊那宿泊。
第二日　伊那―駒ヶ岳頂上小舍（小舍泊）
第三日　頂上―上松―寢覺ノ床―常盤橋―黒澤（宿泊）
第四日　黒澤―御嶽頂上（小舍泊）
第五日　頂上―王瀧―鞍馬橋―福島（宿泊解散）

費用　凡八圓

第貳隊　常念山脈縱走

第一日　飯田町（午後十一時發）―松本（午前十時四十分）―有明驛（十二時五十五分）―中房温泉（宿泊）
第二日　中房温泉―燕小舍場（野營）
第三日　大大井岳―東大井岳―常念岳―二俣池（野營）
第四日　槍ヶ岳―槍澤ドウ（野營）
第五日　梓川下リ―宮川池―上高地―燒―上高地（宿泊）
第六日　上高地―德本峠―島々―松本（解散）

費用　凡拾五圓

第參隊　白馬岳ヨリ大黒岳縱走

第一日　飯田町（午後十一時發）―松本―大町―四ツ谷（宿泊）
第二日　白馬尻―白馬大雪渓―白馬頂上（野營）
第三日　杓子岳―鑓ヶ岳―天狗岳―不歸谷―唐松岳―大黒鋼山事務所（宿泊）
第四日　大黒岳―雪渓―四ツ谷―大町（對山館宿泊解散）

費用　凡拾圓

第四隊　針木越（劍岳）

第一日　飯田町（午後十一時）―松本―大町（對山館宿泊）
第二日　籠川谷入リ大澤小舍場（野營）
第三日　針木峠―蓮華岳―黒部川平の小舍（宿泊）
第四日　佐良峠―五色ヶ原（野營）
第五日　鬼岳―龍王―淨土―室堂附近（野營）
第六日　立山―別山―劍澤（野營）
第七日　長次郎澤―劍頂上―室堂附近（野營）
第八日　上瀧―富山（宿泊解散）

費用　凡貳拾參圓

第五隊　烏帽子岳ヨリ上高地

第一日　飯田町（午後十一時）―松本―大町（對山館宿泊）
第二日　濁小舍（野營）
第三日　烏帽子―濁乘越（野營）
第四日　黒岳附近（野營）
第五日　鷲羽岳―雲ノ平（野營）

◎雜錄　各地登山會彙報（五）

◎雜　錄　各地登山會彙報（五）

第六日　藥師岳—藥師峠（野營）
第七日　黑部五郎岳—黑部平（野營）
第八日　蓮華岳—坊主小舍（野營）
第九日　槍ヶ岳—上高地（養老館宿泊解散）

費用　凡廿參圓

第六隊　穗高槍ヶ岳間縱走

第一日　飯田町（午後十一時）—松本—島々（宿泊）
第二日　德本峠—上高地（養老館宿泊）
第三日　奥穗高（野營）
第四日　槍ノ坊主小舍（野營）
第五日　大雪渓—上高地（宿泊）

費用　凡貳拾圓

第七隊　劍ヶ岳ノ尾根縱足

日程
費用　未定

第八隊　白峯山脈縱走

第一日　飯田町（午後十一時）—甲府—靜澤—西山温泉（宿泊）
第二日　奈良田—大モン澤（野營）
第三日　農鳥山頂上—農鳥間ノ岳鞍部（野營）
第四日　間ノ岳—北岳—ヤブ澤ノドウ（野營）
第五日　大仙丈澤—仙丈岳—北澤の小舍（野營）
第六日　仙水峠—駒ヶ岳（野營）
第七日　朝與岳—早川尾根ノ頭（野營）
第八日　廣河原峠—ゴーロ澤頭（野營）

第九日　鳳凰—地藏—青木湯（宿泊解散）

費用　凡廿五圓

第九隊　赤石山脈橫斷

第一日　飯田町（午後十一時）—甲府—靜澤—西山温泉（宿泊）
第二日　新澤峠越へ（野營）
第三日　悪澤岳と魚無河内岳（野營）
第四日　大聖寺平（野營）
第五日　赤石頂上—大聖寺平—小澁冷泉—鹿鹽ヶ泉（宿泊）
第六日　一ノ瀨峠—赤穗—辰野（宿泊解散）

費用　凡貳拾圓

第十隊　後立山縱走

第一日　飯田町（午後十一時）—松本—大町（宿泊）
第二日　籠川入り扇澤ドウ（野營）
第三日　扇澤—祖父岳—冷ノ池（野營）
第四日　鹿島槍—八峯—五龍岳南越（野營）
第五日　五龍岳—大黑岳—大黑鐵山（宿泊）
第六日　大黑岳雪渓—飯森—大町（宿泊解散）

費用　凡拾五圓

▲各隊の出發期日は追て發表す。（但七月廿日より遲延することなし）

▲服裝携帶品及登山の注意等に關しては追て開かるべき登山準備會に於て詳述す。

▲登山希望者は六月卅日までにヴィッカス階上本會室備付登山申

込帳に記入せらる可し。

▲尚詳細は幹事に御照會ありたし。

理財科壹年B組　中條常七
幹事　政治科壹年　藤山愛一郎
史學科壹年　松本信廣

日本アルカウ會の現況

回顧すれば大正三年二月廿五日、會員草薙、河本の二氏御影出發六甲を經て有馬往還の小遠足をなしたるを第一回とし、爾來趣味を同うするもの月に年に來り參し、大正五年二月廿五日に於て會を重ぬること八十回、一回の平均行程七里三十三町にして九里前後を標準として實施せり。今この三ヶ年間に會員等が健脚を以て踏破せし里數を合算すれば、歩に於て三百八十萬千九百歩、約六百三十三里二十四町なり。地球の周圍を凡一萬里とすれば實に其百分ノ六に及べりと謂ふべし。斯くして我が會の發展し行かんか千百八十四回遠足の時、即大正五十一年八月には全球面を一周することゝなるべきなり、亦快ならずや。又之を本土につきて云へば今極北青森市米町元標を發足し、途中松島の奇勝に惚れ、次で東京の繁華に目を眩し、東海道五十三次に彌次喜多式の洒落を發揮し、暫し京の優雅に醉ひ、やがて雅趣熙接に暇なき山陽道、瀨戸内海に幾日かを費し馬關を後に門司に渡り、小倉を經て第六十八日目には長崎市外浦町の元標に着し、尚十二日間九十八里の旅行を續けて九州各地を跋渉することを得ん。

◎雜錄　各地登山會彙報(五)

又此健脚を以て大宮より富士登山を企て御殿場口太郎坊に下りたりとせんか、我が會員は實に五十六回の富士登山を試みたると同じく、其意氣遙に東海の天を摩するものあらん。

而して會員の多くは京阪神に亘り。在郷軍人商工業界其他、職業如何に拘らず、相携へて和氣藹々、自然の美妙に親み崇高の山靈に接して身體を練磨し精神を鼓舞し、以て平日の誠實實業より各自の業務に精勵するの資たるべき所謂、**アルカウ**の趣味を以て集まれるを以て特色とするなり。

日本アルカウ會々則

（大正六、一、二八第五條改正）

第一條　本會ハ山岳秀麗ノ境ニ趣味深キ遠足ヲ試ミ身神ヲ練磨シ剛健濶達ノ氣風ヲ興スヲ以テ目的トス

以上目的ノ實行ヲ容易ナラシムルタメ毎月二三回各日曜日ニ僅少ナル費用ヲ以テ主トシテ近畿ノ山岳ニ登リ其内一回ハ特ニ阪神手近ノ山野ヲ選ムモノトス

第二條　本會ハ前記ノアルカウ趣味ヲ鼓吹スルタメ適時之ニ關係アル各種ノ集會圖書ノ刊行及歩行能力ノ認定等ヲ行フモノトス

第三條　本會ニ左ノ役員ヲ置キ會務ヲ分掌ス

會長　一名
幹事　七名

第四條　本會ノ趣旨ニ賛シ登山遠足ニ參加希望ノ士ハ指定ノ地點及時刻ニ集合シ住所氏名年齢及業務ヲ役員ニ申出デ同行セラルベシ

但場合ニヨリ豫メ本部又ハ支部ニ申込ミ役員ノ承認ヲ要スル

コトアルベシ

第五條　前條ノ臨時參加者ハ會員ノ紹介ヲ經テ會員タルコトヲ得會員ハ本會徽章ノ交附ヲ受ケ會帳簿ニ必要事項ノ登錄ヲ受ケ通報ニ關スル打合ヲナシ置カルベシ

第六條　本會々員ハ平素親近ノ間ニアルカウ趣味ノ普及ヲ圖ルト共ニ會ノ進展ニツキ必要ナル助力ヲ致サルベシ

第七條　旅行中ハ役員ノ指圖ニ從ヒ終始一致ノ行動ヲ執ラルベシ

第八條　本會々員ハ會ノ經常費トシテ六ケ月分金五拾錢ヲ三月九月ノ兩期ニ前納スベシ但入會當初ノ一回分ニ限リ金壹圓トス旅行當日ニ要スベキ實費ハ當日前以テ役員ニ納附スベシ臨時參加者ニ對シテハ前項旅費ノ外僅少ノ經費ヲ負擔セシムルコトアルベシ

第九條　會計ヲ管掌スル役員ハ每年八月ニ終ル前一ケ年間ノ會計決算ヲナシ會財產ノ狀況ト共ニ役員會ニ報告スベシ

第十條　會員ニシテ二回以上會費ヲ納附セザルトキハ會員ノ資格ヲ失フ

會員ニシテ本會ノ趣旨ニ反スル不都合ノ所爲アリタルトキハ役員會ノ決義ニヨリ除名スルモノトス

第十一條　本會々則ハ本會精神ノ根本的變更ニ亘ラザル限リ役員全部ノ贊成ヲ得テ改廢スルコトヲ得

第十二條　本會々會則ニ規定ナキ事項ハ慣例ニ據ル（幹事山崎彥慶、大阪府岡町停留所西北ニテ）

三高山岳大會

今でこそ關西に於て山岳熱は漲つてゐるが、四五年前迄は登山に對して一向冷淡であつた、此時率先して關西に山岳を說き登山の氣風を誘起し眠れる關西人の覺醒を促したのは實に渺たる黃嘴の三高山岳會であつた。

其後逐年、阪神を初め奈良名古屋等に山岳講演會の催ほしあり京都大學神戶高商に登山部設置せられたのは、先驅者として主唱者として本會は、多大の喜悅と滿足とで微笑を禁じ得なかつた、然るに三年鳴かず飛ばず僅かに少數の團體を每夏日本アルプスに送り、又は近畿の山岳を跋涉して堅實に眞摯に滿を持してゐたが、爾結せるマウンテンフヒーヴアは隱忍抑制する事が出來なかつた。

殊に本年業を終へて大學に赴く者は何か事業を殘して置きたい又尙止つて本會の隆盛を計る責のある在校生は愈々基礎を强固にしたい。と、この二つの力が合致した上、先驅の熱烈なる幇助が與つて巴のやうに實行委員は活躍した。

京都と言へば嵐雪の句を想ひ出す、山陽と言へば外史を反射的に思ひ且、『家面東山常眼明朝嵐夕翠机閒檜』の東山三十六峰を聯想する、山紫水明の洛陽に若し東山微かりせば如何に殺風景な徒らに凡々たる一箇の都市に過ぎないであらう、往古の鴨河、壯なるに似たれど現在は寧ろ無きに勝るの感がある、汚水雜草日を趁うて醜穢、あつたら河原も半ば埋められて電車の狂奔馳走するに至つては凄慘見るに忍びず、獨り東山三十六峰は、溫雅の風姿悠久の形態、清澄獨尊一段の都會美を添へ、千載の古都として流石

に一木一石も歴史を語る慨あらしめる。

然るに此東山は只墨客騷人の咏嘆の對象となるのみで、學術的に對覈考査されず其範圍すら區々であるのは、燈臺下暗しの觀がある、吾三高山岳會は夙にこゝに着目するところあり、數日に亘つて各方面より研究し踏査し撮影し東山講演會を開かんとした、即ち本會の一事業たる山岳會大會を二部に分ち、第一部を東山、第二部を日本アルプスに宛て着々準備も完成した、併し考究の末として東山講演は直接京都市民と親熟なる新聞社の遺憾なき設備の大々的講演會に讓るを可とし、山岳趣味普及の點に於て、吾會と主義を同じうする大阪朝日新聞京都支局の懇望により、彼に全部の計畫を割愛することにした、果して二月十七日の當日は空前の盛況裡に十二分に京の象徴たる東山の研究を發表し、京都市民に東山の紹介及科學的知識の幾分を了得せしめたのは、たとひ吾會にて擧行せざりしとも欣懷とするところで、朝日新聞の快擧に對し賞讃の辭を惜まない、當日の詳細は別項(雜報欄内)大阪朝日記事を參照されたいのである。

依て本會は、日本アルプスと京都の地質構造をモツトーとして花々しく打て出た、市中の要所々々には、殘雪を輝かしたるアルプスの空高く、夕映に驚いて塒に急ぐ山鳥を配し、豪壯にして幽玄なビラは竹久夢二氏に依て揮毫されて貼布された。

當日は拭ふが如き好霽の紀元節である、學生集會場の階下には比企忠先生の蒐集に係る京都附近山岳所産の代表的岩石を數十個陳列した、定刻前より熱心な聽衆は續々殺到して目まぐるしい程であつた。

山本委員は開會の辭を宣した、三高山岳會の創立より今日に至る概況と、山に寄する憧憬及び東山講演會を他に讓つたことどもに就き半時間縷述して今村幸男氏を紹介する、氏は枉げて本會のため入洛して東山の峯傳ひを散歩されたところである、堂々たる風姿を壇上に運ぶや待ち構へた拍手は場に響いた、昨夏登山の鹿島槍ヶ岳の登山談で、自ら撮影に係る實況を本會のため特に製作された幻燈畫につき、約一時間長廣舌を振はれた、六百の聽衆は共に荒天に苦しめられ或は山頂の大觀に恍惚とし、舌端より迸るところ皆熱狂掀飜させれば止まなかつた、氏の周到なる、人夫の方言を筆記しノートを取出し如實に朗讀註釋したので、ローカルカラーとコメジツクシーンを巧みに表現し、ために全くエキサイトしてしまつた、歸神を急がれて降壇した時は誰一人再演を願はぬ者はなかつたらうと思はれた。

次に學校特に女學校にて團體登山の嚆矢たる夕陽丘教諭朝輝記太留氏は、傍聽に來會したるを突然小島榮氏の受持たる「槍ヶ岳と上高地」を押しつけられ快諾一番直ちに壇上に立たれた、山本委員は『夕陽丘(ゆふびをか)に朝日氏キタル』云々の警句の紹介終つて、逸品のスライドにつき、微に入り細を盡し縱横に解説された、例へば上高地溫氣清水屋の問取までも説かれたる如き、梓川徒渉の實感をイムプレツシーブに言はんとして口吃られた如き、氏の山岳に對する忘我眞率な半面を覗はれ拍手の急霰を浴びて降壇された。

次の三高講師エスタアブルツク氏は少壯の紳士、物馴れた態度にて學生に了解せしむるやう、明瞭に悠々、しかも流暢に述べられた、エ氏の出身カレツジにも、ロツキー其他の登山をなした者

◎雜　錄　各地登山會彙報（五）

の集合した山岳會の設立ありて盛んに登山をして居る、米國にもスヰイスに劣らぬ山水の絕景あり、然れども交通設備の發達は往々にしてロッキーの高峻と雖も殆んど汽車にて登山する感がありて文化の進歩に連れ自然の破壞が行はれ、自然物の保護論が叫ばれてゐる等、半時間程隔々まで胸がすくやうにズイと響いた、山本委員はアメリカ仕込の謝辭を述ぶればエ氏自席に立つて、サンクユーと答辭す片唾を呑んだ滿場は一齊に拍手した。

次に比企先生は立たれた、疲れも知らず聽衆は一句も逃さじと膝を進め、新聞記者は萬年筆を取出して物々しく緊張した氣分になる、冒頭口を突いて出づるは滑稽洒脫顧を解かせ滿場を醉はせた、生鹽を噛む如き科學を通俗に平易に解說し興味中心に纏述され、知らず知らず京都附近山岳の地質構造を素人に呑み込ませた御手腕には、敬服せざるを得ない、後日吾々にのみ話されたが、磐梯山の破裂と當時の小兒の慣用語にまでなり、日本號外の元祖たる事變に兩理學士の遭難の際同行し、僅かに身を以て生還されたる談話の如き、豪壯豪快を極めたものがあつた。

今村比企二氏共に山岳會員の先輩にして吾三高山岳會に對し陰に陽に指導傳育の勞を執らるゝは感謝の辭を知らないのである。

最後に立つた小島榮氏は、委員に謀め閉會の辭を述べられ面喰つて登壇、白馬岳と劍ヶ岳につき、說明された、劍ヶ岳は未踏のため山岳附錄の地圖に依つて解かれたが本年の三高登山隊の目的地なので一層注目された。

九時半に盛況裡に終つた、多大の犧牲を拂つた本會は必らず一場のお祭騷ぎの徒輩には終るまい、那邊にまで此影響が及ぶが、吾愛する日本アルプスに如何なる交涉を生ずるか、委員一同は刮目して來らん登山期を樂みに期待してゐる。

講師の方々、宍戸會長及び少なからず御手數をかけた高野幹事に深厚な敬意を表して擱筆します。（一委員）

七高山岳會

新聞ですでに御存じになりましたでせうが、私共七高山岳會の第四回遠足櫻島御岳（おたけ）及引平（ひきのひら）爆裂口の見物に行きました三十六名のものは、十二日、鹿兒島を出發して、十二日の夜を山中にて、前進、後退共に不可能になり、十二日の夕食、十三日の朝食を取らず、二俣谷と云ふ引ノ平のそばの谷の中で淋しい一夜をあかしました。但し、一行中履物の丈夫であり、又元氣のあるもの八名は同夜十一時ごろもと來た道を引き返へし、多大の苦心をして、十三日早朝、登山をはじめた武村につき、又八名のうち一部は藤野に着、又あるものはたゞちに本校に走せ歸り、校長に報告して、十三日、午前十一時ごろ、西櫻島村青年會約百五十名、生徒約五十名は、各々道をことにして、二俣谷に歸り來り、飯、水、草鞋等を給與しましたので、同日、無事鹿兒島に歸着することを得ました。そのうち詳しいことを申上げるつもりで御座いますが、ともかく、概要を記して、御知らせ致します。

十二日　午前八時、鹿兒島港を二艘の船に乘り出發、九時、櫻島の袴腰（方崎）に着、徒歩、武村の北東部より、登山をはじめ、

午後一時、北岳絶巓着、午後二時、南岳噴火口着、三時すぎまで休憩、下山の途につく。下降二十分にして、絶壁にあふ。一行中、多少經驗あるもの四五名それを迂回すべき道を探すに約一時間を要す、遂に發見せずして、元來りし道をひきかへすことに決して、下よりそれを大聲にて、告知したるに、聲達せず、そのうち上方に停止したるもののうち二人の氣早者、知らぬ間に、他方面より急斜面を辷りおり、はるか二俣谷に降りをりたるを認めたり。これを呼びかへさんとしても、遂に成功せず。よつて一同二人を追ひかけることに決して、二俣谷へ急斜面を辷りはじめたり。谷にて二人のものに追ひつき、たゞちに谷を下方に前進したるも、降るべからざる斷の絶壁にあひ、ある點まで引返へし、引の平爆裂口壁をのぼる。この時日全く暮れ、月まだ出でず。空腹を感じ、草鞋を用ひたるものは、全くこれをすりへらして、ほとんどはだしとなりをれるを發見したり。月出づれども、一行の元氣沮喪して、前進を欲するもの少なし。よつて谷底に下り、枯木をあつめ焚火をなし一夜をすごすべきことに決す。十一時半、八名のもの、先刻の急斜面をのぼりはじめ、約三時間にして、絶頂に達したる叫聲をきく。翌朝四名のものは引平絶頂にのぼり、救助者の來るを早く見んとし、二人のものは、その側方の急斜面をのぼり、赤水村に達する道を發見し、二人は履物をもたらすべく村に向ひて前進。午前十一時、青年會員絶巓より降下し、一行に食物を給す。殆んど同時に、生徒は赤水方面より來り、小生等を發見す。一行二百五十餘名、赤水に到り、休憩し、船にて、一旦袴腰にもどり、生徒の一部分と會し、午後四時鹿兒島に歸着。

◎雜　錄　各地登山會彙報(五)

實にわづかなことですが、人數が多いのと、島の人、及び鹿兒島市民が七高生を重要視されるため、種々の臆測流布し、當局の心配は甚だしかつたと云ふことでした。

（七高山岳會委員　辻　莊一）

梓會の成立まで

忘れもしない大正四年三月三十日の事であつた。キングレークのデザートを丁度田部教授（南日）が講義してゐられたが其の時「砂漠の上を天幕かついで駱駝を走らせる光景が眼に見るやうですね」

と言はれ

「私はかう見えても夏になるとよく方々の山に上るのです」

といろ〳〵山岳に關するお話をせられた時は生徒は一樣に駭いて教授一流の人を牽きつける話に或る者は

「是非私を今年の夏連れて行つて下さい」

と飛出したものさへあつた。

これがわが梓會の成立する遠い原因の一つである。その年の夏は教授は魚津よりアルプスに入り約二週間は山中にゐる筈ですと言はれたので生徒は遂に斷念した。といふのは吾々の學校では休暇が甚だ短いので且つは入校後最初の休暇の事でもあり二週間も山中にゐるのは教授に對して迷惑であらうと考へ今年は富士山でも登つてアルプスは來年にしやうといふわけで其年は何等現實の

結果を齎らさなかつた。

昨年の夏となつた。學期試驗も六月に終了して生徒の心は來るべき休暇の利用策に腐心しはじめた。圖書室では盛に地理書類が繙かれる。此の時である山岳の趣味を同うする五六の生徒がよりより

「今年こそ田部さんのお伴をしやう」

と計畫したのは、遂に其の一人は田部教授のお宅を訪問して是非御同行を願ますと懇請した。教授快諾。槍ヶ岳登攀といふ事が直ちに決せられたのである。

待ちに待つた七月二十一日の朝は來た。これが海軍學校の休暇の初日である。籠の鳥は嬉しげに八方に散る。吾々山岳同志は同日の夕方新宿驛で落合ひ夜行で松本に向つた。田部教授の旅裝のもの〳〵しさには何等用意のない吾々は少からず驚かされた。翌午前八時半松本着。不用品を驛に預けてこゝで先發の二名と會し總計七名二臺の馬車にて島々に向けて野麥街道を走つた。時々小雨が襲つて來て今日越さればならぬ德本峠の事が少からず脅かされる。十二時に島々に着。晝食を濟ませて茶を飲む間もなく急ぎ出發。島々谷を溯る一行は此の水が盡きるまで上るのですといふ教授のお話にげつそりしてしまつた。岩魚留の小屋は戸を閉ざして人の氣もない。氷砂糖を舐めて冷たい水で渇を醫す。これからが峠道。道がよくついてゐるので骨は折れないとは言ふものゝ山に馴れない吾々にはかなりの苦痛であつた。昨秋學校の行軍で三峯に上つた時のつらさも思ひ出された。路は上るに從て深山性の綠の木が美しい流の上を覆ひかぶせてゐるが〳〵しさには海の子は無上に嬉んで珍らしがづた。氣遣はれてゐた白雨が途にやつて來た。雨具の用意のない吾々は濡るがまゝに上つて行く。然し餘りの劇しさに一同はさゝある大樹の下に雨宿りをして過ぎ行くを待つた。德本峠の絕頂に着たのはかれこれ六時頃だつたらう。もう夕暮近い雨上りの空に突如として吾々を制壓する穗高の偉大なる山容に接した時は吾々は狂喜して足の疲れも何も忘れてしまつた。まあ何といふ大觀であらう。日本アルプスに對する吾々のやみつきは實に此の德本峠より見たる穗高連峰の夕暮の英姿に始まつたのである。

上高地に着いたのは七時過ぎであつた。清水屋の主人がしきりに好遇する。

次の一日は嘉門次小屋や宮川の池を訪れたり岩魚を追ひつめて捕へたりして潰したが始めて梓川の寒冷骨に徹するのを知つたのである。此川を明日は何回となく渡渉だと聞て內心ぞつとした。

翌二十四日はいよ〳〵目的の槍ヶ岳登山である。午前零時に起き出して提灯の光で一行七名は田部教授を先頭に出發した。服裝は昨日と同樣で白い小倉製の事業服。それに檜帽を載き足には黑のゲートルをつけ草鞋がけに一本の杖をつきて進む。かくして橫尾谷で夜は明け赤澤の小屋に着た時は六時頃だつた。こゝには昨夜とまつたといふ二高の生徒が朝食をしてゐて話を聞けば中房から大天井などを越して來たのだといふ、吾々はこゝで茶を沸して冷たい朝食を認めた。

こゝからは二高の人々と後になり先になりして無事にマッターホーンの絕頂に着たのは八時頃だつた。先頭第一に着たのはわが

等松山田の二君だつた。樺山は東側より攀ぢようとしたができないので引返したため少し遅れたけれど然し吾々よりもずつと先きに着いた。かうして此の大槍の絶頂は海軍經理學校の生徒のため今や全く征服せられたのである。

廣袤幾十里に亘るアルプスの神秘。千山萬岳は今や吾人の脚下に跪拜してゐる。吾々は未だ此の時程に自然の偉大をまざ〳〵と見せつけられた事はない。天も地も隱るゝ處のない山頂の壯觀は永久に吾々の記憶より去らないであらう。二高の人々は暫くして下山したが吾々はなほ留つてこの偉大なる眺望を纖けたのである。敎授は山の名だとか尾根傳ひに立山に向はれた時のお話だとかをひききりなしに面白く話された。或者は朝食の殘りを食ひ或者は四方の景色をカメラに收める。かうして一片の雲も一沫の霧もない午前の日本北アルプスは充分に知るを得たのであつた。

下山。高山植物を手折りつゝ足は宙を飛ぶ。上高地に歸りついたのは六時だつた。まだ明るいうちであつた。

翌朝敎授と分れて一行は上高地を後に島々に向て德本峠を東に再び越した。

あゝさらばよ思ひ出多き上高地の森。梓の流よ嘉門次の小屋よさらばいざ。わが大槍の銳き穗尖よ。海の人として生涯を波濤にゆられて送る吾々にとつては汝こそは永遠に消えざる想ひ出なるべし。

松本で記念の撮影をし一同はこゝて東西四方に散つたのであつた。山中暦日無し。僅か四日の山の生活に髯は茫々に伸び色は黑く燒けて其の珍妙な姿には吾乍ら吹出した。

◎雜　錄　各地登山會彙報(五)

九月に歸校して一同は如何になつかしさを感じた事であらう。山での共同生活は一同の者に言ひ知れぬ親和と結合とを齎らした。わが梓會は實に此の六人の生徒が發起となつて作られたのである。これ本夏の登山を永久に記念するためと且つ年々日本アルプスを踏破して生徒の元氣を振起しわが校の歷史上多少なりとも生彩を與へたいとの目的からである。山岳を愛する同志相會合し親しい交を結び僅か三年しかない吾々の陸上生活を意義あるものにしたいからである。實際海軍士官として一生を送る吾人は陸地たゞ其物が偉大なる愛着物である。まして況や陸上の絆とも言ふべき山岳は吾人憧憬の焦點であらればならぬ。これ吾々が三年の學校生活の夏期休暇を日本アルプスに利用すべく企てた所以である。梓會とは梓川の名に因だのはいふまでもない。かういふわけで發起の六人は生徒一般に向て眞の山岳愛好者を募つた。募に應じて集まつたのは五名。吾々共に併せて十一名より成るわが校の山岳會ともいふべき梓會は田部敎授を顧問として茲に成立を告げたのである。

本年二月四日一同は小集を催して敎授より面白いお話を承つた。本年の寫業としては針の木を越して立山に登るか或は北の白馬に登るかどちらかをやる事となつてゐる。

敎授より寄贈の本誌即ち「山岳」や候補生會員寄贈の烏水氏の「日本アルプス」數卷は本校圖書室に於て會員の閱讀に供せられる。本會記事たる「あづさ」第一卷は三月上旬に田部敎授の寄稿を始め一同の筆によりて發行せられた。目下の會員は候補生に稻岡、山崎。一號(第三學年生徒の意)に宮本、等松、樺山、山田。二號

◎雜　錄　各地登山會彙報(五)

に川島、淺野、奥田。三號には永岡、初見總て十一名である。

吾々は眞の山岳崇拜者である。自然讃美者である。吾々は海の人なるが故に山の人たらんと欲するのである。澎湃たる怒濤汪洋たる大海は吾人の終生の住宅である。海洋美「海のロマンス」は一生を通じていやでもつき纏ふのであらう。だから吾々は今のうちに陸上の檜威山岳美をあく程に飽滿したいのである。

梓會はかうした人達によつて永久に海軍經理學校に存續するに違ひない。(終)　(幹事　宮本彩花)



雜報

◎中學生行方不明となる

市内東區安土町一丁目帶地問屋龍村平藏長男平(十九)同區廣小路町質商植村さく長男嘉一(十九)の兩名は共に府立天王寺中學校の二年生なるが去月廿七日兩名打連れ高野山及び吉野山に行くとて自宅を立出でたる儘六日の開校日に到るも歸宅せざるより兩家にては大いに驚き手を分けて八方捜査したる處平は

出發以後一回の便りだも無かりしかど嘉一は同級生兩三名に宛て去月廿八日附を以て吉野郡大塔村大字中原より「今から全速力で山上嶽の頂上を極めるのだ」と通信せるを發見せしのみならず兩少年とも出發前密に參謀本部五萬分一の地圖に據て種々研究の上朱線を施し磁石時計蠟燭等の用意を整へゐたる事判明せしかば親達の驚き一方ならず去る五日以來兩家協力して捜査隊を出し奈良縣下市警察署及び吉野郡天川村大洞川附近の青年會並に在鄉軍人會員等の應援を求めて百方捜査中なるが兩少年は廿七日橋本に一泊し廿八日高野山に上りて植村の祖先の墓を尋ねたるも判明せざりしより山を越えて同夜は大塔村中原に宿泊し廿九日早朝同地出發同日午後四時頃洞川附近にて通行人に山上嶽に登る道を問ひたるまでの消息判明せしも其後の行動明かならず山上嶽登山道なる洞辻茶屋にて遺留品らしきものを發見したるが同所より山上嶽に登りしか或は積雪のため斷念の上同所より吉野方面に下らんとし誤つて柏木方面に向ひたるものゝ如き形跡あり。

踪跡發見　同地方目下積雪深きは數尺に達せる爲め捜査隊の困難一方ならざりしが七日午後に至り洞川より三里吉野へ七里を隔つる川上村鳴川山の内今宿にて同地方に見慣ざる小さき草鞋の打棄てあるを發見せしに力を得て附近を隈なく尋ねたる處雪の上に踏み迷ひたる足袋跣足の跡あるを發見し尚數度打倒れたる跡さへソレと指摘されたるが同地方は七日朝降雨ありて積雪除々に解け始めたるを以て問も無く足跡は雪と共に杜絶えたり同所は恰も馬の背の如き山地にて處々に斷崖絶壁あり捜査隊は此處にて數隊に分れ各隊獵銃を發射して互に信號しつゝ谷間々々を尋ねたるも降雨と濃暮の爲捜査困難となりたれば已むなく手を空しうして一旦柏木まで引揚げ同夜は此處に宿を取り八日は洞川なる捜査隊部本を柏木に移して捜査を續くる筈なるが龍村は四圓植村は八圓の現金を懷中せる外外套一枚の用意さへ無ければ恐らく寒氣と饑餓の爲め既に絶命せるものなるべく出發後既に十二日を經過し居れり七日天王寺中學校よりも職員一名洞川まで出張せり（大正六、四、九、大、毎）

二少年行方尚不明

金峰山の雪中探檢に行方を失ひたる二

◎雜報　中學生行方不明となる

少年に就ては其後四五十人の捜索隊を組織して鋭意捜索に從事せるが依然として消息なく八日夜吉野郡高原村より土地の狀況に精通せる前田與三郎氏備後町一丁目の龍村氏方に來り種々打合する所あり大天井ケ嶽附近より洞川方面より下多古村高原村に亘る一帶の捜索を爲す手筈を極め居れるが前田氏の談によれば、何分彼の地方は未だ春淺き事とて積雪も所によりては五尺もあり皆岩の如く凍り居れば雪の中に踏み込みて埋るといふ怖れはなけれども屢凍死者を出すを常として一昨年も丁度此頃に凍死者を發見したる事あり植村少年の如きは性來の冒險好にて道の二十里や三十里は意に介せざるより留守宅の者も伊勢路へ廻りたるやも知れずと樂觀し居るも此頃の凍結したる山道にては土地の者も一日五里內外より歩み得ざる狀況なれば途中にて糧食盡き凍死せず共保し難し目下の處懸念に耐へざるは天候にて、當地は雨なりしも彼地帶は大雪なりしなるべく爲に捜索の手掛りを失ふに至るべき事なりと云々尙鈴木天中校長は八日午後龍村方の慰問に赴き種々の打合せをなしたるが學校よりは辻本教諭該地に赴き居れり、因に龍村少年は生來剛毅の性質にて登山中にも足袋を穿かず如何に勸むるも袷一貫の外着せざりしなりと。（大正、六、四、九、大、朝）

捜索隊空しく歸る　大峰山中にて行方不明となれる天王寺中學校第二學年生龍村平及び植村嘉一兩名の捜索は去る六日より洞川駐在所大井巡査を始め同村在鄉軍人青年會員等總出にて連日續行され居れるが未だ發見せず八日午前六時頃より捜索隊は本部なる洞川紀國屋旅館に參集して五人一組に編成し發見の際は軍人會は「氣を付け」の喇叭青年會は銃砲三發を合圖する事に定め更に同村の醫師をも一行に加へ準備成るや午前八時一行約四十名勢揃ひして旅館を出發せり山上嶽は密雲低く垂れて風强く寒氣尙肌を裂けり四十丁にして達したる一の瀧茶屋附近は約四五寸の雪にて歩行困難を覺ゆ此處にて一行を三手に分け軍人會はゲマタ谷より青年會は覗き谷より他の別働隊たる同村宿屋組合其他の有志は川迫谷より何れも頂上に向つて踏査することとなり記者は覗き谷の部隊に加はれり途なければ約五六間の間隔にて聯絡を取り密林中殘雪尙三四尺の中を遮二無二攀登りて捜索隊の苦心名狀すべからず途に日沒に近づきたるにも何等得る所なく各部隊は豫定の洞辻に落合たるが其處には待ち合せ居れる龍村方の番頭及び植村方の親戚の人等を始め駐在所巡査も一方ならず落膽し何かに喰はれたのでせうかと悲痛の色小屋內に漲れり折柄又前日來より鳴川官林を捜索に來れる別働隊も同地に落合ひいづれも明日の捜索を打合せて午後六時半下山せり。

宿の在所が誤りの原因　二中學生が行方不明となりし第一原因は去廿九日兩名が橋本、高野山、中原等を經て同日午後三時頃洞川の手前約二丁許りなる持景橋の橋畔に來り其處にて駄菓子屋の女房に打向ひ大峰山迄如何程里程ありやと問ひたるが女房が約三里ありと答へしに對し更に宿屋があるかと聞き件の女房が何氣なく上（洞川の事）へ行けば幾らもあると答へたるを學生等は頂上の事と信じ今午後四時なればとて元氣の足に任せて頂上に打向ひたるが誤りの原因となりしものなりと因に九日は全村の獵師をして獵犬を使用し屍體發見に努むる筈なりと。（洞川にて特派員）

辻本教諭歸る　尚洞川方面に赴ける辻本天王寺中學校教諭は八日夜九時頃一先づ報告のため歸阪し同日午前までの捜索模様を報告したるが其談に二少年が山上嶽を目的に登攀し鐘掛岩まで至りし形跡は認め得たるもそれからは殆ど判らず捜索の中心點が見當付かぬ有樣なれば如何とも爲す能はず更に協議の上捜索の方針を定めて再び同地に赴く考へなるが同地方の警察其他一般は二少年は既に死亡し最早生存し居らずと斷定し何れも非常な同情を以て死骸の所在發見に努めて呉れて居ます云々。（大正六、四、一〇、大、毎）

二少年は死し居たり　金峰山に雪中探檢を試みんとして行方を失ひたる大阪天王寺中學生植村嘉一、龍村平の二名捜査のため大和國吉野郡天川村大字洞川にては村民百四五十名の大捜査隊を組織し九日午前六時山上ヶ嶽に向ひ洞辻に捜査本部を置き此處にて隊を十三に分ち積雪三尺より一丈餘に達する山上ヶ嶽一帶隈なく捜査したるが午後三時三十五分に至り洞辻を距る二町餘りの下手なる水呑谷に於て死體を發見せり發見者は青年會員東谷龍次郎、辻國松の兩名にて植村嘉一（十九）は仰向けに倒れて龍村平（十九）は俯伏せになり居りしが兩名とも顏は紫色に變じ何れも足袋跣足にて帽子は十間餘の所に飛び散り居りたり先着の捜索隊員の語る所によれば右兩少年は二十九日山上ヶ嶽に登り得ず更に吉野山に向はんとて洞辻より鞍懸まで行き同所にて火を焚きキヤラメルを食ひし形跡あり饑渇と寒氣と疲勞に堪へ果てて洞川に引返さんとせしが同附近よりは右手にあたり眼下遙に洞川道を見渡し得べきによりカツヱ坂の嶮岨を攀づるを避け近道を取るべく直に水呑道に下りたるものらしく同所は兩側に小杉生ひ繁り殘雪今尚七尺餘りありと。

友情偲ばる　更に死狀に就て聞けば龍村少年は額に手を當て仰向けになり夫より二三尺を隔てゝ下の方に植村少年は自分の鞄にて面を掩ひ龍村の鞄をも肩にかけたるまゝ凍死したりと兩人とも小倉服の釦が外づされてゐたるより見れば互ひに肌と肌を寄せて暖め合ひしものと思はる、友情の程愛すべし、殊に植村が龍村の鞄を持ちゐたるを見れば龍村が先に弱りしため持つてやりしものと思はる、植村は無傷なれども龍村は顏、頭等に五六箇所の傷あり絶壁より墜ちし時に受けしものか、現場へは洞川の街醫師急行檢視せり、死後七八日を經過せりとの鑑定なり、午後六時過ぎ兩人の死體は洞川紀伊國屋旅館に持歸られたり、携帶品はマツチ腕時計、空辨當、朱線を施したる參謀本部地圖、蠟燭、日記等なり日記には旅行の豫定と二行の旅行記が記入しあるのみ、植村は四圓、龍村は二圓の金を殘せり、腕時計は二時半にて止りゐたり、死體は十人の人夫にて夜通しにて下市に出で大阪に送られたり。

慘事の原因　二少年今回の慘事を致せる件を研究するに植村少年の表褧より出でたる旅行豫定を見るに二十八日の條に「午後三時山上ヶ嶽、同五時此處出發五時半洞ヶ辻茶屋一泊」とあり參謀本部其他の地圖にも洞ヶ辻茶屋とあれば茶屋と云ふ字に對しても地圖だけを見れば如何にも宿屋のありさうに思はるゝ所より兩少年も洞ヶ辻茶屋に一泊と豫定に記しあり併し事實は全然反對にて茶屋とは名許り海拔五千尺の深山にて宿屋などのあるべき所にあらず是れ地圖のみに賴りて計畫を豫定したる爲に遂に斯かる

◎雜　報　中學生行方不明となる

◎雜　報　中學生行方不明となる

慘事を致せるなり加ふるに洞川村の村人が上に宿屋がありと言ひした此の「上」を兩少年は先入主となり居る洞ヶ辻茶屋とのみ思ひ込み午後四時洞川を出で洞ヶ辻茶屋に向ひしに思ひの外の深山にて夜に入つて遂に後戻りせんとして洞川村の點火を下手に見て下り水呑谷に墜ちて凍死するに至りしなりなるべし。（大正、六、四、一一、大、朝）

二少年は死せり　大峰山中にて行方不明となりたる天王寺中學二年生市内東區備後町一丁目帶地問屋龍村平藏長男平（ナ）及東區廣小路町貿商植村さく長男嘉一（ナ）兩名の行方に就き大峰山麓洞川村の在鄉軍人並に青年會員五十名は九日早朝も疾起して三度積雪五尺餘の山上ヶ嶽を登攀せんとし同村民百餘名も痛く同情して續々參加を申込み茲に百八十餘名の一大捜索隊を組織し五名宛一組三十餘組に編成山麓より約二里を登攀せる洞辻茶屋に勢揃ひを爲し積雪を蹴つて全山に亘り大捜索を爲すべく出發し予（特派員）も亦其一行に加はれり雪は朝まだきのことて固く登攀には容易なるも獸の足跡すら發見せず一行は徒らに疲勞と困憊とを覺ゆるのみ正午近く遂に絶望の裡に引揚ぐるの止むなきに至れり、捜索隊の幹部青年會長小石幸次郎、軍人會長紀岡文治、龜谷磯三郎、紀野倶治氏等は一の世茶屋にて協議會を開きたり。

屍體發見　一行は更に雪靴を穿ち發見の場合における合圖の用意に一挺の鐵砲を携へ雪又雪の嶮路を互に呼び交しながら一樹一巖をも忽にせず峰より峰を溪より溪を傳ひ山中隈なく捜索する折しも一組の捜索隊が午後三時半洞辻より吉野街道を東北に向つて行く事約四丁俗にカッエ阪と稱する高丘に佇立して四邊を物色せる刹那！盆員中の洞川青年會員東谷丈次郎辻國松の兩名は突如として大聲を擧げ「谷に人が見える！」と絶叫せり、相圖の空砲は山靈に谺し四散せる捜索隊は其高丘に集合せるが見れば參差せる杉林中を遡して眞白に凝結せる積雪中に人影らしき黑點二つ、確に二少年の横臥せるが如き光景歷々と亟居る人々の眼中に映じたるよりソレッと許り一行は俄に馳りたるが如く疲れ切つたる身體に正氣を吹き返して樹から樹、枝から枝を猿の如く傳ひ急阪を辷るが如く洞川の溪流に沿ひ約一丁を下りたる谷に水呑溪と稱する溪谿の一斜面に集合せり。

雪の谷間に手枕して　二少年は互に身體を接近して凍えし身を半分まで雪中に埋め横はれるを發見せり、一行の張り詰めたる氣も緩み果て愕然として其死骸を見れば龍村少年は右の手を曲げて枕とし脊き加減となり植村少年はズックの鞄を以て其顏を蔽ひ仰向けとなり兩名共西枕となつて永久に醒めざる眼に入れり、遙る〳〵愛孫の行方を訪れて登攀せる龍村平の祖父爾助（ナ）の如き人眼をも顧みず狂氣したる如く雪中に轉び其死骸に縋り付き「平か〳〵、モウ一度だけ聲つて呉れ、祖父は……祖父はこゝまで來たぞッ」と聲を限りに叫んで其死骸を揺れり、予（特派員）は此悲劇を見るに忍びず死骸の上方茂れる杉林の中に入りたるに雪を除けたる地上に二少年が暖を取る爲に焚火したるが如く燐寸の燃屑やら燋げたる枯葉なぞの濕りながら取亂されたる痕あり、二少年がこゝに最後の休憩を執りたる時の感情や奈何其處よりは密林を透して脚下に洞川村數十戸の民家の甍は手に取るが如く更に頭を回して北西を見れば大峰山中の有名なる雞所鞍懸けの巨巌白

雪に蔽はれ巍然として聳え立てり、二少年は大峰山嶺を究めんとして積雪の爲め鐘懸岩迄登りたれども目的を達し得ず豫定を變じて吉野街道を吉野に到らんとするも前途猶積雪深きに恐れ此杉林中に憩ひ洞川村の民家を俯瞰して今一奮發せいふ其刹那、疲勞と饑寒に身體綿の如く一歩も進む能はず雪中に倒れたるまゝ凍死したるものらしく、予は引き返して遺留品を調査したるに植村嘉一の手首に巻かれたる銀側腕時計の時針は正に二時十分を指し懐中せる參謀本部五萬分の一の地圖には大峰山より吉野に到る道を色鉛筆を以て細々と記入され其懐中日記帖には一字も記載なく旅行豫定表なる左の一札あり。

大阪出發（廿七日）—長野—橋本—高野山—洞川—大峰山—洞辻—吉野—多武峰—御所—下田—王寺—國分峠—大阪歸着卅一日）（大正六、四、一一、大、毎）

春雨の裡に二つの柩　吉野山奥の雪中にて慘死したる天王寺中學生植村嘉一、龍村平の二少年の棺は人夫に舁がれ植村の義兄助五郎氏、龍村の祖父彌助氏附添ひて九日の眞夜中十二時洞川を出で洞川村を去る十餘町の小南峠迄は村の有志なる村長青年會員在鄉軍人等三十餘名提燈を提げて見送りたるが折柄の春雨と見送り人の提燈の火林間に明滅するさまいとど物の哀れを催さしめたり二つの峠と多くの坂道とある五里の道を五日來一睡だもせず捜査に盡力せる龍村少年の祖父彌助老人の如きは棺に附添ひ一憩みもせず六十六の老齢にも拘らず下市迄到れり平生ならずともことですが何分氣が張つて居ますでと涙ぐみつゝ物語れるさま思はず涙を流さしめたり、十日朝七時に至り漸く下市に着し七時五十一分の列車にて出發せり十日も吉野近き此の邊一帶は花曇りにて颯々たる小雨をさへ交へ白布にて蔽へる棺に降り濺げり棺には植村少年の穿ちたる小き靴を結び着けたる板に墨にて丸の印を附し二つの棺の區別を爲し小荷物取扱注意に赤札を貼られたるなどいちらしともいちらし。（下市にて特派員電報）

遺骸着す　十日午前八時四十分下市を出發したる龍村、植村兩少年の遺骸は特に客車一輛を買切り捜査に向ひたる兩家の人々等に附添はれて午前十時二十分湊町停車場に到着したり、同驛には兩家の親族緣故を始め天王寺中學校より鈴木校長、辻本教諭谷脇教諭及び同級生たりし新三年級の正副組長六名と代表生徒二名等プラットフォームに出迎へ轟て列車が構内に入ると共に白布を以て蔽はれたる靈棺に收められたる兩遺骸は同級生及び親族等に擁せられて運び出され構内に用意したる自動車二輛に分乘して各自宅に引揚げたり、哀愁の氣は驛の内外に漂りて白布の棺が群集の眼を襖さる間寂として聲なく歔り揚ぐる婦人の聲、ハンカチーフを以て眼を蔽ふ親族等、見るも悽痛の極みなり、兩家にては自動車の到着と共に棺を解きて佛前に移したるが凍死の爲にや顔面今に紅潮を呈して尚生けるが如く遺族をしても又も涙の雨を催さしめたり、十日は一夜通夜をなし十一日一旦火葬に附したる後更めて本葬を營むべく天王寺中學校に於ても日を定め別に追悼會を營むべしと云へり。（大正六、四、一一、大、朝）

◎雜報　中學生行方不明となる

◎雜　報　寒中淺間登山　マラソン登山を恥ぢよ

寒中淺間登山

═══ 柄にない東京者の大奮發 ═══

東京深川區牡丹町の市川德之助が淺間山に登山した詳細を聞くに二十七日の夜は小諸町本町の萬屋旅館に泊つて二十八日午前五時と云ふまだ薄暗い中に旅館を出た去年の夏一度登山して稍山の樣子を知つて居るので案内者も頼まずに出懸けた信州の寒氣殊に佐久高原の寒氣の何んなものであるかも知らぬ東京者の事とて足袋股引草鞋がけと云ふ防寒の用意も何もない至つて簡單の仕度で登り始めたので一里半許り登ると足の先から凍え始めて歩行困難となり途に路傍に居すまつて息を繼ぐやうになつた。休んで居る處へ來合せたのは鐵砲を肩にした獵師で見馴れない男の居るに驚き仔細を聞くと登山心願のため此處まで來たが何分にも寒さが强くて堪まらぬと答へたので『アンタそんな趣向ぢや登れねえ』と云つて『此處から一町許り行くと小山太郎さんの別莊があるから其處へ行つて炬燵に當てゝ貰ひなさい』と教へた、德之助は大に喜んで小山氏の別莊を尋ね當て家に入つて煖を取らせて貰つたが折しも別莊に來て居たのが淺間山の主とも謂ふべき火山館の主人であつたのでそれから先の案内を頼むことにして別莊を出た火山館の主人は冬季は麓に近い淺間館に來て居るので淺間館まで連れて行つて防寒の用意を充分に整へさせた。

先づ足袋を三足穿き其の上に膝まですつぽりと入る藪靴を穿せ尚其上に馬沓ののやうな大きな草鞋を穿せ膝から少し上まで藁で包み手も亦藁でくる〳〵と包んで僅に物を見得る丈僅に呼吸を爲し得る丈目と口の所とを開けて置いたのみ實に奇妙な扮裝とならせた、案内人たる火山館の主人も同じ樣に用意をしたので此處に藁のお化が二つ出來上つた。用意が出來て登り始めた所地上五六寸の積雪も澤の吹き溜りの所へ行くと四五尺となり半腹以上も尚一尺餘あつてそれが嚴寒のために氷の塊の如くなつて居るので滑つて轉びさうで實に困難を極めたおまけに足には非常に大きなものをつけて居るので足の運びが意の如くならず非常に手間取れた、デ頂上に達したのが十二時過ぎであつた、噴火は至つて平穩であつたが風が强くて目も口も明いて居られぬ噴火坑の内を覗いて見るどころの餘裕が無いのでソコ〳〵にして下つた、が段々に疲れて來るので小諸町の萬屋へ戻つたのは夜の九時となつたのである火山館の主人は途中を案じて萬屋まで送つて來たさうである。

德之助の妹は小諸町の關屋に藝妓をしてゐて昨年小諸町の製絲家小山清右衛門氏に落籍され今は其園ひ者となつて居るので二十八日の夜德之助を尋ねてマア無事でよかつたと喜んださうなお茶代二圓女中へ一圓ソレ〳〵酒だと可なり札びらを切つて下山祝ひをしたとやら何の心願あつてかは知らぬが先づ道樂の寒中登山見るの外無い。（小諸電話）（大正六、一、三一、信、毎）

マラソン登山を恥ぢよ

═══ 風景に加ふる科學的解剖 ═══

山登りの時節が來た、何だ彼だと山好きの旅行家はそろ〳〵仕

度にかゝつて居るであらう、總じて山に行く者は單純な趣味から出る者と學術的の見地からする者と大方二つに分類する事が出來る、本統の趣味から行く者は重に景色を目あてにする、多少でも研學的の頭で行く者は地層とか植物とかに目を曳れる、人銘々に立場が違つて居るのだから一概に律する譯には行かぬけれど、誰でも凡そ山旅行をしようとする者は多少は學術的研究の頭で居ればならぬ、雄大な景色、明媚な風光を背景にした名所古蹟を探るの快味は、洵に譬へ様なきものであらう、併し地質地層の見地から山々を踏破するのは又格別の樂みがある、若しも氣保養の旅でない限り、學生などの登山にあつては特に後者の覺悟が肝腎である、近頃は各學校の生徒達が競つて山登りをする機になつた、結構な事である、それでも學生の登山は往々にしてマラソン競走のお化の様に『僕は何里何里を一氣に突破した』なんぞと誇るが如きは殘念な事である、學生などは既に相當山岳に就いての素養もあるのだから、先づ山の景色を眺めたら更に頭を用ひて、怎うのあるからは此處の地層は怎うであらう、あゝいふ眺めを見せて居るからはあゝした地質から成り立つて居るに違ひない、といふ様に多少科學的の解剖を山々の景色に加へて見れば、山の趣味は一段と深くなつて來る、秩父連山には秩父特有の素質がある、妙義、赤城には又それ〳〵の特色があるといふ様に何處の山でも屹度その山の氣候と地層に關連した獨特の景色と特色があるのである總て景色といふものは地質と氣候の表象であるのだから、本統の趣味、文學的の趣味から山の景色を眺める者でも相當科學的研究の素養と用意をして山に登られば景色の眞諦をつかむ事は出來ない、最後に特に學生の登山者に慫めたいのは『觀察と注意を怠るな、マラソン式登山旅行を恥ぢよ』との一言である、と農商務省地質調査部の佐藤、小林兩技師は語つて居た。(大正、六、六二、七、報知)

◎雜　報

天下の名山大臺原山の破壞せられんことを惜みて志士仁人に檄す

理學博士　白井光太郎

嗚呼天下の名山大臺原山今將に濫伐せられ荒廢に歸せんとす惜む可きの至りなり大臺原山は和、紀、勢三國の境界に聳え大和の吉野川、伊勢の宮川、紀伊の熊野川の水源をなすものたるは古來周知の事實にして兒童走卒も尙能く之を知れり職に林政に從ひ水利を監理し縣治を操縱する公官吏豈之を知らざるの理あらんや然るに安んぞ知らん大臺原山の絕勝たるは其名木奇草にあつて瀑布、怪岩の見る可き者多きにあり隨つて珍奇の動物の多きや論を俟たず其細節に至りては奈良市木本氏著吉野群峰の一書に讓り今之を略す。

萬能達して一心足らずと云ふ事あり林學を修め治水を講じ政事法律に通達する人は多士濟々たりと雖も天下國家を憂ふるの心を有する人は甚だ乏しきを知る何となれば大臺原山の如きは古來有

◎雜報　比叡山の天幕村訪問記

名にして山中三津の川落は三國の三大川の水源たるを知りつゝ之れが荒廢を不問に附しつゝあるは一心の足らざる證左に非すや。

宮川は伊勢大廟の境域に入る五十鈴川是なり宮川の水源の荒るるを顧みざる一事を見てもその一心の足らざるは知らるゝなり史蹟名勝天然物保存の必要を唱ふる人に段々世間にも多き樣なり然れども天下の名山大臺原山の如き絕勝の破壞せらるゝを傍觀して徒に雜誌を發行し演說を爲すも何の益かあらん是亦一心足らざるの類なり。

然れども大臺原山救濟の問題は甚だ簡單なり十年以前四日市の或製紙會社が山下の村より山中の樹木を十五萬圓にて買ひ受けたるにより今次之を伐木せんとして既に昨年末一萬尺〆の樅、唐檜等の巨木を伐木し本年亦雪消を待ちて伐木を續け全山を盡さんとするにあり之を止めしめんとすれば十五萬圓を辨償すれば宜敷なり和紀伊三國に有志の素封家多からんも邊鄙の事故一人の力にて之を辨ずるは難儀なるべし數人協力するか大阪邊の富豪にて義俠の仁人ありて一手に辨償せられたらば如何ばかりの功德なるや測知し難し由來仁者は山を樂しみ仁者壽なりとの事もあり夫丈の名譽と吳報とを得られ天下後世に傳唱せらるゝは余の保證する所也敢て天下の志士仁人に檄すと云ふ（大臺原山は吉野郡に屬す故に救濟の志しある人は同郡役所に紹介せられて可なるべし。六日午前二時記）（大正六、三、一〇、東、日）

比叡山の天幕村訪問記

朝六時比叡山の頂上の四明が嶽がまだ靄の絹帽子をかぶつて居る頃八瀨口から可なり險しい道を登ると七時過きには早くも天幕村に着く、村と云つても家はやつと七八軒、其家も柱は天然の杉の樹を屋根は杉の皮を葺き壁は天幕を張つて家と云ふよりは小屋と云つた方がよく似合つて居る、這入つて見まはすとカーテンの代りには手拭をつぎ合はせたのを掛け、花瓶代りに竹筒や食鹽のあき瓶、本棚やテーブルは總て荒げづりの板の素人細工で間にあはせ、クッションは縮み裕衣地でつくり、額面代りに雜誌から切り取つたポンチ繪が張つてあると云つた風で、實に簡單至極なもの、すべて出來るだけ簡易にし出來るだけ原始時代に近い生活を營むことがこゝの村人の理想だと云ふ、此の天幕村を三十年以前に初めて開いたのは故同志社大學教授デビス博士で今も村の中央にデビス博士記念禮拜堂が建つて居るが、何でも今東京に居るモリル、デビス氏が赤ん坊の時ひどく腸を患つたので、お父さんの博士が山に連れて行きたいと思つたけれど、その頃は外國人が一足旅行するにも旅行免狀を要したのでそれの下附を願ふのがうるさいから何處か京都邊でと探して發見けた場所である、つい十年程前までは村の名の通り本當の天幕生活であつたが、ある年大暴風に襲はれて天幕を吹き飛ばされたのに困つて、このやうな小屋を建てた、村人は歐米人許りで、一時は大變繁昌して三十家族を算へた事もあつたけれど、この頃は輕井澤に人氣をとられて昔の賑やかさは見られないが淋しい方が浮世離れした生活が出來ると

却つて喜ぶ人もある、此の夏此處に暑さを避けてゐるのは五六家族の中に川口に住む米國宣教師ウイークリー氏夫妻も交つて居るこの村が開かれて間もないある夏此處である婦人がお産をして、山で出來たからとて、その産れた男の子にアドマントと名づけたのが、今は米國で第一流の醫者になつて居るが、今は比叡山にこの人が生れた土地として米國で名高くなるであらうとこれはウイークリー氏の話であつた、こゝは日中の一番暑い時で溫度が八十度位、杉の葉擦れの音、鶯、頬白、かうろぎのなく聲など春夏秋の自然の音樂者のかなでる大曲は人の子のいかなる巧な樂よりも美しく、谷川から竹筒で引いた水はいつも風呂桶に溢れ、附近から氷よりも冷たい清水が湧き出て、避暑地としては此の上もないところ日本のお方は何故にこんな結構ないゝ所を見逃して、日光だの箱根だの贅澤な所にばかり行きたがるのでせうと彼等は笑つて居た日用品はどんな重いものでも頭に載せて麓から大原女が毎日運んで來る。（婦人記者）（大正六、七、二四、大、朝）

●山の傳說（三峰のお犬樣）

日本山岳會幹事　木暮理太郎

△秩父三峰といへば、關東で名高いもので恐らく誰知らぬ人もあるまいと思ふ。今でも田舍へ行くと能く門の柱や家の入口三峰講と書いた古い木札が打ち付けてあるのを見懸けるであらう。元は何十萬といふ信徒があつて關八州は云ふに及ばず甲州信州方面から

も講中が陸續と參籠して、お山の繁昌は六十町の登路を人で塡めた程であつたといふ。それも皆お犬さまのお蔭である、お犬さまは火防盜難除けの神として深く崇められてゐた。それで信徒は一定の幣帛料を納めてお犬さまを借り受け家の守護神とする。然し分身を請ひ受けて歸る途中に休憩を許さない若し泊つたり休んだりすればお犬さまは其家に止まつて其家の守り神となつてしまふと云はれてゐる。夫であるから遠方の人は中繼の人を途中に幾人も配置して晝夜兼行して歸つたものである。

△それなら其お犬さまは何だと聞かれると實は返答に困る、八幡樣の鳩や、お稻荷さんの狐は誰も知つてゐるが、三峰のお犬樣は見た人がないいや無い譯ではない、私の知つてゐる限りでは四度は體に姿を現はしたに相違ないやうであるが私は不幸にして一度も其現場に出會はなかつた。

△傳說に據ると景行天皇の御宇に日本武尊が東夷を征伐して甲州から武州へ越えられる際に今の雁坂峠を踰へて三峰へ登られた、其時道に迷はれて お困りになつてゐると、忽然二疋の神狼が現はれて先に立つて 御案內をしたので 恙なく御登山せられた。そこで尊は山上諾二册を お祭りになり、この狼を永く神使として附屬することを許されたといふことである。これが お犬さまの始まりであるが、同樣な傳說は御嶽にも武甲山にも傳はつてゐるので、何處が本家であるか 判然しない。然し三つの山の中では三峰が兎も角も奥深い山なので、お犬さまは三峰の獨占に歸してしまつたものらしい。

△時代はずつと後れて 大老井伊掃部頭が櫻田の雪に噎れた萬延元

年の秋になる。此山では毎月十九日に一斗五升の米を炊いてそれをお犬さまに供へるのが例だ、場所は勿論山の中である。上州の片田舍から參詣に出懸けた講中の一人がお犬さまの姿を拜みたいと思つて、式が濟むとこつそり後に殘つて獨り木蔭に隱れて見てゐた。眞夜中近くなると生憎類りに便を催して來たので、勿體ないとは思ひながら已むを得ず紙を布いて用をしてゐると、不圖二三間先に圖にも餘く二つの目玉が現はれた、續いて耳まで裂けてゐる大きな口から赤い舌が覗められた。まさしくお犬さまである。驚いた彼は一目散に逃げ返つたまゝ二三日は口もきけなかつたと語り傳へられてゐる。

△同じ頃に信州中野の人がお犬さまを借に出懸けて急いで歸る途中彼の誡めを忘れて茶店に休んで晝食を遣つた。横川まで來て不圖氣が付いて包みを開けて見ると果して大事なお姿の札が紛失してゐる。青くなつて取つて返し、先の茶店の附近まで來ると見慣れぬ小犬が人家の門口に紛失した札を咥へて立つてゐる、思ひ切つて『三峰からお出でになりましたか』と聞いて見た、すると小犬は見る〳〵大きなお犬さまの姿になつて『サー』と答へたといふことであるが、眞僞はもとより保證の限りでない。

△私が先年三峰へ行つた時、神社の裏手の三峰村の老人に聞いたことがある。其老人は若い頃に一度お姿を見たことがあると話した、その話に據ると、お犬さまは一本の木一本の草があれば自在に姿を隱すことが出來るので、容易に姿は拜めない。然し山に雪が積ると足跡が殘る、其の跡は犬のよりも少し大きく且つ趾の間が切れてゐないといふ。或時老人が獸を捕る目的で一丈五尺許の陷し穴を掘つて置いた、すると夫の中へお犬さまが墜ちてゐたので、太い藤蔓で編んだもつこを入れて引上げやうとしたがぽつりぽつりと嚙み切つて穴から飛び出さうとする、一丈二三尺は飛び上るが今一息といふ所で出られない。今度は太い綱を下ろして嚙み付いた所を手早く引き上げた、お犬さまの足が地に付いたと思ふ途端に早くも姿は掻き消すやうに見えなくなつたといふ。老人は更に付け加へていふ、あらたかな神樣ですから御信心なされば屹度御利益がありますと。餘り秘密を洩らすと神罰が恐ろしいから茲で止めにする。（大正、六、七、一九、横、賢）

山へ！山へ！

地圖の賣行から見た今夏の登山熱調べ

一番多いが日本アルプス、次は大和アルプス＝足が漸次に四へも向く。

梅雨もいよ〳〵明けて夏も登山の季節に入つてからは暑中休暇を利用しての學生や其他一般の登山家等は目下頻と地圖と睨み合ひで考へてゐる京阪神にかけて唯一の地圖屋たる市内四區江戸堀の尙友堂で此頃何の方面の地圖がよく捌けるかにつき調べて見ると、地圖は大抵參謀本部測量の五萬分の一ので本年は兩三年此方にない捌け方ださうな、で一番よく捌けるのは矢張り日本アルプス地圖で六月に入つてから既に百五十組、次は大和アルプスで大峰山や大臺原山なども四五十枚、それから昨年頃までは東方の山

の地圖がよく賣れたが本年は遠く九州の阿蘇霧島の地圖も二三十枚賣れてゐる、外四國の劍山の地圖も出るさうな、それから筑後の矢部川の上流は耶馬溪に優る絶景だと評判され其方面の地圖も十數枚捌けてゐる、其他近畿の山々別けても寶塚より六甲へ、生駒山より信貴山への縱走地圖などは四季を通じて每週定まつたやうに土曜日の日によく賣れるから妙だといふ、其他ボン〳〵山を中心とする攝津、山城、丹波の國境方面、或は鷲峰山を中心とする山城、大和の兩國境方面の地圖なども十數枚賣れてゐる、兎に角昨年頃までは學生によく賣れたのが今年は丁稚小僧などまで買にくるのは山岳趣味の普及を想像するに足るさうな。（大正、六、七、一四、大、每）

乘馬富士登山隊

富士登山口なる須走村が一村の運命を賭して七年の歲月と約一萬圓の工費と莫大の縣補助金を投じて擴張せる須走乘登山道は馬狹溢を感ぜるより同村にては更に縣費補助を要求して取擴げ此程峽成に近づきたるを以て十五日淺間神社に開山式を行ひ全國新聞記者四十四名を招待し十六日午前二時出發馬を連れて乘馬第二回登山會を行ひたり而して同村にては唯一の下山道とも云ふべき砂走の大修復をなしつゝあれば此機を以て新下山道の踏破を試むべし、コハ山頂より六合目迄は舊道に添ひ六合以下は舊道と分れ太郎坊に據らずして直に假安に入り須走へ直下するものにて目下頗に工を急ぎつゝあり、騎馬隊一行は十六日正午六合目着山頂に向ふ須走町長等の談によれば今夏の登山者は昨年の二倍半に達すべき見込にて既に十四日は東京お茶の水高等女學校生徒三百名は女子登山の先驅をなしたりと、尙山上にて試驗すべき飛行機の發動機は二百餘名の人夫によりて運ばれつゝあり。（須走にて特派員）（大正六、七、一八、大、每）

◎雜報　乘馬富士登山隊　女學生の登山熱旺んなり　白馬山雪深し

女學生の登山熱旺んなり

富山縣立女子師範學校にては登山熱の爲め日本アルプス登山希望者二十名を募り二十四日男女敎員各一名の引率の下に出發し北アルプス主脈の名山たる立山を始め淨土雄山別山等を踏破すべしと是れ婦人團隊登山の第二回目なり（富山十八日特電）（大正六、七二〇、時事）

白馬山雪深し

日本アルプス登山者は七月に入り漸次增加する例なるが本年は春寒のため白馬山方面は今尙殘雪深くして到底登山し能はざる旨所轄警察署より縣廳に報告ありたり（長野來電）（大正、六、七二、時事）

◎雜　報　小黑部鑛山に郵便局　武甲山中の慘事

小黑部鑛山に郵便局

越中立山連峰中の劍嶽にある揮水鉛鑛山では請願郵便局の工事中だつたが此程工事竣成、來月一日から通信事務を取扱ふ事になつた。（大正五年十一月廿七日大、毎）

武甲山中の慘事

中學生三人の橫死　埼玉縣立川越中學校五年生なる入間郡高階村松本政夫（十八）同四年生同村新井三郎（十七）同二年生同村金井昇（十七）同四年生同郡大井村高山重義（十七）同三年生同村井葉勇二の五人は暑中休業を利用して鑛物採集の爲めに秩父連山に入り武甲山に登り採取し二十六日歸途に就きしが山腹にて最も險峻なる屏風岩の絕壁より五人ともに谷間に顚落し三郎重義昇の三人は頭部を岩石に粉碎し無慘の最期を遂げ正夫と勇二は全身に負傷したるも死に至らず飢餓と苦痛に迫られ呻吟し居たるを二十六日午後九時頃同村民が發見し救助せんとせしも何分全山暗黑にて如何とも施す術なく餘儀なく二十七日の曉を待つてかくと山麓なる影森駐在所に急報したるより尾池巡査部長は齋藤同村醫師と共に村民多數の搜索隊を組織して登山し八方搜索の結果殆ど餓死に瀕せる政夫勇二の兩名に應急手當を施し一方慘死せる三名の死體を引揚中なり學校及び父兄に對しても夫々急報したり。（秩父大宮電話）

父兄等急行す

入間郡高階村藤間八一惣助三男　新井三郎
同郡同村同字二九長藏長男　金井昇
同郡同村同字九三郷助長男　松本政夫
同郡大井村大井五教員秋平四男　井守勇二
同郡同村同字鶴岡三次郎二男　高山重義

前記五名は廿四日の午前三時頃新井三郎方に集合して各自五圓宛の旅費を携へ縣社秩父神社に參詣する目的なりと稱して出發し武甲山に登りたるものなり遭難の急報に接し二十七日朝父兄及び川越中學校職員二名同郡視學等附添ひ現場に出張せり（浦和電話）

岩の上を飛び歩くは危險　武甲山は一名秩父嶽と云つて武州の中でも最も名高い山の一つである、場所は秩父郡橫瀨村にあつて西北は大宮鄉西は影森村南は浦山村に跨つて高さは一千二百尺地質は秩父古成層と云つて秩父特有の古岩石より成つて居る、此山で學生の遭難があつたといふ事は全く意外だ、一口に秩父山と云つても武甲は同山脈中最も外れの而も一番入口で能く素人や土地の者などで昔から或信仰を持つた行者の類が登山する山で岩石こそ屹岨として居るが從來此種の遭難者を出したといふ事は曾て聞かない、從つて吾々山岳研究者には寧ろ閑却されて居る山だ元來武甲に登るには妻坂（東口）浦山（南口）橋立（西口）大宮口（北口）の四つの道があつて何れから登るも路が歷然として居り僅か千三百三十六米突位の山であるから假令迷つても濃霧でもない限りは晝間ならば危險のあるべき筈はない、然るに此度の遭難者を出したのは登山に無經驗な人が有り勝の岩石の上を飛歩いて其爲めに岩から墜落したといふやうな原因ではなからうか、又同村

には相應に落葉樹が茂つて居るが是迄方向を誤る如き大森林ではないし假りに何れに迷つても半日で上下の出來る山だからどうしても遭難は日暮れて方向に迷ひ其結果岩石から墜落したものとより想像が出來ない、此山は先にも云つたやうに登山初歩者の小手調に登る處で要するに辨當及び草鞋さへあれば問題を惹起すべきではないのである。（大正六、七、二八、東、朝）

進退谷まり五人相抱いて山中に夜を明す　武甲山下

橫瀨村大字大達號地湯泉佐野六作方に　新井外三名の死體及生存せる井守松本の兩名を收容し夫々手當の上新井外三名の死體は同所札所八番四善寺に收容しあり、大越醫師檢診をなしたるが其慘狀目も當られず新井は頭蓋骨を粉碎し腦漿露出散亂し死體には蛆を生じ　高山重義、今井登兩名も同じく腦漿露出し何れも身體に無數の重輕傷を負ひて　其狀酸鼻を極む、生存者井守は疲勞と友人の慘死を知り　果然自失の有樣なるが涙を流しつゝ語る『今回の登山は新井金井兩君の主唱にて　廿四日早朝五泊の豫定を以て高島村松本方に集合同日原市塲村龜澤旅館に宿泊翌日　午前六時同旅館出發上下二里の砂坂峠をも越えて夫より五十二町の嶮路武甲山に登り午後六時卅分頂上に達し　同七時秩父町方面に下山の途中不幸道を失ひ五人相助けて下山せんとしたるも一面の斷崖絕壁にて　登ることも降ることも得ず　進退谷まりて斷崖の岩蔭に五人相抱きて一夜を明し翌日山冷えに眼を覺まし　寢衣なくも人家を目あてに下山せるが途に二晝夜を絕食の儘彷徨したる事とて疲勞極度に達し　一滴の水を得ることも叶はず　止むを得ず小便を呑んで一時を凌ぐの悲慘事を演じ　其中自分丈けは一行に別れて所々を彷徨ふ中松本に出會ひしかば　引返して三人の搜索を初め遂に三人の慘死を知り非常に驚愕し　自分も死を覺悟して遺書を認めたる上兩人協議の上聲を限りに救ひを求めたるに廿六日夕景山下に於て仄かに『助けてやる』の聲を聞き安堵し廿七日午後二時に至り救護隊の手に救はれたり云々』因に新井三郎等の墜落せし　塲所は武甲山の東南頂上より約十丁の難所屏風岩にて六百五十尺の懸崖より墜落したるものなり、死體は火葬に付し　受取に來れる父兄に引渡すことゝせり。（廿七日、秩父電報）

絕壁に懸垂せる學友を救はんとして三學生は命を喪へり　武甲山中にて遭難せる川越中學生五名の中生存せる井守、松本の談話によりて危難の眞相判明したるが　荒井、高山、金井の三名は學友松本の危險を救はんとして　却て三人ながら生命を失ひたるものにて一行五名は既記の如く廿四日出發途中一泊して翌早朝武甲山に登り午後二時山頂に達し同五時頃上なる秩父神社一の鳥居より下山の途に就きたるが道を踏み迷ひ同七時頃同山の雨乞岩の近に辿り着き同夜は其溪谷に野宿し二十六日早朝出發道も無き岩石の間を攀ぢて同山の北側七合目六枚屏風と稱する高さ數十丈の岩壁の上に　出たる時一行中の松本正夫は足を辷らして谷間に墜落したるが幸にも一本の樹に引かゝりたれば　是を見たる荒井三郎は松本を救助せんとして身を巖壁に進め却つて自身に谷底に墜落し續いて金井高山の兩人も同樣松本を救助せんとして相重なりて墜落死亡したるが此時井守は早朝より腹痛にて一行より遲れて現場に來りしが松本の呻き聲に氣付き之を見て打驚き　救助せんとせしも前日來の疲勞と病氣にて如何とも爲す術なく　其塲に打

◎雜報　武甲山中の慘事

仰れて唯だ聲を限りに救ひを求め居たり此時山腹に居たる横瀨村の小泉逸作及同人の弟忠造外一人が其聲を聞付けたるが既に午後七時頃にて日は暮れ又斯るときは夢知らざりしより其まゝ放置し一先づ歸宅して廿七日早朝村民と共に現場に到り初めて之を發見して大騒ぎとなり直に同村派出所に此旨急報し一方木に引懸り居たる松本を辛うじて引揚げ井守と共に程遠からぬ旅館荒泉館に收容し應急手當を施したる次第なるが松本の傷は微々たるものにて生命に別條なし。（武藏川越來電）

酸鼻を極むる三名の屍體　かくて生存せる井守、松本の兩名は武甲山横瀨村の湯屋佐野六作方にて夫々手當を施し荒井外二名の屍體は札所八番なる四善寺收容し大越醫師檢診をなしたるが其慘狀目も當られず荒井は頭蓋骨を粉碎して腦漿を露出し屍體には蛆を生じ高山 重義金井昇兩名も同じく腦漿露出し何れも身體に無數の重輕傷を負ひて其狀酸鼻を極む生存者井守松本の兩名も疲勞と友人の慘死に依り茫然自失の有樣なり。

絕壁に懸る遺留品武甲山中に慘死せる川越中學校生徒荒井三郎、高山重義、金井昇の三屍體は廿七日午後十一時横瀨村四禪寺に於て火葬に附し遺族並に川越中學校教諭、入間郡役所吏員十餘名は廿八日午前同地に赴きたり尙生存者松本正夫、井守雄二の兩人は漸次恢復し涙ながらに慘死せる學友の遺骨を守りつゝあり遭難現場には慘死者荒井三郎の携帶せる鞄及時計數十丈の斷崖の中間にぶら下り居れるを發見せるも之を取る事能はず永遠に此の慘事を記念せるものゝ如し因に遺骨は廿九日午前中鄉里川越に送る筈。（秩父來電）（大正、六、七、二九、大、毎）

川越中學生の遭難詳報　川越中學生遭難の報に接し廿七日朝各父兄及び川越中學校職員二名、同郡視學等は急遽現場に出張せるが一方大宮署の櫻井署長は午前七時部下の巡査六名を引率して武甲山麓横瀨村に到り先づ村民を招集して百名の捜索隊を組織し四方に手別けして大捜索に着手したるが暴熱激烈にして非常の困難を爲し打倒るゝ者さへありしが終に前記屏風岩下に於て三名の死體を發見せり現場は武甲山の七合目に當り海抜四千三百尺に位する俗に六枚屏風と稱する箇處にて三學生は此岩の下に墜落し居たるものなるが何分嶮岨なる處とて捜索隊の行動自由ならず漸くにして繩を以て三死體を比較的安全なる谷間に吊下し捜索隊員交る〳〵之れを背負ひ合ひて猿猴より往來せざる深山一里半餘を重れつゝ午後五時漸く麓に下り着き廣瀨村の四善寺に收容して直に此旨を父兄其他に通知したれば父兄教員等は午後九時頃悉く同寺に集り來りて死體を受取りたり。（秩父大宮電話）

濃霧に迷ふ　一方生存者たる松本政夫、江森勇二の兩名は駐在巡査に救助されつゝ廣瀨村の鑛泉旅館佐野六作方に入りたるが生命には別條なく兩名が疲勞したる身體を起して更に語る所に依れば『自分等は武甲山に登り大宮町に向つて下山する豫定であつた即ち山に登るといふ外に何等目的のあつたのではない、山に登るに從つて暴氣益强く且途中濃霧に襲はれて路に踏迷ひ終に屏風岩に出たものらしく三名の友人は霧の爲めに足許が見えず多分辷り落ちたものであらう吾吾等は尙も其處らをマゴ〳〵踏迷つてゐる中に一軒の民家を見付けたので命からゞ飛込み救ひを求めたので直に駐在所に通知して呉れたのです山上の苦しさはお話しの出

来ない程でして私等は暑熱に苦しめられつゝも水なんか一滴もないので尾籠な話ですが自分の小便を飲んだ位でした。（秩父大宮町電話）

遺骸を荼毘に　慘死者新井三郎高山重義金井昇の三死體は二十七日午後十一時頃檜瀬村四善寺に於て荼毘に附し二十九日中に遺族附添ひ川越へ向け發送の筈なるが尚生存者松本政夫、江森勇二の兩名は同村湯場佐野六作方にて休養加療中にて元氣幾分恢復したるを以て學友の遺骨と共に歸宅の途に就く筈、遺難地現場には慘死者新井三郎の所持し來れる鉋及銀側懷中時計が數十丈の斷崖の中腹なる樅の木にブラ下り居るも取る事能はず。（秩父大宮電話）（大正六、七、二九、東、朝）

日本アルプス山岳戰記

═══ 八百の健兒武裝成る ═══

日本アルプスの嶮に光輝ある軍旗を進めて槍ヶ嶽を始め巨然として信飛國境に跨れる高岳の頂上に未曾有の壯擧ともいふべき山岳戰を行はんとする松本第五十聯隊では二十五日其の先發兵八百を營庭に集め淳宮殿下が殘ての御希望に基き凛々しき武裝姿を記念のカメラに收めた兵は皆カーキー單衣の夏服に戰時武裝で背嚢其他の總重量六貫目もあると云ふ、それでも流石に續兵中の續兵だけに出征前の兵を見るやうに張り切つた元氣を見せて居る、若い將校連はもう大ハシャギで賑やかな事だ聯隊長はアルプスの連峰を仰ぎながら莞爾とし語る「此の山岳踏破の計畫は豫て希望され計畫されたもので漸く今回實行を見るに至つたのである、八百の選拔兵は各中隊から體格優良の强壯者を網羅したのであるから如何なる難路に遭ふとも健康上から行軍に支障を來す憂ひは全然ないと確信して居る、大分方々へ此の計畫が傳へられたので今日あたりは壯圖を祝すとか成功を祈るとか大分各地の軍人連から激勵の電報が舞ひこんでくる、たゞ一つ遺憾な事は機關銃隊の參加不能の點だ」と語る、尚數日前偵察將校として乘鞍、槍ヶ嶽を踏破して歸來した細井少尉は曰く「僕は元來松本育ちで子供の時分から度々登つて居るが從來山岳會とか文士の連が登山した後に日本アルプス登坂の困難を頻りに傳へた爲に如何にも危險な山のやうになつて終つて居る、ナニ譯はないんだ、今年は雪が多いため槍ヶ嶽は却つて乘鞍嶽より登り易くなつて居る雪渓には一、二丈も積つて居るから困難な岩傳ひをせず樂々と雪を傳つて登る事が出來る、私の考へでは如何なる天候でも槍ヶ嶽枝隊は大丈夫であるが聯隊本部の向ふ乘鞍岳は天候次第で少しは危險ではないかとも考へる、併し槍ヶ岳枝隊から分遣される筒井中尉の一部隊は槍ヶ岳の絶頂から未だ嘗て人間の足跡を印した事のない峻嶺を飛騨の蒲田に降る筈だ、これは今回の行軍中最難路であらう云々尚同演習の一般方略は飛騨高山附近に占據せる敵に對し聯隊は信飛國境の山岳中に攻擊し之を全滅せんと云ふのである。

松本出發　松本歩兵第五十聯隊は愈二十六日午前三時日本アルプス突破の壯圖に上れり天氣快晴星燦々たり計畫聯隊長は武裝凛凛しく先頭に立ち續いて針谷少尉の揭ぐる聯隊旗に續き松永大隊

◎雜　報　日本アルプス山岳戰記

三百餘名は飛驒街道を西へ信飛國境山地に向へり是より先き許斐聯隊長の命令に曰く『敵の徒歩兵約一千名飛驒高山附近にあり聯隊は此敵を攻撃する目的を以て信飛國境山脈を跨え高山に向ひ前進せんとす』士氣頗る旺盛纔て島々着、一時間休憩の後聯隊旗は檜峠の嶺を跨え松本より十二里の行程を白骨温泉に向へり山間の村落は國旗を掲げて迎へつゝあり。（島々にて特派員發電）（大正六、七、廿七、大、朝）

星影を踏んで愈進發　まだ明けやらぬ武石峠の峰の上に明星がチカ〳〵と耀いて居る廿六日の午前二時其山麓なる五十聯隊の營庭には電燈煌々と耀き其處には戰時武裝の軍隊が寂として鳴を鎭めて整列し山馬上に悠々閲兵する許斐聯隊長の秋水が冷い風を切つて光る今日しも我松本聯隊は愈日本アルプス縱斷の壯途に上るのである嘹喨たる喇叭は透明な空氣に高く響きわたる前進々々聯隊長は先頭に馬を驅る次で旗手針谷少尉の捧ぐる光榮ある軍旗は營門を出で四へ〳〵と進む此の一隊は聯隊本部と松永枝隊の率ゐる能美、加賀の二百名の選拔隊である新村まで來れば兵ひ出したやうに鮮かな松本平の高原が靄の中から次第に展開する行きつゝ遙に濃藍の山脈の背景や氷のやうな山景を見れば其處に此軍の露營を布くべき乘鞍の絕頂が現はれる畑や官林の杉林を過ぎれば愈々山脈は眼前に迫る梓川の白い磧を今出た朝暾がサツと桃色に染る日本アルプスから流れる清水が瑠璃となり雪と碎けて淙々と流れる唐松の森林を背景に肅々と進む軍旗の潔よ、斯くて八時此本隊は日本アルプスの關門島々に着いた、村の軒には此行を盛にすべく國旗を出す在鄉軍人團や村の有志が紋附袴で村の入口まで迎へて出て居る此處で休憩朝食を攝り九時峻坂を越えて白骨温泉に向ふ尙本隊た續ける檜ヶ嶽枝隊の作業隊は徐鐵と綱を用意して上高地に向つて伊孝大尉と檜ヶ嶽枝隊は二十七日兵營出發の筈である。

後續隊出發す　伊藤大隊及三浦大尉の檜ヶ嶽枝隊五百餘名は一日遲れて廿七日午前三時營門出發露營地大野川に向へり三浦支隊は島々にて分れ上高地に向ふ筈。（特派員松本發電）（大正六、七、二八、大、朝）

聯隊長得意滿面　島々から一歩を離れると愈梓川沿の峽谷である、奔騰しつゝ流れる水の透明さ美しさは言はずもがな、蜿蜒と全軍は峠を危く削つた道を、徐々として一歩々々日本アルプスの深林中に進み入る二千尺三千尺の山々は梓川の川岸から際ごい急斜面を作つて兩岸に脈々として連り、其の山肌の燃れるやうな淡い線は即ち落葉松の森林である、其の線が次第に薇た迫つて過ぐる川岸の數丈の高さは大岩石の連續で蓬棚のやうに奔騰に突立つたのや突兀と聳えたのなど數里に亘つて大岩石とさうして雪のやうに碎くる急流の連續である、其の一部に屏風岩とか天狗岩抔いふ名が命けてある正午奈川渡に着く、鐵線で吊つた幅三尺の板橋がある、長さは十間もあらう、渡ればゆら〳〵と宙に搖れる、下を覗けば數丈の奔湍である、軍隊が此處に來ると、許斐聯隊長も氣を揉んで橋畔位立ち「オイ〳〵騒けてはいかぬ、さうして氣を付けて歩め」と子供に敎へるやうに全軍を渡してしまふまで立盡す、細見少尉が桶を提げて來る「甘い名物を食べませんか」と出す、何だと聞けば風穴の漬物だと云ふ、油菜の漬物だ甘い〳〵、

大皿を忽ち平げる、細見少尉の説明によれば此の地方では山麓に穴を穿つて蠶種を圍つて置く其の天然の冷藏庫中に漬物を漬けて置く此の邊稻扱村の名産だそうだ、奈川から隊は一列縱隊となる、斷崖の處々に飛瀑があつて道が狹いから强行軍も飛沫を被つて進む、其の內でも親子瀧と云ふ名を持つた瀧が一つある、此處を過ぐる頃空は曇つた「夕立かな」と行軍の戰士達が汗を拭き〳〵空を眺めた、二時半大野川村に着く、低い谷間の河原から歡迎の煙火が凄じい音を殘して破裂する、在鄉軍人が數丁の谷間まで出迎をする、小學生徒が二三十名老先生に率ゐられ斷崖に立つて出迎をする、村に入ると仙臺のモンペイ袴と同じ形で此處では雪除けと呼ばるゝ紺の袴を穿いた娘達が桃割やハイカラに結つて出迎へた、隊は此處で中食する「あと二時半だつてよ」さう云ふカツキりした聲を出す兵卒もあつた、愈三時此處を出發直ぐに急峻の坂にかゝる、折柄涼しい驟雨が沛然と來た、此處を登り切れば明夜の露營地たる乘鞍嶽が四に望める、絕頂近くに白い雪谿が點々として右往左往に走つて居る「あれに乘るんだよ」兵は皆かく言ひ交しながら雪際に聳ゆる大自然美の壯觀を凝視して居る九重折の山路を單縱列で進む此の一隊は蜿蜒と伸〳〵て谷を繞り峰を廻つて銃口をハンカチに卷いたのが恰も薄の穗のやうに揃つた、幾度も谷に下り峰に上るのが鉢木峠の特長だそうだ、峰は二里に亘る峻坂である作業隊は先登して道路改修に忙しい、峠を越え白骨の美しい森を過ぎて谷に下れば白骨温泉であつた、聯隊長は馬から下りたり乘つたりそれで終始先頭に指揮して居た此日の總行程十五里而も一名の落伍者を出さなかつた、聯隊長の頰には第一の成功せる行軍に溢るゝやうな笑が浮んで居た、白骨は紅提燈を懸け連れて歡迎した、尙二十八日乘鞍絕頂露營に付き白骨村民より危險なれば中止されたしと云ふもの多く爲に同日の天候次第にて變更を見るかも知れぬ。（大正六、七、二九、大、朝）

乘鞍山上の露營　二十七日午前三時半白骨を出發せる松本第十五聯隊本部及び松永大隊は途中非常の難路を冒し乘鞍ケ嶽に强行軍をなせり　大野川より先發せる加賀大隊の登山せるを遙に望みつゝ難路を越え作業隊は道路を作りつゝ前進午前十一時大雪溪の邊に休憩しつゝあり二十七日夜は松本より望み得べき大雪溪の上に全部露營の事に決せり天氣晴れたれど時々霧襲來落伍兵僅に一名壯快限りなし平湯に下山中の加賀大隊は山嶺より本隊に向け登山軍歌を合唱して遙に袂別し飛騨に向け姿を消したり當日露營地の氣温五十六度なり（島々にて特派員電報）（大正六、七、二九、大、朝）

絕頂の「君ケ代」　乘鞍嶽に强行登攀せる松本五十聯隊本部及び松永大隊は二十七日午前十一時半三丁餘の大雪谿を橫斷して山頂劍ケ峰摩利支天の間なる平地に上り此處に天幕を張り火を焚きて露營せり寒氣烈しけれども快晴にして弦天高く劍ケ峰に懸る、許斐聯隊長は石室に焚火を圍みて夜を明せり同夜八時半太田中尉、細見少尉は卒を率ゐ提燈を翳し劍ケ峰に上り松本兵營に向けて烽火の信號を擧げ山り風靜かなれば案外恰好なる露營なりき、かくて二十八日は午前三時旗手聯隊旗を先頭に聯隊本部松永大隊は隊を整へ提燈を振翳して乘鞍嶽の絕頂劍ケ峰に登攀せり三時五十分東天黎明の色に明くる頃針ケ谷少尉の捧ぐる聯隊旗は飛騨方

◎雜　報　日本アルプス山岳戰記

面より吹送る風に翻弄として九千九百尺の絕頂に閃き樹てり全軍此處に到着すれば東南遙に東京に面して整列す、山麓の雲塊は曉の色に染出され駒ヶ岳御嶽槍ヶ嶽は紫色を以て今日の光輝ある乘鞍山上を圍むが如く、光景壯嚴を極む、嚴頭に立てる許斐聯隊長の號令一下君が代の喇叭は峰より峰に谷より谷に答して今日此の初めて軍旗を迎へしアルプス連峰に嘹喨と響く壯嚴の極みなり、次いで天皇陛下萬歲を三唱軍歌を高唱す、四時五十五分日の出の壯觀を拜し六時半露營地に歸り朝餐を喫り平湯に向へり。（特派員島々發電）

平湯入口の斥候衝突　乘鞍嶽の頂上を究めたる松本聯隊は一旦露營地に下山平湯在鄉軍人青年の出迎を受け廿八日午前九時平湯に向け出發せり、即ち飛騨高地方面の敵を攻撃せんとするの計畫なり平湯の山道は頗る嶮岨を極めたるも平湯青年等は數日前より道路の修理をなし路標の札を樹てたれば白骨登山道に比し容易なり、左れど所々鑛物性の毒水あり水の源惡しく兵士は殘の雪を噛みつゝ下山せり二時四十分平湯入口にて斥候の衝突あり、此の温泉村は始めて歩騎見ることゝて村を擧げて熱狂的の歡迎をなしつゝあり全軍村内各戸に分宿せり伊藤大隊は豫定より遲れ平湯にて本隊に合隊せり、二十九日午前八時平湯發燒ヶ嶽を突破し上高地温泉に露營の筈、全軍連日の行軍にも疲勞の狀なく士氣旺盛愉快に行動しつゝあり（島々にて特派員發電）（大正、六、七、三〇、大、朝）

乘鞍絕頂との聯絡　日本アルプス突破強行軍の松本歩兵五十聯隊と共に出發せる長野縣更科郡八幡村在鄉軍人豫備歩兵下士勤務上等兵佐藤清一郎及び同工兵上等兵佐藤政廣の兩名は二十七日乘鞍ヶ嶽の絕頂を極め直に下山、大野川村島々等を經て同夜零時半松本に歸着せるが其談によれば、私共は松本聯隊の先發加賀中隊と白骨温泉の露營地を出發し十一時二十五分乘鞍絕頂の劍ヶ峰に着、其所で記念の撮影を爲し今から下山しやうと、遙か八合目邊の鞍部大雪渓の下線を目がけて來ると、强行軍の這上つて來るを見掛けました、それが丁度白布の上を蟻の這ふやうに見えて其の壯快さは何とも形容の言葉もなかつた、其の本隊は掩ひなかけて刈谷少尉の捧持する軍旗を先頭に次第に這つて來る、三時五分になると隊は休憩しました、それで加賀中隊長は「無事成功を祝す」と手旗信號を振ると本隊からは直に「平湯在鄉軍人分會及び青年會員約五十名本隊を出迎へ露營の設備中全軍士氣旺盛」と應信があつた、間もなく細井少尉は聯隊長の命を受け兵卒一名を從へ絕頂の加賀中隊に來て本隊と聯絡を取りました、本隊は此處で晝食を取つて居ました雪渓は辷ること夥しく頗る危險で一步踏外せば止まる所がない、雪渓の終る附近には岩石が突兀として若し居るからも落つれば命がない、思はず膽を冷した、許斐聯隊長より緊要な用務の傳達を依頼されたので之を持つて零時五分に頂上から一直線に雪渓や何かを無茶苦茶に通り三十五分間を費し下山しましたが、加賀中隊の先遣隊は零時七分に飛騨國平湯に向つて出發した私共は午後二時半に大野川村に到着すると此處には二十七日朝三時松本を出發して伊藤少佐の率ゐる一箇大隊が露營の設備をして居たので、聯隊長からの命令書を渡して松本に來た、同日は折惡しく曇天で頂上から展望を恣にする事は出來ずたゞ僅

に雲の割目から御嶽の雄姿を見たが是れも雲に隠れて終つた」云々。（松本電話）（大正六、七、三〇、六、朝）

銃聲喊聲山谷に谺す　松本聯隊山岳强行軍は二十九日午前五時飛騨平湯を發し船津方面の敵を攻撃すべく聯隊長以下旺盛なる勢にて一路前進せり七時二十分村上（鷲上）に到るや寶川の溪流を挟みて北村、上村高地に敵影を發見し猛烈なる戰闘は開始されたり永井少尉は兵を率ゐ全身ズブ濡れとなり徒渉場偵察をなす銃聲頻りに起れば四面に聲こじき谺を傳へて壯觀言はん方なし此の地軍隊を迎ふること初めてなれば遠近に集へる雪袴姿の村民一千人餘、未曾有の雜沓を呈せり、又在鄉軍人は聯隊長のため馬を牽き來り老人等は涙を流して隊の通過に敬禮せり。

此衝突終れば愈々蒲田を經て燒岳に向け前進せり此の時槍ヶ岳第一の難路を通過下山せる筒井中尉の一隊亦來會せり、一方小田少佐の槍ヶ岳枝隊は上高地を經て午後一時には既に硫黄ヶ岳、燒岳間の尾根を占領敵の急撃に備へ熊笹の中に散兵線を布けり三時三十分斥候は敵兵發見を報じ續いて銃聲爆々たり、枝隊は之に猛射を加ふ、銃聲アルプス山嶽を震ほて東西に相對せる笏杖、霞の兩峰は爲に鳴動するが如く痛烈を極む、纔て四時森林帶を出で躍進せり、攻撃軍は敵の前面を迅速に硫黄ヶ岳の中腹に反れて展開す、硫黄ヶ岳の噴煙濛々天に漲りて凄絶を極む、纔て旭光燦たる軍旗は樹間を縫うて前進せり忽ち嘲暁たる喇叭の響くと見る間に四時二十分、松永、伊藤兩大隊は雪崩の如く熊笹の中に槍の枝隊に向ひ突撃に移り槍の枝隊又勇奮之に對し喊聲嵐の如く起り、茲に兩軍は信飛國境なる雲表八千尺の鞍部に劒戟鬩れんとせり、此時休戰喇叭起りて演習は終りを告げ敵味方相交りて行を祝し五時半硫黄ヶ岳絶頂を究め梓川畔、上高地に下山露營せり。

全軍歸營　松本聯隊山地强行軍は三十日午前四時上高地梓河畔の露營地を發し許斐聯隊長は此處より乘馬し讀本峠嶺を踰えて島々に出で六里の行程を無事松本の兵營に歸還す時に午後七時半山道强行軍は未曾有の成功を以て終りたり尚久保田副官は凡て長靴にて乘鞍の嶺を突破し意氣揚々たり。

營庭に宴を張る　斯くて未曾有の山地强行軍を終へ無事歸營せる將卒一同は直に營庭に祝宴を張りビールを汲み交したる後午後八時半散會せるが席上許斐聯隊長は左の如き卓上演説を試みたり。（松本電話）

嶮峻なる山地强行軍に於て多大の成功を收めたのは實に自分の意外とし且つ非常なる滿足とする所である此の成功は單に帝國陸軍に大なる効果を齎した許りでなく我國民精神に多大なる好影響を與へた事と自分は信ずる、而して今回の成功は全く各將卒の非常なる奮勵努力の賜で諸子に對して自分は深甚なる感謝の意を表していゝ、我陸軍が此の名譽を得てに從つて其責任も愈重大となつた事と思ふ、夫に就て將來に於て諸子の奮勵努力を希望する次第である、終りに臨み自分は今回の山地强行軍に於て沿道各地の在鄉軍人團や青年會等が修理又は其他に關し多大なる後援を與へられた事に對し衷情から感謝の辭を捧げたい云々。（大正六、八、一、六、朝）

大成功の日本アルプス踏破軍　松本歩兵第五十聯隊の日本アルプス山地强行軍の成績は我陸軍に於ける破天荒の記錄であ

◎雜　報　日本アルプス山岳戰記

ると共にさま〴〵の意味に於て開闢以來の出來事が伴つて、乘鞍劍ケ峰の山頂に於て作業兵が刻み付けた「步五〇、踏破大正六、七、二七」の文字は同日山頂の旭日に反映して聯隊旗の光輝を永久に物語る開闢以來第一に數ふべき出來事であつた、飛騨の山奥と云へば必ず熊や野猪の横行する所で、二十八日の松本聯隊が乘鞍から飛騨に入ると云ふ報告を得た、此の地方の騒ぎは是れこそ開闢以來のことであつて、恰も養蠶期で最も多忙の季節であつたに拘らず此の地方の在鄉軍人青年會二百餘名は數日前より乘鞍より平湯に下山の道路修繕に全力を濺いだ當村に一人しか居ない小學校の先生は「此に毒水あり」と云ふやうな注意深い建札を始め「登山は急ぐな、緩る〳〵と下腹に力を入れて登れ」と云ふやうなことを書いた建札百數十本造る爲に乙も數日を要したさうだ、殊に道路修繕の行き届いたことは將來の登山者の爲に餘程便利であらう二十九日も乘鞍山頂の露營地に五六十人の一隊が旗を押し立てゝ登つて來たそれは態々此處まで出迎ひに來て呉れた飛騨の青年であつた、其の質朴な青年等は九千尺の山頂まで前夜から來て出迎へに來てのである、それから平湯に來ると大變の出迎へであつた、殊に聯隊長以下將校の爲七八里も隔つた所から立派な馬を曳いて來て乘用に供したのである、所が此の馬は種馬であつた爲に流石の將校連も威勢が好過ぎて乘るに乘られず大騒ぎつきは御愛嬌であつた、殊に此の村役場の好意で我社の爲に特に八里を隔つた船津まで打電の使を立てゝ下すつた厚意は深く感謝する所である、三十日は白湯から少し下つた村上で演習があると云ふので此處も亦開闢以來の大騒ぎであつた、或る老婆は「わしは來年で八十になりますが始めて兵隊を見た思ひ殘すことがれわ」と言つて或は十里の先から見に來たと言ふものもある此處に集まつたのが千は越えた、中にも紙の國旗の竿頭に玉の代りに蠶の花を付けて居たのなどは流石に素晴らしく珍らしいものであつた、此の邊の何處の女も子供も雪袴を穿いて居た、其の袴の上に縮緬の晝夜帶を幅廣く締め込んだ姿などは一寸驚かされた、此村には中々立派な構えの家が多いけれども桑を敷いた家は一軒も見當らない床は出來て居ても鏡のやうな板の間である、槍ケ獄から槍の肩を跨え飛騨蒲田に下る道は從來誰も試みた者がなかつた、筒井中尉の率ゐる三十二名の一隊が通行した乃ち通稱槍ケ肩と云はれたのを今回聯隊に因んで五十峠と命名された此の路跡を突破することは實に開闢以來の成功であつた、途中中尉は雷鳥を捕へて燒いて食つたと傲語して居た松永、伊藤兩大隊は槍ケ岳に前進すべく蒲田より上宝村を上つて居る時であつた山家の前の杉樹立に鹿の頭が吊されて其角に日章旗が下げてあつて、梟の目はキラ〳〵と物凄く光つて居た傍に雪袴の老婆がポンヤリ立つて居る聞けば婆さんに古瀧梅之助と云ふ息子があつた梅之助は笠ケ岳の麓で此の鹿を射留めて間もなく日露戰爭に出征した、さうして其の鹿の頭を筐に殘して滿洲の野に戰死を遂げた、婆さんは今日此の軍隊の通行に際も息子の捕へた鹿の角に日章旗を揭げ十年前に死んだ息子の事を思ひ浮べて居るのであつた婆さんは古溜する(ママ)と云つた。

（松本にて特派員電話）

許斐聯隊長は語る

「今回の强行軍は實に豫想以上の好結果を收めた、是は獨り帝國陸軍に貢獻する許りでなく國民精神の上

に多大の効果を與へるのであらうと思ふ、此行に於て信濃、飛騨の在鄉軍人會及び青年會が與へられた助力は多大であつた幸に成功する事が出來たのは各將卒の努力に因る事は固よりであるが又諸君の盡力も確に其一因である、出發に先立つて準備したものは何一つなかつた嚮導れも戰時武裝をしたのみで特に旭川聯隊と松本聯隊のみに與へられて居る生絲製の防寒用シヤツ下を着けた丈で他には夫々生米六合軍用パン及び水筒を携帶した特別作業隊は鉈、鶴嘴、シヤベル、鐵線、麻繩を用意したに過ぎぬ總てが靴で通してが何の差支もなく殊に久保田副官の如きは終りまで長靴で飛ばした位だ又乘鞍の絕頂で露營する前夜には白骨村長は從來彼地で露營するものは十人に七人は死んで居るし昨今の天候では必ず嵐が來るからとて露營中止を勸告された、そこで會議の結果天候險惡ならば直に平湯に下ることゝして扨て泊つて見ると案外の好天氣であつた併し用心して天幕は出來るだけ低く張り萬一の場合には石室を利用することゝしたが其の必要もなくて露營し得たのは幸福であると共に又我が聯隊の誇りとする所である。（松本電話）（大正六、八、一、六、朝）

◉谷間へ墜落して慘死を遂ぐ

福岡縣京都郡泉村當時山梨縣技手北巨摩郡土木出張所詰神崎政孝（三十）は實弟なる鐵道院工務局保線課製圖係神崎政行（二十）と共に甲信境地藏嶽を踏破せんとて二十八日午前十一時韮崎町を出發し二十九日午後五時地藏山麓なる青木原字御座石に露營し三十日早朝出發七合目迄登りたる時政孝は誤つて足を踏み辷らし三丈餘りの溪間に墜落せしにぞ政行は大に驚き危險を冒して溪間に下り見たるに已に政孝は無慘の死を遂げ居たるより政行一旦引返して此旨韮崎署に届出て同署より岩間水村の兩巡査を派遣する事となり政行は案内人として三十一日午前四時遭難地に向け急行せり（甲府三十一日電話）（大正六、八、一、時事）



◎雜　報　谷間へ墜落して慘死を遂ぐ

會報

幹事の改選と新任

近來會運の隆盛に從ひ會務多端の故を以て、今幹事改選期に際し一名の增員を計り、會則に由り特別會員及び幹事の選擧に由り左記十三名幹事として決定せられたり。

法學士　城數馬（在米）　小島久太
工學博士　高頭仁兵衛　辻本滿丸
理學博士　武田久吉　木暮理太郎
理學士　梅澤親光　理學士　山川默
三枝守博　中村清太郎
農學士　辻村伊助　高野鷹藏
（新任）近藤茂吉

新任幹事近藤茂吉氏以外は前重任の儘なり。

第十回大會の記

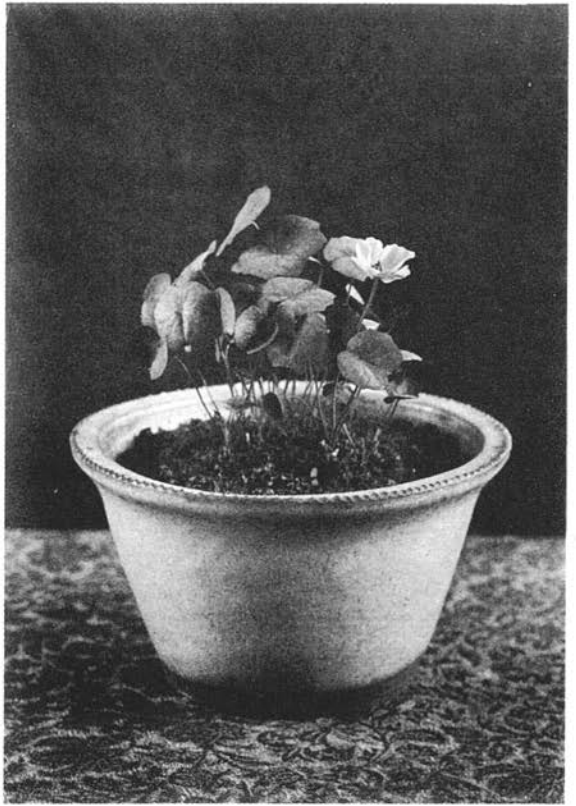
晩春四月二十二日東京赤阪三會堂に本會第十回大會を開く。大會回を重ぬる事十、聊か其第十回を記念する爲めに、特別展覽會開催の議ありて特に高山植物を主題とせる展覽及び講演會を開催せり。

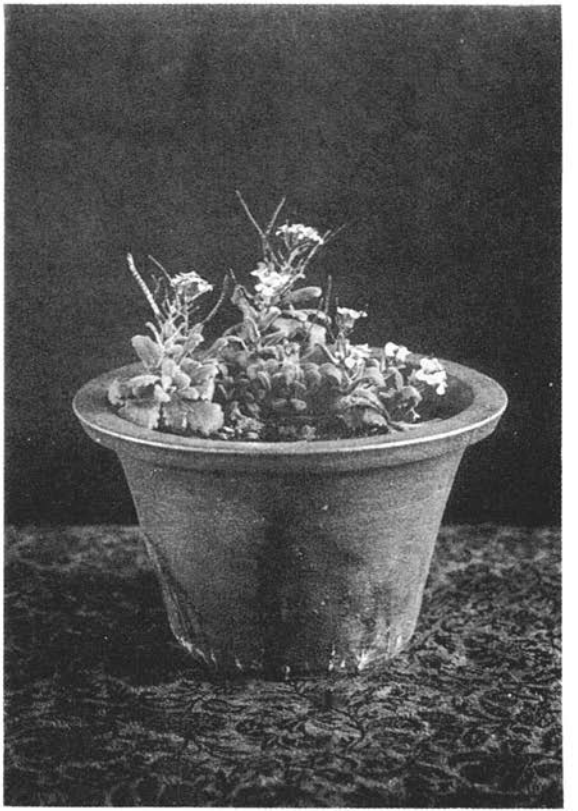
從來高山植物に關したる展覽會は「山草會」以外殆んど其例なく、幸にして會員及び同趣味諸君の援助を得て多大の効果を得たるは感謝の至に耐へざるなり。

集れる生品百六十餘點、其他標品、圖書、參考書繪畫等にして、午後七時より左記高山植物に關する幻燈講演ありたり。

高山植物の生態　會員　長野高等女學校長　河野齡藏氏
高山植物の研究　幹事　理學博士　武田久吉氏

本會大會の爲め特に出陳物携帶上京せられたる會





大會出陳高山植物

右 Arabis Alpina (辻村伊助氏出品)

左 ウサタツタ (松平康民氏出品)

員、河野齡藏、村野時哉氏の厚意は特記して感謝する所なり。

出品目錄

高橋章臣、鈴木靜穗氏出品

吉野群峰主要植物標本

ホソバコケシノブ。イハヤナギシダ。イチヰ。シラベ。サウシカンバ。オホヤマレンゲ。ヤハズアヂサイ。ハスノハイチゴ。アサマツゲ。クロソヨゴ。クロカンバ。ハリブキ。シシンラン。イハチドリ。ツリシユスラン。ウチヤウラン。キエビネ。コイチエフラン。チサラン。ヤマサギサウ。ミヤマムギラン。

辻村伊助氏出品

圖書

R. Farrer : — The Rock garden.
" : — My Rock garden.
H. Correvon : — The Alpine Flora,
Robinson : — Alpine flower for gardens.
Weber : — Rock and Water gardens.
Smith : — Dry wall gardens.
Jenkins : — Small Rock gardens.
Vilmorin : — Les Fleurs de plantesterré.
J. R. H. S. : — Primula Conferrence Report.
Hulme : — Familiar Swiss Flowers.
Schroeter : — Das Pflanzenleben der Alpen.
Sanders : — Rock garden and Alpine Plants.
Thompson : — Alpine Plant of Europe.
" : — Sub-Alpine plants of Swiss wood and meadow.
Kerner : — Pflanzenleben I. II.
Brown : — Schöffer : — Alpine Flora of the Canadian Rocky Mountain.
S. Hastings : — Summer flowers of the high Alps.
Hoffman : — Alpine flora.
Hoffman : — Alpine plants at home I-II.
Clement : — Rocky mountain flowers.
Tsujimura : — Some notes on alpine plants.
R. Malby : — Saxifrages or Rockfoides.
G. Flemwell : — Alpine flowers and gardens.

高山植物生品

Anemone apennina.
Myosotis alpestris.
M. alba.
Alyssum saxitile.
Athionema cordifolia.
Arenaria Montana.
Arabis alpina.
Lychnis alpina.

Draba aizoides.
Saxifraga aizoon.
Sax. hypnoides.
Viola cordata.
Papaver nudicoule.
Alsine pinifolia.
Aquilegia Alpina.
Linaria vulgaris.
Cerastium tomentocum.
Arenaria balearica.
Lychnis pyrenaica.
Hutchinsia alpina.
Saxifraga cymbolaria, var. Huetii.
Sax. sp.
Geranium sanguineum.
Primula frondosa.
Erinus alpinus.
Dianthus alpinus.
Leontopodium alpinum (Edelweiss)
Saponaria ocymoides.
Aubrietia Eyrii.
Silene maritima.
Cheiranthus alpinus.

高山植物盛花　數鉢

高山植物繪はがき　六十枚

理科大學植物園

生品　丹頂草。シャウジャウバカマ。カツコウサウ。イハタバコ。ツルコケモヽ。アヲチヤセンシダ。コケモヽ。ユキザサ。ヒメハルトラノヲ。トガクシショウマ。ヤシヤゼンマイ。フクジンヒバ。イソツヾジ。ヒメシヤクナゲ。ヒトツバショウマ。ハヒマヾ。コバリモミ。ユキワリサウ。ホソバシヤクナゲ。

五百城文哉氏筆高山植物寫生帖　一冊

河野齡藏氏

生品　ハヒマツヒメクモマゲ植込　八ヶ岳産

八ヶ岳の安山岩を添へ高山に於ける自然の景を現したるもの。

タカネキンバイゲ。クロバナヘウタンボク。ウラジロキンバイ

ミヤマキンバイ。シコタンサウ。コケモヽ。カサバグサ。トガクシギク (Chrysanthemum Koreanum Maki.)

標本　本邦産奇品十數種、北海道産數十種

富永謙治氏

生品　ガンカウラン。コモウセンゴケ。フデリンダウ。

中井猛之進氏

智異山植物調査報告書。朝鮮山地及植物寫眞。朝鮮金剛山寫眞。

濟州島漢羅山。白頭山麓定界碑石刷。平壤より白頭山を經て豆滿江に至る。

村野時哉氏

生品

リシリシノブ　一　ヤマハナ草　一
エゾイヌナヅナ　シコタン草　一
シコタンハコベ　イソツヾジ　一
ミヤマキンバイ　イハシモツケ
ハクセンナヅナ　キクバクハガタ　一
タチカメバ草　ガンカウラン
ホソバ石楠　一　大石楠　一

小塚辰次郎氏

高山植物天然色寫眞　三枚

植物の種類　タウヤクリンダウ。オホサクラサウ。チヤウノスケサウ。イハベンケイ。コイハカヾミ。キバナノコマノツメ。チシマギキヤウ、タカネキンバウゲ。

Nouvelle Flora des Alpes et Pyrénées　三冊

島津久家氏

小平亮二氏

高山植物生態寫眞　九枚

伊藤篤太郎氏

印度ヒマラヤ山植物標本

ツルリンダウの一種 (Crawfurdia Speciosa Wall.)。木蘭科の一種。ヒマラヤザクラ。石楠三種。躑躅科の一種。松柏科の一種不詳三種。

山本德三郎氏

てうかいふすま標本（羽後鳥海山産）

加藤榮氏

G. Flemwell:—Alpine Flowers & Gardening.　一冊

高木伊八氏

ハヒマツ鉢植（ゴーロ澤の頭産）

高野鷹藏氏

高山植物生態寫眞透明畫（四ツ切）　六枚

藥師岳産いはぶすま

岡田健藏氏

北千島（幌莚、占守）諸島採集標本

リンネサウ。ハクサンチドリ。オホヤマフスマ。アキノキリンサウ。マルバシモツケ。ホソバイハベンケイ。ツマトリサウ。ヤマハコ。ニツクヲシヤクナゲ。ハマカンザシ。エゾノコギリサウ。ノコギリサウ。ミヤマスミレ。クロバナロウゲ。シコタンサウ。ムカゴトラノヲ。マヒヾルサウ。カラマツサウ。エゾキンバイサウ。エゾムカシヨモギ。ヒカゲノカヾラ。ミヤマタニタデ。エゾヤマブキショウマ。ハマハコベ。ナツユキサウ。センダイハギ。ハマベウフウ。マウセンゴケ。トリアシショウマ。カラフトブシ。カハラマツバ。ホソバノヨツバムグラ。ハマベンケイ。チシマセンブリ。イハオトギリ。チシマイチゴ。

チシマイハブキ。ワレモカウ。エゾアゼスゲ。ヨツバシホガマ。クロマメノキ。チシマリンダウ。ミヤマダイコンサウ。リシリワウギ。エゾゴゼンタナバナ。チシマフウロ。ハナイカリ。コアカバナ。エゾコザクラ。コキンバイ。ベニバナイチヤクサウ。チシマアマナ。サマニモヨギ。クモマグサ。ミヤマハタザホ。サギスゲ。ヒメクハガタ。ハクサンハタザホ。イハギキヤウ。チシマギキヤウ。チングルマ。タカテカサウ。クルマユリ。キバナノコマノツメ。エゾツヽジ。クロユリ。コハマギク。イハウメ。グンジサウ（七十一點）

白井光太郎氏

吉野郡名山圖志（畔田翠山著）　五冊
吉野郡中物產志（畔田翠山著）　一冊
上州妙義山圖（大窪詩佛懸詩）　一枚
諸國名山往來（一返舍一九著文政七年刻）　一冊
榛名詣（清水玄叔、享和三年刻）　一冊
駿遠信濃卉葉鑑（飯室樂圃編）　一冊
香山采種（竹內鶴鳴著慶應三年編）　一冊
熊野物產初志（畔田翠山著）　五冊
採取錄（榮古堂、寶曆十年）　一冊
蘭山採藥記　二冊
上州妙義山並武州三峯山採藥記　一冊
蝦夷草木寫眞（澁江長伯著）　一冊
澁江長伯甲駿豆相採藥圖　一冊
須川長之助採集高山植物腊葉　三冊

日光植物寫生圖（加藤竹玄）　四十一葉

大迫武吉氏

佛領印度支那產サンハツト　二、

榛原直次郎氏

和田英作、小糸源太郎氏作富士圖扇　十二種

佐藤順次郎氏

筑波山に於ける植物の體外結氷模型及び參考書

理學界第七卷第八號

Monthly Weather Review Vol. 42. No. 8 (U. S. Dept. of Agriculture Weather Bureau.)

植物の體外結氷模型　一

カメバヒキオコシ（腊葉）ジヤコウサウ

丸山晩霞氏

生品

ハヒマツ。ミヤマイハカガミ。コケモヽ。ウラジロキンバイ。ガンカウラン。

蒲田重吉氏

高山植物寄植　二

辻村農園

生品

シラネアフヒ。ヒメサユリ。ナンキンコザクラ。ヒナザクラ。リンダウ。

横江春正氏

フタバアフヒ

松平康民氏

生品

サラサダウダン。チヤルメルサウ。シラネアフヒ。ヒメシヤクナゲ。カツコウサウ。ユキワリサウ。タツタサウ。オホバキスミレ。ヤシヤゼンマイ。チヤボゼキシヤウ。イハヒゲ。イハウメ。マヒヅルサウ。イカリサウ。セリバワウレン。ガンカウラン。タチマンネンスギ。

五百城文哉筆高山植物圖懸物　一軸

本山佗吉氏

生品

カライトサウ（白馬山）　ハナシノブ（日向國）　イソツツジ（岩手山）　ミチノクコザクラ（岩木山産）　ツクシシヤクナゲ（祖母嶽）　チヤルメルサウ（洞ケ嶽）

彩花園

生品

コモウセンゴケ。キジムシロ。ツルコケモヽ。イタチガヤ。コチヤルメルサウ。ユキワリコザクラ。ヒメイヅイ。チヤルメルサウ。ハコネゴケ。フタバアフヒ。ヒメシヤクナゲ。ムシトリスミレ。

蔦屋旅館

生品

ハコネコメツヾジ。キクザキイチゲ、高山圖繪葉書

◎會　報　出品目錄

生品

イハハタザホ。イハウチハ。コメバツガザクラ。ユキワリサウ。ヒナザクラ。

望月直義氏

アラスカ採集植物標本

井上禧之助氏

鈴木久三郎氏

生品

タカネヒゴタイ。ミヤマキンバイ。ハクサンイチゲ。コマクサ。チシマギキヤウ。ウラジロキンバイ。コバノツメクサ。カツコウサウ。シマイケアケボノサウ。

後藤關次郎氏

生品

アタゴホホヅキ

別所梅之助氏

Mrs. Aubray Le Blaud : — Mountaineering in the Land of the Midnightsun.

Prof. P. Schröter : — Alpen-Flora.

H. Spender : — In Praise of Switzerland.

小山源二氏

Paul Wooster : — Alpine plants.

服部與兵衛氏

中村清太郎氏寧白馬岳（油繪）

◎會報　名古屋に於ける山岳講演會

茨木猪之吉氏

白馬大池（水彩畫）　春陽堂

五百城文哉氏筆高山植物はがき　小島久太氏

丸山晩霞氏筆御花畑（水彩畫）一　矢部吉禎氏

支那高山植物腊葉　武田久吉氏

顯微的高山植物（單細胞藻類）信州八島ヶ池産

ガンカウランの葉横斷面

ムシトリスミレの一種

シラカンバの樹皮の斷面（以上顯微鏡下にて示す）

生品

キミカゲサウ實生。ミヤマキケマン。ツルピランヂ。ツガ。セリバヲウレン。バイクワイカリサウ。イカリサウ。ホザキノイカリサウ（溶岩臺ー淺種）

腊葉

日本高山植物中の稀品タカネソモソモ、（最初の標本は矢田部博士及松村博士が立山に採集せり）

日本の高山に北極植物の分布せる例の一として「ヒナガリヤス」

日本のエーデルワイス

高度に依りてニガナの變化するを示す。

圖書

ダラトレ著　高山植物分類書

フツカー著　極地植物分布論

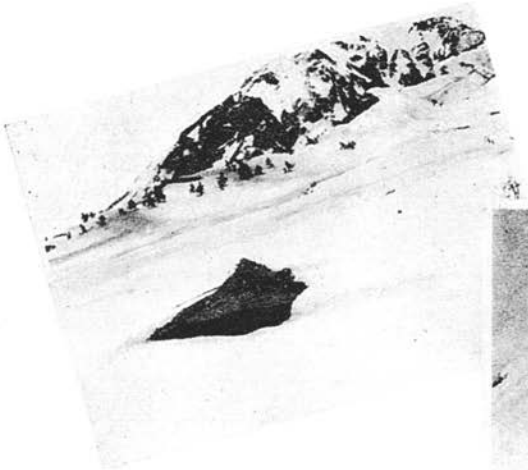
アルプス植物圖說

名古屋に於ける山岳講演會

在名會員及び名古屋新聞社の慫慂に從ひ、六月二十三日名古屋市愛知縣會議事堂に山岳講演會を開く、昨夏も同じく茲に講演會を開き多大の良成績を收めたりしが、今年も亦前回に優りたる盛會なりしは、一に在名會員及び主催者たる名古屋新聞社の厚き援助に由る次第にして、日本アルプスの關門たる此市に於て斯くの如き成功を得たる事は、等しく、山岳趣味普及上忘るべからざる偉勳なりと云ふべし。本會よりは武田、木暮兩幹事、及び名譽會員志賀重昂氏を勞して左記講演をなせり。高野幹事及び會員近藤茂吉氏は幻燈其他の事務處理の爲めに共に出張せり。

講演次第

山岳と人生　名譽會員　志賀重昂氏











雪の伊吹山

上右、八合目より絶頂三角点を望む。上左、雪中に埋没せる四合目小屋
中央、九合目附近斜面を下る。下右、五合目附近下左七合目

三上捨三氏撮影

日本の山岳（幻燈）　幹事　木暮理太郎氏
高山植物　幹事　武田久吉氏

翌二十四日、在名會員八木道三、祖父江重兵衛、結城豐三郎氏の發起に由り、志賀氏及び本會幹事一行の爲めに歡迎の宴を榮ホール樓上に開かる、會するもの四十餘名食後、志賀氏、木暮、高野兩幹事の小話ありて四時散解せり。

本會は在名會員名古屋新聞社及び特に此行の爲めに歡迎の宴を開かれたる各位の御厚情に感謝の意を表す。（岳雄）

豐橋市に於ける山岳講演會

七月二十四日午後七時豐橋市教育會主催にて同市八丁小學校に日本山岳會山岳講演會を開く、此れより先、二十三日夜名古屋に於て開かれたる講演會講師一行は、二十四日午後豐橋市に至り、幻燈講演をなせり。

山岳と人生　名譽會員　志賀重昂氏
山岳と植物　幹事　武田久吉氏

日本アルプス　幹事　木暮理太郎氏

會するもの六百、十一時多大の興味と効果を齎して散會せり。

終に豐橋市教育會諸賢の御厚情を深謝す。（岳雄）

橫濱市に於ける山岳展覽講演會

或意味に於て日本の山岳界に忘るべからざる橫濱に於て――ウエストン氏や、小島君の居た事など――未だ一度も山岳會の開かれざりし事は、不思議の樣に云はれて居たのである、兩三年前より其話も間々あつたなれど、何時も夢の樣に忘れてしまつて居たが、愈々たまらなくなつて、少しく時外れであるが、七月二十一日二十二日展覽會を、二十二日夜講演會を開く事に話がまとまつたのは、既に登山期に入りかけた、七月の初めである、在濱會員の主催とする事や、期日や、場所や草々の事の定つたのは、五六回の集回を經た後である、斯くの如く會期の遲れた事は、會場に當て

た、横濱開港記念の横濱會館（公會堂）の竣成が遅れた爲めで、新しき公會堂で最初の講演を、新興の人々に頒ちたいと云ふのが希望の一端であつた

案内狀は全市の知識階級にのみ發送された。横濱貿易新報は十餘日に亘つて山岳記事を掲げた、前景氣と或期待は、山に行く前の心持に似て居る。

會員諸君の努力に由つて、二十日の午後には展覽會場も完成をした、會場は公園内の市公有の一建物、運動倶樂部の樓上である、特に此展覽會の爲めに富士山に生品を取りに行かれた特志家もある、寫眞、圖書、模型、登山用具、スキー等、初めて見る來觀者の多くには事毎に珍しい、そして事毎に驚異である、二十一日二十二日の會期二日間は無慮二千人の來觀者があつた。

講演會は同じく二十二日午後七時より、展覽會場とは別である、新築の横濱會館に開かれた、總ての點に於て一つの典型を示す爲めに、斯くあるべき事を敎ふる爲めに、時間の嚴守と入場（講演會の）には特殊の制限を附した、講演會場には必ず入場券を要する事と（入場券は無料で分與す）兒童の入場を謝絶する事と、入場者は必ず入場券の裏面に住所氏名を記入すべき事である、此れは總ての點に於て、主催者も來會者も共に滿足し得る方法と思ふたからである、果してさうであつた。

新築の公會堂は、熱心な五百の同趣者に滿ちた靜かに、そして熱烈に。

開會の辭　會員　山崎小三氏
余の山岳觀　幹事　梅澤親光氏
日本アルプス（幻燈）　同　高野鷹藏氏
山岳と植物（幻燈）　同　武田久吉氏

豫定の如く（案内狀にも明記してある通り）午後七時に初めて十時半に終つた。

總てが滿足に、靜かに、熱心に、此二日間の在濱會員の努力は、閉會の幕を下げた、此二日間の努力は、何を齎すであらうか、清新の趣味は、何を敎へたであらうか。（た、た、）

會員登山報

△雪中伊吹登山（圖版參照）　昨冬より今春にかけての大

降雪に、各地に其被害夥しく、聞けば各地を通じて實に三十餘年來の大降雪の由に候、吾々は來るべき日本アルプスの夏山が昨夏の見すぼらしき姿に比し、今夏こそは大綺雪を藏したる其壯觀に接せんことを今より待焦れ居候、此未曾有の大雪に夏山を一寸待遠しく、會員若林鮒次郎君と共に雪の伊吹登山を思立ち、二月十八日午前五時發列車に投じ、同八時近江長岡に下車致候、此邊積雪五六寸に及び足先は今まで列車のスチーム管にて温められし結果却つて一層の冷たさを感じ、恰んど感覺を失ひ候、約一時間にて山麓上野村に着、旅館松村屋に入り、人夫一名を雇ひ、杖、輪カンジキ等を準備致し、十時愈々山路にさしかゝり候、吾々より先にスキー隊の通過せし痕軌條の如く雪上に長き線を引きたる上を吾々は不格好に大きなる足跡を印しつゝ一合目までは强いてカンジキを用ひず、勝まで沒する積雪に一寸惱まされつゝ一合目小舍に達し候、此邊にスキー隊の練習せるを見つゝ、小舍にてカンジキを穿き、山頂指して登り候、重たき輪カンジキは登るに餘程の困苦を要し候、乍然是を用ひずして腰部までを雪中に投じ脚を拔く事に要らざる勞力を費やすに比較せば重量位の事を辛抱して可然と存じ、正午に近くなり、寒氣と空腹に襲はれ候得共、吾々の辨當を開くべく風寒の場所と顧ひし四合目小舍も、來て見れば無慘や三ヶ所其積雪に沒し內一ヶ所を僅に屋根を露はすのみにて、是には實に閉口致候、致方なく四邊を見廻し附近に幸ひ雪の上に露はれたる一坪餘の土地を發見し、其上に寒風に吹かれつゝ、冷たく凍りたる握飯を噛り候、此時魔法瓶こそは偉大なる効を奏し、吾々は爲に得難き温湯に腹部を温ため、頓に向つて感謝の意を表し候事こそあはれなる有樣に候、休息中は却つて一層の寒さを覺え候まゝ少時にして出立、五合を過ぎ六合目と覺しき邊に雪の斜面に猪の足形らしく數丁に梅鉢紋を印せるを見申候、此邊より積雪益々深く、杖は其用をなさず、疲勞を覺え候に付、登路を雪なき尾根に變更し、宛ら水中に溺れたる者が辛ふじて陸地に游ぎつきし心持にて尾根に辿りつき候、頂上より吹下ろす寒風は益々猛威を振ひ候得共、絕頂は漸く近くに見え來りたるに勇を鼓し、午後三時三十分、即ち山麓より五時間半を費して絕頂に達し申候、幸に天氣晴朗にして三角臺下に立ち四邊を眺望すれば實に壯觀にて殊に北に面しては見渡す山岳、谷間白皚々として黑き物は何一つ見出し能はざる程にて實に今年降雪の多量なるに一驚致候、頂上の雪は凝結して六方石の形狀を呈し居候、寒威凜烈蒼皇として頂上を辭し、下りは雪の斜面を一直線に富士の砂走りの如くに駈下る其愉快なる事筆紙に盡し難く候、頂上より二時間餘にて上野村に歸着致候、今朝行がけるは一合目より膝想以上の積雪にて、或は頂上に達する能はずして中途より空しく逆戻りの憂目を見んかと心中私かに疑懼の思致候に拘はらず無事目的を達し、長岡發午後六時八分にて歸京致候。

要するに雪中伊吹登山は充分防寒の用意をなし途中吹雪に遭遇せざれば案外平易あるものと存候。(三上捨三)

△おめでたう存じます　くれの廿五日に立ちまして三田尻あたりからは雪の中を九州へと入りました。

阿蘇へは廿八日に出かけました、その日は杤の木の小山旅館にさまり凍へてゐる湯の谷道をとりました、噴火口へは十二時ちか

◎會報　會員登山報

くにつきまして、歸路も湯の谷みちにしましてがあとから考へてみたらこれが間違でひであつたらうと存じます。混濁で甚だなやみ、往路とかへりはおなじく四時間ばかりかゝりまして、むしろ雪の多い重玉道がよかつたらうに存じます雪は案外少くございました、一月一日は櫻島へゆきました鹿兒島のお醫者さんに頂上はまだよした方がよからうといはれましたので（私のからだにはでせう）溶岩のあたりをさまよつて新に出來たお湯にはいりました。

二日には小雪の中を牧園から丸尾そこから韓國の岳のもとの大濕池までのぼりました、非常に見事なキメナをみました、風がつようございました、三日に東霧島へゆく豫定を風の爲によしました、かへりに東霧島へ二日たのぼつた人の話をきゝましたが、そこの方が韓國よりはるかに雪が少かつたさうです。

昨夜かへつてきました、まだ高千穗の雪景は目にのこつてゐます。（一月七日、別所梅之助）

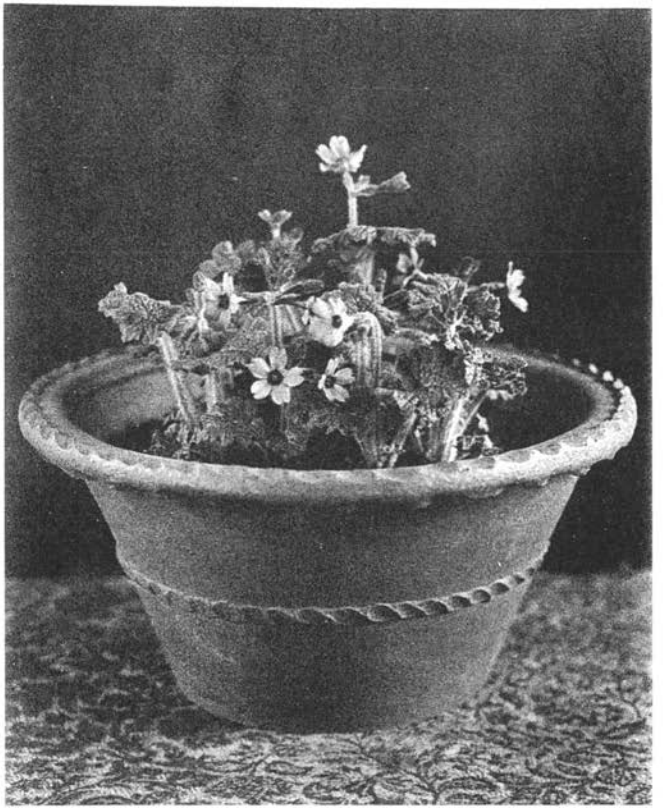
△諏訪の温泉は相不變スケートで可成混雜してゐます前日と大遜ひで靍尻峠を越すと穗高から白馬ヶ岳迄白玉の一大長城が眼々と連亘してゐます蝶ヶ岳の蝶形は瞭然たるものです穗高の厚化粧の中にドス黑い生地が表はれてゐるのは如何に物凄いパツテラスなるかゞ判ります槍の穗先を見やうと靍尻から下車して松本への線路を半里程傳つたが見えず其中名古屋行が來たので引返しまして木曾駒より流石に御岳は雄大でした名古屋市外の千種から見た木曾駒と惠那は雲か山か漂つてる如き見事な『淺山の雪』でした。（一月十五日京都にて小島榮）

△謝久敷本校生徒たりし會員の植村光子より外は試みし事なき六甲五山の縱走を本日生徒八十七名を率ゐて試み成功いたし候このスタンプは右より六甲、マヤ、再度、鍋蓋、城ヶ越の五山に候。（三月十八日、大阪府夕陽丘高等女學校朝緯記太留）

△小生岐阜縣惠那山に登山を思ひたち二名の友と共に去る十一日朝名古屋を出發致し中央線中津川驛に下車、途中雨に降られつゝ徒渉川上（カワカン）に參り申候、惠那山を越えて飯田に下る豫定にて案内を求め候ひし所雪深くて到底頂上に達するすら不可能なりと主張して應ずる者無之候間行き得る所まで讓歩して宿の青年會員（小生等は前宮下の今井辰次郎方に一泊致し候）を伴ひ登山てし候、頂上まで二十合に分つこの山の約十合目あたりより雪を踏みて極めて樂に十一時半頂上に着致候頂上にては雪に降られ眺望無之歸途は途中より雨に降られて三時川上に着仕候、川上にては梨の花、桃の花盛りに候ひき。（五月十六日　長谷川敏郎）

△晉掛にて夜全くあけはなれ冷涼身にしみし高原の風物自ら目に新に覺えられ候小諸に下車、これより本年新に開通致し候佐久鐵道にのりかへ羽黑下に參りこれより七里、今夕は本澤温泉泊りの豫定に御座候同行は兄と甥二人、知人と小生の五人、八ヶ嶽を信州より登り甲州に下る考に候、驛前の茶亭に朝飯認むる間の走り書き。右迄（七月二十一日朝、信州小諸にて島山憐成）

△拜啓益々御健勝奉賀候小生事無事滯在過日は有名なるタカー湖（海拔六千二百尺、周圍六十哩）に參り殘雪を踏みその四圍に屹立せる八千尺乃至一萬一千尺の峻嶺をながめながら湖邊を終日逍遙仕り無上の盛興に誌り候桑港の熱鬧を距る僅に二百哩にこんな天





大會出陳高山植物

右　ラクザコクノチミ
左　ウソウコツカ

（品出氏吉陀山本）
（品出氏民康平松）

下の名勝があるかと驚かれて、夏期には避暑の客にて大雜沓を極むとの事に候。明日出發ヨセミテに二三日滯在ロスアンゼルスに向ふべく候。(オークランド、林並木)

△先般は色々御配慮に蒙り難有奉存候 兎も角當地迄出懸申候明日當地出發劍から藥師袴越烏帽子大町の豫定に御座候 茨木氏裔の平藏肖像を當家にて見受申候當主人は留守にて 春藏を連れて行く積りに候へ共烏帽子附近は未案内にて一寸困惑致候。(七月十八日芦峅寺にて三上捨三、若林祐二郎)

△小生去る十二日夜行 (午後十時十五分 京都發直江津行) に乘車仕り翌十三日午前九時五十分富山へ 到着直に驛前より人力車にて上瀧へ向ひ同地にて 車を捨て日盛の暑き街道を芦峅寺に向ひ午後四時到着平藏宅にて一泊 翌十四日 (佐伯義教、志鷹安之亟) 二名人夫と同行室堂に夕刻着途中異りたる事もなく 炎天一蓋の覆なく甚敷渇を覺え申候 室堂の暗き一夜を明し十五日早朝室堂發玉田の窪を視て賽の河原より 雪溪の右を大走小走に取り別山に登り別山小祠の右下手の草地に幕營申候 十六日露營地出發山上より直下して劍澤に出て雪溪上を劍岳に向ひ本年は非常に積雪多くしてむしろ劍岳登山には好適に時季に候平藏澤を見て 山岳の登山地圖と現地と照合しつゝ長次郎澤に出てそろ〳〵登り掛け申候時に午前七時卅分に候十二時頂上を極め申候 熊の岩以上は雪傾斜特に甚しく御座候小生は大町産カンジキを用ひ候へ共爪の短き爲め 貳度も滑りかけ申候カンジキは爪の長き程宜敷候山岳會檢定のカンジキを所持しながら 携行せざりしを惜み申候。

歸途平藏澤を撰み候處人足の誤りにて 平藏澤の脇澤に下り中途雪溪の横斷せるに遭遇し又々頂上さして逆戻り 是が爲め三時間程時間を空費し愈々平藏澤の本澤を降下申候 此澤は勾配の急峻の度終始殆ど同一の爲め降りと雖も中には捗り 短く遂に六時過ぎ平藏澤入口の大乾石の 傍に出て申候又々劍澤を別山に急ぎ二時途中一高山岳旅行部第四班に出會申候 雪溪を登り初め候處追々夕日西山に沈み暮色頓に加り忽諸にして 四圍暗澹の影に包まれ申候山中にて燈火の用意と糧食の 準備を缺き申候も夕刻歸營出來候事と豫定せし故に候ヤヽ歩行に惱み 人夫の空腹を感ずるに困り候へ共決然意をあせらず終夜 行進をつゞくとも露營地に歸るべく決心して徐行しつゝ雪溪と岩石の 境界線を進み別山差して登りかけ申候途中草地に休憩し焚火をなし暖を取り悠々として 鋭氣を養ひつゝ愈出發に際し増々 焚火を大きくして目標となしつゝ別山に登る暗夜山中の登攀には焚火の目標には非常の經驗を得申候 十時三十分漸く露營地に歸り申候。

翌十七日露營地を拂ひ室堂を經て松尾峠より 温泉に一泊十八日漸く富山平原に出て 歸京申候先は右梗概を記して御報告申候本年度劍岳は積雪の多くして登攀に好都合と存ぜられ申候 (七月廿五日、森平藏)

△小生山岳旅行左に御通知申上候 第一日四谷發頂上小屋宿第二日同所發杓子を通り 例年になき鑓岳の御花畑附近の大々的雪溪をへて頂上を窮め 天狗宿り第三日、同所發、不歸、唐澤のワルバを通り大黒鑛山宿り 第四日同所發急峻なる大黒の雪溪を降りて午後四時四谷着に候同行者は 駒場の横山桐郎猪股修二郎の二氏三高山岳會の砂川、望月、山本、田邊、阪部氏兄弟及小生の九人に候 雪の

◎會報　「登山の注意」の頒布

多き故一同大元氣にて始終仕り候加ふるに晴天續きにて山の幸我等に在りし事を感謝して成功を祝し解散仕り候。頓首（第一日は七月十九日第四日は二十二日）（二十四日大町にて、影山寅造）

△七月廿三日大武川の赤羅澤を溯り野呂川廣河原に出で北岳間の岳より尾根傳ひに荒川鹽見岳を經て三峯川を鹽平迄で下り伊舟より電車にて中央線へ富士裾野駿州側を半周し卅日歸宅仕候。（柳直次郎）

△拜啓七月廿五日大町出發針の木岳、越中澤ザラ峠五色原鬼、瀧王、淨土、雄山、別山、別山乘越より尾根傳ひに劍岳に登攀、長次郎谷を降り劍澤にて朝輝氏の一行に會ひ共に立山室堂附近に露營仕り昨朝夜營地並昨夕當地に安着仕り候先は右御通知申上候。（影山寅造）

△友人飯塚君と七月十六日夜行にて十七日午前十一時過立山鐵道上市驛に下車夕刻白萩村伊折に着翌十八日小黑部鑛山道をブナクラ谷落合に到り午後より愈よ目的の劍の唐尾根へ向ひ飯を分け谷を登り谿側に夜營十九日大尾根に取付き一九二〇米突の三角迄を發見し尾根途中夜營廿日偃松帶に出で大降越を二つ程越して劍直下の雪上に夜營廿一日午前六時劍の頂點に立ち長次郎澤を降つて室堂に泊り廿二日友人と分れ御山澤を降つて越中澤の木挽小屋夜營廿三日黑部川を東澤へ溯らんとせしも水量平年の二倍大にて徒渉點なく東側の河原を行きしも壁や崩れに當るこに尾根へづりをやり一日行程僅かに二十五町には悲觀致し候翌廿四日漸く東澤に出で三ノ澤手前にて夜營廿五日赤牛を極め大雷雨の爲赤牛の尾根に夜營廿六日赤牛岳より黑岳、鷲羽岳、蓮華岳、双六岳を經て槍裏までこぎつけ廿七日午前八時槍ヶ岳第三回の登山をすませ上高地へ降り九年ぶりにてなつかしき高原の景に接し候。

槍ヶ岳道の立派になりしは實に驚き入り申候。

上高地は矢張りよき處に候。（八月五日、冠松次郎）

「登山の注意」の頒布

登山趣味の普及は、登山の慘害を多からしめたり、本會は將に登山期の至らんとするに當り、「登山の注意」なる一編を著して、廣く世に頒ちたり。

文部省當局は本會の主旨を贊し、各中等學校に頒布の勞を取られたり、即ち本會より「登山の注意」二千部を文部省に依托し、文部省は左記の如く全國各學校に交附されたり。

男子師範學校、中學校、甲種程度、實業學校、各二部宛。

女子師範學校、高等女學校、乙種程度、實業學校　各一部宛。

高等師範學校各四部宛。

尙ほ信州大町に於ける、信濃通俗大學夏期大學及び紀州大臺ヶ原山に於ける吉野郡主催の敎育會に

は夫々相當部數を寄贈せり。

會員諸君及び希望者には夫々配布を了したり、尚ほ多少殘餘あれば希望者は申出られたし。

本冊子は登山の注意と準備とを敎へて、青年子弟の爲め健全なる登山の氣風を振興するの目的を以て頒布せるものにして、幸にして多少の効果を得ば、本書編纂の主意を得たるものと云ふべし。

寄附二件

會員大迫武吉氏は別揭登山の注意頒布の資金として、金若干を寄附されたり、本會は茲に深謝の意を表す。別項「高頭高野兩幹事慰勞會記事」にある如く、同會實行委員より同會剩餘金本會基本金として寄附相成りたり、本會は同會有志諸君に感謝の意を表す。

會員の著作

會員河野齒藏氏「高山植物の研究」を著す記す

◎會報　寄附二件　會員の著作　會員石崎光瑤氏印度より歸る

る所高山植物の形態生理に及ぶ、別頂新著紹介欄に詳解あり。幹事武田久吉氏一書を著し「高山植物」と題す、主として日本の高山植物に就て述べたり、此れ亦別頂新著紹介欄に述べたり。

前號に豫告せる、會員木本光三郎氏編吉野群峯は、附圖共に出版せられたり。發行所奈良市登大路積精堂——價金三圓五十錢なりとす。

本會會員にして斯る著作あるは最も喜ぶべき所幸にして多々益々斯くあらん事を祈る。

會員石崎光瑤氏印度より歸る

會員石崎光瑤氏昨秋來、印度に在り、特にカシミール地方に登山の目的を以て旅す、氏は畫壇の一陣を占むる新進の日本畫家なり、ヒマラヤの雄景氏の畫嚢を滿して歸る、本會は氏の歸朝を喜ぶと共に將來の雄躍を待つ、記事は乞ひて本誌を飾るべし。

幹事中村清太郎會員加賀正太郎兩氏の外遊

兩氏は登山の希望を以て、ジャバ、スマトラ、ニユギニヤ等の熱帶國に行けり。中村氏は新進の洋畫家にして、强烈なる熱帶色は、氏の色調觀に如何なる影響を與へたる、加賀氏は嘗て鐵脚に、瑞西アルプスを踏破し今や、再びマンゴーの果實る南洋の山に登る、期して兩氏に待つ。

高頭高野兩幹事慰勞會記事

山岳會の機運の益々發展せんとする將來を想ひこゝに十數年前、少數の會員を以て組織せられたる當時を回想すれば、本會發起者の先見と努力とに對して、多大の敬意を表せざるを得ず。諸兄が本會の爲めに拂はれたる犧牲は、會員の熱誠と相俟つて、こゝに至れるを疑はずと雖、又、高頭高野兩幹事に負ふこと至大なるを斷言す。則、高頭高野氏は會務全般の經營者として、兩氏なかりせば今日の盛運は、殆んど期し難かりしことを信せんとす。

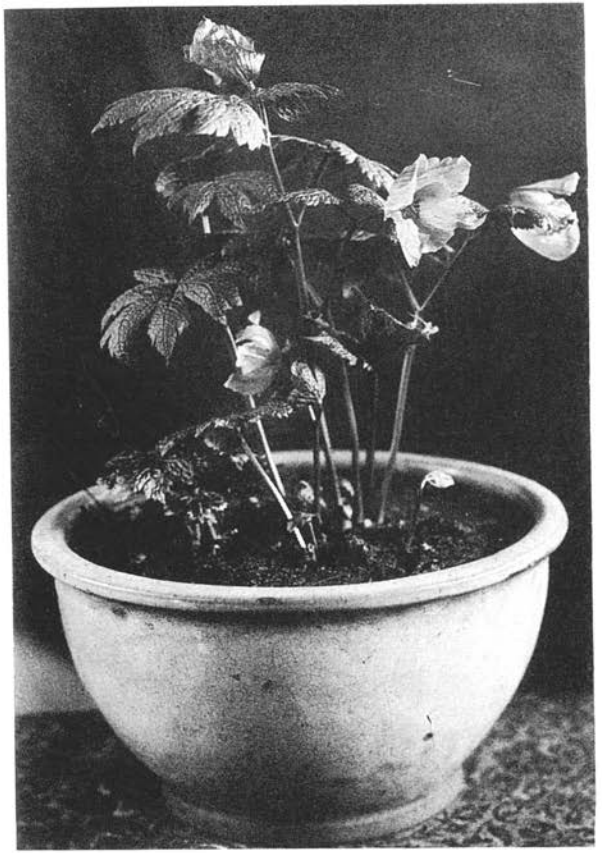
然るに未だ兩氏の勞に報ゆる途なく余等感謝の微意を表するの期なかりしを遺憾とせり、こゝに於て同人有志に諮り、いさゝか兩氏に對して慰勞の會を開かんとし大正五年十一月、左記の決議のもとに、在內地會員に主意書を送達し、本年四月二十二日、東京築地精養軒ホテルに於て本會を開催せり。汎く會員全部に諮らざりしは、始め、兩氏の知己及び發起人等の少數に限らんとせしに他ならず、そは慰勞會が山岳會の發議に非ずして、特に兩氏の知友に制限せんとしたるが爲めに他ならず、然れども時日の餘猶なかりしがため、在外の諸君に傳達する能はざりしを遺憾とす。

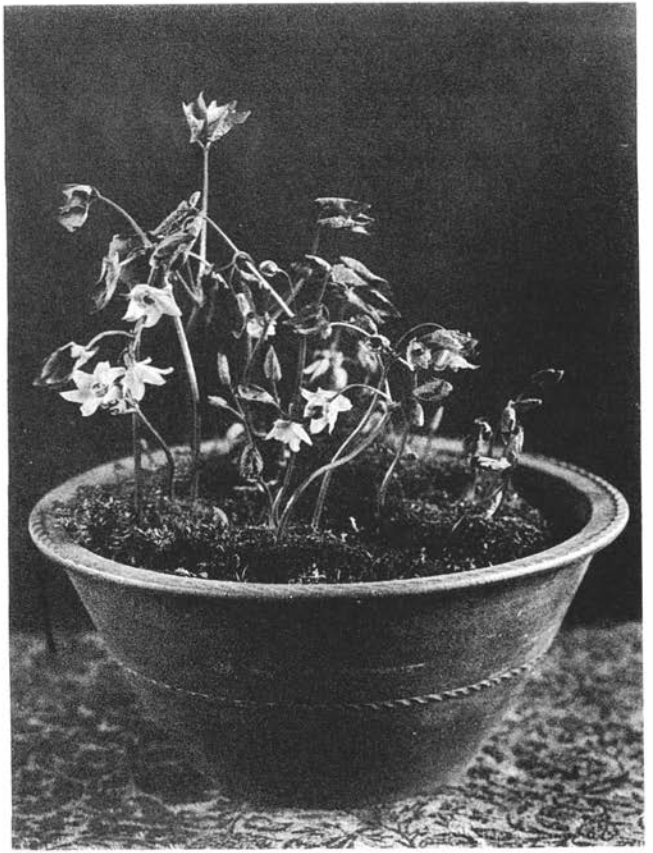
收入

醵金總額　金四百四拾五圓貳拾貳錢也
郵便貯金利子　金六圓四拾五錢也
總計　金四百五拾壹圓六拾七錢也

（寄附者總數一百七十三名）

支出





大會出陳高山植物
右　トガクシショウマ
左　シラネアオイ

（理科大學植物園出品）
（松平康民氏出品）

記念品懐中時計二個　金參百五拾圓也
印刷費及郵勞　金貳拾六圓貳拾貳錢也
振替貯金受入料金　金六圓六拾八錢也
總計　金參百八拾貳圓九拾四錢也
殘金　金六拾八圓七拾參錢也

右殘金は兩氏の希望により日本山岳會基本金に算入す。

慰勞會出席者は左の二十九名（順序不同）

中村清太郎、小南清、大迫武吉、池野成一郎、酒井忠一、松宮三郎、小山源治、白井光太郎、内田節三、梅澤親光、那須皓、河野齢藏、田中阿歌麿、植有恒、木暮理太郎、井上禧之助、冠松次郎、鳥山悌成、志賀重昂、岡野德之助、服部與兵衛、武田久吉、辻本滿丸、茨木猪之吉、辻村伊助、近藤茂吉、八木道三、今村幸男、石川光春。

同席上記念品、並びに會員外、保々三九郎氏より寄贈せられたる與田抱生氏作詩及書、二幅を兩氏に贈呈せり保々氏の好意に對し一同深く感謝するところなり。

右發起人

今村幸男、石崎光瑤、服部與兵衛、鳥山悌成、加賀正太郎、武田久吉、辻本滿丸、辻村伊助、中村清太郎、中村孝二郎、那須皓、南日重治、梅澤親光、山川默、木暮理太郎、近藤茂吉、三枝守博、木村鑛吉。

實行委員

梅澤、山川、木村、那須、近藤、辻村（I・T）

雜誌の遲るゝ言ひわけ

毎度の事ながら言ひわけも、此の樣に度重つては申し惡くゝなる、前號に雜誌の遲るゝ御詫びをした所、御口言を頂きました、其れはほんとうの事で雜誌の發行などと云ふ事は、事務的にやればよいのです、が然しさう行かぬ所に眞面目さがあるわけで、紙に活字で字が刷つてあればいゝと云ふ程度の考へなれば、實は此んなに惱みも致しません、少くも自分達の滿足を得ねば印刷する事は出來ないからです、遲るゝのは怠けるのでありますが、怠けの意味が多少異るので御座います、ど

◎會報　雜誌の遲るゝ言ひわけ

うか遲るゝ事に就ては御免しを願ひます、其代り「山岳」の品位と内容の向上には勉めて居ります、少くも後で參考になる様な、後世「山岳」が引用書目として書かれる位の充實したものとしたいのであります、此意味に於て「山岳」の記事は銷夏的の記事はありません、眞面目に讀るべきものゝみです、隨つて記事は一方に偏してると云ふよりは、各項の專門的なものが多くしたいと希望して居ります、「山岳」は賣る爲めの雜誌ではありません、紙屑屋の手に渡る様な雜誌は作りたくないのです、此意味で努力をして居ります、然し此れは遲れる理由にはなりませんが、兎角斯うなると遲れ勝ちです、どうか吾々の努力を買つて頂いて、御免しを願ます、會員諸君の厚き御援助に報ゆる努力は決して惜しみません、平に御詫びを致します、私等が心から喜んで居ります事は近頃斯くの如く雜誌が遲れても、御同情こそ下され決して催促がましい事は云はれなくなつた事です、數年前迄は雜誌が遲れると、罵倒されたものです、思へば吾々の數ならぬ努力を御認め下さつた結果と思ひます、深く諸君に御禮を申上ます。

終に臨んで孤軍奮闘して居ります吾々の爲めに何分の御援助を希ます、それは各方面からの報道原稿寫眞等を賜りたい事で御座います。

一言御詫び旁々御願申上ます。（編輯係）

校正者　木暮理太郎　高野鷹藏

大正六年九月十五日印刷
大正六年九月十八日發行

著作權所有

定價金八拾錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　橫濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　橫濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　橫濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話特長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

高山深谷第九輯發行

會員石崎光瑤氏昨秋より印度に遊び、カシミヤ地方に旅す、寫す所の寫眞數十の內より選擇して一集となして同好に頒つ先に辻村氏のスヰスアルプを一集として頒ちたる本會は再びカシミヤ山岳を一卷として頒つの光榮を喜ぶ、總ての印畫は、何れも原版より印畫して其オリヂナリテイーを保證すべし、前輯と同一條件に由りて頒布す。

△價格　一部金參圓五拾錢乃至四圓五拾錢　（外に送料を要す）總ての製作を完了せる上其價格を決定すべし即ち實費頒布の主旨によるものにして此價格は止むなき增額なり、豫め承諾を乞ふ。

△申込　希望の諸君は部數及び住所氏名を明記して記名調印の上申込れたし前金等一切要さず、豫約者以外には頒布せず、百部を限りて頒布すべし。

△期日　申込期限大正六年十一月限出來期日明年春期

△發送　出來の上は金額送料等御通知すべきに由り代金着次第發送すべし。

△本輯は營利的刊行物に非ざるを以て一切割引等をなさず、又一切仲介者書肆等に取次販賣を委托せず。

發行所

橫濱市本町四丁目高野方

日本山岳會事務所

「山岳」需供欄

會員及び同趣味者の爲め本欄を公開致しました事は「山」に關した事に限ります、掲載の如何に就ては全權を保有致します。

△本會々員の爲め登山用具販賣店東京市本郷區本郷五丁目美滿津商店は相當割引を致してくれます、會員證明書は事務所で差上げます。

△朝鮮鐵道（南滿鐵道京城管理局）東京案内所から、會員の朝鮮金剛山來遊に就て懇意がありました、案内書等も若干寄贈を受けて居ります、御希望の諸君には差上げます、適當の時期に於て會としても計劃する事と存じます。

△山岳は引つゞいて出します、次號には、例の如く會員名簿を附しますから、御住所等御變更あつた諸君は至急御通知を願上ます。

△「登山の注意」は餘分が御座います、御希望の諸君には差上げます。

△「山岳」殘本について御問合せが御座いますが五年一號より以降全部殘つて居ります。

△本欄は成る可く諸君の御利用を願ひます。

（事務所）

高山植物 増訂二版

日本山岳會幹事 理學博士 武田久吉著

今夏第一版を出す、日ならずして絶版となり、更に著者に乞ふて增補訂正し、圖版を新にして、第二版を出せり、登山家、植物採集者、植物學者の參考に資する事大なり、敢て諸君の讀了を乞ふ。

東京神田
發行所 同文館
（定價 金七拾五錢）

吉野群峰

日本山岳會々員 木本光三郎編著

著者年餘の歳月を費して、大峯山に關する記事を編纂せるものにして、附するに四切大のコロタイプ寫眞帳一冊、吉野群峯概念圖、大和國山岳高度表、大和國古地圖等を附す、裝禎頗る美にして、著者の特志に由りて頒布するも、普通の出版物と同一のものにあらず、唯一の吉野群山志と云ふべし。（實費金參圓五拾錢）

奈良市登大路
發行所 積精堂
東京市神田
發賣所 東京堂書店